
そして、星を継ぐもの (ガンダムSEED)

かーき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして、星を継ぐもの（ガンダムSEED

【コード】

N88340

【作者名】

かーき

【あらすじ】

ルナマリアがSEED時代のキラポジションに逆行。他にも色々変わっています。

*この作品は以前2chに投稿した物です。

arcadiaさんにも同時投稿させていただいております。

感想求む晒し中

第一話

「ジャステイス！ アスラン!?」

「インパルス！ ルナマリアか!?」

私は一瞬の内に走馬灯のように思い出していた。アスランとの思い出を。

だが！ 今は敵だ！ 脱走して、望んで敵になったのだ。よりもよって愛する妹、メイリンまで巻き込んで！

気を引き締める！

「アスラン……でも、何で貴方がメイリンを……よくもメイリンを！」

「チイ！ やめるルナマリア！ お前も！」

「逃げるな！」

「ええい、くっそー！」

「あー！」

とっさに胸部のCIWSで弾幕を張り牽制する。

……一瞬の内に片腕をやられた。やっぱり腕の差かしらね。アスラン、やっぱりあなたは……英雄

折れそうになつた心にアスランの言葉が響く。

「邪魔をするな！ 君を討ちたくなどない！」

手を、抜かれていた。その事をあらためて自覚した時、折れそうになつていた心が激高する！

「何をっ！」

「時間を掛けたくないんだ！」

「ああああー！」

ジャステイスが、ビームブーメランを放った。それに反応する間も無く。そして、衝撃が来た。私の意識は深海へと沈んでいった。

「……い」

……なにか、声が聞こえる。

「おい、ルナ！」

「ルナ、起きなさい！」

ぼんやりした闇の向こうの遠くから聞こえる声に反応する間も無く。

そして、衝撃が来た。

「いったーい、なによ、ミリィ。人がせつかく……」

あれ？ どうしたんだろう？ 私は今までアスランと戦って……え？ どうして私とアスランが戦わなきゃいけないの？

アスランはコペルニクスの幼年学校で仲が良かった友達だ。

連絡がなくなってしまうたのはいつからだろう。

私はそれを少しさびしく思った。

違う！

頭に声が響く。誰の声？ 自分の声だ。

アスランはヤキンの英雄で、憧れの人で、でも妹を連れて私を裏切った

口惜しさが胸中に満ちる。

なんで？ なんで？

「……私に妹なんていないじゃない。なんなのよ、もう……」

「……あれ！？ ルナ？ おかしいな、そんなに強く叩いた訳じゃないのに」

見上げると、見知らぬ少女があたふたしていた。

え？ 見知らぬものにも？ 私の親友のミリィじゃない。

そしてその隣には、ミリィのボーイフレンドのツールが心配そうにこちらを見ている。

「ごめーん。なんか調子悪いみたい」

「カトー教授が悪いんだよ。いくらルナがプログラムが得意だからって、なんでもかんでも押し付けて」

「そうよ。今日もね、ルナ見かけたらすぐつれて来てくれって」

「えー、昨日渡された分もまだ終わってないのに」

「俺達も手伝うからさ」

「ありがと、ツール。じゃ、行こうか。え？」

スタンバイ状態にしようとしたパソコンから、緊迫したアナウンスの音が聞こえる。

「カオシユンか。先週でこれじゃそろそろ墜ちそうかな。連合は何やってんだ」

「オーブ本土は大丈夫よね。中立だもん」

オーブは焼かれたわ。私達も攻めたじゃない。オーブを。オペレーション・フューリーを忘れたの？

まただ。胸の奥底から声が聞こえる。

医務室へ行って、薬でももらおう。そう決めると、私は手早く荷物をまとめ、ミリイの後に続いた。

「あ、ルナマリア。やっと来たか」

しばらくしてカトーゼミに着くと、ひよいとゼミの仲間のサイが顔を出した。

「うん。カトー教授は？ また私を呼んでるって聞いたけど」

「ああ、ルナマリアに宿題残して出て行っちゃったよ。忙しい人だね。あの人も」

「うへー。あ、そうだ。デパス持ってない？」

「レキシタンなら。調子、悪いのか」

サイは私の左手を心配そうに見やる。

「ラッキー。医務室に行く手間が省けたわ。うん、ちょっとね」
サイからレキソタンの5ミリ錠をもらって、ゆっくり口中で溶かす。
目覚めてから胸の中でざわざわしていた物が静まり、不安が消えて
ゆく。

「ふう、楽になったわ。ありがとね。あれ？」

心が落ち着いて私が部屋を見渡すと、部屋の壁にうつかって、帽子
をかぶった見知らぬ少年がいた。

「誰？ あの子？」

「さあ？ 教授のお客さんだって」

カズイが答える。帽子を被った少年が、少し顔を上げる。

せつかく静まった心がざわめき始める。

「……………アス八代表……………」

……………忘れる物が、あの顔。

え？ 私の知らない私が勝手に声を出す。

見知らぬ少年は、びっくりした顔を見ると、向かって来た！

「ちよっとお前！」

「え、ちよっと、なんなのよ、もう！」

強引に、部屋の外に連れ出されてしまった。

「はあ。どうして知ってるんだ？ いや、確かに私はアス八家の力
ガリ・ユラ・アス八だが。いや。ともかく、秘密にしてもらえない

か。お忍びなんだ。あーあ。もつとすっかり変装しとけばよかったかな」

「えー!? 代表首長のアス八家のお嬢様の!?!」

「? ……おい、お前、名前はなんと言おう? さっきアス八とか言っただじゃないか。あれは何だったんだ」

「ルナマリア・ホークです。ああ、そう言えば、言いましたね。自分でも、なんでか、ふと口に出ちゃったんです」

「潜在意識にでも残ってたのかな。私もまったく露出が無いわけじゃないからな。ともかく秘密に頼むぞ」

「はい。カガリ様」

私は素直に答えた。再びざわめきだした、心に何か引つかかる物を感じながら。

「カガリ様はやめてくれ。カガリでいいよ。カガリで。その方が気楽だ」

「ええ、じゃ、カガリ」

「うん、いいな。こっちもルナマリアって呼ぶから」

私達は部屋へ戻った。

さーて、宿題をやっつけますか!

キーボードを可能な限りの速さで叩き出す。まったく。

落ち着いて昼寝も出来やしない。カトー教授ったら!

カガリ様は、カズイがロボットを操縦し始めると、面白そうに話しかけてる。

ふふ。あんなところは、普通の女の子と同じよねえ。

突然、衝撃が来た。

「キヤー！」

「何？ 隕石でもぶつかった？」

「まさか！ 衝突しそうな隕石やらデブリやは、とうの昔にわかっているはずだ！」

部屋の明かりが消え、そして非常灯に切り替わった。

「とにかく、避難しよう」

「ええ！」

部屋を出ると、職員の人たちもぞくぞくと階段を上がって避難していた

「いったい、どうしたんです!？」

「知らんよ」

「ザフトに攻撃されてるんだ！ コロニーにモビルスーツが入ってきてるんだよ！」

「……え!？」

「君達も早く！」

「……なんで？」

ザフトは味方。ミカタ。私はザフト。ワタシハザフトノレッドデス

……

胸の奥がざわめき出す。脳裏に写る光景。私の知らない私が、ザフトの軍服を着て戦っている。

「なんなのよう、もう、いやあ」

「しっかりするんだ！ ルナ！」

サイが私の頬を軽く叩く。

「……あ……」

「しっかりしなきゃな。最上級生だろ、俺ら」
「……うん」

「あ、君！」

え？ 顔を上げるとカガリ様が、みんなとは逆方向へ走っていく！
まさかほっておけるはずも無い。

「私が追うわ！ みんな先に行つてて！」

「気をつけるよ」

「わかつてる！ みんなも！」

「何してるんです、カガリ様！ そっち行つたつて……」

「何で付いてくる？ そっちこそ早く逃げろ！」

！ 近くで爆発が起こり、カガリ様の帽子が吹き飛ばされる！

「ほら！ カガリ様、あぶないですつて！」

「いいから行け！ 私には確かめねばならぬことがある！」

「……もう、遅いですよ」

私は後ろを振り向き指し示す。カガリ様も振り向く。

走ってきた通路は、瓦礫で塞がれていた。

「……だから言ったんだ、付いてくるなと……」

「大丈夫ですよ、カガリ様！ 工場区に行けばまだ避難シェルター

「があるはずです！」

カガリ様の手を握って走り出す。カガリ様は抵抗しなかった。大きな空間に出た時、下に大きなロボットが横たわっていた。

え！？ あれってまさかインパルス！？

……インパルスって何よ。私は知らない！

なんであれがモビルスーツだってわかっちゃうのよ！？

「はあ… やっぱり… 地球軍の新型機動兵器… うっ… お父様の裏切り者ー！」

カガリ様の叫び声に気づいて、下からオレンジ色の服を着た女性が撃ってきた！

運よく外れて、ラッタルが甲高い金属音を立てた。

その女性が、ちっと舌打ちする様子まで見て取れた。

「カガリ様、ここも危険です！ 早く逃げましょう！」

「うっ… うっ…」

カガリ様は泣いている。先に泣いた方が勝ちよね。私も何がなんだかわからなくて泣きたいのに！

「でも、オーブが地球連合と組んでたとしても、しょうがないかもしれないよ。独立を守るには」

「… うう… え？」

「旧世紀のスイスなんか、もっと悪どかったらしいですから。ナチスドイツに協力したり、戦後なんの関係も無い日本から賠償金取り立てたり。まあ、もう独立は破れてユーラシア連合になっちゃいましたけどね」

「… 私が、子供なのかな…」

ふう、なんとか避難シエルターに着いた。

「ほら、ここに避難してる人が居る」

「まだ誰か居るのか？」

「はい。私と友達もお願いします。開けて下さい」

「二人！？」

「はい！」

「もうここはいつぱいなんだ！ 左ブロックに37シエルターがあるからそこまでは行けんか？」

「なら一人だけでもなんとかお願いできませんか！？」

「一人か……分かった。一人だけ入ってくれ。すまん」

「カガリ様だけでも、入って！」

「え？ なにを！？ 私は！」

「いいから早く！ 私は左ブロックのシエルターに行ってみますから！」

「待て！ お前！」

カガリ様を強引に押し込むと、エレベーターは下がって行った。私は左ブロック目指して走り出す。

第二話

「あー!? 危ない後ろ!」

オレンジの服の女性が撃たれそうになつてのでつい声を上げてしまった。

その女性は振り向くとすかさず銃を放つた。

……え、撃たれた人は、あれは? ザフトレッド? 味方の邪魔をしちゃった?

いえ、ザフトなんて知らない! 知り合いなんかいないし味方じゃない!

だって中立のヘリオポリス攻められてるじゃない!

オレンジ服の女性が混乱している私に声をかけてきた。

「こっちへ来い!」

「……左ブロックのシェルターに行きます! お構いなく!」

「あそこはもうドアしかない!」

「え!? きゃー!」

また爆発が起こった!

「早くこっちへ!」

しかたないな。

爆発をやりすごして、モバイルスーツ目指してラッタルから飛び降りた!

あ、あの人が撃たれた!

あわてて駆け寄ると、ザフトレッドがナイフを持ってこっちに来るのが見えた。

! あれは……あれは

「アス、ラン!？」

「っ!？ ルナマリア!？」

「……アスラン……よくもメイリンを！ この裏切り者！」

！ 私は、心の奥から突き動かされる感情のままアスランを殴打してしまった！

メイリンって誰よ？ 裏切り者って!？ 私の心と身体はどうなっちゃってるの!？

「あ、アスラン、だいじょう…きゃ」

アスランに声を掛けようとしたら、オレンジ服の女性に後ろから引っ張られてモビルスーツの中へ墜とされた！

「シートの後ろに！ この機体だけでも！ 私にだって動かすくらい！」

「……ガン、ダム？」

表示される画面に表示される文字が縦読みでそう見えた。インパルスと同じだ。

……だからインパルスってなによー!？

混乱している私をよそに、スクリーンにパッと周囲の光景が映し出され、このモビルスーツは立ち上がった！

「……ちよつと。ただ歩いてるだけじゃないの。大丈夫なの？」

「私は戦艦の副長よ！ パイロットじゃないの！ だから言ったじゃない、動かすぐらいならできるって！ 無理に走って一般人巻き込むよりいいでしょう!？」

「あ、ちょっと！ ふら付いた！ 足元に人がいたわよ！」
「ちよつと、黙って！」

私をコクピットに押し込んだ女性は、コクピットのあちこちをいじっている。

！ あるスクリーンが拡大される！

「サイ！ トール！ カズイ！ まだ避難し終わってなかったんだ！」

ガーン！ 大きな音と共に突然モビルスーツがふら付き、コクピットを衝撃が襲う！

「きゃー！」

「下がってなさい！ 死にたいの！？」

正面のスクリーンには重突撃銃を構えたジンが映っていた。

このままじゃ！ くやしい！ あんな古臭い機体に！ インパルス、いえ、ザクがあればあんな……

うっん、操縦するのが私なら……

(忘れてた？ 私も赤なのよ？)

遠い記憶がつつすら蘇る。誇らしげに、私は誰に向かって言っていたんだろっ？

私の回想をよそに、ジンは重斬刀を抜くと切りつけてくる！

「まだ終わらないわ！」

副長と名乗った女性は、ひとつのボタンを押し込んだ。

ガシーン！

衝撃はあつたけど、このモバイルスーツはやられていなかった！

「PS装甲　フェイスソフト装甲よ。実体兵器ならほぼ完全に無力化できるわ！」

副長と名乗った女性　ああ、めんどくさい。副長は振り返り、誇らしげに、そして安心させるように微笑んだ。

……なら！

「余裕、出来ましたよね？　ちょっといじらせてください！」

「な、なにを！？」

返事を聞く間も無く、私はキーボードを取り出し、OSの確認を始めた。

「……なんなの？　このOS？　こんなので動かそうなんて！」

「仕方ないでしょ、まだ未完成なんだから！　あ！」

ジンは懲りずに重斬刀で切りつけて来た！　このモバイルスーツはふら付きながらなんとか受け止める。

ガシーン！　何度目か、とうとうこのモバイルスーツは尻餅をついてしまった！

いくら装甲が硬いとはいえ、こつも何度も叩かれるとコクピットの中にいる私達が持たない！

あ。あれは、ミリィ！　こんなところに、まだ！

「ちよつと、どいてくださいー！」

操縦席の副長を無理やりどかす。

「あなた、何を！ 何者？」

すばやく操縦席に滑り込むと、スラスタを吹かしてカウンター気味にジンを殴りつける！

ジンは大きな響きを立てて倒れこんだ！

私は振り向いて言った。

「私はルナマリア・ホーク。オーブのコーディネイターです！」

「……そう。オーブのコーディネイター。わかったわ。任せる」

「いいんですか？ キャリブレーション取りつつ、ゼロ・モーメント・ポイント及びCPGを再設定……」

私は再びキーボードを手にしてOSをいじりだす。

「コーディネイターにはコーディネイターと思っただけよ。私じゃ、もう限界だったし、あなたに賭けてみたくなったの」

「OS終わり！ 武器は？ 何かないの？ ビームサーベルとか」

「……！ ……今は、ないわ。頭部の対空自動バルカン砲塔システム、イーゲルシュテルンと……」

副長の手が後ろから伸びあるスイッチを押すと、このモビルスーツの頭部から、起き上がったジン目掛けて弾丸が飛んで行く！

「左右の腰にコンバットナイフのアーマーシユナイダーが格納されているだけよ。それでなんとかして頂戴」

「しょうがないわね！」

ジンと最後に戦ったのはいつだったろう。ふと思ひ浮かんできた考え。普通ならまた混乱しただろうそれを、今の私は自然に受け入れていた。

「ユニウスセブンの時か……」

「なんですって?」

「なんでもない! 落とさせやしないわ、空を!」

私には、頭部C I W Sの弾幕を抜けてくるジンが、あの時のテロリストとだぶって見えた。

ジンは再び重突撃銃を手にすると放ってくる! 着弾!

「ええい、いつまでも思い通りになんかさせるもんですか!」

両腕にアーマーシュナイダーを装備し、スラスターを吹かしジンに向かつて行く! このスピードならそうそう当たるもんですか!

重突撃銃の銃撃を切り抜け、私は一気にジンの右腕付け根にアーマーシュナイダーを突き刺した!

そして! 右腕のアーマーシュナイダーをジンのコクピットに突き入れた。

あの、黒いのなんだろう。油かな。はは。は……私は意識を失う事を自分に許した。

第三話

「あ、ルナ、気がついたの？」

「あ、ミリイ。私……？」

「あのモビルスーツからこの女の人担いで出てきたら、いきなり倒れるんだもん、心配しちゃった。水飲む？」

私の隣には、副長が寝かされていた。ふと、左手首を見てしまった。切り刻まれた痕。

……見なかつた方が良かったな。私も古傷がうずく。

「ありがとう、ミリイ」

ミリイからコップを受け取り。水を飲む。おいしい。

「う、うーん」

「あ、こちらも。気が付きました？ お水飲みます？」

副長さんが気がついた。腕を押さえながら身体を起す。

「……あ。ありがとう。あなたたちは？」

「私の工業カレッジのゼミの仲間です。副長さん」

「ルナマリアさん、だったわね。戦いはどうなったの？」

「ザフトのモビルスーツなら、ほら！」

ミリイが指し示した先には、片膝を突いて動かないジンがいた。コクピット付近の黒い色は……考えないようにしよう。

「よくやってくれたわ！ よくストライクを守ってくれたわ！ ルナマリアさん！」

ストライクって言うんだ。このモビルスーツ。

「無我夢中だっただけです」

「それでもよ。この一機があれば……あなたたち！ 何してるの！？」

不意に副長さんが形相を変えて拳銃を放つ！

「そこから離れなさい！」

見ると、カズイたちが私が操縦していたモビルスーツ ストライ

クに登ってコクピットを見ていた。

「止めてください！ あなたを運んでくれたの、みんななんですよ！？」

ミリイが慌てて止める。

「それでもです！ その機体から離れなさい！ 助けてもらったことは感謝します。でもあれは軍の重要機密よ。民間人が無闇に触れていいものではないわ」

「なんだよ。さっき操縦してたのはルナじゃんか」

トールが不服そうに言う。副長さんは、鬼の形相になってトールに銃を向ける。

「わかった、わかりましたよ。降りりやいいんでしょう、降りりやあ」

トール達は慌てて降りてくる。

「みんなこっちへ。一人ずつ名前を」

マリューは命令する。

「サイ・アーガイル」

「カズイ・バスカーク」

「トール・ケーニヒ」

「ミリアリア・ハウ」

「私はマリュー・ラミアス。地球連合軍の将校です。申し訳ないけど、あなた達をこのまま解散させるわけにはいかなくなりました」

「「えー！？」」

子供達は当然騒ぐが、マリューは後を続けた。自分が開発して来たモバイルスーツが4機もザフトの手に渡ってしまった事が、彼女の心の余裕を無くしていた。

どうしても残った一機の機密は守らねば……

マリユールは続ける。

「事情はどうあれ軍の重要機密を見てしまったあなた方は、然るべき所と連絡が取れ処置が決定するまで私と行動を共にしていただけざるを得ません」

「そんな！」

「冗談じゃねえよ！なんだよそりゃ！」

「従ってもらいます！」

「僕たちはヘリオポリスの民間人ですよ？ 中立です！ 軍とかなんとかそんなの、なんの関係もないんです！」

「そうだよ！ 大体なんて地球軍がヘリオポリスに居る訳さ！ そっからしておかしいじゃねえかよ！」

「そうだよ！ だからこんなことになっただんだけだろ！？」

ガン！ マリユールさんが威嚇射撃をし、銃声が木霊する。

「黙りなさい！何も知らない子供が！ 中立だと関係ないと言ってさえいれば、今でもまだ無関係でいられる。まさか本当にそう思っている訳じゃないでしょう？ ここに地球軍の重要機密があり、あなた達はそれを見た。」

それが今のあなた達の現実です」

「…そんな乱暴な」

「乱暴でもなんでも、戦争をしているんです！ プラントと地球、コーディネイターとナチュラル、あなた方の外の世界はね」

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！

「……何よ。コーディネイター、コーディネイターって！ ここはオーブよ！ コーディネイターとナチュラルうまくやってるのよ！ 外の価値観を持ち込まないでよ！」

「ルナマリアさん、黙りなさい……」

「やめろ、ルナ！」

「……え？」

サイが止める間もなく、私はカッターで自分の左腕を切り裂いた！

「な、なにを……ルナマリアさん……」

あー、すかつとした！ 腕から流れる血の暖かさに、安心を感じた。
「あんた。地球軍の士官だか知らないけどさあ、ルナの前でよくも
コーディネイターを敵視した発言が出来たな！」

「そうだよ。コーディネイターってばれてからルナがどれだけ嫌が
らせ受けたか知ってるのかよ」

「リストカッターもようやく収まってきてたのに」

「そうよ。最近、やっと七分袖が着れるって喜んでたのに！」

「ごめんなさい！」

「…え」

マリューさんがいきなり土下座した。

「迂闊な発言してごめんなさい。……辛かったわよね。いくらオー
ブと言っても。プラントの奴らがニュートロンジャマーなんて落と
したから尚更よね」

マリューさんの顔は、泣き笑いだ。

「私の彼もね、メビウス乗りだね。プラントの奴らに殺られたのよ。
ほら、私も」

マリューさんは、左腕を私達に見せた。醜い。でも見慣れている傷
跡だった。マリューさんは泣いていた。

「でも！ だから！ プラントの奴らに一矢報いたいのよ！ お願
い、今は力を貸して頂戴！」

「……いいよ」

「ルナ？」

なんでだろう。ふと、口をついて出た台詞。それは、マリューさん
の涙に本物を感じたからだろう。あるいは、リストカッター同士の

共感、かな。

「手伝つてもいいよ。どうせ、どここのシエルターに行けばいいかも、無事かもわかんないし。この人、戦艦の副長なんだって。なんとかしてくれるんじゃない?」

「まあ、ルナがそう言うなら、な」

「しょうがねーな」

「ありがとう、あなた達!」

マリユーさんの顔は涙と鼻水と、土でぐちゃぐちゃだった。でも、私はそれを綺麗だと感じたのだ。

「ほら、大事にしなきゃ。女の子だもんね」

「ミリイ……」

ミリイがリスカした所を止血して手当してくれてる。リスカした時の不健康な温かさよりも、伝わってくる確かな暖かさ。

「ごめん。もう、しない」

私は、ミリイの肩で泣いた。

ルナマリアが自らの左腕を切り裂いた時、マリユーは時間が止まったように感じた。

少し前の自分がフラッシュバックする。同じように左腕に切りつけて泣き叫んでいる女性が見える……あれは自分だ。

「あんた。地球軍の士官だか知らないけどさあ、ルナの前でよくもコーデイネイターを敵視した発言が出来たな!」

「そうだよ。コーデイネイターってばれてからルナがどれだけ嫌がらせ受けたか知ってるのかよ」

「リストカットもようやく収まってきてたのに」

「そうよ。最近、やっと七分袖が着れるって喜んでたのに!」

彼女の友人達の言葉が耳に入ってくる。

思わずマリューは土下座する。それしか謝罪の方法が思いつかなかった。

でも……同時に感じていた。

そうよ。恨みは消せない。そう。コーディネイター全体が悪い訳じゃない。悪いのはザフト。

お願い！ 力を貸して！ マリューは懇願した。心の底から。

「……いいよ」

最初に口を開いたのは、当のルナマリアだった。

え？ いいの？ それより。この子は、なんてまっすぐにこちらを見つめてくるのだろう。

綺麗な子だ。それを傷つけてしまった。

罪悪感が疼く。マリューは誓う。もう二度と彼女を傷つけないと。

「こちらX-105ストライク。地球軍、応答願います。地球軍、応答願います！」

「ナンバー5のトレーラー……あれでいいんですよね？」

「ええそう。ありがとう」

「それで？ この後はどうすればいいんです？」

「ストライカーパックを装備して。そしたら、ルナマリアさんもう一回通信をやってみて！」

「はい」

私はストライカーパックと言う言葉に聞き覚えがあった気がした。ウィザードシステム。そんな言葉も浮かんできた。まただ。何だろう。一体。

「マリューさん、ストライカーパックってどんな物ですか？」

「ストライカーパックシステムは、戦況に応じて近・中・遠距離用等複数のバックパック、及びその他装備を換装する事によって、1

機で各々の専用機と同等かそれ以上の性能を付加する事を目的としているのよ。また、ストライカーは各々のパックが独立したバッテリーユニットを持ち、同時に装着機の補助電源の役割も兼ねているわ。そう言えば……」

マリューさんの目が少しきつくなつた。

「ビームサーベルが無いか、とか言つてたわね。なぜ、地球軍の最新の装備を知っているの？」

「え？ あ、ふと、口に出ちゃったんですよ」

本当になんでだろう。あの顔をしたモビルスーツ ストライクには、ビームサーベルが似合う気がしたのだ。

「不思議ですね。そんなに、ロボット物のアニメとか見ていなかったのに」

「……そう。確かにストライカーパックの中には、エールストライカーと言つてビームサーベルが装備されている物もあるわ。でも、いきなり素人のあなたに切り合いをもらうつもりはないわ。今装備するのはランチャーパックつて言つてね、320mm超高インパルス砲『アグニ』に、右肩に120mm対艦バルカン砲と2連装のミサイルランチャーが付いているわ。もしザフトのMSが出てきたらうまく使つて敵を近づけないようにして頂戴。『アグニ』は威力が強力な分、バッテリーの消費も激しいから使いどころに気を付けてね」

「はい、わかりました。あ！」

「どうしたの！？ ルナマリアさん」

『……ちら……ク……ジェル……… ちらアークエンジェル！』

微かだけど、途切れ途切れだけど、呼びかけて来る艦名は確かにマリューさんの言っていた物だ！

「繋がりましたよ！ こちらX-105ストライク。アークエンジェル、応答願います！」

！ 爆発音がした！

「あ！ 気をつけて！ ルナマリアさん、敵機よ！ 早く装備をつ

「
慌てて空を見やると、シャフトからメビウスとジンが……違う、ジンじゃない、シグーだ。戦って、いえ、メビウスがシグーに追われている！
次の瞬間、コロニー内に爆音が響き、大地が割れ、爆炎の中から一隻の戦艦が現れた。」

！ シグーに目を付けられた！
慌ててハッチを閉める。

重突撃銃の弾が当たる感触。

私は右肩のコンボウエポンプッド 120mm対艦バルカン砲と350mmガンランチャーから弾を吐き出す！

……だめだ。うまく避けられてしまう。シグーは重突撃銃を撃つのを止めると、シールドからバルカン砲を撃ち出す！

うん、相手の武器もストライクには効いていない！ 落ち着け、私！

「よし、狙いはばっちりよ！」

『アグニ』を構え、バルカン砲で牽制しながらシグーを狙う！

「待って！ その方向では！」

「え？」

急にかげられた声に狙いが逸れた。辛うじてシグーの片足を奪ったものの、ヘリオポリスの外壁に穴を開けてしまう。

でも、こんな物、コロニー内でどっちの方向に向かって撃てばいいって言うのよ！

……フォースシルエットなら……まただ。また見知らぬ単語が頭に浮かんで来る。私はもうそれに慣れていた。

「ラミアス大尉！」

「バジール少尉！」

「御無事で何よりでありました！」

「あなた達こそ、よくアーケエンジェルを…おかげで助かったわ」
コロニー内に姿を現した艦　アーケエンジェルから降りてきた人達は、どうやら、マリューさんの知り人みたいだ。

私もストライクから降りると、みんなぎよつとした顔になった。

どうしたんだろう？　リスカしちゃった傷は包帯で隠れてるはず？

「おいおい何だっただ？　子供じゃないか！あの嬢ちゃんがあるに乗ってたってのか」

ああ、そう言う事か。

「ラミアス大尉、これは？」

「ああ……」

「へー、こいつは驚いたな」

奥から、さっきのメビウスのパイロットだろう青年がやって来た。
シグーと戦って助かったのだ。きつと腕が良いのだろう。

「地球軍、第7機動艦隊所属、ムウ・ラ・フラガ大尉、よろしく」

「第2宙域、第5特務師団所属、マリュー・ラミアス大尉です」

「同じく、ナタル・バジール少尉であります」

「乗艦許可を貰いたいんだがねえ。この艦の責任者は？」

「……艦長以下、艦の主立った士官は皆、戦死されました。よって今は、ラミアス大尉がその任にあると思います」

「ええ……」

「無事だったのは艦にいた下士官と、十数名のみです。私はシャフトの中で運良く難を」

「艦長が……そんな……」

「やれやれ、なんてこった。あーともかく許可をくれよ、ラミアス大尉。俺の乗ってきた船も落とされちまってねー」

「あ、はい、許可致します」

「で、あれは？」

話が私の事になった。でもあれ扱いはないでしょう。私はちょっとむっとした。

「御覧の通り、民間人の少女です。襲撃を受けた時、何故か工場区に居て……私がGに乗せました。ルナマリア・ホークと言います」

「ふーん」

「……う、彼女のおかげで、先にもジン1機を撃退し、あれだけは守ることができました」

「ジンを撃退した!？」

「「え!」「」

「あの子供が!？」

「俺は、あれのパイロットになるヒヨっこ達の護衛で来たんだがねえ、連中は……」

「ちょうど指令ブースで艦長へ着任の挨拶をしている時に爆破されましたので……共に……」

「……そうか」

つかつかと、フラガ大尉と名乗った青年がこちらにやって来た。

「な、なんですか？」

「君、コーディネイターだろ」

「気持ち悪い……」

「なんだって？」

「コーディネイターだったら、なんだってのよ」

周囲の兵が、銃を構える。ミリイが悲鳴を上げる。

なによなによなによなによ! コーディネイターがそんなに敵だつて言うなら血を流してあげるわよ! 自分で!

「止めて、ルナマリアさん！」

「え？」

カッターを出そうとしたら、マリューさんに、いきなり抱きしめられた。

「自分を、もつと大事にして。ね？」

「マリューさん……う……うああ……！」

私は、マリューさんから伝わってくる暖かさに、マリューさんの胸に顔を埋めて号泣していた。

「マリュー大尉、これは一体……」

「……皆銃を下ろしなさい。そう驚くこともないでしょう？ ヘリオポリスは中立国のコロニーですもの。戦渦に巻き込まれるのが嫌で、ここに移ったコーディネイターが居たとしても不思議じゃないわ。この子はオーブのコーディネイターなのよ。コーディネイターってばれて、かなり嫌な目にも遭ってきたのよ」

「……いや、悪かったなあ。とんだ騒ぎにしちまって。俺はただ聞きたかっただけなんだよね」

「フラガ大尉、地球軍の士官なら、これからはもつと言葉に気をつけてください」

「だから、悪かったって。でもここに来るまでの道中、これのパイロットになるはずだった連中の、シミュレーションを結構見てきたが、奴等、ノロくさ動かすにも四苦八苦してたぜ。やれやれだな」

「フラガ大尉！ どちらへ？」

「どちらって、俺は被弾して降りたんだし、外に居るのはクルーゼ隊だぜ？」

「ええ……」

「あいつはしつこいぞ。こんなところでのんびりしている暇はないと思うがね」

私は、マリューさんと一緒に医務室に来ていた。

「デングル先生、お世話になります」

「ああ、大変だったな。どれ。銃創は貫通しとるからそれほど心配はいらん。こっちのお嬢ちゃんは……」

医務室で私の傷を見た医師は、マリューさんを見た。マリューさんは、こくと頷いた。

「あんたはもう、大丈夫なんじゃな？」

「はい、先生」

「それで、今度はこのお嬢ちゃんか。よくこんな事をやっておるのかい？」

「いえ、最近は全然」

「すみません、私がプレッシャーを与えてしまって」

「そうかそうか。とりあえず止血はしとくが、鉄錠剤出すから飲んでおきなさい」

「やだ、あれまじいのに」

「こんな事をするからだ！ 罰だと思って飲んでおきなさい」

「はい」

『ラミアス大尉！ ラミアス大尉！ 至急ブリッジへ！』

いきなり、艦内通話機が鳴った。

「どうしたの？」

『モビルスーツが来るぞ！ 早く上がって指揮を執れ！ 君が艦長だ！』

「私が？」

『先任大尉は俺だが、この艦の事は分からん』

「……分かりました。では、アークエンジェル発進準備、総員戦闘第一戦闘配備。大尉のモビルアーマーは？」

『駄目だ！出られん！』

マリユーさんは、こちらに振り向くと言った。

「ルナマリアさん。本当に申し訳ないけど、でも、どうしようもないの。またストライクに乗ってもらえないかしら？ このままじゃ確実にこの艦も破壊されるわ」

マリユーさんは頭を下げた。

……どうしよう。コロニーの警報レベルは9に上がったと言ったことだった。もうシエルターには入れない。

宇宙の真空に晒され、凍りついた死の世界が脳裏に浮かぶ。一度も行った事が無いけど、ユニウス7だ、と心の奥が告げている。

ここがあんな風になっていいの？ いい訳ない！

「いいですよ」

「本当！？ 助かるわ！ ありがとう！」

「でも、次はエールストライカーをお願いします」

「本当にエールストライカーでいいのね？ 切り合いになるわよ？」
「相手の武器は効かないんですから、大丈夫です。コロニー壊すわけにはいかないですから。ランチャーストライカーだと、アグニ撃てないとそれほど牽制も出来なかったし」

「ルナマリアさん一人に任せるわけじゃないのよ？ 心の余裕を持って、艦砲とも連携して。……ちゃんと帰って来て。それしか言えないけど」

「はい！」

私は格納庫に走った。後ろから、マリユーさんもブリッジに走り出す音が聞こえる。

このままコロニーをザフトの奴らに好きに壊させる訳には行かない！ コクピットに入って、状況を把握する。

アークエンジェルからミサイルが放たれ始めたようだ。敵のモバイルスーツはそれを躲し……ミサイルは皮肉にもコロニーのシャフトに当たっている！ このままじゃコロニーが！

『ストライク！ 敵のジンは拠点攻撃用の、重爆撃装備だ。コロニーに遠慮する気は無いらしい。頼むぞ！』

「はい！」

『タンネンバウム地区から更に別部隊侵入！ 一機はX-303、イージスだ。ストライクと同じくPS装甲でビームライフルにビームサーベルも持っている！ 気をつける！』

「じゃ、ルナマリア・ホーク、ストライク、出るわよ！」

動きが鈍い、大型ミサイルを持った重爆撃装備のジンは、どうやらアークエンジェルを狙っているようだった。

「させるもんですか！」

エールストライカーのスラスターを使い、一気にジンの上方に出る。ジが発射している大型ミサイルをビームライフルで射撃！

やった！ あの時は失敗したけど今度は！

ふと、昔こんな切迫した状況でビームライフルを撃っていた事がある気がした。

あの時の挫折感が癒されたと思った。

ミサイルを迎撃した後は上空から加速をつけて下方の死角へ回り込む。ビームライフルからビームサーベルに切り替え、ジンの胴を一薙ぎ！ ジンは爆散した。

『いいぞ！ ルナちゃん！ その調子だ！』

「はい！」

もう一機のジンは！？ いた！

『こいつ…すば…いい！ …ラン！ …アスラン！ …ど…にいる！』
アスラン！？

私が残るジンに向かおうとした時、赤いモビルスーツ イージスが立ちふさがった。

「ルナ！ ルナマリア・ホーク！」

え！？ イー吉斯から呼びかけて来た！ この声は、記憶より少し大人びていて、でも……

「アスラン！？ アスラン・ザラなの！？」

何故。記憶より大人びているような、いえ、記憶よりまだ幼いような懐かしいこの声。でも、心のどこかで、お前を裏切った裏切り者を早く倒せと囁きだす。

「何故……何故アスランが！？」

「お前こそ……どうしてそんなものに乗っている！？」

「……あなたこそ、なんでこのコロニーを壊そうとするのよー！」
あ。身体が勝手に操縦桿を動かす。止まらない！

「アスラン、逃げてー！」

「え？」

潜在意識が勝手に放った斬撃はイージスの右腕を切り飛ばした。

次の瞬間、背後から大きな衝撃が来た！

振り向くと、コロニーのシャフトが、完全に崩れて……

「あー！ うわああああ！！！」

イージスは宇宙に吸い出されて行った。

「アスラーン！」

……もう、返事が返って来る事は無かった。

第四話

『X-105ストライク！ X-105ストライク！ ルナマリア！
聞こえていたら……無事なら応答しろ！』

あ。気がつくのと、私はコロニーの残骸の中を漂っていた。

「……こちらX-105ストライク、……ルナマリアです」

『はあ……無事か？』

ナタルさんの安心したような溜息と共にこちらを気遣う言葉が返ってきた。

「はい」

『こちらの位置は分かるか？』

「……はい」

『ならば帰投しろ。……戻れるな？』

また、ちよつと気遣わしげなナタルさんの言葉。

なんか、不謹慎だけど嬉しい。

「……はい」

返事をして、アークエンジェルへ向かう。

……父さん、母さん、無事だよな？……家にあつた物、みんなどうなつちやうんだらう。戦争によつて放棄された物は確かジャンク屋組合の物になるんだよね。私の大切にしてきた物も、もしかしたら勝手に持ってかれちやうのかな。なんか、ジャンク屋組合って許せない。

あ！……あれ、ヘリオポリスの救命ポッド！ どうしたんだらう？
漂つてる？ 助けなきゃ！

私が持ち帰った救命艇は、ちよつとした騒ぎを引き起こした。

ナタルさんが収容に反対したのだ。

「……認められない！？認められないってどういうことですか！？推進部が壊れて漂流してたんですよ？それをまた、このまま放り出せとでも言うんですか！？避難した人達が乗ってるんですよ！？」

「すぐに救援艦が来る！アークエンジェルは今戦闘中だぞ！避難民の受け入れなど出来る訳が……え？あ、はあ。ではそのようにルナマリア、許可が出たぞ。収容急げ！」

「ほんとですか！？ありがとうございます！」

私は早速救命艇を艦内に収容し、ハッチを開けた。

「あら？」

見覚えのある顔が出てきた。

「あ、あー、貴方！サイの友達の！」

「あなたは……確かフレイ・アルスター？」

「ねえ、どうしたのヘリオポリス！どうしちゃったの？一体何があつたの？」

フレイは、心配で混乱した様子だった。冷や汗だかでほつれた髪が首筋に張り付いている。

「ヘリオポリスは、ヘリオポリスはね……」

私は言葉に詰まってしまった。悔しくて涙が出てくる。

「あたし、あたし……フロレンスのお店でジェシカとミーシャにはぐれて、一人でシエルターに逃げて、そしたら……」

「……」

「これザフトの船なんですよ？あたし達どうなるの？なんであなたこんなところに居るの？」

そうか、それでそんなに心配して……

「安心して。これは地球連合の艦よ」

「うそっ！？だってモビルスーツが！」

「地球軍の試作品よ。この艦にはサイも、ミリアリアもいるのよ。心配しないで？ ね？」
「フレイはこくと頷いた。
皆は休憩室にいるとの事だった。一緒にフレイを連れて行く。
サイの顔を見たらフレイは飛び付いて行った。
よっぽど不安だったんだろうなあ。救命艇、助けてよかった。
ぼりっ。私はデングル先生からもらったデパスを噛み砕き、その甘さを楽しんだ。」

「どこに行くのかな、この船」

「一度、進路変えたよね。まだザフト、居るのかな？」

「この艦と、あのモビルスーツ追ってた？　じゃあ、まだ追われてんのかも」

「えー！　じゃあなに？　これに乗ってる方が危ないってことじゃないの！　やだーちよっと！」

え。そうなのかな。私、余計な事しちゃった？

自然と頭が俯く。

ぼりっ。デパス、もう一錠追加。

「ルナ」

「え？」

サイが声をかけて来た。

「その辺で止めとけ。飲みすぎるな」

「ありがとう」

うん、あまり薬に頼りすぎるのも良くないし。もう止めておこう。
幸い、ざわめき出した漠然とした不安感は収まった。

ミリイがフレイに言う。

「壊れた救命ポッドの方がマシだった？」

「そ、そうじゃないけど……」

「親父達も無事だよな？」

「避難命令、全土に出てたし、大丈夫だよ」

あ、フラガ大尉だ。

「ルナマリア・ホーク！」

「は、はい」

「マードック軍曹が、怒ってるぞー。人手が足りないんだ。自分の機体ぐらい自分で整備しろと」

「私の機体……？ え、ちょっと私の機体って……」

「今はそういうことになってるってことだよ。実際、あれにはお嬢ちゃんしか乗れないんだから、しょうがないだろ」

「それは……しょうがないと思って2度目も乗りましたよ。でも、

私は軍人……」

！

私はザフト。私はザフト。ワタシハザフトノアカフク。

まただ。また声がする。

「いずれまた戦闘が始まった時、今度は乗らずに、自分は軍人じゃないって言いながら死んでくか？」

「……うう……」

「今、この艦を守るのは、俺とお前だけなんだぜ？ 君は、出来るだけの力を持っているだろ？ なら、出来ることをやれよ。そう時間はないぞ。悩んでる時間もな。……おい、どうした？ 大丈夫か？」

私は頭に響く声を抑えようと頭を抱えていた。

「……大丈夫……。降伏、する訳にはいかないんですか？」

そうよ！ 向こうには、アスランがいる！ アスランならきつといのようにしてくれるはず……

「エイプリル・フル・クライシスの被害を見るよ。プラントの奴らは何かあるとすぐ血のバレンタインとか言うけどな、被害はエイプリル・フル・クライシスの方が数もパーセントも段違いだぜ。」

それに、いきなり中立国もなんもお構いなしに地球全土にニュートロンジャマーをぶち込むなんざ、所詮プラントの奴らは、空の高みから、ナチユラル如きと俺達を見下してやがるとしか思えんよ。そんな奴らに自分の身を進んで預けようとは思わないね」

「そう、ですか」

「お前さんが複雑なのもわかる。しかし、ザフトの連中は容赦しちやくれんぞ」

「……」

「あの！ この船はどこに向かってんですか？」

「ユーラシアの軍事要塞だ。ま、すんなり入れればいいがな。ってとこね」

「じゃ、私行くから」

「おい！ ルナ！」

「何？ サイ？」

「整備に行く前に、もう一度医務室に行っとけよ！」

「うん、ありがとう」

「えー！？ なに？ 今のどういうこと？ あのルナマリアって人、

あの……」

どう言えばいいのかな。サイは迷った。

……この場で隠してもすぐばれる。なら正直に言った方がいいか。

「君の乗った救命ポッド、モビルスーツに運ばれてきたって言うって。あれを操縦してたの、ルナなんだ」

「えー！ あの……人……？」

「ああ」

「でもあの……あの……人……なんでモビルスーツなんて……」

「ルナはコーディネーターだからね」

「えー！」

「カズイ！」

カズイは余計な事を言う……もっと言い様もあるだろうに。サイは腹立たしかった。

「……うん……ルナはコーディネイターだ。でもザフトじゃない」

「……」

「……うん、あたし達の仲間。大事な友達よ」

ミリアリアもそう言うてくれる。だがフレイは

「……そう……」

としか言わなかった。

サイはフレイのコーディネイター嫌いを知っていた。納得してくれたのか、少し不安を感じた。

「……と言う訳で、声が聞こえるんですよ。お前はザフトだ、ザフトの赤服だとか。私、統合失調症でしょうか？」

「うーむ」

避難民の中に医者がいたらしい。その人もやって来た。

やだな。避難民を不安にさせちゃう。

「お前さん、ザフトがよっぽど怖かったんじゃないのかな？」

「はい、それは、怖かったです」

「よほど怖い眼に遭うと、人はその対象に自己を同一化して恐怖を無くそうとする。それかも知れんの。ほれ、ゾンビに追われる位ならゾンビになった方がまし、と言う奴じゃ」

「どうすれば、いいんでしょうか？」

「ザフトの事が怖くなくなればいいんじゃないか……自分を磨いて強くなる、自信を持つ、と言うのもひとつの方法じゃな」

「強い薬は、あまり使いたくないですね。デングル先生？」

「そうじゃの。マイナートランシルナイザーで様子を見よう。どうしても生活に不便が生じたら言うてくるんじゃないぞ。何かあったら、いつでも来なさい。カウンセリングでもしてあげるからの」

「あ、はい。やっぱり、強いストレスかかるとなるみたいで」

「じゃ、頓服にレキソタン出しておくけど、常用するんじゃないぞ」「はい」

私は医務室を後にした。やっぱり、ストレスかかっているよね。ここ一日でこんなに環境が急変したんだ。無理も無いと思う。

「自分を磨いて強くなれ、かあ。モビルスーツが動かせても、戦争が出来る訳じゃないのにな」

でも……そう。でも。あつという間に、こんな生活になじんでる。ううん、昔からしてたような気になるのはなんでだろう。

「遅いぞ！ お嬢ちゃん！」

「あ、マードックさん。すみません、医務室に寄つてたもので」

「む、そうか。大事にしてくれよ。まあ外側の整備はやつといたが、内部の整備はなあ。やっぱりお嬢ちゃん自身で動かしやすいようにしておいてもらわんと」

「そうですね。今やります」

私はコクピットに上がってキーボードを取り出した。

「ほんとによくこんなOSで実践に出た物よね。ここで小手先だけでいじってスパゲッティになるより、基礎は一から組んだ方が早いかもね」

私には、なぜか、モビルスーツの基礎OSの完成図が判る気がしたのだ。ナチュラル用のOSまで、そう、まるで何度も授業で叩き込まれたかのように……

『敵影補足、敵影補足、第一戦闘配備、軍籍にあるものは、直ちに全員持ち場に就け！ 軍籍にあるものは直ちに……』

アラート音が鳴ったのは、一時間も過ぎた頃だろうか？

「やばっ じゃあここまでとりあえず保存して、組み込みっと」

『ルナマリア・ホークはブリッジへ。ルナマリア・ホークはブリッジへ』

「もういますっての」

「おーい嬢ちゃん！」

「あ、マードックさん」

「根つめるタイプなんだな、嬢ちゃん。パイロットスーツに着替えおいたほうがいいぞ。なんたって、今度は外は真空だ」

「はい」

『敵影補足、敵影補足、第一戦闘配備、軍籍にあるものは、直ちに全員持ち場に就け！ 軍籍にあるものは直ちに……』

『ルナマリア・ホークはブリッジへ。ルナマリア・ホークはブリッジへ』

戦闘……その事が頭に浮かんだ時、ミアリアが感じたのは恐怖だった。そして、ルナマリアの事が頭に浮かんだ。モビルスーツに乗って、私達を守ってくれた親友。

「……ルナ……どうするのかな」

「あいつが戦ってくれないと、かなり困ったことになるんだろうなあ」

ミアリアは罪悪感を覚えた。きっとルナマリアは戦うだろう。自分達を守るために。そんな子だ。

ミアリアは決意した。

「ねえトール……私達だけこんなところで、いつもルナに頼って守ってもらって……」

「出来るだけの力を持っているなら、出来ることをやれ……かあ……」
「ミリアリアが見回すと、みんな頷いてくれた。」
「行きましよう、私達も！」

「ルナー」

「あ！ トール、みんな」

パイロットスーツに着替えに行く途中、みんなに逢った。どうしたの？ 地球軍の制服なんて着ちゃって？

「……何？ どうしたの？ その格好？」

「僕達も艦の仕事を手伝おうかと思って。人手不足なんだから？」

「ブリッジに入るなら軍服着ろってさ」

「軍服はザフトの方が格好いいよなあ。階級章もねえからなんか間抜け」

「生意気言つな！」

「お前にばつか戦わせて、守ってもらってばつかじゃな」

「こつという状況なんだもの、私たちだって、出来ることをして……」

「おーら行け！ ひよっこども！」

「じゃあな、ルナー」

「後でね」

そう言ってみんなは向こうへ行ってしまった。

「あー、お前もまた出撃するんなら、今度はパイロットスーツを着ろよー！」

「あ、はい、今着替えに行く所です。みんなに頑張らせて伝えてください。チャンドラさん」

「ああ！ しつかり伝えるよ！ お前さんも頑張れ！」

「はいー！」

みんなの気持ち、嬉しかった。あたしは更衣室に向かってダッシュした！

「ほおー」

「ああっ」

着替えた所に、フラガさんに出くわした。

「やっとやる気になったってことか。その格好は」

「フラガさんが言ったんでしょ？ 今この船を守るのは、私とあなただけだ。戦いたい訳じゃないけど、私はこの艦は守りたい。みんなが乗っているんだから」

「俺達だってそうさ。意味もなく戦いたがる奴なんざ、そうは居ない。戦わなきゃ、守れねえから、戦うんだ」

「ええ」

「よし！ じゃあ、作戦を説明するぞー」

フラガさんが説明した作戦とは、私が艦を守って時間稼ぎしている内にフラガさんがこっそり敵の艦に近づき、一撃を加えると言う物だった。

「とにかく、艦と自分を守ることを、考えるんだぞ」

「は、はい！ フラガさんもお気を付けて」

あ、やだ！

ふと、先の戦いの事を思い出してしまった。

……アスラン……またあなたも来るの？……この艦を沈めに……もしアスランが来たら、私はどうすればいいんだろう？

「ストライク、発進位置へ！ カタパルト接続。システム、オールグリーン！」

フラガさんが隠密先行して、前の敵を討つ。その間私は、後方の敵から艦を守る。うまくいくのかな……

「ルナ！」

「……！ ミリィ！」

「以後、私がモビルスーツ及びモビルアーマーの戦闘管制となります。よろしくね！」

「よろしくお願ひします、だよ」

「ふふ」

「装備はエールストライカーを。アークエンジェルが吹かしたら、あつという間に敵が来るぞ！ いいな！」

「……はい！」

待つ時間は短いようで長く、長いようで短い。私の心臓はどきどきしている。

「前方、ナスカ級よりモビルスーツ発進。機影1です！」

「艦長！」

「お願い！」

「ルナマリア！ ストライク発進だ！」

「ルナ！」

「……了解！ はあはあはあ……ルナマリア・ホーク、ストライク！ 行きます！」

宇宙へ出て、敵のモビルスーツを視認する。

「あのモビルスーツは……アスラン？」

先の戦いと同じ、赤いモビルスーツがそこにいた。

やだつ。アスランとは戦いたくない！

「ルナ！ 出撃してきたモビルスーツは奪われたGと判明！ PS 装甲にビーム兵器付きよ！ 気をつけて！」

「了解！」

「ルナ！」

「イーリスから通信が入る。」

「アスラン！」

「やめろ！ 剣を引け！ ルナ！ 僕達は敵じゃない、そうだろ？
何故僕達が戦わなくちゃならない！」

「……アスラン！」

「同じコーディネイターのお前が、何故僕達と戦わなくちゃなら
ないんだ！？」

「あ、アークエンジェルが！」

「新たに後ろから接近して来たモビルスーツに攻撃されている！」

「止める！ ルナ！」

「アスラン！」

「お前が何故地球軍に居る？ 何故ナチュラルの味方をするんだ！
？」

「私は地球軍じゃない！」

「……！？」

「……けどあの船には仲間が、友達が乗ってるのよ！ アスランこ
そ！ なんでザフトになんか！？ なんで戦争したりするのよ！？」

「……！」

「戦争なんか嫌だつて、あなただつて言ってたじゃない！ そのあ
なたがどうしてヘリオポリスを壊したりしたのよ！」

「状況も分からぬナチュラル共が……こんなものを造るから……」

「勝手な言い分を！ 身を守る武器を持って何が悪いのよ？ 忘れ
てた？ 私の親はナチュラルよ！ そんな見下した言い方…… あ
つ！」

「……甘い言葉を吐いておきながら……」

「急に口惜しさが込み上げて来る！」

やだ！？ また！？

「アスラン！ 逃げて！」

「え？」

身体が勝手に放った斬撃は、今度はとつさに後ろにスラスターを吹かせたイージスの右脚を切り飛ばした。

「やだ！ もうアスランと戦いたくない！」

「なにをもたもたやっている！ アスラン！」

デュエル？ ビームライフルを撃ちながらこちらへ向かって来る！

……邪魔よ……

頭の中の声は冷静に囁く。

私はとつさにスラスターを吹かし、デュエルに急突進した。

「にゃにおう！」

ビームサーベルは見事にデュエルのビームライフルを右手ごと切り落とした。

「もう、いやー！」

イージスへの攻撃を再開しようとする身体を押さえつけ、私はアスランから離れようとアーケエンジェルを攻撃しているモバイルスーツの方へとスラスターを吹かせた。

……攻撃力の割りに動きが鈍いのは、あれ……

私の叫びにお構いなく、頭の中の声は冷静に囁き続ける。

もう、私は心の奥底の声に任せた。

バスター……私に気づくと、右手にリニアレールガン、左手に大型ビームライフルと高出力の砲を撃ってくる！

でも、そんなの今は当たる気がしない！

大型ビームライフルを躲しながら私はビームサーベルで、上からバスターに切り付けた！ 盾を持たないバスターはそれを防げず、ビ

ームサーベルはバスターの右腕を切り落とした！

……？ 撤退？ していく？

あ、アークエンジェルから。特装砲ローエングリンの警告。フラガさんが成功ったの？

私はアークエンジェルに着艦した。

「おーい！ こら嬢ちゃん！」

「あ？どうした？」

「いや、なかなか嬢ちゃんが出てこねえんで……」

「おやおや。おーい、何やってんだ！こら！ルナマリア！……！」

「ハアハアハア……あつ」

「もう終わったんだ。ほら、もう、とっとと出てこいよ。お前も俺も死ななかった、船も無事だ。上出来だったぜ」

……あつ……

アスラン……もう、だめなのかな。私、あんな事を言うあなたは好きになれない。何時の間にか、こんなに互いの心が違ってしまった。

「……ううあああ……！」

私は、フラガさんにしがみつくと、泣いてしまった。

「あー、こりやどうしたもんかね？」

「緊張の糸が切れたんでしょう。すごい活躍でしたから。慰めておやんなせえ。役得役得」

「役得ってね……ほら、もう大丈夫だから」

私は……どうすればいいんだろう。

第五話

「カガリ様！ ご無事でなによりです！」

「ああ、心配をかけた」

カガリを乗せた救命ポッドは無事に収容されていた。

「クサナギか……」

「は、何か？」

「いや、頼もしいなと思ってね」

カガリはヘリオポリスで会った少女の事を考えた。

ルナマリア・ホークとか言ったな……無事だろうか？

あんな別れ方をしたせいだろうか、不思議と気に掛かる。

「……隊が未帰還……」

なぜ？ その報告にカガリは耳をそばだてた。モビルアーマー隊の

一隊が未帰還らしい。

オーブは戦争をしている訳でもないのに、なぜ！？

お父様は中立宣言していたのに……ザフトは遠慮しなかったらしい

な。

力がなければ、中立宣言など一顧だにされない。それがカガリには

骨身に染みてわかった。

力が、欲しい。国を守るだけの力が。

国へ帰ったら、広い世界を見てみよう。視野を広げなければ。

カガリの小さな決意だった。

「はい。また声が聞こえました。でも、私を助けてくれた、導いてくれた気もします」

「ふーむ。潜在意識が、顕在化したものかも知れんの。まあ悪い事

は無かったと言うことじゃな」

「でも、私の意志とは勝手に攻撃したり……」

「それも、自己保存の本能が働いた物かも知れんよ。また、なにかあつたら来なさい」

「はい」

デングル先生に言わなかった事もある。夢の事だ。ヘリオポリスが崩壊する前、居眠りで見た夢……私とアスランがモビルスーツで戦っていた夢。現実になっちゃった……予知夢って奴かな。

でも、やっと、味方の基地に着くんだよね。

医務室を出て、ほつと一安心してたところにフラガさんが現れた。

「ちよつと言い忘れてた」

「はい？」

「ストライクの起動プログラムをロックしておくんだ。お嬢ちゃん以外、誰も動かすことの出来ないようにな」

「……え？」

なんで？ でも、やっておこう。フラガさんが言う事だ。何かあるのかもしれない。

「いいですけど……ちよつと聞いてもらえますか。変な話だけど」

「いいぜ、お嬢ちゃん」

夢の話をつらがさんに聞いてもらおう、と思った。誰かに話さなきゃ、我慢できそうになかった。

休憩室で、みんなと休んでいると。

なに？ 突然銃を持った兵士が……

「よーし！ そのままだ！」

「ああ！」

「動くなっ」

なんなのよ？ なんなのよ、これ！？

「ユーラシアって味方のはずでしょ？ 大西洋連邦とは、仲悪いんですか？」

「そういう問題じゃねえよ」

「ハア、識別コードがないのが悪い」

「それって、そんなに問題なんですか？」

「どうやらねえ……………」

「本当の問題は、別のところにありそうだがな」

「……………ですね」

はあ…………… 当分、おとなしくしているしかなさそうだった。

せつかくの食事も、銃を持った兵に監視されながらじゃ、おいしくないーい。

「この艦に積んであるモバイルスーツのパイロットと技術者は、どこだね？」

「……………あぁ……………」

突然、えらそーなおっさんが入って来た。

「パイロットと技術者だ！ この中に居るだろ！」

……………！ 私が立ち上がるうとすると、マードックさんが私の肩を押さえた？

「何故我々に聞くんです？」

「なにに？」

「艦長達が言わなかったからですか？ それとも聞けなかったからですか？」

…………… あ！ フラガさんが、ストライクの起動プログラムをロックしておくようにと言った訳がわかった気がした！

「なるほど。そうか！ 君達は大西洋連邦でも、極秘の軍事計画に選ばれた、優秀な兵士諸君だったな」

「…………… ストライクをどうしようってんです？」

「別にどうもしゃしないさ。ただ、せつかく公式発表より先に見せていただけの機会に恵まれたんでね。パイロットは？」

「フラガ大尉ですよ。お聞きになりたいことがあるなら、大尉にどうぞ」

「先ほどの戦闘はこちらでもモニターしていた。ガンバレル付きのゼロ式を扱えるのは、あの男だけだということぐらい、私でも知っているよ」

何？ こいつ、いきなりミリィの腕をつまみあげた！

「……うああーいっ……」

「ミリアリア！」

「……くっ！」

「……うっ……」

「女性がパイロットということも無いと思うが……この艦は艦長も女性ということだしな」

「いったーい！」

「止めて下さい！ 卑怯な！」

もう、我慢できなかつた。

「お嬢ちゃん……！」

「あれに乗っているのは私です！」

「お嬢ちゃん、友人をかばおうという心意気は買っがね……あれは貴様の様なひよっこが扱えるようなもんじゃないだろ？ ふざけたことをするな！」

！ なに、こいつ。いきなり殴ろうとしてきて！

私はえらそーなおっさんを投げ飛ばした。

「……うわっ、うおお、うほあ！」

「私はあなたに殴られる筋合いはないです！」

「司令！」

「なんなんですかっ！ あなた達はっ！」

「ルナ！ 止める！ 抵抗するな……」

「貴様あー！」

「止めて下さい！ うっ！」
「うわああ！ ……サイ！ ……ちょっと止めてよ！ その人が言
つてることは本当よ！ その人がパイロットよ！」
「貴様ら！ いい加減にしないか！」
「嘘じゃないわよ！ だってその人、コーディネイターだもの！」
「……ええ！ ……」
「あちゃー……」
「……コーディネイター……なんだそうかあ、そうだったのか！
ははは！」

私は、ストライクの前まで連れて来られた。でも、しょうがないよ
ね。ミリイをあのままにしておけなかつたし。

「OSのロックを外せばいいんですか？」

「まずはな。だが君にはもつといろいろなことができるのさ？」
「何がですか？」

「例えば……こいつの構造を解析し、同じものを造るとか、逆にこ
ういったモバイルスーツに対して有効な兵器を造るとかね」

「コーディネイターを何だと思ってるんですか！ 魔法使いじゃあ
りませんよ！？ それに私はただの民間人で学生です！ 軍人でも
なければ、軍属でもない！ そんなことをしなければならぬ理由
はありません！」

「だが君は、裏切り者のコーディネイターだ」

「……ああ？ 裏切り者……？」

「どんな理由でかは知らないが、どうせ同胞を裏切つたんだろ？
ならば色々……」

「違うわよ！ ……プラントなんて同胞じゃない！ 私はオーブの…
…」

私はザフト。ザフトの赤服。

まただ。頭が……痛い。

「地球軍側に付くコーディネイターというのは貴重だよ。なに、心配することはない。君は優遇されるさ。ユーラシアでもな」

！

「……あつ？」

格納庫が、揺れた。

あ、また！

「管制室！この振動はなんだ！？」

「不明です！ 周辺に機影なし！」

「……だがこれは、爆発だぞ！」

「爆発ですつて！？」

「ああ、安心しな、お嬢さん。傘さえ展開すれば……」

「ぼ、防御エリア内に、モビルスーツ！ リフレクターが落とされていきます！」

「なんだとっ！！ 傘が破られた！？そんなバカなっ！？」

「司令……」

アルテミス傘が破られた。とにかくモビルスーツが基地を攻撃しているのは間違いない！

「……でいつ！」

「うわぁー！」

私は足でガルシア指令達をコクピットから押し出し、ハッチを閉めた。

「だーっ！ 貴様！」

「攻撃されてるんでしょ？ こんなことしてる場合ですか！？ 出ます！」

「……くっそーっ！」

……こんな所じゃランチャーもエールも向かない。ソードストライカーが装着されると、私は歩いて出撃した。

まただ。私の知らない戦いの場面が脳裏に浮かぶ。誰かが、ス

トライクのようなモビルスーツで、対艦刀で艦を次から次へと叩き切っている。私はその人と仲が良かった気がする。誰だろう……？

！ブリッツだ！ あいつら、しつこい！

私は頭を一振りすると気を引き締めた。

ブリッツがロケットアンカーを射出して来た！ 私は対艦刀でそれを受け止め、絡ませレーザー部でコードを焼き切る！

「……もう私達を放っておいてよー！」

そのままスラスタを吹かしてダッシュ、対艦刀を振り下ろすも、動きのすばやいブリッツはそれを躲す。

「ルナ！ ルナ、戻って！ アークエンジェル発進します！」

ミリィだ！ よかった！ アークエンジェル、私達の手に戻ったんだ！

そうならもう、すばやいブリッツを無理に追う事も無い！

ブリッツは右手からレーザーと金属製の針を飛ばして来る……？

レーザーをロケットアンカーの基部で受ける。金属製の針……なんでも無意味な物を……と思った瞬間、それが爆発した！

衝撃。その隙にブリッツが、ビームサーベルを展開して向かって来る！

「鬱陶しいのよ！」

対艦刀を振りかぶり、振り下ろす！ ブリッツは慌ててスラスタで逆進をかける。

「……ええい！」

私は対艦刀でそこら中を切りつける！ 壊れてしまえ！ こんな基地！

建材と煙が空間を漂い、ブリッツとの間を塞いでいく。

『……くっ！ 逃げるのかあー！』

ブリッツのパイロットが喚いている。

「追って来たければ来なさいよ。出来ればね！」

私がアークエンジェルに着艦したと同時に、艦は最大加速でアルテミスを脱出した！

第六話

……結局、アルテミスに寄った事は全て無駄だった。いえ、滞在して、戦闘して、物資を消耗しただけ、損をしたような物だ。

弾薬は戦闘にならなければ消費しなくて済む。食糧もまだ余裕はある。足りないのは水だった。

水は飲むだけじゃない。身体を洗ったり、洗濯をしたり、トイレも……衛生を保つのに大量の水を使う。機械の整備もそうだ。水が使えないと、メンテナンスにひどく手間取る。

なんとか整備が終わって食堂に歩いていくと、みんなの声が聞こえてきた。

「うっ……うっ……水を！ もっと水をー！」

この声はトルだ。それをうんざりしたようにミリイが突っ込む。

「止めなよ、状況に合っていないギャグ」

「ギャグじゃねえよ！ ったく〜」

「……なに？ どうしたの？」

「……だって、水の使用制限だって、昨日シャワー浴びれなかったんだも〜ん」

「……」

「……はあ……」

「みんなー」

「お！ ルナ。ストライクの整備、完了か？」

「うん。でも、パーツ洗浄機もあまり使えないから、まいつちゃう。手間ばっかりかかって」

「……ほらフレイー！」

「……あ、あの…ルナマリアさん……」

「え？」

「この間はごめんなさい！ ……私、考え無しにあんなこと言っちゃっっ……」

「……あんなこと？」
「……アルテミスで、ルナマリアさんがコーディネイターだって……」
「……！……ああ、まあしょうがなかったわ。ミリィをあのままにしておけなかったし……」
「……ありがとう……」
本当に、この子は考え無しに言っちゃったんだろうな。気にしてない訳じゃないけど。しょうがないか。私の方が年上だし、大人にならないきゃ……

この水不足、どうするんだろうと思っていたら、マリューさんからみんなに呼び出しが掛かった。

「補給を？」

「受けられるんですか？ どこで！」

「受けられると言うか、まあ……勝手に補給すると言うか……」

「私達は今、デブリベルトに向かっています」

「……デブリベルト？ って……」

「ちよつと待つて下さいよ！ まさか……」

なんの事やらわからないと言ったようなツールとは対照的にサイが気色ばむ。

「君は勘がいいねえ」

フラガさんがサイを誉める。って事は？ デブリベルトには、様々な残骸が集まっている。そこから？

「デブリベルトには、宇宙空間を漂う様々な物が集まっています。

そこには無論、戦闘で破壊された戦艦等もある訳で……」

「まさか……そつから補給しようって……」

「仕方ないだろ？ そつでもしなきゃ、こつちが保たないんだから……」

「あなた達にはその際、船外作業艇での船外活動を手伝ってもらい

たいの」

「「ええー……」」

「あまり嬉しくないのは同じだ。だが他に方法は無いのだ。我々が生き延びる為にはな……」

「喪われたもの達をあさり回ろうと言うんじゃないわ。ただ……ほんの少し、今私達に必要な物を分けてもらおうというだけ。生きる為に」

ヘリオポリス……今頃無神経なジャンク屋に漁られている事だろう。それに比べれば……

「……そうよね。ジャンク屋組合なんて物まであるんだもん。この世界。それに比べりゃ可愛いもんじゃない。ね？」

「そっか。そうだな。ルナの言う通りだな」

「……ヘリオポリスも、あさられたのかな」

ミリィがぼつりとつぶやいた。私も、思っていた事だった。

「「……」」

「いっばい、無くした物あるよね」

「……うん」

「でも、生きてるからいいじゃない。頑張ろうよ、生きるために！」

「ルナに言われちゃあなあ」

「頑張るしかないか」

「やあねえ、私は元々前向きよ？」

「そうだったな。ははは」

「ふふふ」

そう言えば、ここしばらく抗不安剤を飲んでいなかった事に気がついた。

なくても過ごせちゃうんだ……って言うか、コーディネイターってばれて一部の人からひどいイジメに遭うまでは、普通に過ごしてたし。

やっぱあいつらないと不安が軽くなるのかな。ここじゃ付き合うのは皆見知った人ばかりだし。

こんな、命の危機、なんて状況に続けざまに遭遇すると、あいつらの事なんか、くだらない、小さな事に思える。
あいつらのせいで、辛い目に遭わせちゃったね。ごめんね？
私は自分の左腕をそつと撫ぜた。

デブリ帯に着くと、私達はポッドでの船外活動を始めた。
時々出会う死体に驚いたりしながら、順調に物資を集めていった。
でも、どうしても水が足りない。

「あそこの水を!？」

「ユニウス7には、一億トン近い水が凍り付いているんだ。」

「ユニウス7って、なあ……」

「あの血のバレンタインの、でしょ？」

「大勢、死んでるんだよね？ そのまんまでさ」

みんながざわつき出す。

「そつ、ユニウス7を……」

私の最近の夢に時々現れる、凍りついた巨大なデブリ。あそこで私はいつも誰かと一緒に戦っていた。それはとても大切な仲間で……アスランもいたような気がする。

「気が進まないかも知れないけど、水は、あれしか見つかっていないの」

「誰も、大喜びしてる訳じゃない。水が見つかった! ってよ……」
私が俯いているので心配してくれたんだろう、マリユールさんとフラガさんが声をかけてくれる。

「……いえ、いいんです。毒を食らわば皿までも。ですよ」
「そつか。ならいいんだ」

「……でも……」

「なんだい？」

「笑わないで下さいね？ 最近、夢を見るんです。今まで見た事も無かったはずのユニウス7の夢を……そこで、凍った大地の上で、私は戦っているんです。ザフトのジンってモビルスーツと」

「……気をつけるって事か」

「……はい……」

「わかったわ。ユニウス7からの水の補給の時には、ルナマリアさんとフラガ大尉で交代で護衛に当たる事にしましょう。いいわね？」

二人とも」

「はい！」

「了解しました！」

水の補給は順調に進んだ。プラントの砂時計型のコロニーは、かなりの面積が水面だ。その凍った海？ 湖？ から適当な大きさにした氷塊を、船外作業艇で次々に運び込んで行く。

私の心配は、余計な心配だったかな？

私とフラガさんは既に2交代している。水の補給も後4時間程で終わるみたいだから、後一交代ずつ……

「あ……」

大きなデブリの向こうを白い綺麗な船が通り過ぎて行く。民間船？

まるで、まだ生きてるみたいだ。撃沈されたばかりって感じ。

！

デブリの向こうに強行偵察型 複座のジン！ なんでこんなところ…… アークエンジェルが見つかって、応援を呼ばれたらアウトだわ……

私は、デブリの影からその複座のジンに狙いを付ける。

「……………行っちゃえ……………行つてよ……………そのまま……………あ！」

ジンが船外作業艇に気づき、銃口を向ける！

「馬鹿！　なんで気づくのよ！」

私が放ったビームライフルの光は過たずジンの胴体に吸い込まれて行き……………小さな爆発が起こった。

「……………馬鹿……………」

「ありがとう、ルナ！」

「マ、マジ死ぬかと思ったぜ」

「お嬢ちゃん！　どうした！」

「……………殺したくなんて、なかったのに……………あ！」

救命ビーコンの音！　救命ポッド！？

「つくづく君は、落とし物を拾うのが好きなようだな」

「すみません。でも、私が拾わなきゃ誰も来なかったかも知れないから、しょうがないですよね？」

「……………まあ、今度はな」

ナタルさんがため息をつく。

「開けませうぜ？」

マードックさんが用心深くハッチを開ける。

「ハロ　ハロ、ハロー、ハロ、ラクス、ハロ」

出て来たのは、けたたましく奇声を上げるピンクのボールだった。

「……………はあ??」

「……………ありがとう。御苦労様です」

「……………はあ??」

続いて、こんな宇宙にふさわしくない、ふわふわに広がるスカート
を膨らませて、飛び出てきた女の子一人。

……………プラントの反逆者！　ラクス・クライン！……………
心がざわめく。

「……………ラクス・クライン！」

「え？」
マリューさんやナタルさんがこちらを振り向く。
私は、ただ目の前の少女から目が離せずに睨み付けていた。

時が止まったようなその時間は、その少女の言葉で破られた。

「あらあら？まあ！これはザフトの船ではありませんのね！？」

「……………はあ……………」

「ポットを拾っていただいて、ありがとうございました。私はラク
ス・クラインですわ」

「ハロ ハロ！ ラクス、ハロー」

「これは友達のハロです」

「ハロハロ。オモエモナー。ハロハロ？」

「……………はあ……………」

「……………やれやれ……………」

如何にもほんわかした感じの少女だ。でも、私は力強い言葉で戦いの場に立つ彼女を知っているような気がした。

知りたかった。私の心を妙にざわめかせるこの少女の事を。

「なんて言ってる？」

「聞こえない。黙ってよツール」

「お前ら、静かにしろって」

いきなり扉が開く！

「……………うおお……………」

「お前達にはまだ、積み込み作業が残っているだろう！」
ナタルさんの一喝！

「……………うわああ……………」

「さっさと仕事に戻れ！ ほら、ルナマリアも」

「はーい」

しょうがない私も引き上げだ。

あ。扉からちらつと見えた時、ラクス・クラインと名乗った少女がにこりと微笑んだ。

私は見とれてしまい、またナタルさんにどやされてしまった……

……！ あのジン、もしかして！

作業が終わって、食堂に行く時に、ふと私が狙撃したジンの事を思い出した。

あれは、もしかしてあの子の事を探しに来ていたの？ そんな！でも、そんな事わかる訳ないじゃない！ わかったって……どうしようもなかったのよ。あの時は、あれしか……

「嫌よ！」

……？ 食堂から、フレイの鋭い叫び声が聞こえた。

「フレイー！」

「嫌ったら嫌！」

「なんでよ〜」

「どうしたの？ カズイ」

「……ん。あの女の子の食事だよ。ミリイがフレイに持ってって、って言ったら、フレイが嫌だって。それで揉めてるだけさ」

「私はやーよ！コーディネイターの子の所に行くなんて。怖くって

……」

「……」

「フレイー！」

「……あ！ ……も、もちろん、ルナマリアさんは別よ？ それは分かってるわ。でもあの子はザフトの子でしょ？ コーディネイターって、頭いいだけじゃなくて、運動神経とかも凄くいいのよ？

何かあったらどうするのよ！ ……ねえ？」

……本当に考え無しね。この子。人の気持ちを考えないの？

「フレイ！」

「でも、あの子はいきなり君に飛びかかったりはしないとと思うけど

……」

「……そんなの分からないじゃない！ コーディネイターの能力なんて、見かけじゃ全然分からないんだもの。凄く強かったらどうするの？ ねえ？」

「……はあ……じゃ、いいわよ。私が持っていくから」

私は答えた。正直、あの子の事が知りたかった。しゃべって見たかったのだ。

「まあ！ 誰が凄く強いんですの？」

え？

「ハロ ハーロー。ゲンキ！ オマエモナ！」

「「あつ！」」

あの子 ラクス・クラインが、そこにいた。

「わあー……驚かせてしまったのならすみません。私、喉が渴いて……それに笑わないで下さいね、大分お腹も空いてしまいましたの。こちらは食堂ですか？ なにか頂けると嬉しいんですけど……」

私は、また、この子に見とれてしまった。

「鍵とかがつてないわけ……？」

「やだ！ なんでザフトの子が勝手に歩き回ってんの？」

「あら？ 勝手にではありませんわ。私、ちゃんとお部屋で聞きましたのよ。出かけても良いですかー？ って。それも3度も」

「「……」」

「それに、私はザフトではありません。ザフトは軍の名称で、正式にはゾディアック アライアンス オブ フリーダム……」

「な、なんだって一緒よ！ コーディネイターなんだから」

「同じではありませんわ。確かに私はコーディネイターですが、軍

の人間ではありませんもの」

「……」

「貴方も軍の方ではないのでしょうか？ でしたら、私と貴方は同じですわね。御挨拶が遅れました。私は……」

「……ちよつとやだ！ 止めてよ！」

フレイのあまりにも嫌がりぶりに、ラクスさんはきよとん、と首を傾げた。

「冗談じゃないわ、なんで私があんたなんかと握手しなきゃなんなのよ！ コーディネイターのくせに！ 馴れ馴れしくしないで！」

！

「フレイ！」

バシン！

ミリイが、フレイの頬を叩いた。フレイはびっくりした顔で固まっている。

「ごめん。ルナ。この子にはよく叱って置くから。その子を部屋に戻して、食事運んでいって」

「……わかったわ。じゃあ、ラクスさん、行きましょう」

私がトレイを左手に乗せて右手を差し出すと、ラクスさんは嬉しそうに手を握ってきた。

「何よ！ ミリイ！ なんであたしが叩かれなきゃいけないのよ！」

「まだ、わからないの？」

お嬢様にしては、いい子なんだけどね。ミリアリアはサイを見た。

サイは頷くとフレイに言った。

「フレイ、自分がコーディネイターだったらって考えた事があるか？」

「ないわよ！ そんなの！ 気持ち悪い事言わないで！」

「親は子供をコーディネイトするかしないか選べるけどな、子供は選べない。フレイ、実はお前はコーディネイターだよって言われたら、どうする?」

「そんなの、私の親は絶対子供をコーディネイトなんかしないもん!」

「たとえ話もわからないの?」

「ミアリアはつい口を出してしまった。」

「ルナの、左腕見た?」

「え? 確か包帯が巻かれてたけど、それがどうかしたの?」

「ヘリオポリスが崩壊した日、地球軍の士官からコーディネイターは敵だと言われてね、ルナが自分で切ったのよ」

「……!」

フレイは驚愕した。信じられなかった。自分で自分の身を傷つけるなんて!

「それだけじゃない。ルナがコーディネイターだとわかったら、地球軍の奴らルナに銃を向けやがった。ルナは、また切ろうとした。」

……今までもな、ルナがコーディネイターだって知った奴から、ひどい嫌がらせを受け続けて、ルナのリストカットが始まったんだ。今も医者に通ってる」

「フレイが、コーディネイトを嫌うのはわかるわ。でも、コーディネイター自身は、コーディネイターと言うだけで、嫌わないで欲しいの」

「……わかってるわよ。ルナマリアさんは特別って。でも、よく知りもしないのにコーディネイターとなんか仲良く出来ないわよ!

特にあの子、ザフトのお偉いさんの娘でしょう!? 仲良くなんてできないわよ!」

「おい、フレイ!」

居た堪れなくなつて、フレイは部屋を飛び出した。

「……そうよ、ルナマリアさんはサイもミリイも仲間だって言うから信じられるけど、他のコーディネイターなんてすぐに信じられる

わけ無いじゃない……」

「またここに居なくてはいけませんの?」

部屋に入ると、ラクスさんはつまらなそうに言った

「ええ、そうですよ」

「つまりませんわー……ずっと一人で。私も向こうで皆さんとお話ししながら頂きたいのに……」

「これは地球軍の艦ですから。コーディネイターのこと、その……さっきのようにあまり好きじゃないって人も居るし……殊に、今は敵同士ですから……」

「残念ですわねえ」

「……ええ」

つまらなそうにしているこの子も、魅力的な顔だ、と思った。

「でも! あなたは優しいんですね! ありがとうございます」

「……!」

「ふふ」

「……私も、コーディネイターですから……」

「そうですか。でもあなたが優しいのは、あなただからでしょう?」

「……え?」

「お名前を覚えていただけます?」

「ルナマリア・ホークです」

「そう。ありがとう。ルナマリア様」

「様は止めてください、ラクスさん。仲のいい友達はルナって呼びます」

「まあ。じゃあ、私達、お友達になって頂けますの!?」

「は、はい。ラクスさんがよろしければ」

「『さん』はいりません。ラクス、でよろしいですわ」

「じゃあ、ラクス。友達の手をしましょう」

「はい、ルナ。ふふふ」

「ふふふ」

花が咲いたように笑うラクスは、眩しかった。友達と言ってくれた事が嬉しかった。

「あら？」

「え？」

「その包帯……もしかしてザフトの方との戦闘で怪我でもされたのでしょうか？」

いきなり憂いを秘めた顔になるラクス。私はあわてて説明する。

「え、いえ、これは……そのー。さっきのラクスみたいに、コーデイネイターを敵視する人に遭った時に、衝動的にやっちゃったんです。自分で。自傷行為ってやつですね。あはは」

「まあ……」

「ごめんね、ラクス」

「なんで、私に謝るのですの？」

「だって、ラクスが悲しそうな顔しているから」

「辛い……思いをされて来たのですね。でも、謝るならどうか自分の身体に謝ってください」

「うん、もうしないって、謝ったよ。この前」

「よかった！……その方とは、どうなさったのですか？」

「仲良くなった人もいるし……実は、それこの艦のマリュー艦長なんだけどね。まあ、絶対遭いたくないままの人もいるし。色々です」

「でも、一人だけでも分かり合えたのは、素晴らしい事ですわ」

「そうですね。あ、しゃべってばかり！ さあ、食事も冷めないうちに食べてください」

「ええ！」

私は、ううん、私達は、幸せだった。

名残惜しく部屋を出ると、サイが近づいてきた。

「ルナ！ ミリイから聞いた」

「……？ ああ」

「あんまり、気にすんな。フレイには後で言っとく」

「うん……フレイってさ、ブルーコスモス？」

「まさか！」

「そう。よかった……」

「……でも、そう思われても仕方ないよな」

「……まあ私もね？ 思わないでもないんだな。病気でもないのに遺伝子弄るのおかしいって。イジメに遭った時は特にね。コーデイネイターなのに変かな？ 両親を恨んだりもしたわ。両親が私をコーデイネイトなんかしたから苛められるんだ。って。私の両親は何を思っただ私をコーデイネイトしたんだろう……」

「ルナ……」

部屋の中から、歌声が流れてきた。ラクスが歌っているのだろう。

「あの子が歌ってるのか？ 綺麗な声だなー」

「ええ」

「でもやっぱ、それも遺伝子弄って、そうなったもんなのかな？」

「ラクスは、自分自身はコーデイネイトは受けてないって言ったよ」

「そうなのか！？ 弄ってなくてピンクの髪か！？ やっぱ一旦コ

ーデイネイトしちゃうと後が怖いなあ。……あ、悪い、ルナ！」

「だーめ。罰。デコピン！」

「いったー！ じゃ、俺達も食事に行こうぜ！」

「ええ！」

第七話

翌日、嬉しい事があった。

なんと昨日、第8艦隊先遣隊と連絡が取れたというのだ！

給水制限が取れた事もあって、昼の食事は宴会騒ぎだった。

気になっていたフレイも、おずおずとただけど私に何回も話し掛けてきた。ミリイとサイに、色々言われたのかも知れない。でも、こうやって話し掛けて来てくれれば、その内コーデイナーだって普通の人間と変わらないってわかってくれるかも知れない。私も、笑顔でフレイに何回も話し掛けた。

うん。カレッジのあいづらは、イジメのネタにするんならなんでも良かったんだろう。性格が悪いんだ。今の私にはそれがわかる。でもフレイにあるのは、コーデイナーへの嫌悪感だけなんだ。それさえ消えてくれれば……

……ふと、ラクスの事が頭に浮かんだ。私達は浮かれているけど、あの子にとっては浮かれる事じゃないよね。

あの子はこれからどうなるんだろう？ きつと月の本部にでも連れて行かれて、政治的に利用されるんだろう。なんたってプラント評議会議長の娘だ。

「そんな目に遭わせたくないな……」

「どうしたんですか？ ルナマリアさん」

「ん？ なんでもないのよ、フレイ」

私にはつこりとフレイに微笑んだ。

「おーい！ お前達、いつまで騒いでるんだ！ そろそろ勤務の間だぞ」

「あ、やべえ」

私達はガタガタと食器を片付けだす。

「じゃ、また後でね、フレイ」

「あ、はい」

格納庫に着くと、マードックさんが待っていた。

「すみません、遅れました」

「あー、規律ジオメトリーのオフセット値変えといたから、ちょっと見といてくれ」

「はい！」

「ま、もう用はねえかもしんねえけどな。こいつも」

そう言えば、私が組み込んだモバイルスーツの基礎OS、消去した方がいいのかな？

ううん、まだ、何があるかわからない。保存だけはしておこう。私だけがアクセス出来るようにして……

せっかく何日もかけて完成させたんだしね。持ち出し、出来ないかなあ？

「ルナマリアさん、良かったら使いませんか？」

「へ？ 何？ それ？」

フレイが自慢そうな顔で話し掛けてきたのは翌日だった。

「顔のパック剤ですよー。あ、全部は使わないで下さいよ？」

「よくそんな物持ってたわねー」

「いざって時のために持ち歩いてたんです。パパも先遣隊と一緒に来るっていうんだもの。ちゃんとしとかなきゃ。大西洋連邦事務次官の娘が、あんまりボロボロじゃあ、パパに悪いでしょ？ 久しぶりに会うんだし、せめてこのくらいはねっ」

「いざって言う時って……じゃあ、ありがたく使わせてもらっわ。ありがとね」

「ふーん。本当につるつるになるんだ」

感心しながら、私はストライクから私が組み込んだモバイルスーツの基礎OSの吸い出し作業をやっていた。

「…よっ……んっ……ほおー……」

うわっ！ マードックさんが上がってきた！

「な、なんですか？」

「いや、どうかなあって思って」

「オフセット値に合わせて、他もちょっと調整してるだけですよ。念のために」

「はっはっはっは。お嬢ちゃんは感心だなあ。やっとけやっとけ。無事合流するまでは、お前さんの仕事だよ。何ならその後の志願して、残ったっていいんだぜ？」

「えー。ははは……」

『総員、第一戦闘配備！繰り返す！総員、第一戦闘配備！』

もうすぐ先遣隊と合流と言う事で休憩室で休んでいた私の耳に、こしばらくの浮ついた気分を吹き飛ばす艦内放送が流れてきた！

私は格納庫に走った！ 目の前にラクスが！？

「何ですか？ 急に賑やかに……」

「戦闘配備なんです！ さあ中に入って！」

「戦闘配備って……まあ、戦いになるんですの？」

「そうですねよってどうか、もう……とっくにそうです」

「ルナも戦われるんですか？」

ラクスが悲しそうな顔をする。

「守らなきゃいけないから。この艦のみんなを。さ、中に入って！」

そうだ。私が艦を守らなきゃ、ラクスも死ぬ！

私はラクスを部屋に入れると、再び走る。

あっ、フレイが飛びつくようにして話し掛けてきた！

「ルナマリアさん！ 戦闘配備ってどういうこと？ 先遣隊は？」

「分からないわ。私にはまだ何も……」

「大丈夫だよね！？」

「！？」

「パパの船、やられたりしないわよね？ ね！？」

「！ この時、全てをうまく納める方法が頭に浮かんだ！

「聞いて、フレイ！」

「何ですか！？」

「こっちのモビルスーツは私一人だし、正直厳しいの。勝てるかわからない」

「そ、そんな！」

「だからねフレイ。あなたにやって欲しい事があるの」

「え？ あたしに？ どんな事ですか！？」

「それはね……」

「遅いぞ！ お嬢ちゃん！」

「すみません！」

急いでコクピットに飛び乗る。

『敵は、ナスカ級に、ジン3機。それとイージスが居るわ。気を付けてね』

『ルナ、先遣隊にはフレイのお父さんが居るんだ。頼む！』

「わかったわ！」

『カタパルト、接続！ エールストライカー、スタンバイ！ システム、オールグリーン！ 進路クリア！ ストライク、どうぞ！』

「ルナマリア・ホーク、ストライク、行きます！」

相手はジン3機とイージス。

アスラン……あなたの事好きになれなくなったけどやっぱり戦いたくない……！

バーナードは撃沈寸前。イージスは……ローに向かってる。

……あの二艦はもうだめ。頭の冷静な部分が嘔く。

モントゴメリ……主砲塔が被弾してる。機関部にも！

まずはモントゴメリに取り付いているジン一機を排除しないと！

相手のジンはこちらに気づくと、バズーカを撃ってくる。

当たらない！ そんな物！

シールドを構えて突貫する！ ジンは慌てて避けようとするけど。

遅い！ ストライクのビームサーベルはジンの胴体を薙いだ。

『助かったよ！ ストライク！』

モントゴメリから通信が入る。

「気をつけて！ まだ敵は3機も残っているわ！」

『ああ！ 君も気をつけて！』

あっ！ ローが……とうとう、イージスに撃沈された。

モビルアーマー形態になって素早い速度でイージスがつつ飛んで来る！

……直ってる！？ この間切った腕も、脚も。ザフト脅威の科学力ね！

とっさに私は横に避ける。

「アスラン！ 私はあなたと戦いたくないのよ！」

『俺だつて！ お前がそうナチュラル共の味方ばかりするから！』

「そうやって人を見下して！ 昔のあなたはそんなじゃなかった！」

『俺の母にはお前も会った事があるだろう！ 母は、血のバレンタインで地球軍に殺された！』

「それがどうしてナチュラル全てを見下す事になるのよ！？ おば様はそんな人じゃなかった！ 地球に無差別にニュートロンジャマ―散布したり、ザフトはやってる事がめちゃくちゃよ！」

これでいい……アスランは私一人で牽制できる。でも。

ああ！ とうとう残りのジンが来てしまう！ フレイは何をやっているの！？

『ザフト軍に告ぐ！ こちらは地球連合軍所属艦、アークエンジェル！』

その時、ナタルさんの声が戦場に響いた。

『当艦は現在、プラント最高評議会議長、シーゲル・クラインの令嬢、ラクス・クラインを保護している！』

『何っ！？』

アスランが驚いた声を出す。

私はほっと溜息を漏らす。

間に合ったのね、フレイ……

『偶発的に救命ポッドを発見し、人道的立場から保護したものであるが、以降、当艦へ攻撃が加えられた場合、それは貴官のラクス・クライン嬢に対する責任放棄と判断し、当方は自由意志でこの件を処理するつもりであることを、お伝えする！』

『卑怯なっ！』

ザフト艦から撤退信号が上がる。

『救助した民間人を人質に取る……そんな卑怯者と共に戦うのが！』

お前の正義かっ！？ ルナ！』

『……アスラン。じゃあ、何も言われないうまま、ラクスごとアークエンジェルを沈めた方が良かった？』

『それは……！』

『……ラクスは私が返すわ。必ずね』

『信じられるか！』

『……おば様が血のバレンタインで殺されたからナチュラルを許さないって言ったわね。もし、ヘリオポリスで私の両親が死んでいたら、私はザフトを許さない』

『……！ ルナ！』

「お姉様！」

「へ？」

「フレイ！？」

「あたし、うまくやれたかな？ やれたよね？」

ストライクから降りた私に、必死な顔でフレイが聞いて来る。

「ええ！ あなたはよくやったわ！」

「よかった！ お姉様も無事で！」

「ちよつと待て！」

あ、ナタルさん。

「フレイがブリッジにラクス嬢を連れてきたのは、ルナマリア、お前の差し金だったのか？」

「ええ」

それが何か？ と言うように私はナタルさんを見つめ返す。

「艦が沈んでしまつては、元も子もありません。ラクスだって、ザフトに何も知られないまま死ぬよりはよかつたと思います」

「……そうだな。その通りだ」

ふ……とナタルさんが微笑む。

「臨機応変の判断、非常によろしい！ ルナマリア、お前軍人に向いているかも知れんぞ」

撃沈されなかつたものの、モントゴメリはそれなりの被害を受けていた。

アルスター事務次官は、アークエンジェルへの補充の人員と共にアークエンジェルへ移ってきた。

「やあ！ 君がルナマリア君か！」

「あ、はい」

「いやあ。君の活躍はモントゴメリのブリッジから見させてもらったよ。頼もしいねえ。我が軍にもこんなパイロットがいるとは」

「あ、いえ。私はヘリオポリスの学生で……それに、コーディネーターですし」

「ああ、フレイから聞いたよ。大変だったようだな。よく、アークエンジェルを、娘を守ってくれた。ありがとう」

「フレイのお父さんはぺこりと頭を下げる。」

「いいえ、こつちも自分の身を守るのに必死でしたから」

「それにしても。すごい。本格的に、軍に志願しないかね？ 私のコネで、相当優遇はしてやれると思うよ」

「……さつきも言いましたけど。私、コーディネーターですよ？」

「地球を愛する心があれば、そんな物は関係ないさ！」

「はは、とアルスターさんは笑った。」

「ブルーコスモスは、それほど懐の狭い団体じゃないよ」

「え？ ブルーコスモス!？」

「まあ過激派も居ってブルーコスモスの評判を下げてるがね。本来はただ、これ以上子供をコーディネイトする事を規制して、数を増やさずコーディネイターも自然にナチュラルの中へ還して行きたいと考える者の団体だ。構成員にはコーディネイターも居るのだよ」

「そう、なんですか……」

「娘から聞いたよ。ヘリオポリスのカレッジではひどいイジメに遭っていたそうだな。品性下劣な奴らだ！ 我々の憎むべきはコーディネイトであってコーディネイターではないと言うのに！」

「アルスターさんから、聞いた話は、私の今までのブルーコスモスのイメージを崩す物だった。」

「もつと落ち着いて考えたい。でも、私にはやらなければならない事があった。」

「ラクス、いる？」

「夜半、みんなが寝静まった頃、私はラクスの部屋をノックした。」

「はい。開いておりますわ」

私はラクスの部屋へ滑り込んだ。

「ありがとう」

私はラク스에頭を下げた。

「え？」

「あなたのおかげで、戦闘は収まったわ」

「まあ。ルナも無事に帰ってきましたし。私がルナの役に立てて嬉しいですわ」

「うん、恩に着るわ。さあ、これに着替えて」

「これは、地球軍の制服ですわね？ なぜこれに？」

「今度は私が、あなたを逃がしてあげる。このまま地球軍の本部に行ったら、ラク스가どんな目に遭うかわからないから」

「いいのですか？」

「いいのよ。友達が嫌な目に遭うと思うと、私、嫌なの」

「ありがとう！ ルナ！」

花が咲いたように笑うと、ラクスは着替え始めた。

「そつと、ね」

「はい。ふふ」

「ああ！」

「ええ？ サイ、まだ寝てなかったの！？」

「ルナこそ、何やってんだ？ あ、お前の後ろ！」

「あらら。見つかったちゃいましたわね」

「……」

「彼女を、どうするつもり？ ……まさか！」

「……黙って行かせて。サイ達を巻き込みたくない。……私は嫌なの！ ……こんなの！」

「……まあ……女の子を人質に取るなんて、本来、悪役のやることしな」

「……！」

「……手伝つよ」

「私も手伝つわ」

「ミリィ……サイ……ありがとう」

「ふー。無事に格納庫に着いたな」

「ありがとう」

「……いえ」

「またお会いしましょうね」

「……それはどうかな？ ルナ、お前は帰って来るよな？」

「……ええ！」

ストライクにラクスを連れて上がる。

あ、マードックさん！

「おい！ 何している！？」

「見逃してください！」

「おい！ ちよつと待て！」

「お前はちゃんと帰ってくるよな！？ 俺達んところに！」

サイがストライクから離れながら叫ぶ。

「……必ずね。……約束する！」

「なんだ！？」

「軍曹！」

「きつとだぞ！ 約束だぞ！」

「ハッチ開放します。退避して下さい！」

「きつとだぞ！ ルナ！ 俺はお前を信じてる！」

「こちら地球連合軍、アークエンジェル所属のモビルスーツ、ストライク！ ラクス・クラインを同行、引き渡す！」

宇宙に出て、両軍の中間位まで来ると、私はザフト艦に呼びかける。「ただし！ ナス力級は艦を停止！ イージスのパイロットが、単独で来ることが条件よ。この条件が破られた場合、彼女の命は……保証しない……」

しばらくじりじりした気持ちで待っていると、ザフト艦は停止し、イージスが単機、接近して来た。

「アスラン……ザラ？」

「……そうだ」

「コックピットを開け！ ラクス、話して」

「え？」

「顔が見えないでしょ？ ほんとにあなただって事、分からせない」と

「あ。そういうことですの。こんにちは、アスラン。お久しぶりですわ」

「……確認した」

「なら、ラクスを連れて行って！ さあ、ラクス……」

「……あっ！」

私の手から離れたラクスは、無事、アスランの手に収まった。

「色々とありがとう。ルナ。……アスラン、貴方も」

アスランはラク스에頷くとこちらを向いて叫んだ。

「……ルナ！ お前も一緒に来い！」

「……！！」

「お前が地球軍に居る理由がどこにある！？」

「私だって、あなたなんて戦いたくない……でも、あの船には守りたい人達が……友達が居るのよ！」

「……くっ」

「まあ、二人はお知り会いましたの？」

「ええ、まあ。……ならば仕方ない……次に戦う時は……俺がお前を討つ！」

「……それでも、私はあなたと戦いたくないわ……」

『……………！』

二つのモビルスーツが離れる。

！？ ザフト艦に動きが！

モビルスーツが、二機？

アークエンジェルからもメビウスゼロが！

「……………フラガさん！」

「お嬢ちゃん、相手が何もして来ないと思ったか！」

「……………うう……………」

私、ラクスのために皆の安全を犠牲にしてしまった……………月本部へ行つても殺される訳じゃないのに……………

こうなったら！ ザフトのモビルスーツ二機位！ 私が！

私が後悔の念に包まれていると、ラクスの声が響いた！

『ラウ・ル・クウーゼ隊長！ 止めて下さい。追悼慰霊団代表の私の居る場所を、戦場にするおつもりですか？ そんなことは許しません！ すぐに戦闘行動を中止して下さい！』

ラクス……………

両軍共に動きが止まる。

『聞こえませんか？』

あ、ザフトのモビルスーツが撤退してゆく……………

「なんだか知らんが、こつちも戻るぞ！ 追撃して、藪蛇は詰まらん」

「……………はい」

「とんでもねえお姫様だったなあ……………あ？ ……………どうした？」

「……………いえ……………なんでもありません……………」

ラクス……………もう二度と会えなくても、私達、友達だよな。

そつと頬を涙が伝った。

第八話

「ルナマリアさん、今回の行動について何か言う事はある？」

「ルナマリア、そもそもラクス嬢を人質にすると言う考えはお前が発案だろう。それがなぜ？」

「まあまあ、二人とも。二人掛りでわーわーやられちゃお嬢ちゃんもしゃべれん」

「……フレイに頼む時、決めていたんです。一回戦闘を止めてもらったら、私がラクスをザフトに返してあげようって」

「だが、その勝手な行動が、艦の安全をどれほど脅かしたか、理解しているのか？」

「……反省してます。別に月本部に連れて行かれても、殺される訳じゃないのに……私……ラクスが止めてくれなかつたらと思うと……」

「……そう。わかっているのね。今度は、もうあんな勝手な事しちやだめよ？ 私だって、ラクスさんにとってよい方向になるように色々考えてたんだから」

「……はい」

「じゃ、これで解散！ お嬢ちゃんも、いつまでも辛気臭い顔しないで！ もうすぐ第8艦隊と合流なんだからさ！」

「はい。失礼します」

部屋から出ると、サイとミリィが心配そうな顔で待っていた。

「ルナ！ 大丈夫か？」

「何て言われたの？」

「お前も、トイレ掃除一週間とか？」

「おーそれいいね！。やってもらおうかなあ」

あ、フラガさん。続いてナタルさん、マリューさんも部屋から出て

行った。

「大丈夫よ。勝手な事はするなって、叱られちゃった」

「そっか。ってことは……俺達だけか」

「ん」

「え？」

「私達、マードック軍曹に凄く怒られたの。お前達は危険で言葉すら知っちゃいねえのかぁ！ って」

「あう……ごめん。手伝うよ」

「いいよ。もうすぐ第8艦隊と合流だし、大したことない」

「……ありがとう」

「……正直言うと、少し心配だったんだ」

「……サイ……」

「でもよかった。お前、ちゃんと帰ってきたもんな！」

「……あ……」

「じゃ、俺、交代だから」

「私も。じゃ、また後でね」

「うん。頑張つて」

（きつとだぞ！ ルナ！ 俺はお前を信じてる！）

私は、ラクスを返す時のサイの言葉を思い出していた。

裏切らなくて、良かった。サイも、ミリイも自分に取っては家族と同じ位大切な存在だ。

……アスランは何度も誘ってくれたけど、コーデイナーだと言っただけで、プラントに行く気は起こらなかった。

ナチュラルに、いい人悪い人がいるように、コーデイナーにだっていい人悪い人がいるだろう。それはどこの社会に行っても同じで……今の私の居場所はここなんだ。

アスラン……あなたが変わった訳……多分、わかった。おば様が血のバレンタインでお亡くなりになったからね。でも、本当のあなたは優しいままだって信じる。ラクスからアークエンジェルにいるヘリオポリスの避難民の事を聞けば、きつと何かはしてくる

はず……期待はし過ぎないけど。

「……ん？」

アスランはピンクの物体が廊下を飛んで来るのを認めた。

「ハロ、ハロ、アスラーン」

「……おっ……ハア……ラクス……」

ピンクの物体は、自分が作ったハロだった。本当にラクスはハロがお気に入りなんだな、とアスランは思う。次のまとまった休暇が取れれば、また一体作ろうか？

「ハロがはしゃいでいますわ。久しぶりに貴方に会えて嬉しいみたい」

「ハロには、そんな感情のようなものはありませんよ」
でも、このような物にも感情を見出すのが女性と言う物なのだろうか？

「貴方は客人ですが、ヴェサリウスは戦艦です。あまり、部屋の外をウロウロなさないで下さい」

「ああ……」

ラクスは退屈だった。アークエンジェルでは、ルナマリアと言う友人も出来たと言うのに。それ以下だ。

ルナ……彼女を思い出すと心が温かくなる。ルナ……あれでよかったのですかね？

ラクスの言葉で戦闘を止めた時を思い出す。

だって、私達、友達ですもの。

「どこに行ってもそう言われるので、詰まりませんの」

「仕方ありません。そういう立場なんですから」

「……っ！……何か？アスラン？」

「あつ、いええ……あ、ご気分はいかがかと思ひまして……その、人質にされたりと、いろいろありましたから……」

「やっぱり、女性と話すのは苦手だ。とアスランは思った。いや。ラクスが苦手なのだ。あまりにも御伽噺に出てくるお姫様みたいで、どうしたらいいかわからなくなる。」

「えっへ。私は元気ですわ。あちらの船でも、貴方のお友達が良くしてくださいましたし」

「……そうですか……」

ルナマリア。幼年学校の親友。あいつとなら、気軽に話せたんだがな。

アスランは苦い思いで思い返す。

「ルナはとても優しい方ですね。そして、とても強い方」

「……あいつはバカです！ 軍人じゃないって言つてたくせに……」

「まだあんなものに……あいつは利用されてるだけなんだ！ 友達とかなんとか……あいつの両親は、ナチュラルだから……だから……」

「ああ……貴方と戦いたくないと、おしゃっていましたね」

「僕だつてそうです！ 誰があいつと……」

「……」

「失礼しました。では私はこれで」

「待つてくださいな。アークエンジェルに居られるヘリオポリスの避難民の事はどうなりましたの？ ルナも、ルナのお友達も避難民ですよ。子供もいるとか」

「……アークエンジェルが本当に避難民の事を思うなら、素直に投降すればいい、と言う事です」

「それは、クルーゼ隊長の判断ですの？ 貴方はどう思いますの？」
ラクスが問い掛けると、アスランの顔が苦しそうに歪む。

「……」

「辛そうなお顔ばかりですのね。この頃の貴方は……」

「ニコニコ笑つて戦争は出来ませんよ」

アスランは出て行った。

ラクスは祈った。

「祈りましようね、ハロ。どの人の魂も、安らぐことの出来るようにと」

「いろいろあつたけど、あと少しだね」

「あー」

「僕達も降ろしてもらえるんだよね、地球に」

「え？」

「だって、ほら……あの時、ラミアス大尉が……」

（事情はどうあれ、軍の重要機密を見てしまったあなたは、然るべき所と連絡が取れ、処置が決定するまで、私と行動を共にしていただくざるを得ません）

「あー。だから艦隊が、その然るべき所、とかじゃないの？」

「だよ。でも……」

「……でも？」

「ルナはどうなるんだろう？ 降りられんのかな？ あれだけいろんなことやっちゃってさ」

「……私。私……残ろうかなって思ってるの」

「なんだって!?!」

「なんで!?!」

『総員、第一戦闘配備！ 繰り返す！ 総員、第一戦闘配備！』

「……ああ!?!」

「こんな合流間際に！　じゃあ、行って来る！」

ラクスからヘリオポリスの避難民の事は伝わっているはずだけど、無駄だったみたいね。

私は戦争と言う物の厳しさを感じた。

「気をつけるよ！　ルナ！　今死んだら馬鹿らしいぞ！」

うん、ここまで来て、やられるわけには行かない！

「戦争よお！　また戦争よお！　あああ！」

「きゃー！」

あ、お姉様が女の子とぶつかった！　フレイは慌てて駆け寄る。

「……ううう……」

「……ああ……大丈夫？　さあ……」

「ごめんね、お姉様急いでだから……」

「……うん……うん……」

「うふ……また戦争だけど、大丈夫。お姉様が戦って、守ってくれるからね」

「ほんと？」

「うん。悪い奴はみ〜んなやつつけてくれるから」

フレイは、確信していた。また、お姉様に任せておけば大丈夫と。

「さあ、お姉様は行って！」

「ん。じゃっ」

……どうかお姉様が無事でありますように。フレイは祈った。

「ルナ、ザフトは、ローラシア級1、デュエル、バスター、ブリッツ！」

私がコクピットに入るとミリィが情報を伝えて来る。

「あの3機！」

「APU起動。ストライカーパックは、エールを装備します。カタ

パルト、接続。ストライク、スタンバイ。システム、オールグリーン。進路クリアー。ストライク、発進です」

「ルナマリア・ホーク、行きます！」

ディアッカとイザークは逸っていた。なにしろ、アークエンジェルのモバイルスーツにはザフトレッドの自分達が片腕を切られると言う屈辱を味合わされていたのだ。

今度こそは。デュエルとバスターは、外見が変わっていた。切り落とされた右腕はジンの物に変わり、両機とも右肩にレールガンとミサイルポッドが追加装着されていた。装甲とスラスターも追加されていた。

今度こそは。二人は誓う。アサルトシユラウドが貴様に屈辱を晴らす！

「モバイルスーツを引き離す！ ニコル！ 足付きは任せたぞ！」

「了解！」

ははは、奴らは見事に策に嵌まりやがった！ こっちに喰らいついてくるぞ！

ディアッカは哄笑する。

「ストライクって言ったっけな。所詮地球軍の奴らなんて……」

……と、哄笑が止まる。

なんで。最初からわき目もふらずにビームライフルも撃たずに俺に突っ込んでくる！？ 怖くねえのか！？

その速度は予想よりも若干速く、まずはビームライフルの撃ち合いをする気であったディアッカの気持ちの余裕を失わせる。この間右腕を切られた時の恐怖が蘇る。

ディアツカは右手に持った突撃機銃を放つ。ミサイルポッドを開放する！

まだまだ足りない、あいつを止めるには！ リニアガンも、大型ビームライフルもだ！

ディアツカは左腰に構えたビームライフルも放つ。だが、まずは回避に徹しているらしき相手には当たらない。

……やはり、ディアツカは余裕を失っていたのだろう。スラストーも強化されたバスターで回避すればよかったのだ。だが、恐怖を感じたディアツカの心は、攻撃する事でそれを払拭しようとしたのだ。「うわああ！」

重突撃銃とリニアガンの弾丸も、ミサイルも、ビームも乗り越えて、『それ』はバスターの正面にいた。

「化け物め！」

捨て台詞のように叫ぶディアツカを無視するように『それ』はビームサーベルを振りかぶり、バスターの左腕を切り落とした。

！ やばい！ このままじゃあ！

ディアツカの脳がめぐるましく回転する。

反射的に一つのボタンを押す。追加装甲が弾け飛ぶ！ 一瞬、敵機が怯む。その隙に、バスターは逃げ出す事になんとか成功した。

イザークは焦っていた。たかがモビルアーマー如きに、拘束されているのだ。

このままでは足付きが第8艦隊と合流するまでの10分などあつという間に過ぎてしまう！

「手こずらせる！ モビルアーマー如きが！ 邪魔なんだよ！ 落ちろ！」

彼は見た。バスターがあつという間にストライクに敗れるのを。

ストライクはすぐさま足付きに取り付いているブリッツツへ向かった！

「ニコル！ 気をつける！ ストライクがそちらに……！」

「うわああああ……!!」

「ニコル……!!」

イザークはストライクに蹴飛ばされたブリッツが姿を消したのを確認した。

ミラージュコロイドで隠れたか……

ここでイザークは苦渋の決断をする。

「ディアッカ! ニコル! 引き上げだ! ガモフに帰還する!」

ようやくメビウスゼロのガンバレルを一撃して振り切ると、ストライクが迫っていた!

「くそう! 次こそは覚えてろ!」

デュエルはビームソードを抜き放つ。

! イザークは背中に衝撃を覚えた! 一旦は振り切ったメビウスゼロが、攻撃してきたのだ!

「ひっ……」

動きの止まったデュエルの右腕が右肩に取り付けたリニアガンごと断ち切られる!

イザークは死を覚悟し、次の斬撃を待った。

「イザーク……!!」

「ニコルか……!!」

突然姿を現したブリッツのレーザーライフルの連射により、メビウスゼロとストライクはデュエルから身を離れた!

「今のうちに早く」

「わかっている!」

彼らは悄然としてガモフに帰還したのだった。

とうとうアークエンジェルは第8艦隊に合流した!

みんな、数多くの艦艇が織り成す威容に溜息をついている。

「そう言えばさ。ルナが残るってどう言う訳だよ？」
サイが聞いてきた。

「うん……あのね、もうすぐ、第8艦隊と合流かって、やっと地球に降りられるのかって思った時、何かとてもおかしき気がしたのよ」
「おかしい？」

「うん。これで、もう本当に安心なのかって。オーブにいて、中立の国だって安心していただけ、本当は連合と組んで、そのせいでヘリオポリスは崩壊した。もう、否応無く、戦争に巻き込まれているのよ。オーブも」

「そうだな。それで？」

「その後、やっぱりザフトに襲撃されたし、本当に安心なんて戦争が続いているうちは無理だったわかったのよ。……私ね、本当の平和が……本当の安心が……戦うことによつてしか守れないのなら。私は戦う。私の力なんか、戦争全体から見ればほんの小さな力だろうけど」

「ルナ……」

「お前さん、残るそうじゃな」

「デングル先生……これからお世話になります」

「本当にいいのかね？ 言うまでも無いが、危険じゃぞ？ 戦争なんぞ大人に任せておけばいいと思うにのう」

「ほんとと言うとね、怖いんです。ただの守られるだけの人になってしまう事が。不思議だけど、戦っている時は怖いけど、なんか安心できるんです」

「声はどうじゃね？ まだ聞こえるかね？」

「普段は聞こえなくなりました。でも戦闘が激しくなると、まるでどうすればいいか導くように、ついさっきの戦闘の時も聞こえました」

「ふーむ。わしが心配するのは、お前さんが戦闘に依存しやしな

いか、と言う事じゃ」

「戦闘に、依存？」

「お前さんは強い。確かにな。勝てば、味方に賞賛もされる。じゃが、いつか戦争は終わってしまう」

「わかってます！ そんな事！ 私は戦争を終わらすためにも……自分でも、声が小さくなつていくのがわかった。」

「私は……」

私は、心の中で戦争が終わってしまう事を怖れていやしないだろうか？ いつの間にか、ストライク無しの自分など考えられなくなっていた。

「いつか戦争は終わる」

デングル先生が繰り返した。

「その時にどうするか、よく考えておく事じゃて」

「はい……」

第九話

「艦隊と合流したつてのに、なんでこんな急がなきゃならないんですか？」

格納庫に顔を出すと、フラガさんは妙に焦って作業をしていた。

「不安なんだよ！ 壊れたままだと……」

「第8艦隊つつたつて、パイロットはひよっこ揃いさ！ なんかあつた時には、やっぱ大尉が出れねえとな」

マードックさんがひよっこ顔を出す。

「お嬢ちゃん、残るんだつてな。心強いや」

「そう言えば、お嬢ちゃん。夢！ 夢は、見ないのか？ 最近、その予知夢つて奴」

「夢……ですか？」

「ああ、今までも、結構当たつてたじゃないか」

「……地中海のような所で戦つてる夢でしょうか？ 最近は。陸上戦もあり、海上戦もあります」

私が、ザフトレッドの制服を着て戦っているとは、言えない。

「だー！ 降下に失敗するつてののか！？ それともアラスカから……まさかな」

「夢ですよ、夢」

「とにかく、用心して悪い事はないやね。お嬢ちゃんも……お、艦長！」

あ、マリューさんが、格納庫へ上がってきた。

「あらら、こんなところへ」

「ごめんなさいね。ちよつと、ルナマリアさんと話したくて……」
私達は、格納庫の床へ降りた。

「私自身、余裕が無くて、あなたとゆつくり話す機会を作れなかったから。……その……一度、ちゃんとお礼を言いたかったの」

「え？」

「あなたには本当に大変な思いをさせて、ほんと、ここまでありがとう」

「……自分の身を守るためでもあったし……」

「色々無理言っつて、頑張ってもらって……感謝してるわ」

「そんな……マリユールさん」

「口には出さないかもしれないけど、みんなあなたには感謝してるのよ？」

「ああ……」

「これからもよろしくね？」

そう言っつと、マリユールさんは手を差し出してきた。

「あ、はい」

「うふ」

握手をすると、マリユールさんは、また後で、と言っつて去っつて行っつた。

アークエンジェルは、第8艦隊旗艦メネラオスの隣に位置した。

ハルバートン提督は、モビルスーツとこの艦の開発の一番の推進者だっつたそうだ。きっつと、近くで見たいのだらう。

程なくして、ハルバートン提督がランチでアークエンジェルへとやっつてきた。私達へリオポリス組も整列して出迎えた。

「ん？ おおー！ いやあ、へリオポリス崩壊の知らせを受けた時は、もう駄目かと思っつたぞ。それがここで、君達と会えるとは……」

……

「ありがとうございます！ お久しぶりです、閣下！」

「先も戦闘中との報告を受けて、気を揉んだ。大丈夫か！？」

「ナタル・バジールであります！」

「第7機動艦隊、ムウ・ラ・フラガであります」

「おおー、君が居てくれ幸いだっつたあ」

「いえ、さして役にも立ちませんで……」

「ああー、そして彼らが……」

「はい、艦を手伝ってくれました、ヘリオポリスの学生達です」

「マリユールさんがそう言うのと、ハルバートン提督は私達の前に立った。

「君達の御家族の消息も確認してきたぞ。皆さん、御無事だ！」

「あーよかったあ」

みんな、安心のため息を漏らす。よかった……父さんも母さんも無事だった……

「とんでもない状況の中、よく頑張ってくれたなあ。私からも礼を言う」

「閣下、お時間があまり……」

副官の人が提督を促す。

「うむ。後でまた君達ともゆっくりと話がしたいものだなあ」

そう言うってハルバートン提督は去って行った。

格納庫には、戦闘機　スカイグラスパーが二機、積み込まれていた。

そうか。ここからアラスカに降下するんだ。

私は黙々とキーボードを走らせる。私のプログラムは基礎OSから外部プログラムへと進んでいた。もっと滑らかに、もっと早く、ストライクが動くように……

「精が出るな」

「あ！？　ハルバートン提督？」

「ルナマリア・ホーク君だな？　報告書で見ているんでね」

「……はい……」

「しかし、改めて驚かされるよ。君達コーディネイターの力というものには」

「……………」

「ザフトのモビルスーツに、せめて対抗せんと造ったものだというのに、君達が扱うと、とんでもないスーパーウェポンになってしまふようだ」

「そんなことは……………この子には何度も助けられました。この子じゃなかったら、ここまで来れなかったかもかもしれません」

本音だった。このストライクじゃなければ……………ザフトのモビルスーツだったら……………きっと、私は死んでいた。

「ありがとう」

ふふ。『この子』か。女性にかかつてはこのような物まで『この子』になってしまふのだなあ。ハルバートンは妙な所で感心した。

「君の御両親は、ナチュラルだそうだが？」

「え！……………あ、はい」

「どんな夢を託して、君をコーディネイターとしたのか……………」

「……………恨んだ事も、あります。なんでコーディネイターにしたんだろうって」

「そうか。済まない事を聞いた。何にせよ、早く終わらせたいものだな、こんな戦争は！」

「閣下！ メネラオスから、至急お戻りいただきたく」と

「やれやれ……………君達とゆつくり話す間もないわ！ ここまで、アーケンジエルとストライクを守ってもらって感謝している。そして志願してくれた事にもな。良い時代が来るまで、死ぬなよ！」

ざわわ。心がざわつく。何？ 何なの？ 久しぶりに、普通の時に声が聞こえる。

……………低軌道会戦 地球に降下しようとするアーケンジエルを援護する地球連合軍第8艦隊と、ザフト軍クルーゼ隊が交戦した戦い。コズミック・イラ71年2月13日、アーケンジエルを追撃していたクルーゼ隊はアーケンジエルが地球に降下する前に撃破すべ

く戦闘を仕掛け、アークエンジェルを援護する第8艦隊と交戦状態となる。艦船総数など、物量ではザフト側の戦艦3隻に対して圧倒的に第8艦隊が上回っていたが、ザフト軍モビルスーツの前になす術も無く壊滅、第8艦隊司令官のデュエイン・ハルバートン提督も戦死する

まるで教科書の文章のような、感情の籠らない声が淡々と文章を紡いでゆく。

「……………」

「ルナマリア君！　どうかしたのかね？」

声が成人男性の物に変わる。自慢気に話している。脳裏に浮かぶのは、これは教室？

（地球軍のモビルアーマーは160機弱。対して、ザフト側のモビルスーツはわずか14機。これで地球軍を打ち破ったんだ）

（もし、教官がハルバートン提督だったらどうされますか）

ああ、質問しているのは私だ……

（いい質問だ。私ならまず戦艦の数の優位を生かして砲撃戦を仕掛けるな。それで大体終わりだ。後は、モビルアーマーを一撃離脱に徹底させる事かな？　帰る所が無くなれば、如何にモビルスーツがモビルアーマーに優越しているとして早晚バツテリー切れで終わりだ……なぜそうしなかったのかは未だに謎だよ）

「大丈夫かね！　大丈夫かね！　ルナマリア君！」

「……………ああ、提督……………来ます。ザフトが。数は戦艦が3隻、モビルスーツが十数機……………」

「何だと!？」

「わかるんです、私。時々妙に感が鋭くなる事があって！　信じてください！」

「……………歴戦の君の言う事だ。信じよう。すぐにメネラオスに戻る！」

「あと！　最初からモビルアーマーを出さないでください！　まずは徹底的に戦艦同士で砲撃戦をしてください！　モビルアーマーには一撃離脱を徹底させて！　多分、それで、勝てます！」

「お姉様！」

フレイが格納庫に飛び込んで来たのは、その時だった。

「なんで？ お姉様が残るの！？ 他のみんなも残るって！」

「え、みんなも？ なんで？」

話し始めた二人の女性の声を聴きながら、不思議な事もある物だなとハルバートンは思った。ルナマリア君が言った事は普通の人が聞いた所で信じまい。だが、私はそれを本気にしている……

「ご苦労様です、ハルバートン准将」

「これは！ アルスター事務次官殿。事務次官殿もご苦労な事でしたなあ」

「いやはや、命を失うかと覚悟しましたよ。ルナマリア君のお蔭もあつて助かりましたが」

「事務次官殿。アラスカへ着いたらどうか、モビルスーツの開発にご助力頂きたい」

ハルバートンは頭を下げた。アルスター事務次官はブルーコスモスとは言っても穏健派だ。手も握れるかもしれない。頭を下げる事にさほど抵抗感はなかった。

「わかっているさ。我が軍のモビルアーマーが手も無くザフトのモビルスーツにやられて行く光景を見ていたのだよ？ 私は。G計画、推進しようじゃないか！」

「ありがたくあります」

「その代わりと言ってはなんだが……」

ジョージ・アルスターは切り出した。

ルナマリア君の残留を聞いて自分も志願するとまで言った娘との約束、そしてルナマリア君との約束、果たさねばなるまい。

「アークエンジェルは、先遣隊から人員補給を受けただけ、でしたかな」

「大気圏内用戦闘機を2機、それとストライク兼用の予備部品も補

給してあります。無論、弾薬も」

「しかし、乗る人がいない」

「確かに。しかし今の我々にはもう、アークエンジェルに割ける人員はないのです。それにアラスカへ降りるのです。そう心配した事は……」

「だが、一機はフラガ大尉が乗るとして、もう一人ぐらい、なんとかなるでしょう。万が一と言う事もある……アークエンジェルには出来るだけの事をしてやりたいのですよ」

「……わかりました。一人、なんとか致しましょう」

「助かる！ これで娘に怒られずに済むと言う物です。……フレイ、別れの挨拶は済んだか？」

「……ええ。お姉様、ご無事で」

「フレイも元気だね？ また状況が落ち着いたら、会いましょう」

「では、事務次官殿、我々はすぐに、避難民より一足早くメネラオスへ向かいます。よろしければご一緒にどうぞ」

「ああ、よろしく頼むよ。さ、フレイ」

フレイは、格納庫を出るまで、ルナマリア君に手を振っていた。まったく、コーディネイターを毛嫌いしていたと言うのに、変わる物だ。ナチュラルとコーディネイターの融和は、案外早いかもしれぬ。

「早く、平和な世の中にしたい物ですな？ 子供らが安心して会えるような？」

「同感です。事務次官殿」

二人の男は、それぞれに決意を新たにした。

「ナスカ級1、ローラシア級2、グリーン18、距離500。会敵予測、15分後です」

「こちらへ向かってきているのか？」

「3隻か……当たったな」

「何ですか？ 閣下？」

「いや、なんでもない」

ルナマリアの言が当たった事に、改めてハルバートンは驚きを感じた。

「全艦、密集陣形にて、迎撃体勢！ アークエンジェルは動くな！

そのまま本艦に付け！」

「Nジャマー、展開！ アンチビーム爆雷、用意！……モビルアーマー隊は出さなくてよろしいので？」

「その必要は無い。今出しても、主砲射撃の邪魔になるうよ」

ハルバートンは思う。ルナマリア君の言った事は考えてみれば道理だ。こちらの勝機は、艦艇とモビルアーマーの数を生かす事にしかない。……モビルスーツの威力に怯えて、考えが後ろ向きになっていたかもしれない。

最初から勝てぬなどと考えていれば負けるのが当たり前だ！

「補給艦、離脱！」

「ランチ収容、ハッチ閉鎖！」

「うむ。砲撃戦用意！」

後に低軌道会戦と呼ばれる事になる戦いが始まった。

ネルソン級、アガメムノン級合せて10隻を超える地球軍の戦艦からビームが、ミサイルが放たれる。

アンチビーム爆雷などでその威力は削がれるため沈められる艦はなかったが、尚もかなりの密度で砲撃を浴びせ続ける。

ザフト艦も負けじと砲撃を開始する。モビルスーツの発艦も確認された。

「撃て！ 撃て！ 撃ちまくれ！」

ホフマンが全艦隊に向かって吼える。

「ジン2機、いや、3機撃破を確認！」

オペレーターが伝えて来る。

艦橋は歓喜の声に包まれる。

だが、すぐにオペレータの声がそれに水を差す。

「敵モビルスーツ、イエローゾーン突破しました！」

「む。モビルアーマー隊、発進！」

「ワルキューレワン、ワルキューレツー、発進！」

ハルバートンの指示でホフマンが命令を下す。

「セレウコス、被弾、戦闘不能！」

「カサンドロス、沈黙！」

「アンティゴнос、プトレマイオス、撃沈！」

「ぬうう……」

モビルスーツに内懐に入り込まれたとたん、これだ。やはり、奴らは侮るべきではないのだ。

「モビルアーマー隊に伝えろ！ 一撃離脱に徹しろと！ 奴らの攻撃のじゃまをするだけでいい！」

「敵ナスカ級、及びローラシア級接近！」

「セレウコス、カサンドロスに直撃照準！」

「なに！？」

「接近してくるか！ ようし、全艦、前方に突出しているローラシア級に攻撃を集中しろ！」

第8艦隊のビームとミサイルが放たれる。ただ一艦、ガモフを目掛けて！

ナスカ級より小柄な船体は、すでに被弾していた。急に密度を増したビームが、ミサイルが、その破孔を穿った。ガモフは、内側からの圧力に耐え切れず爆散した。

だが、歓喜の声が上がる前にオペレーターが告げる。

「モビルアーマー隊、損耗率20%！」

「早いな……」
戦いの行方は、誰にもわからない……

「クセルクセス、パリス、前へ出ます！」

「Xナンバー、接近！」

「ビームを使うんだ！ 落とせ！」

「アークエンジェルより、リアルタイム回線」

「……なんだ？」

『本艦は、艦隊を離脱し、直ちに、降下シークエンスに入りたいと思います。許可を！』

「なんだと!？」

「自分達だけ逃げ出そうという気が！」

『敵の狙いは本艦です！ 本艦が離れなければ、本艦が離れない限り、敵は諦めません！』

「うっ……」

『アラスカは無理ですが、この位置なら、地球軍制空権内へ降りられます！ 突入限界点まで持ち堪えれば、ジンとザフト艦は振り切れます。閣下！』

「ぬう……。マリュー・ラミアス。ふん！ 相変わらず無茶な奴だな」

『……部下は、上官に習うものですから……』

「いいだろう。アークエンジェルは直ちに降下準備に入れ。限界点まではきっちり送ってやる。送り狼は、1機も通さんぞ！」

『はい！』

アークエンジェルとの通信が切れる。ハルバートンはホフマンに命ずる。

「シャトルも脱出させておけ。同じくアラスカには着けないだろうが、これ以上戦闘に巻き込まれるよりよいだろう」

「はっ」

私はストライクのコクピットに座って戦況を聞いて一喜一憂していた。

怖い……何も出来ないのが怖い。

『総員、大気圏突入準備作業を開始せよ』
とうとう降りるのね。うまくいくといいけど。

『イージス、ブリッツ、先陣隊列を突破！ メネラオスが応戦中！』

「艦長！ ギリギリまで俺達を出せ！ 何分ある？」

フラガさんが要請する！

「このままじゃあ、メネラオスも危ないですよ！ 艦長！ カタログスペックでは、ストライクは、単体でも降下可能です！」

「ええ、でもやった人はいないのよ？ ……わかったわ。許可します」

「ただし、フェイズスリーまでに戻れ！ 高度とタイムは常に注意しろ！」

「はい！」

「こんな状況で出るなんて、俺だって初めてだぜ……！」

「ルナマリア・ホーク、行きます！」

「……動きが鈍い！ 重力に引かれてるの！？」

でも！ 頑張らなきゃ！

幸いジンでここまで降りてくる命知らずはいない。
見つけた！ イージス！

イージスは私を認めると、こちらにやってきた！

「ルナ！ ルナマリア・ホーク」

「アスラン！ あなた馬鹿よ！ このまま大気圏突入するつもり！」

？」

「目的も果たせずして、今更戻れるか！」

「しつこいんだよ！ お前らあ！」

フラガさんもうまくブリッツを牽制している。

「アークエンジェルに着艦しなさい！ 投降して！ そうすれば無事に地球に降りられるわ！」

「うるさい！」

私の忠告はアスランを怒らせてしまったようだった。

本気で攻撃して来る！ 私は回避に専念する。

ああ！ アークエンジェルと離れてしまう！

！ 上から衝撃が来た。

何？ あ、残ったローロシア級が、爆発している！ やった。

でも、今の衝撃で決定的にアークエンジェルと離れてしまった。：

もう、この高度ではストライクでは戻れない。

！？ アークエンジェルが、寄せて来てくれてる！？ これなら、なんとかか……

「もはやこれまでか！」

ラウ・ル・クルーゼは唇を噛んだ。

自らもシグーに乗り込みモビルアーマーを落としまくったものの、地球軍は未だに18隻を数え、モビルアーマーも50機はいるだろう。

アークエンジェルまで辿り着いたのはイージスとブリッツのみ。その2機も、重力でこれ以上の攻撃は無理そうだ。

それに対してこちらはガモフをやられ、デュエル、バスターを除けばジンも残りは6機。その半数は被弾、バッテリー充電のために戦線を離脱している。

！ 閃光が走った。ツイーグラがやられた光だった。

「潮時か……！ アデス、撤収するぞ！ モビルスーツ隊に撤退命令を出せ！」

ヴェサリウスから、撤退信号が放たれる。

「ハルバートンめ！ 能力を侮っていたか……！ 次は見ている！ モビルスーツを收容すると、ヴェサリウスは最大戦速で撤退していた。」

メネラオス艦橋では、ナスカ級が撤退するのを確認しても、誰もが無言だった。引き続き被害報告に、感覚が磨耗していたのだったが、

「どうやら勝ったな」

彼らの司令官がぼそりとつぶやくと、艦橋のあちこちから、勝った……勝った……と言う声が聞こえ始め、それは歓喜の声に変わった。

「ばんざーい！ ばんざーい！」

「アークエンジェルはどうか？」

「は。どうやらアフリカに降下したようです」

「そうか……無事にアラスカまで辿り着ければよいのだが……」

勝ったとは言え艦艇の約半数、モビルアーマーの2/3を撃破されると言う大損害を受けている。

これでアークエンジェルがアラスカに辿り着けなければその犠牲が無駄となる。

「だが……これ以上ここにおいても出来る事はなさそうだな。各艦、モビルアーマーの收容及び生存者の救助を行え！ 帰還する！」

第十話

「暑い……暑い……」

「デンギル先生、氷持って来た！」

「よし、腋の下、股などの動脈が集中する部分にあてて冷してくれ」

「大丈夫でしょうか？ ルナ、意識が朦朧としているみたいで」

「うーむ。熱中症の一種じゃろうからな。身体を冷却して、水分とミネラルを補給すれば大丈夫じゃろう」

「よかったー」

「さあ、みんなも寝なさい。」

あ、ここは……医務室のベッド……

「気がついたかの？ お嬢ちゃん」

「あ、デンギル先生。あたし……」

「お前さんは熱中症でぶつ倒れておったんじゃよ」

「さ、これを飲みなさい」

「あ、……これ、スポーツドリンク？」

「経口補水塩と言ってな、医療用に、脱水症状の時なんかを使う物じゃよ」

「……んぐんぐ……！ おいしい！ もう一杯！」

「ほいよ。しっかり飲みなされ。……もうこれは必要ないかな」

デンギル先生がちょうど終わりにかけた輸液のパックを仕舞う。

「先生……私、眠い」

「もう少し、寝ときなさい」

「はい」

私はうとうとと眠りについた。

「うん、もう大丈夫！ ご飯も普通に食べれるし！」

「よかったー！」

「心配しなげまったく」

「やっぱり試作品のカタログスペックは信頼しちゃだめねー。あやうく死ぬところだったわ」

こうして夕飯を食べているルナマリアの様子を見ると、まったく昨日は意識不明で寝込んでいた人とは思えない。

カズイはストライクのコクピットが何 になつていたか知っていた。自分じゃ死んでいたかもな……

コーデイネイターのルナマリアに軽い嫉妬心を覚えた。

でも、ルナマリアも死にかけたんだよな。ルナマリアが俺達の内一番危険な事は確かだ。

カズイは軽い自己嫌悪感をコップの水と共に飲み干した。

私は夕飯を食べた後、格納庫に顔を出した。

「やあ、お嬢ちゃん、具合はもういいのかい？」

格納庫では、フラガさんとマードックさんと数人の整備の人、そして見知らぬ人私くらい？ の年齢の人がスカイグラスパーに掛かりきりになっていた。

「ええ、お陰様で！」

「そりゃよかった。みんな心配していたんですぜ」

その時、見知らぬ人が私に話し掛けてきた。

「ルナマリア少尉ですね。僕はメネラオスから転任してきたジョブ・

ジョン少尉です。よろしく」

「新しく配属された人!? 頼もしいわ。よろしくお願いします!」
「そうか。ずっとフラガさんと二人だけで戦ってきたけど、嬉しい!
「そういや、お嬢ちゃんの子知夢、当たったなあ。見事にアフリカ
だぜ」

「……すみません。私のために……」

「いや、ストライクを失ったら意味無いからなあ。これからも妙な
夢見たら言ってくれよ」

「……はい」

「さーて少佐、弾薬も積み込んだし、ここでやれる事はこんなもん
ですぜ。後は実際に飛ばしてみねえと」

「う、ふぁーあ……そうだなあ。お嬢ちゃんも元気になったし、明
日は移動するかもしれんからなあ。とっと仕上げたいところだが……」

……

「……! そうなんだよね。ここは地上なんだ。じゃ、私、ちよつ
と地上用に設定いじってみます」

「そうか。じゃあ俺は寝るわ」

「はい。私はしっかり寝ちゃいましたから
フラガさんとジョンさんは出て行った。」

「マードックさんは? 寝ないんですか?」

「せつかくですからね、付き合いますよ」

「ありがとうございます!」

結局マードックさんをそれほど付き合せずに済んだ。地上用の大ま
かな設定はすぐ出来たけど、細かい設定は、やっぱり実際に動かし
てみないとわからなかったのだ。

「じゃ、マードックさん、お休みなさい」

「お嬢ちゃんも、お休み」

いい月夜だなあ。

窓から見える夜空にロマンチックな気持ちになりながら、私にあげられた個室に入り、寝ようとした時、警報が鳴った！

『第二戦闘配備発令！ 繰り返す！ 第二戦争配備発令！』
更衣室へ走る間に警戒度が上がる！

『第一戦闘配備発令！ 機関始動！ フラガ少佐、ホーク少尉は、搭乗機にてスタンバイ！』

手早くスーツを着ると、格納庫へ走る！

「状況は!？」

コクピットに乗るとミリイに尋ねる。

『今の所ザフト戦闘ヘリが3機確認されているわ!』

「戦闘ヘリ、そう……」

なら、それほど心配はないかな？

フラガさんのスカイグラスパーが発進していく。

『大変だ！ 砂丘の向こうにはザフトの四足歩行のモビルスーツまでいやがるぜ！ 5機だ!』

なんですって！

ジョンさんのスカイグラスパーも発艦していく。

私にもとうとう発進命令が出た。

『ストライク発進！ 敵モビルスーツを排除せよ！ 重力に気を付けるよ!』

「はい!」

5機も……うまく、いくかな。

『カタパルト、接続。APU、オンライン。ランチャーストライカー、スタンバイ。火器、パワーフロー、正常。進路クリアー。ストライク、発進どうぞ!』

「ルナマリア・ホーク、ストライク、出るわよ!」

ストライクはカタパルトから飛び立った！

さすが地球！ 重力ですぐに沈み込む。着地するとずるっと滑る。ああ、やっぱり微調整しないとだめか。

「砂漠だから接地圧が逃げるのね。逃げる圧力を想定し、摩擦係数は砂の粒状性をマイナス20に設定！」

これで、動かしやすくなった！

！ 敵モビルスーツが！ バクウ！？

バクウは素早い動きで迫って来る！

一機が体当たりして来る！ とつさに私はバルカン砲のスイッチを入れる！

ガガガガ！ バルカン砲の弾丸がバクウの装甲を貫いてゆく！

一機、撃破！

それを見たバクウはストライクを遠巻きにする。ミサイルが撃たれる。

やられるもんですか！

スラスターを吹かしてジャンプするとアグニを発射！

当たらない……こんな事ならエールストライカーで出ればよかった！

あ、上空から！ ザフトの戦闘ヘリを排除したスカイグラスパーが攻撃に加わる！

突然の上空からの銃撃に、一瞬バクウの足が止まる！

そこ！ アグニは見事にバクウを貫いた。

だが……それからバクウは足を決して止めず、ストライクを翻弄する。

だめだ、アグニ、当たらない……

突然、南西の方向に光の矢が走る！ 何！？

アークエンジェルの近くに、着弾！

砲撃！？ どこから！？

『南西20キロの地点と推定！』

『俺が行って、レーザーデジネーター照射する。それを目標に、ミサイルを撃ち込め！』

フラガさん！

また、南西の方角から光の矢が！ やらせない！

急に頭の中がクリアになる

……邪魔よ！……

バルカン砲で弾幕射撃！ スラスターを吹かしてジャンプ！

砂塵が立ち込める。だが、この時の私には相手がどこから出てくるかわかる気がした。

「そこ！」

ストライクのパンチは見事にバクウを捕らえ！ 更に上空へと弾き飛ばされたバクウは南西からの砲撃に当たって爆発する！

ストライク、着地！

「次はあぁー！」

上空に向けてアグニを連射する！

「はぁ、はぁ、はぁ、……」

私は、気がつけばアークエンジェルに向かう砲弾全てをアグニで叩き落していた。

でも、だいぶアグニ使っちゃったな……パワーダウンが近い！

！ バクウが、また向かって来る！

もうアグニは撃てない。

バクウの残り2機！ バルカン砲で牽制するも……いつまで持つ？ ジョン少尉から通信が入る。

『ホーク少尉、フラガ少佐が戻るまで踏ん張れ、そしたら2機で牽制する。その隙にアークエンジェルへ戻れ！』

「はい！」

その時、あれは……バギー！？ バギーが、バクウ目掛けて攻撃を仕掛けている！

！ 一両のバギーがストライクに近づいて来ると、これは接触回線！

『そのモビルスーツのパイロット！ 死にたくなければ、こちらに指示に従え！ そのポイントにトラップがある！ そこまでバクウを誘き寄せるんだ！』

……信じてみよう！

私はスラスターを吹かしながらそのポイントへ向かう。バクウもその後を追って来る！

さあ、ポイントへ誘導したわよ！ 何が起ころの？

突如爆音が響き、誘き寄せたポイントがバクウを巻き込みながら崩落していく！

ふう。なんとか、助かったか……

「なんとか助かったようね」

アークエンジェル艦橋でも、同じような言葉がつぶやかれていた。ザフトが残存部隊をまとめ撤退して行ったのはジョン少尉が確認している。

「フラガ少佐より入電です」

「なんと？」

「敵母艦を発見するも、攻撃を断念。敵母艦はレセツプス！」

「レセツプス！？」

マリユーの声に緊張が混じる。

「繰り返す、敵母艦は、レセツプス！ これより帰投する。以上です！」

「レセツプスとは？」

訝しげにナタルが尋ねる。

「アンドリユー・バルトフェルドの母艦だわ。敵は、砂漠の虎と言っことね」

「味方、と判断されますか？」

謎のバギー達は、ザフトのモビルスーツを撃退した後もそこに留まっていた。

マリューは決断する。

「銃口は向けられてないわね。ともかく、話してみましよう。その気はあるようだから。上手く転べばいろいろと助かるわ。後はお願い。はあ……」

でも、気は抜けない。エレベーターの陰には狙撃兵を配置する。

「やれやれ……こつちのお客さんも、一癖ありそうだな。俺、これはあんまり得意じゃないんだけどね」

フラガはホルスターを叩きながら言う。

まあ！ 戦闘機に乗るとエースなのに。

「うふ」

マリューの緊張が少し解けた。

「助けていただいた、とお礼を言うべき何でしょうかね。地球軍第8艦隊、マリュー・ラミアスです」

「第8艦隊か。めずらしくザフトに勝つたらしいな。おめでとさん」「どうも」

そう。勝ったのね。ハルバートン提督も無事なようね。

マリューは上官の無事を喜んだ。

「俺達は明けの砂漠だ。俺はサイーブ・アシユマン。礼なんざ要らんが、分かってんだろ？ 別にあんた方を助けた訳じゃない」

「……」

「はん！ こつちもこつちの敵を討つたまででねえ」

「砂漠の虎相手に、ずっとこんな事を？」

「あんたの顔はどっかで見えたことあるなあ」

「ムウ・ラ・フラガだ。この辺に、知り合いは居ないがね」

「エンディミオンの鷹とこんなところで会えるとはよお」
「！」

「情報もいろいろとお持ちのようね。私達のことも？」

「地球軍の新型特装艦アークエンジェルだろ。クルーゼ隊に追われ
て、地球へ逃げてきた。それで、あれが……」

「X-105。ストライクと呼ばれる、地球軍の新型機動兵器のプ
ロトタイプだ」

金髪の少年が後を引き取って続けた。

この子？ どこかで？

マリューは記憶を辿った。が、出て来ない。

気のせいか……

「さてと、お互い何者だか分かってめでたしってとこだがな、こっ
ちとしちゃあ、そんな厄の種に降ってこられてビックリしてんだ。

こんなところに降りちまったのは事故なんだろうが、あんた達がこれ
からどうするつもりなのか、そいつを聞きたいと思ってね」

「力になっていただけなのかしら？」

「へ！ 話そうってんなら、まずは銃を下ろしてくれ。あれのパイ
ロットも」

「……ふう……分かりました。ホーク少尉、降りてきて」

「ああっ！」

金髪の少年が叫ぶ。

「ああ？ あれがパイロット？ まだガキじゃねえか。ほんとかよ

……」

他のレジスタンスも叫ぶ。

無理もないわね。

マリューの罪悪感が、強くなる。

「ああ……ああ……お前……」

……？ 金髪の少年がルナマリアさんに近づく。何？

「ああー！ あなたは！」

ルナマリアが、叫んだ。

第十一話

「ああー！ あなたは！ やっぱり！」

私は駆け寄って来た金髪の少女を見つめる。

間違いない、カガリ様だ！

「お前……お前が何故あんなものに乗っている！？」

「あなたこそ、何やってんですか！ こんな所で！？」

「あ、ちよつとお前、待て！」

「待ちません！」

私はカガリ様の手を引いて物陰に連れ込んだ。

「カガリ様？ なーに、やってるんですか！？ こんな所で？」

「『様』はいらないと言っただろう……ずっと心配していた。お前は無事にシエルターに入れただろうかと」

「それが入れなくて。左のシエルターはもう雇いなくなつて……成り行きでアークエンジェルに乗る事になって、成り行きでストライクを操縦してます。カガリは？」

「ヘリオポリスを脱出した後、考えたんだ。私の視野は狭い。もつと大きな世界を知りたいと。そしたら、お父様がここを紹介してくれた」

「それでこれですか！？ わかつてるんですか？ レジスタンスなんて言うって聞こえはいいですけどね、ゲリラは問答無用で殺されても文句言えないですよ？ それにカガリがレジスタンスに加わっているなんて知れたら……オーブも巻き込まれるんですよ？」

「その点なら心配ない。お父様は、もしそんな事になれば、私は病死した事に見捨てる。だそうだ」

あつさり、カガリは言う。でもそれが為政者としての厳しさと言う物なのだろう。

「カガリの正体は、何人に知られているんですか？」

「サイ ブだけだ。お父様の古い知り合いだそうだ。あと、お父様

が付けてくれた護衛が一人。キサカー佐だ」

ふう。世界を広く知る事が、なんでザフトと戦う事になったのやら。

「ザフトは非道い。お前もこれを聞けば考えが変わるぞ」

声を潜めてカガリが語った事は、衝撃的な事だった。

「3日前、ビクトリアが陥落した」

「え！」

「驚くのはこれからだ。ザフトは捕虜を取らず、降伏した者も殺害したらしい」

「 そんな！」

「歴然としたコルシカ条約違反だ！」

「でも、そんな情報、どうやって知ったの？」

「 ビクトリア付近の部族の者が、太鼓通信で伝えて来おった。

……馬鹿にするなよ？ 意外なほど正確で早いぞ」

あ、サイーブ、さん？ だっけ？ こちらに顔を出して言った。

「もう話は終わったか？ カガリ」

「あ、ああ、大体」

「こちらのお嬢ちゃんは？ 知り合いか？」

「ああ、ヘリオポリスで知り合ったんだ。私の正体も知ってる」

「そうか。言うまでもないが、カガリの正体が知られる事がないように」

「はい」

「じゃあ、しばらくの間よろしくな。俺達はアークエンジェルと協力する事になった」

「そうなんですか！」

こうしてアークエンジェルはレジスタンスの隠れ場所に行く事となった。

「ご苦労だったな」

着いた所では、テントや洞穴を利用してアジトが作られていた。こんな所によく……

「ここに住んでる訳じゃないぞ」

カガリが言う。

「ここは、前線基地だ。皆家は街にある。……まだ焼かれてなけりやな」

「街？」

「タツシル、ムーラン、バナディーヤから来てる奴も居る。私達は、そんな街の有志の一団だ」

……向こうにみんながいる。

声が聞こえてくる……

「はあ……レジスタンスの基地に居るなんて……なんか、話がどんどん変な方向へ行ってる気がする……」

「はあ……砂漠だなんてさ……あゝあこんな事ならあん時、残るなんて言うんじゃないか」

「これから……どうなるんだろうね……私達……」

……私の、せいかな。

ぼりっ。久しぶりにデパスを取り出し、齧る。

「どうしたんだ？ ルナ」

「ううん、なんでもない、カガリ。……みんな、ここにいたの？」

「ルナ！ そう言えば、この子は？ レジスタンスの子に知り合いなんていたの？」

「やだな。みんなも一緒だったじゃない。カト 教授のお客さんだった子よ」

「ええー！？ でも、そう言えば……」

「でも、なんでこの子がこんな所でレジスタンスやってるんだ？」

「カガリにも、色々事情があるのよ」

「そうか、カガリって言うのか」

「ああ、よろしくな」

「やばい！ 色々ばれない内に引き上げようつと。」

「じゃ、私モビルスーツの調整があるから。さ、カガリも向こうに用があるんでしょう？」

「ああ、じゃあ、またな、みんな」

「そらあザフトの勢力圏と言ったって、こんな土地だ。砂漠中に軍隊が居るわけじゃあねえがな。だが、3日前にビクトリア宇宙港が落とされちまってからこっち、奴等の勢いは強い」

「ビクトリアが？」

「マリューは驚いた。確か一回は撃退したはず……場合によっては頼ろうと思っていたのに。」

「3日前？」

「あゝらら」

「ここ、アフリカ共同体は元々、プラント寄りだ。頑張ってた南部の、南アフリカ統一機構も、遂に地球軍に見捨てられちまったんだ。ラインは日に日に変わっていくぜ？」

「そんな中で頑張るねえ、あんたらは」

「……」

「俺達から見りゃあ、ザフトも、地球軍も、同じだ。どっちも支配し、奪いにやって来るだけだ」

「あつ……」

「……だが、地球軍がましだと思っるのはな、あんたらは、少なくとも投降した兵を殺害したりはせんだろう？」

「え、ええ。個人的にそのような犯罪を犯してしまう者はいるでしょうが」

「だが、ザフトは軍全体でそれをやりやがった。投降した者も残ら

ず殺害した。ビクトリア大虐殺よ」

「何て事……」

ザフト Zodiac Alliance of Freedom Treaty 自由条約黃道同盟。結局彼らはまともな軍隊ではないのだった。

建前上はあくまでも政治結社。旧世紀にナチスドイツが保有していた突撃隊に近いのかもしれない。

そんな物に、まともに振舞え、と言っても無駄な話かも知れない。

コルシカ条約を教えられてすらいないかもしれないのだ。

マリューは齒軋りをして戦友の悲劇を噛み締めた。

「それにエイプリルフル・クライシスだ。ここいらは一応親プラントが強い地域だった。にも係らず、ニュートロンジャマーをぶち込まれた。砂漠の虎は今の所いい子にしているようだがな、到底信用できんさ。……あの船は、大気圏内ではどうなんだ？」

「そう、高度は取れない」

「山脈が越えられねえってんなら、あとはジブラルタルを突破するか……」

「この戦力で？ 無茶言うなよ」

「……んー。頑張つて紅海へ抜けて、インド洋から太平洋へ出るっきゃねえな」

「太平洋……」

「地中海北岸を目指してユーラシアの勢力圏内に辿り付く訳には行かないのでしょうか？」

「地中海は残念ながらザフトのバスタブになってる。途中で撃沈されるのが落ちさね」

「……そうですか。紅海から太平洋、補給路の確保無しに、一気にいける距離ではありませんね」

地中海艦隊がザフト軍に敗北したのはマリューも聞いていた。無理は出来ない。

「大洋州連合は完全にザフトの勢力圏だろ？ 赤道連合はまだ中立

か？」

「おいおい、気が早えな。もうそんなところに心配か？」

「ん？」

「ここ！ バナディーヤにはレセツプスが居るんだぜ？」

「あ……頑張つて抜けてつて、そういうこと？」

「……はあ……」

「おー、また何やってんだ？」

私がストライクの調整をしていると、マードックさんが顔を出した。

「昨夜の戦闘の時、接地圧弄ったんで、その調整とかですよ」

「ほおー、なるほどねー。便利なパイロットだよなあ、お前つて。

なんか俄然やる気じゃねえかよ！ ホーク少尉。はっはっはっはっ

は

私はさっきのみんなの言葉を思い出していた。

私が巻き込んだも同然だもん。私がみんなを守らなくちゃ……

最近、私は自室に居るよりコクピットで過ごす事が多くなっていた

……

夜になつて私はアークエンジェルの外へ連れ出された。食事は外で
取れ、との事だ。

ミリィ達もそうだ。気分転換、させようとしてくれているのかな？
こうしてぼーっと火を眺めていると、キャンプみたいだ。

カガリも私の向かい側でぼーっと火を眺めている。アフメドつて子
が色々話し掛けてる。

「……ごめんね、ミリィ」

「え、なに？ ルナ？」

「私が残ったせいでみんなも巻き込んだじゃって」

「やだなあ。昼間の事気にしてるの？ みんな自分で選んで自分で決めたんだから。気にする事ないよ」

「……ありがとう」

私はミリイの肩にそつと頭を寄せた。

！ 警笛がなる！

「どうした！」

サイーブさんが叫ぶ。

「空が燃えてる！」

「うつつ！」

「タツシルの方向だ！」

のんびりしていた空気が一変した。

カガリの話なら、タツシルに家がある人もいるはず！

私達は顔を見合わせると、マリユーさん達の所へ走った。

「どうした！」

「空が燃えてる！」

「うつつ！」

「タツシルの方向だ！」

「くっそー！ 駄目だ、通じん！」

「急げ！ 弾薬を早く！」

「まいったなあ……お袋は病気で寝てんだよ！」

「街がやられた！？」

「早く乗れ！ モタモタすんな！」

「急いで戻るぞ！急げ！ 早く！」

「サイーブ！」

「半分はここに残れと言っているんだ！ 落ち着け！ 別働隊が居るかもしれん」

せつかくのんびり和んでいたのに！

マリューは舌打ちする。事態は急変した。

アークエンジェルの皆が指示を求めてマリューの元へと集まって来る。

「どう思います？」

マリューはフラガに尋ねた。

「んー……、砂漠の虎は残虐非道、なんて話は聞かないけどなあ。

でも、俺も彼とは知り合いじゃないしね。どうする？俺達も、行くか？」

「アークエンジェルは動かない方がいいでしょう。確かに、別働隊の心配もあります。少佐、行っていたくださいます？」

「あ？ 俺？」

「スカイグラスパーが、一番速いでしょ？」

「だわねえ。んじゃ、行って来るわ」

「出来るのはあくまで救援です！ バギーでも、医師と誰かを行かせますから！」

マリューは振り向く。皆が、指示を待っている。彼女の責任感が高まる。

「総員！ 直ちに帰投！ 警戒態勢を取る！」

「はい！」

私はコクピットで待機を命じられた。タッシルへの攻撃は囷かも知れないからだ。

状況が伝わってくる。タッシルの人達は無事らしい。

焼かれたのは弾薬に食糧に家……ニュートロンジャマーで地球の人達をじわじわ苦しめるシーゲル・クライン。
クライン派らしいやり口だ。

即効性でなければ良しとでも思ってるのかしら？

……！ レジスタンスの人達が、ザフトを追撃したらしい。馬鹿な事を！ 無駄死にしたいの！？

『ルナ！ ストライク、発進願います！』

「了解」

『APU起動。カタパルト、接続。ストライカーパックはエールを装備します。エールストライカー、スタンバイ。システム、オールグリーン。進路クリアー。ストライク、どうぞ！』
こんな馬鹿らしい戦いで死にたくないな、と思った。

敵は3機。一機は動けない。まず、あれから。……！？

「静止目標なのに、逸れた？ そうか、砂漠の熱対流で……」
少尉！ 砂漠の熱対流に注意してください！ 逸れます」

『了解！』

私は熱対流をパラメータに入れ、再び撃った。よし、撃破！
着地。

バクウはミサイルを山のように撃って来る！

PS装甲を信じて！ 私はエールストライカーの追加ブースターも吹かし、身を低くして遮二無二突進する。上はジョン少尉が押さえ
てくれる！

ストライクのビームサーベルは見事にバクウの脚部を断ち切った。

動けなくなったバクウへ上空からアグニが放たれ止めを刺す。

残ったバクウは撤退を開始した。

そう簡単に逃がさない！

「ジョン少尉！」

『ああ！』

以心伝心！ ジョン少尉が上からアグニで牽制する。鼻先にアグニをぶち込まれて、ジャンプして後退するバクウ……
「そこ！」

ビームライフルのビームは見事にバクウを貫いた

「だいぶ追いかけて来てしまったわ。撤退しましょう」
『了解』

私が先ほどの戦場に戻ると、そこかしこに破壊されたバギーが散らかつていた。そして、死体。

アフメド！ 先ほどまで私達に陽気な姿を見せていた彼も、動かぬ骸となつて横たわっていた。

「……死にたいんですか？」

私は我慢できず言った。

「う……」

「こんなところで……なんの意味もないじゃないですか！ 気持ちだけで……一体何が守れるって言うんです！」

戦いの去つた戦場に、すすり泣きが満ちた。

男達は肅々とキャンプに引き上げて来た。

「カガリ！」

キャンプにカガリを見つけると、私は駆け寄つた。

「カガリ、無事だったのね。よかった」

「……アフメド、死んだんだってな」

「ええ」

カガリは俯いていた。

「止めても、止まってくれなかった」

「しょうがないわよ。それが彼らの選択なら」

「私は、卑怯かな？ アフメドが出て行った時、こんなつまらない

事で死ぬ訳には行かない、と思ってしまったんだ」

「卑怯じゃ、ないわよ。死んだ彼らにも言い分はあるでしょう。でも、あなたはこんな所で死んじゃだめ！」

「……私も、思ったんだ。ここでは死ねない、と」

「そうよ。カガリはこんな所で死なないで。そして、このくそったれな世界を何とかして頂戴」

「できるかな？」

「力を貸すわ」

「ちよっと、胸を貸してくれ」

そう言うと、カガリは私の胸にすがり付いてきた。

「……う……えぐ……い……」

私は泣き出したカガリの頭を優しく撫でた。

第十二話

「じゃあ、4時間後だな」

「気を付けろ」

「分かってる。そっちこそな。アル・ジャイリーってのは、気の抜けない奴なんだ」

「ホーク少つい……た、頼んだぞ……」

「はい」

「行くぞ！」

「ああ」

「じゃあ、私達も行きましょ、カガリ」

「ああ」

ナタルさんやサイーブさんは、物資の調達、私とカガリはバナディーヤの町に買出しに来た。

買出しと言ってもたいした物じゃない。私の気分を晴らせてくれようと言うのだろう。

そして、サイーブさんやキサカさんからすれば私はたった一人カガリの正体を知っている。ついでに、と思っただらうな。

「でも、ほんとにここが虎の本拠地？ 随分賑やかで、平和そうね」

「ふん！ 付いて来い」

「え？」

「平和そうに見えたって、そんなものは見せかけだ」

「ああ……！」

カガリが指し示すその向こうには、城砦のように陸上戦艦レセップスがそびえ立っていた。

「あれが、この街の本当の支配者だ。逆らう者は容赦なく殺される。ここはザフトの、砂漠の虎のものなんだ」

「あーああ…… たつくもう…… こんなもん持ち込んでよお…… 何だ
ってコックピットで寝泊まりしなきゃ、なんねえんだよお……」
マードックはぼやいた。ストライクのコックピットがこんな事になっ
ているとは。

「でも…… いつからそんな……」

「さあ……？ けど、地球に降りてからじゃないの？ それまで……
…そんな余裕なかったでしょ？」

「それにしても迂闊だったわ。パイロットとしてあまりにも優秀な
ものだからつい、正規の訓練も何も受けてない子供だということを
私は……」

マリューは俯いた。

あの子を、決して二度と傷つけまいと誓ったのに、私は……

「君だけの、責任じゃないさ。俺も同じだ。いつでも信じられない
ほどの働きをしてきたからなあ、必死だったんだろうに…… また、
いつ攻撃があるか分からない。そしたら、自分が頑張って艦を守ら
なきゃならない。そう思い詰めて、追い込んでしまったんだろう
なあ…… 自分を……」

「解消法に、心当たりは？ 先輩でしょ？」

「え？ …… あ……ん、あまり…… 参考にならないかも……」

マリューはピーンと来た。女関係だろう。思わず声がかきつくなくなるの
を自覚した。

「のようですわねえ。取り敢えず、今日の外出で少しは気分が変わ
るといいんですけど……」

「…… はあ…… いいよねえ若者は……！」

「これでだいたい揃ったな。後は飯食って帰るだけか」

「お待たせねー」

「何、これ？」

「ドネルケバブさ！ あー、疲れたし腹も減った。ほら、お前も食えよ。このチリソースを掛けてえ……」

「あーいや待ったあ！ ちよつと待ったあ！ ケバブにチリソースなんて何を言ってるんだ！ このヨーグルトソースを掛けるのが常識だろうがあ」

「ああ？」

突然、派手なアロハシャツにサングラスの目立つ男が声をかけて来る。

こんな所でいきなり親しそうに話し掛けて来る奴って、大抵なにか企んでるのよね。

あ・や・し・い！

「いや、常識というよりも……もっところ、んー……そう！ ヨーグルトソースを掛けないなんて、この料理に対する冒涇だよ！」

「なんなんだお前は！」

「ああ……！」

あ、カガリはその男に従わず、思いつきチリソースをかけた。

「見ず知らずの男に、私の食べ方にとやかく言われる筋合いはない！ ハゲツ……」

「あー！ なんと……」

私はその男の観察を終えた。とりあえず敵意はなさそうだ。でも、監視されている感じが……？

どこから？ 私は気づかれないように周囲に気を配る。

「つままー！ ーいー！ ほうらルナも！ ケバブにはチリソースが当たり前だ！」

「だああ待ちたまえ！ 彼女まで邪道に墮とす気か！？」

「何をするんだ！ 引ッ込んでる！」

「君こそ何をする！ ええい！ この……」

「ぬううう！」

「あ！」

「なんて事を！」

「え？ あ~~~~！」

気がつく私のケバブには盛大にチリソースとヨーグルトがかけられてしまっていた。

「いや〜悪かったねえ〜」

「……ええ……まあ……ミックスもなかなか……」
しょうがないから余計な分を落としながら食べる。

「しかし、何ぼんやりしてたんだ？ ルナ」

カガリが聞いて来る。私は小声で答えた。

「気をつけて。私達、監視されてるわ」

「なんだって！」

カガリが叫ぶのと同時だった。

「伏せる！」

アロハの男はテーブルをひっくり返すと、懐から銃を取り出し撃ち出した！

「うわあ！」

「カガリ、伏せて！」

私はカガリの頭を抱えて地面に伏せる。

「無事か君達！」

「な、なんなんだ一体……」

「死ぬ！ コーディネイター！ 宇宙の化け物め！」

「青き清浄なる世界の為に！」

「ブルーコスモスか！」

「構わん！ 全て排除しろ！」

気がつくと、私達の座っていた周囲のテーブルから男達が銃を取り出し、襲って来た男達に応戦している。

「うつつ！」

あ、壁の影から、こっちが狙われている！

目の前には転がって来た銃が！ やるしかない！

（銃のせいじゃない。君はトリガーを引く瞬間に手首を捻る癖がある。だから着弾が散ってしまっただ）

ふいに言葉が脳裏を過ぎる。

そうね、アスラン。あなたに言われた事がないけど言われた記憶がある言葉……

「うわあ！」

見事命中！

「よし！ 終わったか！？」

「隊長！ 御無事で！」

襲い掛かってきたブルーコスモスを撃退していた警備兵の一人が、こちらへやって来る。

「ああ！ 私は平気だ。彼女のおかげでな」

「ああ……アンドリユー・バルトフェルド……」

サングラスを取ったアロハの男を見て、期せずして、私とカガリの声がだぶった。

「さ、どうぞ〜」

「いえ……私達はほんともう……」

私達は、なんとアンドリユー・バルトフェルドの車に乗せられ、彼が宿舎にしているらしい宮殿のような建物に連れて来られてしまった。

「いやいや〜、お茶を台無しにした上に助けてもらって、彼女なんか服グチャグチャじゃないの。それをそのまま帰すわけにはいかないでしょ。ね？ 僕としては」

これからどうなるんだろう。私はともかくカガリは！？ なんとか無事に帰してあげないと……

そんな私の不安を見抜いたのか、ふ、とバルトフェルドは笑った。

「こつちだ」

「あ！」

もう逃げられない……覚悟を決めた私達の前に、一人の女性が姿を現した。バルトフェルドに負けず劣らず妙な格好だ。

「この子ですか？ アンディ」

「ああ。アイシャ、彼女をどうにかしてやってくれ。チリソースと

ヨーグルトソースとお茶を被っちまっただ」

「あらあら、ケバブねー」

「あ……うーん……」

「さ、いらっしやい？」

「カ、カガリ……」

え、こんな状態で離れるなんて！

そんな私を宥める様にアイシャと言う名前らしい女性が言う。

「大丈夫よ、すぐ済むわ。アンディと一緒に待ってて」

「おーい！ 君はこつちだ」

私は呼ばれるまま、日が差し込む大きな部屋へと入った。

「僕はコーヒーには、いささか自信があっただねえ」

「はあ……」

「まあ掛けたまえよ。くつろいでくれ。んっ」

……まな板の上の鯉、か。私はソファに座った。

「エヴィデンス01。実物を見た事は？」

「いえ、あ……」

私、見た事がある！ 確かアプリリウス1で、大きな鯨石を誰かと

見ていた！

私、プラントになんか言った事ないのに！

「見た事、あるかも……とつても大きくて、でも手で触れる位近くまで寄れた気がする」

「そうか。何でこれを鯨石と言うのかねえ。これ、鯨に見える？」
混乱する私をよそに、バルトフェルドは質問してくる。

「……羽根を除けば、鯨っぽいですね」

「これどう見ても羽根じゃない？普通鯨には羽根はないだろう」

「え……まあ……あでも、それは外宇宙から来た、地球外生物の存在証拠ってことですから……」

「僕が言いたいのは、何でこれが鯨なんだってことだよ」

「……じゃあ、何ならいいんですか？」

「ん……、何ならと言われても困るが……、ところで、どう？」

「コーヒーの方は」

「……よくわかりません」

「あ、君にはまだ分からなかなあ、大人の味は」

資源コロニーのヘリオポリスでは、本物のコーヒーなんて贅沢品だ。私はコーヒーと言えばインスタントコーヒーしか飲んだ事がなかった。

おいしいと、言った方がよかつただろうか。でもこの相手には媚びる事はやめておいた方がいい気がした。

「本物のコーヒー、飲んだの初めてなんです」

「そうか？ ぜひ好きになって欲しいものだねえ。楽しいぞお」

バルトフェルドは、そう言う自分もカップを手を取った。

「ん。キリマンジャロを増やしてみたがなかなか。ま、楽しくも厄介な存在だよねえ、これも」

「……厄介、ですか？ コーヒーが？」

「違ーう！ 君はボケの才能があるねえ。エヴィデンス01の事だよ」

そう言うとバルトフェルドは大げさに仰け反って見せた。

「こんなもの見つけちゃったから、希望って言うか、可能性が出てきちゃった訳だし」

「ああ？」

「人はまだもつと先まで行ける、ってさ。この戦争の一番の根っ子だ」

「昔から良くある、植民地の独立戦争じゃないんですか？」

「それは……」

その時、さっきの女性がカガリを連れて入って来た。

「アンディー」

「おやおや！」

「ああ……」

「あーほら。もう」

尻込みするカガリを押すアイシャさん。

「ああ……」

カガリは、なんと言うのだろう。髪をアップにして、身体に巻きつくような緑の、フリルが斜めに付いたドレスを着ていた。

「……綺麗ねえ、カガリ」

「ドレスもよく似合うねえ。と言うか、そういう姿も実に板に付いてる感じだ」

！ カガリの正体、ばれている！？

「勝手に言ってる！」

「しゃべらなきゃ完璧」

「そう言うお前こそ、ほんとに砂漠の虎か？ 何で人にこんなドレスを着せたりする？ これも毎度のお遊びの一つか！」

「カガリ！ 落ち着きなさい」

たしなめるけど、カガリは止まらない。

「ドレスを選んだのはアイシャだし、毎度のお遊びとは？」

「変装してヘラヘラ街で遊んでみたり、住民は逃がして街だけ焼いてみたり。ってことさ」

「いい目だねえ。真っ直ぐで、実にいい目だ」

「くっ！ふざけるな！」

「君も死んだ方がマシなクチかね？」

「……………」

「そっちの彼女、君はどう思ってたの？」

「えっ？」

「どうなったらこの戦争は終わると思う？モビルスーツのパイロットとしては」

「……………」

「やっぱり、ばれてた……………」

「お前どうしてそれを！」

「はっはっはっは。あまり真っ直ぐすぎるのも問題だぞ。戦争には制限時間も得点もない。スポーツの試合のようなねえ。ならどうやって勝ち負けを決める？」

「そんなもの、どちらもこれ以上はやりたくないと思えば、に決まってるじゃないですか」

「片方が、もう止めたくても片方は止めたくない。どうすればいい？」

「……………」

「敵である者を、全て滅ぼすまで続けるかね？」

「あっ！」

バルトフェルドが、机の引出しから銃を出すとこちらに突きつけ……………！

私も隠しておいた銃をスカートに隠したホルスターから取り出し突きつける！

私は立ち上がるとカガリを背中にかばう。

「銃を仕舞って。私、ヘタなのよ。どこに弾が飛んで行くかわからない」

「……………ははは。ヘタな事を脅しに使われるとはねえ。君がヘタだとは思わないが、ま、いいでしょう」

バルトフェルドは銃を仕舞った。

「しかし、暴れるのは止めた方が賢明だなあ。いくら君がバーサーカーでも、暴れて無事にここから脱出できるもんか」

そうかも知れない。でもなんとかカガリは無事に脱出させないと……
「ここに居るのはみんな君と同じ、コーディネイターなんだからねえ」

「えー!?」

「……」

「お……お前……コーディネイターだったのか?」

「なんだ……カガリわかってると思ってた」

「君の戦闘を二回見た。砂漠の接地圧、熱対流のパラメーター。君は同胞の中でも、かなり優秀な方らしいな。」

あのパイロットをナチュラルだと言われて素直に信じるほど、私は呑気ではない」

「……」

「君が何故同胞と敵対する道を選んだかは知らんが、あのモビルスーツのパイロットである以上、私と君は、敵同士だと言うことだな?」

「……地上のコーディネイターを、考えに入れずに無思慮にニュートロンジャマーをばら撒きまくりながら同胞!? 自分に都合がいい時だけ同胞扱いしないで欲しいわね! 私の同胞はと言われればオーブ国民以外ないわ!」

「ルナ……」

「ふふ。やっぱり、どちらかが滅びなくてはならんのかねえ」

「……ビクトリアのように? 少なくとも地球軍はそんな事はしない!」

「む……血のバレンタインはどう考える?」

「脅し、でしょう。プラントを何度も滅ぼせる程の核を保有しているにも拘らず、わざわざ試験プラントに一発しか使用しなかったのよ? 地球軍にプラントを滅ぼす気があればとつくにその時に滅びているわ」

「……それは、プラントの防備に穴があったからだ」

「対して、勝手に同胞と呼ぶ地球在住コーディネイターをも巻き込

んでの無差別虐殺をするプラント。その結果、裏切ったのは自分達なのに、なぜあなた達の言う地球の同胞に恨まれるのかさえ理解できず裏切り者扱いするの!？」

「……やれやれ。舌戦では分が悪いようだねえ。ま、今日の君は命の恩人だし、ここは戦場ではない。帰りましたまえ。話せて楽しかったよ。よかつたかどうかは分からんがねえ。また戦場でな」
さっきの女性が出て来て扉を開ける。

「ああ、そのドレスはあげるよ。ささやかなお詫びだ」

「誰がいるか！ 私の服を寄越せ！」

「もらつときなさいよ、カガリ」

つい、口を出してしまった。だって、このドレスを着たカガリはとも素敵で、なんと言うか、もつたいなかったのだ。

「ははは。君はバーサーカーなだけじゃない、柔軟性もあるようだなあ」

バルトフェルドはおかしそうにくっくくと笑った。アイシャさんも笑っている。

「君にも見繕って上げたいが時間がない。これをあげよう」

バルトフェルドさんはいくつかの袋を私にくれた。

「これは？」

「コーヒー豆さ。銘柄は袋に書いてある。ぜひ同好の士になってもらいたいものだねえ。宇宙じゃ贅沢品で、こんな物に凝る奴なんて少なくてね」

そう言ったバルトフェルドさんの顔がさびしそうに見えたのは気のせいだったろうか。

「ねえカガリ」

待ち合わせの場所まで車で送られて行く時、ドレスが入った紙袋を抱えてるカガリに聞いてみた。不安だったのだ。

「私がコーディネイターだって知って、どう思った？」

「ルナは、ルナだろう」

怒ったようにカガリは言った。

「私はナチュラルだから、コーデイネイターだからと言って態度を変えないぞ。むしろ、ルナには済まない。コーデイネイターだからモバイルスーツが操縦できるからと言って、ずいぶん無理をさせられたろう。それもオーブに力がないせいだ。済まない」

「……ありがとう。私、コーデイネイターだからって結構嫌な目に遭って来たから……」

涙が出てきた。

「……泣くな……いや。ま、いいか。肩を貸してやる。この前と逆だな」

ありがたくカガリの肩に頭を埋めた。

「……でも、カガリも鈍いわね。今時モバイルスーツを操縦できるのはまだまだコーデイネイターくらいよ」

「言ったな。その元気があれば大丈夫だ」

「ふふふ」

「ははは」

助手席の兵士が、何事かとこちらに振り向いた。それを見てまた二人で顔を見合わせて笑ってしまった。

通り過ぎて行くバナディーヤの街は、先ほどの騒ぎなんかなかったみたいに賑やかだった。そんな風に逞しく、私もなりたい。

第十三話

そろそろ頃合だろう。マリユーは思った。ザフトの戦力も、ここ何回かの戦闘で目減りしている。今仕掛けなければ、ジブラルタルからの補給で砂漠の虎の戦力は元に戻ってしまうだろう。

「この辺りは、廃坑の空洞だらけだ。こっちは俺達が仕掛けた地雷原がある。戦場にしようってんならこの辺だろう。向こうもそう考えてくるだろうし。せつかく仕掛けた地雷を使わねえって手はねえ」

サイーブが広げた地図を指し示す。

「本当にそれでいいのか？俺達はともかく、あんたらの装備じゃあ被害はかなり出るぞ」

「虎に従い、奴の下で、奴等のために働けば、確かに俺達にも平穏な暮らしは約束されるんだろうよ。バナディーヤのようにな」

サイーブは思う。だが、と。家畜のような暮らしになんの価値があるものか！明日の保証があるものか！

「女達からはそうしようって声も聞こえる。だが、支配者の手はきまぐれだ。何百年、俺達の一族がそれに泣いてきたと思う？」

「う……」

「支配はされない、そしてしない。俺達が望むのはそれだけだ。虎に押さえられた東の鉱区を取り戻せば、それも叶うだろう。へえ……。こっちはあんたらの力を借りようってんだ。それでいいだろう、変な気遣いは無用だ」

「おーけー、分かった。艦長？」

「あ……分かりました。では、レセップス突破作戦へのご協力、喜んでお請け致します」

「ああ」

「なんでザウートなんて寄こすかねえ、ジブラルタルの連中は。バクウは品切れか？」

バルトフェルドはぼやいた。

バクウの代わりがザウートなんて屁の突っ張りにもなりやしない。だいたいスエズ攻略戦で地球軍のリニアガンダク部隊に散々にやられた機体じゃないか。

「はあ……これ以上は回せないと言っこと……。その埋め合わせのつもりですかねえ。あの二人は」

「かえって邪魔なだけのような気がするけどなあ、宇宙戦の経験しかないんじゃないか」

「エリート部隊ですからねえ」

「大体クルーゼ隊つてのが気に入らん。僕はあいつが嫌いだね」

ザラにアマルフィか。とんだお坊ちゃんのお守りを押し付けられたな。

まあ、会って見るとしよつか。

バルトフェルドは踵を返した。

「うわっ！」

突然吹いてきた砂の混じった風にあスランとニコルは声を上げてしまった。

「なんですかこれは……酷い所ですね」

「砂漠はその身で知ってこそってねえ。ようこそレセップスへ。指揮官のアンドリユー・バルトフェルドだ」

やはり、あまり使い物になりそうにないなあ、心の中で思いながら、バルトフェルドは二人に歓迎の言葉を述べた。

「なんたって、評議会議員の息子なものな。」

「クルーゼ隊、アスラン・ザラです」

「同じく、ニコル・アマルファイです」

「宇宙から大変だったなあ。歓迎するよ」

「ありがとうございます。足付きの動きは？」

「あの船なら、ここから南東へ180kmの地点、レジスタンスの基地にいるよ。無人偵察機を飛ばしてある。映像を見るかね？」

「……」

バルトフェルドは二人の機体を見る。なるほど。

「なるほど、同系統の機体だな。あいつとよく似ている」

だが、こいつらに、あのストライク程の活躍が出来るかな？ 皮肉めいた気持ちで心の中でつぶやいた。

「バルトフェルド隊長は、既に連合のモビルスーツと交戦されたと聞きましたが」

「ああそうだな。僕もクルーゼ隊を笑えんよ」

バルトフェルドは自嘲気味に言つと口を歪めた。

「これをアフメドが？」

「ああ、あんたにもらつて欲しいんだよ。ほんとは加工してから渡すつもりだったらしいけどねえ」

「……」

「ほんとに男達は戦争、戦争つて、自分からどんどん死にたがる。

あんたは、死んじやいけないよ」

「……おばさん……」

カガリは思った。少し前の自分なら、今も、自分でバギーに乗って戦いに行つたらう。

でも今は……死ねないな。私は国に帰つてやる事があるから。

カガリは祈った。戦に出かける男達ができるだけ多く戻ってくるように……

そして、ルナマリアが無事で戻ってくるようにと。

とうとう、アークエンジェルはレセップスを突破するために動き出した。

「はあ……」

もうすぐ戦いか。砂漠の虎はきつと来る。

「なんだ遅いなあ。早く食えよ。ほら、これも」

「え！ あ、あの……」

「ん〜。やつぱ、現地調達のもんは旨いねえ」

「フラガさん……まだ食べるんですか？」

「俺達はこちらから戦いに行くんだぜ？食つとかなきゃ、力でないでしょ。ほら、ソースはヨーグルトのが旨いぞあ」

「ああ！」

「ん？」

「いえ……虎もそう言ったから。ヨーグルトのが旨いって」

「あ……んー！味の分かる男だな。ハグウ。けど、敵の事なんか知らない方がいいんだ。早く忘れちまえ」

「え？」

「これから、命のやり取りをしようって相手の事なんか、知ってたってやりにくいだけだろ」

「そうですね。知らなきゃ良かった」

でも……プラントの……ザフトの人の考え方もわかった。穏健だと言う砂漠の虎でさえ、ナチュラルへの蔑視が、コーディネイター、ううん。プラントのコーディネイター中心的な考えが滲み出ている。そんな相手に負ける訳にはいかない！

！ 爆音と衝撃が響く！

「ああ！」

「なんだ！？ 爆発か！？」

「始まったの！？」

フラガさんが艦内通話機に走る。

「ブリッジ！ どうした！？」

『レジスタンスの地雷原がやられました！』

『総員、第一戦闘配備！ 繰り返す！ 総員、第一戦闘配備！』

私とフラガさんは顔を見合すと、格納庫へ向かった。

「連中には悪いが、レジスタンスの戦力なんぞはつきり言って当てにならん。お嬢ちゃんも踏ん張れよ。まあ、最近のお前さんなら、心配ないとは思うけどな」

「ええ。頑張るわ」

「あ！ レ、レーダーに…！」

「え！？」

「レーダーに敵機とおぼしき影。攪乱酷く数、補足不能。1時半の方向です！」

「その後方に、大型の熱量2。敵空母、及び駆逐艦と思われませう！
とうとう本腰入れて来たわね。マリユーは眈を決した。」

「対空、対艦、対モビルスーツ戦闘、迎撃開始！」

「ストライク、スカイグラスパー、発進！」

「スカイグラスパー1号、フラガ機、発進位置へ。進路クリアー、フラガ機、どうぞ！ スカイグラスパー2号、ジョン機、発進位置へ。進路クリアー、ジョン機、どうぞ！」

次々にスカイグラスパーは飛び立っていく。次は、私！

「APU起動。カタパルト、接続。ストライカーパックはエールを装備します。エールストライカー、スタンバイ。システム、オールグリーン。続いてストライク、どうぞ！」

「ルナマリア・ホーク、行きます！」

ストライクがカタパルトから飛び立つと、いきなり戦闘ヘリがストライクの進路を塞いだ！ ストライクはシールドで防ぎ、イーゲルシュテルンで反撃、撃墜する。

それを見てマリューは決断する。数多く居る戦闘ヘリにスカイグラスパーとストライクが拘束されれば、負ける。

「スカイグラスパー及びストライクは敵艦及び敵モバイルスーツの撃破に専念せよ！」

「よろしいのですか！？」

ナタルが声を上げる。マリューは毅然と答える。

「戦闘ヘリの攻撃ぐらい、防いで見せなさい！ そのくらいの攻撃で、この艦は沈みはしないわ！」

『ひょー。言うねえ。じゃ、ちよっくら敵艦に行つて来るわ。お嬢ちゃんとジョン少尉は対モバイルスーツと艦の護衛に当たれ！』

「はい！」

「……バクウは何機居るの？ 3、4……5機ね！」

『突出している奴を叩くぞ！ 上は押さえる！』

「はい！」

……！ バクウの口のあたり……あれはビームサーベルだわ！ 新型ね！ 気をつけないと……

バクウはこの前のように私を遠巻きにせず、積極的に進んでぶつかって来ようと言う感じが見て取れる。やはりビームサーベルが装備されたせいね。でもそんな付け焼刃の攻撃！

ジョン少尉がキャノン砲と機関砲で地上を牽制する。

私はそのすぐ後を飛び、横合いからレールガン装備のバクウの背中にビームサーベルを突き立てる！

レジスタンスのバギーがバクウに蹴飛ばされる！ あんたの相手は私よ！

ビームライフルを装備し撃つ！ ミサイルポッドに命中！

！ 横合いからバクウが飛び掛ってきた！

「そんな、付け焼刃の、接近戦なんかでえ！ やられるもんですか！」

ビームライフルを手放し、背中を地面に付けて、両手を振りかぶりビームサーベルでバクウの正中心線を斬る！

「次！ 敵は、敵はどこ！？」

「ECM、及びECCM強度、17%上がります！

「バリアント砲身温度、危険域に近づきつつあります」

「艦長！ ローエングリンの使用許可を！」

「駄目よ！ あれば地表への汚染被害が大きすぎるわ！ バリアントの出力と、チャージサイクルで対応して！」

「しかし……」

「命令です！」

「……了解しました」

フラガは隙を狙っていた。アークエンジェルは戦闘ヘリに敵空母、駆逐艦。ルナマリアとジョンはバクウと共に、多数の相手を相手にしている。早く自分が楽にしてやらねば……

だが、敵はザウトを艦上に上げて砲台代わりにしてやがる。火力は侮れない。着実に少しずつ火力を奪っていくしかない状況に焦れていた。

「ちまちまと！ ザウトを片付けていくのは面倒だねえ！」

……！ 一瞬、偶然ながらぽっかり開いた空間が出来た。

「くおおおお！」

フラガはすかさずそこにアグニをぶち込んだ！

「機関区に被弾！速力50%にダウン！」

「消火急げ！ 転進して残骸の影に入るんだ！」

駆逐艦が速力を急速に落とすのを確認すると、フラガはレセップスへと向かった。

「なんて強力な砲だ！」

レセップスでは、ダコスタがアグニの威力に驚いていた。だが、彼らも何の用意もなくこの戦いに臨んだ訳ではなかった。

「間もなく、ヘンリーカーターが配置に付く！ 持ち堪える！」

「うわあ！」

突然襲った衝撃にアークエンジェルの乗員は悲鳴を上げる。

「6時の方向に艦影！ 敵艦です！」

「なんですって!?!」

「もう一隻？ 伏せていたのか！」

「アークエンジェルが！ あ！」

バクウを片付け、アークエンジェルの救援に向かおうとする私を一機の黄色のカラーリングをされたモビルスーツが遮った！

『君の相手は私だよ、奇妙なパイロット君』

「……！ 虎か！」

まるで虎のようなモビルスーツだ。

いよいよ出て来た。私の胸に緊張が走る。

『アークエンジェルの救援には僕が行く！ 君はこのモビルスーツ

を！」

「はい！」

ジョン少尉のスカイグラスパーはアークエンジェルの方へと去って行く。

私はビームライフルで牽制する。虎は易々と避ける。

「やっぱりだめね」

私はビームサーベルを抜き放つと向かって来る虎に突進！ 虎は…

…跳んだ！？

しまった！ ジョン少尉はいないんだ！

「くっ」

辛うじて左側のウイングを切り裂いた！

よるめいた私に素早く虎が襲い掛かる。

今度は！？ 下！

虎の高速で回転するクローラーがシールドを弾き飛ばす！ ストラ

イクの本体にまでクローラーが迫りガリガリと音を立てる！ バク

ウ5機と戦った後のこれで、このままじゃパワーが……！

「ヘルダート、コリントス、てえ！」

「フラガ少佐から入電！ レセップス艦上にイージスとブリッツ！」

「なんだと？ こ、これは……レセップスの甲板上にイージスとブ

リッツを確認！」

「なに？」

「スラスター全開！ 上昇！ ゴットフリートの射線が取れない！」

「やっています！ しかし、船体が何かに引っかかって……」

衝撃が襲う！

「うわぁ！」

『アークエンジェル！ 高度を上げる！』

「ジョン少尉!? 船体が何かにつっかかって上昇出来ないの!」
『……荒っぽいですけど、我慢してくださいよ!』
再び衝撃が襲う。

「きゃあ!」

「うわ……外れた?」

「面舵60度! ナタル!」

「ゴットフリート、照準!」

「第4、第9区画消失!第3区画大破!」

「火災発生! 機関、及び振動モーター停止!」

「くっそー!」

レセップスに再び衝撃が走る。

「今度はなんだ!?!」

「敵の支援機、ビートルーをやった奴です!」

「このままでは……隊長……!」

ダコスタからの悲鳴のような報告を、バルトフェルド穏やかな心持で聞いた。

自分はやるべき事はやったのだ……

死力を尽くして戦いあった。もはや結果などどうでもいい。

「ダコスタ君」

『は、はい!』

「退艦命令を出せ!」

『隊長……!』

「勝敗は決した。残存兵をまとめてバナディーヤに引き揚げ、ジブラルタルと連絡を取れ!」

『隊長……!』

「君も脱出しろ。アイシャ」

「そんなことするくらいなら、死んだ方がマシね」

「君もバカだな」

「なんとでも」

「では、付き合ってくれ！」

後は、自分が戦士として戦い抜くだけ……バルトフェルドは高揚していた。

「バルトフェルドさん！」

まだ、向かって来るの？ 残った敵艦は後退し始めたと言っているのに。

『まだだぞ！ お嬢ちゃん！』

「もう止めて下さい！ 勝負は付きました！ 降伏を！」

『言ったはずだぞ！ 戦争には明確な終わりのルールなどないと！』

片方が戦いを止めなかつたらどうするのかと！』

「くっ、バルトフェルドさん！ ああ！」

残った虎のウイングを切り裂き、そしてストライクのビームサーベルの光が消えた。

フェイズシフトダウン !

『戦うしかなかろう。互いに敵である限り！ どちらかが滅びるまでな！』

「そんな考えしかできないから、あなたは !」

頭がクリアになる

頭の中が高速で計算し始める。

逃げる？ 無駄無駄無駄！ 戦うしかない！

残った武器は……初めてこのストライクに乗った時の事を思い出す。

エアーストライカーをパージ！ 身軽になる！

そしてアーマーシュナイダー！

私は虎に駆けて行く！ ジャンプ！ こちらを切り裂こうとする虎

の頭を踏みつけ！ 虎の背中にアーマーシュナイダーを、ストライクの体重をかけて突き立てる！

ストライクはジャンプした勢いのまま後方に肩から転がり……

虎は……止まった？ 虎モビルスーツのビームサーベルの光が消え、びくりともしない。

あ！ 虎モビルスーツが、アーマーシュナイダーを突き刺した背中が大きく爆発した。

「はあはあはあ……」

勝った、のね。

後味は、苦かった。

やっぱり、命のやり取りをする相手の事なんか、知ったってやりにくいだけ……

ふと、戦闘中に飛び込んできた通信がふいに蘇る。

（レセツプス艦上にイージスとブリッツ！）

アスラン……やっぱり私、あなたとやりあいたくなんてないよ。

私はデパスを口にほおりこんだ。

第十四話

「ああー！ お月様だあー！！ おおーー！！」
みんなが外で騒いでいる。

戦いが終わった夜。昼間の激戦が嘘のように、砂漠に綺麗な月が浮かんだ。

今夜は祝いの夜だ。そして……鎮魂の夜。

サイーブとマリユール、ナタル、フラガはテントの一つで祝杯をあげる。

「明けの砂漠に！」

「勝ち取った、未来に！」

「じゃあそういうことで！」

イスラム教徒が多いこちらへんも再構築戦争終結辺りからお酒に寛容になったらしい。と言うより、かつて中世にイスラム教が持っていた寛容さを取り戻したと言ったところだろうか。

「ゴホツゴホツゴホツ！」

ナタルがむせている。お酒、弱いのか？ それに比べてこっちは……フラガは横を見る。

対照的に、マリユールさんはゴクゴクと喉を鳴らして一気に杯を干した。

「プハーハー！ おいしいわねえ！」

「はっはっはっは」

「でも、まだ大変だなあ、あんた達も。虎が居なくなっただって、ザフトは居なくなっただけじゃない。奴等は鉱山が欲しいんだろ？ すぐ、次が来るぜ？」

「その時はまた、戦う。戦い続けるさ！ 俺達は。俺達を虐げようとする奴等とな！」

「父さん！ 戦士を送る祈りをするって、長老が」
「ん」

「アジブ・シャムセリム、アフメド・エルフォズル、アル・ガウアリ、シユタイン・オーファ、ファムドム・ボンナ、ステファン・リンドベルガ、ロワジ・アサド……」

長老が、散って行った者達の名前を読み上げる。アフメドの名前も呼ばれた。

「戦い続ける、か」

空に向かって放たれる銃を見ながらフラガさんがつぶやいた。

あの先に、アフメドはいるんだろうか？

「ドバン・タルコフ、ハルファ・ピンラード、ムサル・パラファ……」

みんなの魂が安らぎますように……私は祈る。

戦士を送る祈りは続く……

「だから私を連れて行けと言っている！ あんた達よりは情勢に詳しいし、補給の問題やら何やらあった時には、力になってやれるしな」

「……でも……」

マリユーは困惑していた。レジスタンスの少女が、同行を申し出たのだ。

「無論、アラスカまで行こうってんじゃないし、地球軍に入るつもりもないが、今は必要だろ？」

カガリは、インド洋から太平洋に出てアラスカを目指す、と言うアークエンジェル計画を聞いた時、アークエンジェルに同乗しようとして決めていた。もちろん、オーブの近くに着けば下ろしてもらったつもりだった。

カガリは自分で体験したかったのだ。ルナマリアに志願を決意させた地球軍を、その訳を。

「君が、かい？」

「あいや……だからその……いろんな助けがだ！」

「助けって言われても……」

「女神様ね」

フラガは、カガリの事を勝利の女神だ、と言ったサイーブの事を思い出した。どうやらこの子にはなにかあるらしい。

「んー……ともかく、私はアークエンジェルと共に行くぞ！ もう決めたからな！」

そう言つと、カガリはマリユール達の前を去って行った。

「……で、あの子、ほんとは何者なの？」

どうやら護衛として一緒に乗り込むつもりらしいキサカにフラガは尋ねた。

「……」

返って来たのは、沈黙だけだった。

「海だ！ 海に出たぞー！」

「ほんとか！」

「ひさしぶりー！」

みんな、窓に駆け寄る。

『非番の者は、デッキに上がる事を許可します』
艦内放送が流れた。

「ひゃっほー！ 行こうぜ！ みんな」

「あー！ 気持ちいい！」

ミリイが叫ぶ。

いい潮風が吹いてくる。

やっぱり海は懐かしいなあ。

私も思い切り深呼吸する。

「地球の海い！ すんげー久しぶりー！」

トールも叫ぶ。

「あっはっはっ」

「でもやっぱり、なんか変な感じ」

「そっか、カズイは海初めてか」

「うん」

「ヘリオポリス生まれだったもんなあ」

「砂漠にも驚いたけどさあ、何かこっちのが怖いなあ。深いところは

凄く深いんだろ？」

「ああ」

「怪物が居るかもよあ？」

「ええ！？」

脅かすミリイ。ほんとに怯えるカズイ。それを見て、またみんなで笑った。

「しかし呆れたものだな、地球軍も。アラスカまで自力で来いと言っ
ておいて、補給も寄こさないとはな。水や食料ならどうにかなる
だろうが、戦闘は極力避けるのが、賢明だろうな。汎ムスリム会議
も未だ中立だ」

キサカは、ユーラシア大陸沿岸には近寄らず、インド洋の真ん中を
行く案を提案した。

マリューはキサカを少し睨む。

「……ふう。なにしろザフトの支配地域に降下したのが想定外でしたので。このような状況では本部と連絡も取れませんし。連絡が取れればきつと……」

本部と連絡が取れば、必ず支援を送ってくれる。そのような意味合いを含ませて、マリューは言った。

「だが、インド洋のど真ん中を行くと言うのは、こちらにとっても厳しいぞ。何かあった場合には、逃げ込める場所もない」
ナタルが懸念を口にする。

「ザフトは、領土拡大戦をやっているわけではないんだ。海洋の真ん中は、一番手薄だ。あとは運だな」
開き直ったようにキサカが口にする。

「了解しました」

マリューは決断した。

「沿岸には監視の目があるでしょう。アークエンジェルはインド洋のど真ん中をいきます！」

「レ、リーダーに反応！」

「え？」

「また民間機とかじゃないのか？ ……早い！」

「これは！ 攪乱酷く、特定できませんが、これは民間機ではありません！」

「総員、第二戦闘配備！ 機種特定急いで！」

マリューの若干安心していた気分は一発で吹っ飛んだ。

そうだ。ここはアデン湾。ザフトのスエズ基地からも近い。カーペンタリア「スエズ」ジブラルタルを結ぶ交通の要所だ。見張られていてもおかしくない。

「ライブラリー照合……」

「ザフト軍、大気圏内用モビルスーツ、デインと思われませす！」

「ん……総員、第一戦闘配備！ フラガ少佐、ジョン少尉、ホーク少尉は搭乗機へ！」

「艦長！ ストライクは……」

「空も飛べなけりゃ泳げもしないってことくらい知ってるわ。でも、なんとかしなきゃ……砲台代わりにはなるわ！」

「く……」

「デイン接近！ 10時、4時の方向です！」

「ミサイル発射管、7番から10番、ウォンバット装填！ てえ！

イーゲルシュテルン起動！」

「スカイグラスパー1号、発進位置へ。スカイグラスパー、フラガ機。進路クリアー。発進どうぞ！」

スカイグラスパーが発進して行く。

デインは三次元機動能力や旋回性は高いけど、フラガさんやジョンさんはスカイグラスパーの高速を生かして牽制している。よかった。これなら私が出る幕もなさそう……！ 艦が、離水している！？

「あ？ソナーに感あり。4、いや2」

「なに？」

「このスピード……推進音……モビルスーツです！」

「なんだと！？ 水中用モビルスーツ……」

「ソナーに突発音！ 今度は魚雷です！」

「回避！」

「間に合いません！」

「くっ！ 推力最大！ 離水！」

「くっ……」

「水中用モビルスーツだ、お嬢ちゃん！ 撃てるか！」
「やってみます」

ビームライフルを三連射。外れ。逆に、ザフトの水中用モビルスーツ　グリーンはこちらに向けてミサイルのような物を飛ばしてくる。このままじゃあ、一方的にやられるだけ！

「駄目……ここからじゃあ。マードックさん！」
「なんだあ！」

「第8艦隊からの補給にバズーカがありましたよね？」

「あー？ あつたがどうした？」

「用意して下さい。海に降ります！」

「降りる！？ 降りるたって！ ストライクはな……！」

「分かってます！ でも、なんとかしなきゃ！」

また！ ミサイルがグリーンから撃たれる。大した威力じゃない物の、癩に障る。

バズーカを装備して出ると、グリーンは海上に頭を出してフォノンメーザー砲を撃とうとしている。

させない！

（落ちるなよ、落ちても助けてやれない）

（意地悪ね）

頭の中で、声がある。まただ。

「でも！ そんな事言っつられないのよ！」

今は頭の声を見視！

スラスターを吹かしてグリーンの上に移動すると、バズーカを撃つ！

大きな水しぶきが上がる。やったの？

まだ水しぶきが収まらないまま、ストライクは海に沈んだ。

いた！ さすがにやられてないか。

グリーンは魚雷を放ってくる。

そんな物にやられない！

こちらもバズーカを放つ。

！ 体当たりで来た！

バズーカを離しそうになって慌ててしっかり握る。

今度は後ろから！？

とつさに後ろから体当たりしてきたグリーンのふちに手をかけ、つかまると思い切つてバズーカを捨て、アーマーシュナイダーを取り出す！ グリーンの体表面を突き刺し切り裂く！

動かなくなつたグリーンから手を離すとグリーンはしばらく進み、爆発した。

もう一機は？

前方から高速魚雷を放つて来る。当たつてしまう！ ストライクの周囲で連続して爆発する！

あ、アーマーシュナイダーを落としてしまった！

チャンスと見たのか、グリーンは体当たりをしてくる。

「なめんじゃないわよ！ 格闘戦も出来ないモビルスーツが！」

私は、もう一つのアーマーシュナイダーを取り出し、グリーンの頭に突き立て！ グズグズと切り裂いてゆく！

身を横に捻つて離れると、そいつも爆発した。

海から上がると、デインは、一機を失い撤退したとの事だった。

そう言えば、なんで私デインとかグリーンとかザフトのモビルスーツの事わかつちやうんだらう。

守護霊様が教えてくれるのかな。

私はもう、考えても無駄な事は悩まないようにしていた。

「潜水母艦……と言うこと?」

「うん……いくらなんでも、カーペンタリアから直接は無理だ。こつちだつて動いてんだしさ。ギリギリ来て戦えたつて、帰れないからなあ」

「デインも、スエズからでも無理ですわよね」

「洋上艦や航空機なら、いくらなんでも見逃さないだろうけど、水中はこつちも慣れてないからねえ」

「そうなのだ。マリューは思う。アークエンジェルは元々宇宙用で、大気圏内航行能力はあるものの、それは付け足してみたいな物だ。

それほど高空は飛べない、最も強力な兵器ローエン格林は地上の汚染に配慮して使えない。艦体下面の武装の貧弱さ。ソナーすらも最初は付いていなかったのだ。バナディーヤでザフトの物を非正規に補給できなければどうなっていたか。マリューは頭が痛かった。

「今度来たら、そつちも叩かないと。下手すりやずつと追い回されるぜ」

「ですわねえ……しかし……」

「ガンバガンバ!」

「うわつと」

また悩みのスパイラルに落ち込もうとした時、いきなりフラガに背中を叩かれた!

「どうにかなるよー。なるべく浅い海の上行くようにしてさあ。これまでだつて、どうにかなってきたんだから」

「まーた根拠なくそんなこと!」

「それが励ましてもんでしょ」

「あつ……」

「あはははは」

「もう……うふ……」

ありがとう。

マリューは心の中でフラガに礼を言う。

貴方のおかげで悩みも軽くなるわ。

「やっぱり駄目かなあ」

「だって、目的地アラスカだぜ？ オーブへ寄るなんて、遠回りになるだけじゃないか」

「大体寄ってどうすんの？ 私達今は軍人よ？ 作戦行動中は除隊できないって言われたじゃない」

「でもこんな予定じゃなかったじゃないか！ アラスカへ降りるだけだって……だったらって僕もさあ！」

「戦争には相手があるんだ。しょうがないだろ！」

「サイ……」

「カズイ、ルナの前で今みたいな事言うなよ？ 一時はコクピットで寝泊りするぐらいに気にしてんだ。俺達を巻き込んだってさあ！」

カガリは立ち上がって食堂を出た。

「カガリ！」

キサカが慌てて追いかけて来る。

艦長の所にも行ってオーブに寄れと言うんでも思ってたか？

カガリは苦笑した。

「分かっている。何も言うな。私は何も言っていないぞ」

「なら、いいですが」

「そりゃ、何かあれば、とってはいるが」

「カガリ！」

「しょうがないだろ？ いきさつも分かっているが、この船とあいつは沈めちゃいけないって、どうしてもそんな気がするんだから

……」

「んー……」

「きつとハウメアのお導きなんだろ？ うん。あ、や！ ルナ」

「あ、カガリ。食事済んだの？」

「うん、ルナはこれからか？」

「うん。士官になったんだからって、暇な時間あると艦長さん達に色々教わってるのよ」

「そうか、大変だな」

「結構面白いわよ」

「そうか？ じゃあ地球軍を除隊したらオーブ軍に來い。優遇するぞ」

「あはは。じゃね！」

「アスラン！ クルーゼ隊は第二ブリーフィングルームに集合ですって」

「ああ」

アスランとニコルが部屋に入ると、イザークが大声を上げていた。

「お願いします隊長！ あいつを追わせて下さい！」

「イザーク、感情的になりすぎだぞ」

「ですが……」

「失礼します！」

「あ、ふん！」

「よう、お久しぶり」

「足付きがデータを持ってアラスカに入るのは、なんとしても阻止せねばならん。だがそれは既にカーペンタリアの任務となっている」

「我々の仕事です隊長！ あいつは最期まで我々の手で！」

「私も同じ気持ちです隊長！」

「ディアツカ……」

ニコルが呟く。

「ふん！ 俺もね、散々屈辱を味合わされたんだよ」

そうだな。イザークとディアツカは二度もあいつにやられている。

いや、やられているのは俺も同じか。

アスランは嘆く。

ルナ、ルナ、何でお前はそこまで、ザフトのエースに目を付けられるまでに強くなっちゃったんだ。

「無論私とて、想いは同じだ。スピットブレイクの準備もあるため、私は動けんが……。そうまで言うなら君達だけでやってみるかね？」

「はい！」

「ではイザーク、ディアツカ、ニコル、アスランで隊を結成し、指揮は……。そうだな……。アスラン、君に任せよう」

「え！？」

「うっ！」

「カーペンタリアで母艦を受領できるよう手配せよ。直ちに移動準備にかかれ！」

「うっ……うっ……」

すごい目付きでイザークがこちらを睨んでいる。

そんなに俺の下に入るのが嫌か？

アスランは少し傷ついた。

「隊長……私が？」

「色々と因縁のある船だ。難しいとは思うが、君に期待する。アスラン」

「ザラ隊ね……」

「ふん！ お手並み拝見と行こうじゃない」

(ストライク……討たねば次に討たれるのは君かもしれないぞ)

ルナ……俺は今度会ったら討つとまで言ったのに、あいつは、それでも俺と戦いたくないと言った……

アスランの顔が一瞬苦渋に満ちた。

第十五話

「ソナーに感。7時の方向。モビルスーツです」

「間違いないか？」

「数は？」

「音紋照合、グリーン2、それと、不明1ですが、間違いありません！」

「このインド洋上でしつこい！ 総員、第一戦闘配備！」

『総員、第一戦闘配備！ 繰り返す！ 総員、第一戦闘配備！』

「魚雷接近！弾数8！」

「離水！ 上昇！」

「くっ……くっ！」

「底部イーゲルシュテルン、迎撃開始！ バリアント、照準、てえ！」

また離水した！ この前の、水中用モビルスーツ？

私は格納庫に走った。バズーカが役に立たなかった事で、私も考えた事があった。

「ソードストライカーで？」

「はい！ ビームを切れれば、実剣として使えますから！」

「分かった！」

どのくらい役に立つかはわからない。でも、アーマーシュナイダーと合わせれば3つの武器になる。それにロケットアンカーも！

「少佐、頼みます！」

「オーケー。CIC、敵母艦の予測位置は？」

「痕跡から割り出した、予測データを送ります！」

「了解！ じゃ、ジヨン少尉、さく行って奴らの母艦、やっつけようぜ！」

「はっ！」

「スカイグラスパー1号、フラガ機、発進位置へ！」

「出るぞ！」

「ジヨン機発進、どうぞ！」

「出ます！」

「ストライク、どうぞ！」

「ルナマリア・ホーク、出るわよ！」

スラスターを吹かして飛び立つ！ 海上に顔を出したグリーン目掛けて私は海に飛び込んだ！

「どうにか足を止めないと……あ！ うっ！」

対艦刀を構えたものの、また、魚雷攻撃に押されてる！

あ、あれはゾノ！ 格闘戦も可能な水陸両用モビルスーツ！

ロケットアンカー射出！ ……簡単に弾かれる。

「うっ」

なんてパワーなの！？

突っ込んできたゾノに、完全に押されてる。

「回避しつつロール20！」

「グリーンを取り付かせるな！バリアント、てえ！」

「うわあ！」

衝撃で艦が揺れる。

取り付かれたか……ナタルは焦る。グリーンは何の邪魔も無くこちらにミサイルを撃ち込んできている。

「ストライクは？ 何をしている！」

「ええい！ 上部の砲の射線が取れば！」

「うう……ノイマン少尉！ 一度でいい、アークエンジェルをバレルロールさせて！」

「ええ！？」

「艦長！」

「ゴットフリートの射線を取る。一度で当ててよ、ナタル」

「あ！……分かりました」

「ノイマン少尉！ やれるわね？」

「はい！」

『本艦はこれより、360度バレルロールを行う。総員、衝撃に備えよ。繰り返し！本艦はこれより、バレルロールを行う！』

「グリーン2機、来ます！」

「ゴットフリート照準、いいわね！」

「行きますよ？ くっ！」

……ゴットフリートは見事、グリーンを撃ち抜いた！

「ええーい！」

海上で起こった爆発に乗じて私はゾノに対艦刀を突き刺した。でも！？ ゾノは止まらない。

クローに抱え込まれ、押し付けられる！

フォノンメーカーの砲口が光る。

「こんな至近距離で！？ やられてたまるもんですか！」

両手でアーマーシュナイダーを取り出し！ 突き刺す！ 突き刺す！

クローの力が弱まった！

「あっちへ行っちゃえ！」

ゾノを蹴飛ばす。一瞬の後、爆発。

「はあはあはあ……。この所ずっとあなたに助けられてばかりね」
アーマーシュナイダーを見つめる。

ありがとう。

幸い敵の襲撃がない日が続く。

私は毎日マリューさん、フラガさん、ナタルさんから交代で講義を受けた。

「もうお嬢ちゃんにはわかっているとと思うが、色々教える事はあるが、とりあえず生き残る事を考える。……生き残ってさえいれば、やり直すのも、続きを楽しむのも、どちらも出来るからなあ」

「はい」

「俺が『エンデュミオンの鷹』なんて異名をもらっちゃったのは、地球軍上層部がエンデュミオン・クレーターでの惨敗を糊塗するためだが、それにしたって生き残ればこそだからなあ。俺はあぶないと思っただらガンバレルのスラスターを一まとめにして、すたこらさつさと逃げたもんだ」

「ふふ。コーヒー、いかがですか」

「……お、インスタントじゃない本格的なのはうまいねえ。バナデイーヤで仕入れたのか？」

「虎に、お土産にもらったんですよ」

「アンドリユー・バルトフェルドか」

「ちゃんと飲んであげないと成仏しなさそうで……ふふ。お蔭で最近コーヒーの味がわかるようになってきました」

「私は、お前に戦争のやり方を教える。だがそれは、殺し方を教えているのではない。お前が生き残るために教えるのだ。一人の学兵への教育と、それに与える装備の値段を考えれば、お前が一生働いても払えない額がかかる。で、あれば、まずは無駄遣いしないこと

が、戦争に勝つ基本だ。死なないで粘る事が、国とお前自身とが得をする訳だ。自己犠牲の精神は大切だが、むやみに使つな。あつさり死なれたら後が困る。国が求めるのはしぶとい兵だ……」

「ふう、ここまでにしましょうか。」

マリユーさんが教本を閉じる。

「コーヒーどうぞ」

「ありがとう。頂くわ」

マリユーさんは微笑んだ。

「それにしても、あなたは本当に飲み込みが早いわね。他の皆も驚いていたわ」

「ありがとうございます」

「コーディネイター、だからかしらねえ。あらごめんなさい。他意はないのよ?」

「ええ。わかってます。不思議ですね。自分でも昔からこんな事……」

…軍人やってたような気がするんです」

「フラガ少佐が言っていた、あなたの夢って物?」

「ええ、夢でも、学校で軍事教練したり、授業受けたりしてる事があります」

「そう……でも、それが今のあなたを助けているとしたら、むやみに悩まず、素直にありがたがった方がいいわ」

「はい。最近が開き直って、そうしてます」

「うん。いいわね。じゃ、そろそろ再開しましょうか……」

「や! ルナ」

「あ、カガリ」

私が休憩室で休んでいるとカガリがやって来た。

「なんにもなくて暇じゃない？」

「そんな事ないぞ。色々艦をうるつくだけでも面白い」

「そう。このままずっと何もなければいいのにね」

「だが、赤道連合の範囲に近づけば、島もいっぱいあるし、カーペ
ンタリアにも近づく。ザフトは必ず仕掛けて来るぞ」

「そうよねえ。……ねえ、アラスカに行く途中、オーブには寄れな
いのかなあ」

「お前もそう思うか。みんな お前の友達もそう言った」

「やっぱり、みんなもそう思うよね」

両親は、ハルバートン提督から無事だつて知らされたけど、もう長
い間会つてない気がする。さみしい。

「オーブは一応中立だからなあ。でも、いざと言う時は私の名前を
出してでも入ろうと思つてるけどな」

「それ、まずいんじゃない？ 何かあつたら見捨てるって言われて
るんでしょう？」

「うーん、そうか。じゃ、どうすればいい」

「ヘリオポリスの避難民を乗せています とか？」

「それがいいかもな。オーブは領海に不審船が近づくとマスコミも
飛んで来るんだ。無視できないだろう」

うんうんとカガリは納得したようだった。

「うまく行くかな？ まあ行かない様ならカガリの名前出せばいい
か」

「話は変わるんだけどさ」

カガリが、上目遣いで話してきた。

「なあに？」

「私がオーブに戻つても、友達でいてくれるよな？ 私は、同年代
の友人なんていなかったから……」

不安げな顔でカガリは言う。

「馬鹿ね！ 前にカガリが言ったでしょう？ ルナはルナだつて。」

カガリはカガリよ」

「よかった」

ほっとしたようにカガリが笑う。あ、なんとなく涙ぐんでる。うう、可愛い！

ハグしちゃう！

「ル、ルナ！？」

「大丈夫、大丈夫よ。大丈夫だから。大丈夫。大丈夫」

「……落ち着くな」

「でしょ。不安な時、お母さんによくやってもらったんだ」

「よし、私もやってやる」

「え？」

カガリの手が私の背中に回される。

「よしよし。大丈夫だ。大丈夫だから。大丈夫だ。大丈夫……」

「ふふ。安心する」

いたわる気持ち嬉しくて、キスを交わすより身体は暖かい。このまま少しカガリに甘えていよう……

マラッカ海峡　スエズ運河・パナマ運河と並び世界のシーレーンの中でも重要な場所である。

「とうとうここまで来れたわね。結局インド洋では一度襲撃を受けただけ……インド洋のど真ん中を行くと言う判断が当たってよかったわ」

マリユーは感慨深そうに溜息をつく。

「ほんとだねえ。お蔭でしばらくのんびりできたよ」

「ああ、そうだな」

キサカは感情の揺らぎを見せずに答える。

本当にこの男は何者なのだろう。マリユーは改めて思う。ただのレ

ジスタンスではないわね。訓練された軍人？

「でも、結局、赤道連合への補給要請は断られてしまったわね」

「ええ……。ですが、この海峡の通行許可を得られただけでも幸運と思わねばなりません」

ナタルが前向きに言う。

「今後の進路はどうすればいいかしら？」

「ボルネオ島、ミンダナオ島の間を抜け、ニューギニア島の北部を通りウエーク島に出る航路が良いと思います。カオシユンとカーペンタリアの勢力圏内ギリギリを通過する事になりますが、現状ではこれ以上のルートは無いかと思われます」

「そうね、その航路で良いわ。後は補給の問題ね……。オーブからの返答は？」

「ダメです、未だ返答ありません」

「どちらにしる、もう後戻りは出来ません。オーブと交渉を行いつつ前進しましょう」

「ああ、ザフトにやられていざと言う時はかまわずオーブ領海内へ突進しても構わんだらう。例え艦が沈められたとしても命だけは助かる」

キサカが断言する。

オーブの関係者かしら？ そうなら、いざと言う時は彼に表に出てもらうべきかしら。ここらへんで補給が受けられなければ、後2・3回襲撃を受ければ艦があぶない……。マリユはオーブ政府との交渉が気がかりだった。

海峡の中程に差し掛かった時だった。

「レーダーに反応！ 1時の方向に艦影です！」

「ライブラリ照合確認！ ボズゴロフ級潜水母艦です！」

「くっ……伏せられていたか!？」

「確かに『中立』のようね、赤道連合も……。総員、第一戦闘配置!」

『総員、第一戦闘配置! 総員、第一戦闘配置!』

「フラガ少佐!」

「なんだあ?」

「幸い、今回は潜水母艦が最初から姿を現してくれています。この前と同じように、最優先で撃沈を!」

「おーけー!」

フラガは駆け出して行った。

「レーダーに反応! 前方にデインと思われる反応が3!」

「ソナーに感! これは……音紋照合、グリーン8!」

「これはこれは。盛大に歓迎してくれるわね」

「艦長! フラガ少佐かジョン少尉を本艦の護衛に当たらせただ方がよいのでは?」

「だめよ! まず潜水母艦を叩かなければ、この海峡を突破する事はできないわ! 二人が潜水母艦を撃沈して戻るまで、なんとしても耐えるのよ!」

「了解しました!」

離水する感覚……また敵に水中用モビルスーツが?

水中戦ではいつもぎりぎりの戦いだった。私は不安だった。でも、今デパスを飲む訳に行かない。鈍くなるから。

胃が痛くなったような気がする……

不安を抱えながら私は走った。

「エールを装備して! エールを!」

コクピットに乗り込むと、私は叫んだ。

「エールでいいのかい? お嬢ちゃん」

「エールだって、滑空くらいは出来ます!」

「わかった」

正直、海には入りたくなかったのだ。空から狙撃できればその方が

……

「APU起動。カタパルト、接続。ストライカーパックはエールを
装備します。エールストライカー、スタンバイ。システム、オール
グリーン。ストライク、どうぞ！」

「ルナマリア・ホーク、出ます！」

いるいる！ ひよこひよこ海面にグリーンが顔を出している。

ミサイルを絶え間なくアークエンジェルに撃ち込んでいる。

スラスターを吹かして横から狙う！ 一機撃破！

グーンの内3機がこちらへ向かってミサイルを放って来る！ 何発

か当たってしまった。

やばい！ スラスターを吹かしてアークエンジェルに着艦する。も
う一度、ジャンプ！

潜水母艦に向かうフラガとジョンは、ディン3機に行く手を阻まれ
た。

「くっそー！ このままじゃアークエンジェルがやられちゃう！」

「どうします!？」

「まず一機、なんとか片付けよう！ 一旦離脱して襲え！ 後は俺

がやる！」

「はい！」

圧倒的に速度に勝るスカイグラスパーがディンを振り切るのは容易
だ。そしてターンしてジョンはディンに突っ込む！

旋回性に優れたディンがジョンの攻撃を避けるのは簡単だった。だ
が、避けた所にフラガ機からのアグニが撃たれる！ 機体の半分を
失い、ディンは海面へと落ちて行った。

そのままの速度でフラガはディンを振り切り潜水母艦に突っ込む。アグニと同時に対艦ミサイルが放たれる！

「ひゃっほー！」

アグニと対艦ミサイルで開いた破孔から怒涛のように海水が流れ込み、潜水母艦は海面下に没していった。

「ストライクはだめか」

次々と撃ち込まれるミサイルに傷ついてゆく船体。ナタルの頬を冷や汗が流れる。

「グリーン一機、撃破しましたが、以後は……」

「グーンの半分の攻撃を引き付けてくれているのですもの、意味はあるわ」

また着弾だ。艦が揺れる。グリーンが7機もいてはこの前のように360度バレルロールを行う訳にも行かない。

マリューは焦れた。……白波が立っている。あれは岩礁？ 浅瀬に繋がっている。

数多くの岩礁と浅瀬 マラツカ海峡を難所としている原因

「そうだわ！ 浅瀬に、浅瀬に上がって！」

「浅瀬に、ですか？」

「グリーンは陸上でも行動できますよ？」

「いいから早く！」

アークエンジンは一面に白波が立っている岩礁地帯へと突っ込んだ。

グリーンも浅瀬に上がって来る。ミサイルの撃ち込みは、止まない。

「チャーンズ！」

私はグリーンが浅瀬に上がって行くのを見た。あそこなら！

エールストライカーを吹かし、グリーンに突っ込む！ ビームサーベルを抜き放つ！

「まず一機！」

少しだけ海面に突き出た岩礁を蹴り次へ向かう。

「2機！」

残ったグリーンは慌てて海中へ戻ろうとする。

「させないわ！」

ビームライフルを3射。立て続けにグリーンが爆発する。

「海から出れば、あんた達なんてこんな物よ！」

残ったグリーンは海中に2機。どうしよう。ソードストライカーに替えて来ようか？

その時キーンと言う飛行音と共にスカイグラスパーがやって来た！

「やった！」

グリーンが海面に顔を出した時、スカイグラスパーのキャノン砲とアグニが突き刺さる。

海面には、グリーの破壊された跡が浮かんで来た……

第十六話

マラッカ海峡を越えてからは、みんなぴりぴりしていた。
なにしろカーペンタリアが近いのだ。

オーブ政府は相変わらずアークエンジェルの入港を拒否しているらしい。でもいい。身一つでもオーブに辿り着ければ……

『総員、第一戦闘配置！ 総員、第一戦闘配置！』
捕まったか！ こんなオーブを目の前にして！

「ソナーは？ ソナーに感はないの？」

「今回は、ないようです。助かった！」

マラッカ海峡でグリーンに散々な目に遭わされた為つい口に出てしまったようだ。

「気を引き締めて！」

今のアークエンジェルは、マラッカ海峡でやられた被害のため、最大速度が出せない。

「艦長！」

「なに！？」

「この反応は、イージス、ブリッツ、デュエル、バスターです！」
「なんですって！？」

「APU起動。カタパルト、接続。ストライカーパックはエールを装備します。エールストライカー、スタンバイ。システム、オールグリーン。ストライク、どうぞ！」

私が発進すると、フラガさんとジョンさんが戦闘に入っていた。奪われたXナンバーはグウルに乗っている。

バスターはまた姿が変わっている。元の、砲を両脇に抱え込む射撃

方式に戻っている。撃っているのはどうやら大型レールガンらしい。デュエルはこの前と同じね。

「みんな！ グウルを狙って！ 本体を实体弾で狙っても相手はP S装甲よ！」

『おう！』

『了解！』

バスター……… 实体弾だけなら！

私はエールストライカーを吹かすとハイジャンプした。

「うわあ！」

ディアツカは悲鳴を上げた。

「なんでお前は、いつも出て来るなり俺に突っ込んで来るんだよ！」

P S装甲に实体弾を撃つ無駄さは彼が一番知っている。

つい、レールガンを撃つ手が緩み、逃げる体勢になる。

だが、彼は間違っていた。实体弾であっても衝撃は与えられる。撃

ち続けてストライクの体勢を崩すべきだったのだ。

ストライクには高空飛行能力はないのだから。

「またかよー！」

片脚を斬られながら、バスターは海面へと落ちて行った。

「やった！」

見ていたアークエンジェルクルーは歓声を上げる。

「回避！」

「うわあ！」

「バリアント、ウォンバット、てえ！ 気を抜くな！ お前達！」

「何をやっているディアツカ！ アスラン！ さっさと船の足を止

める！」

「分かっている！」

「くっ！」

「イザーク！ 一人で出過ぎるな！」

「五月蠅い！」

「エンジンを狙うんだ。ニコル！ 左から回り込め！」

「はい！」

こいつさえ沈めれば！ アスランは思った。そうすれば、ルナだつて戦うのを止める！

「はっはっ！」

「イーゲルシュテルン、4番5番、被弾！」

「損害率25%を超えました」

「イージス、ブリッツ、接近！」

「ウォンバット照準！ ゲウルを狙うんだ！」

「ええ？ ゲウル……ですか？」

「モビルスーツが乗って飛んでいるあれだよ！」

「あ！ あはい！」

「てえ！」

「うっうっ……くっそー！ こんなところまで追いかけてくるなんて、あいつらー！」

「うっうー……」

「下がれアスラン！ こいつは俺が！」

「イザーク！ 迂闊に！」

！ ほら見る！

アスランは心の中で叫ぶ。イザークは、ゲウルから落とされる。ルナは強い！ 強いんだぞ！

アークエンジェルに取り付こうとしたデュエルは、すぐに飛んで来たストライクによって片腕を切り落とされ、海の中へ蹴り落とされていた。

「ニコル！ ストライクの飛行能力はゲウル程高くない！ ストライクの届かない所から攻撃するんだ！」

「わかりました！ アスラン！」

『皆様、御覧いただいている映像は、今、まさにこの瞬間、我が国の領海から、わずか20kmのの地点で行われている戦闘の様です。政府は、不測の事態に備え、既に軍の出勤を命じ、緊急首長会議を招集しました。また、カーペンタリアのザフト軍本部、及びパナマの地球軍本部へ強く抗議し、早急な事態の收拾、両軍の近海からの退去を求めています……』

「ウズミ様」

「許可なく、領海に近づく武装艦に対する我が軍の措置に、例外はありませんまい。ホムラ代表」

「はあ……しかし……」

どうする気だ兄者。ホムラは思った。サイーブ教授が伝えて来た話だと、あの艦には姪が……カガリが乗っているのだぞ。

「テレビ中継はあまりありがたくないと思いますかな」

そんなホムラの気遣いを無視するようにウズミが言った。

「領海線上に、オーブ艦隊！」

「なに！？」

「あっ！助けに来てくれたの？」

「トール達の声が弾む。だが、マリユーの言葉がすぐにそれを打ち消した。」

「領海に寄り過ぎてるわ！ 取り舵15！」

「え！？」

「しかし！」

「これ以上寄ったら、撃たれるわよ」

「そんな……」

「ヘリオプリス組に失望が走る。」

「オーブは友軍ではないのよ？ 平時ならまだしも、この状況では

……」

「構うことはない！」

「え？」

「カガリが、艦橋に飛び込んで来た。」

「このまま領海へ突っ込め！ オーブには私が話す！ 早く！」

「カガリさん……」

「展開中のオーブ艦隊より、入電！」

『接近中の地球軍艦艇、及び、ザフト軍に通告する。貴官等はオーブ連合首長国の領域に接近中である。速やかに進路を変更されたい。我が国は武装した船舶、及び、航空機、モビルスーツ等の、事前協議なき領域への侵入を一切認めない。速やかに転進せよ！』

「うう……」

『繰り返す。速やかに進路を変更せよ！』

「くっ……」

『この警告は最後通達である。本艦隊は転進が認められない場合、貴官等に対して発砲する権限を有している』

「くっ！」

「攻撃って……俺達も？ そんなあ……」

「何が中立だよ。アークエンジェルはオーブ製だぜ？」

「構わん！ このまま領海へ向かえ！」

再びカガリが叫ぶ。

「あ……」

「マイクを寄越せ！ 全周波数帯で発信しろ！ 取材のヘリにも聞こえるようにな！」

「カガリの言う通りにしてやってくれ」

「キサカさん……わかったわ。全周波数帯で発信！」

「この状況を見ていて！ よくそんなことが言えるな！ アークエンジェルは今からオーブの領海に入る！ だが攻撃はするな！」

『な！？なんだお前は！』

「お前こそなんだ！ お前では判断できんと言うなら行政府へ逃げ！ ウズミ・ナラ・アス八を呼べ！ この艦には、ヘリオポリスの避難民が乗っているんだぞ！ 政府は自国民を見捨てるのか！？」

『そのような言い逃れを！ 仮に真実であったとしても、何の確証も無しにそんな言葉に従えるものではないわ！』

「貴様あ！ うっっ！」

「うっ！ くっっ！」

イージスとブリッツからの攻撃がアークエンジェルを襲う。

「ご心配なく、ってね！ 領海なんて入れさせませんよ！ その前に決める！」

「ニコル！ オーブ艦に当たる！ 回り込むんだ！」

「しかたないですね！」

「うわあ！」

「あっ……うっっ！」

「ああ！」

「あ！」

「1番2番エンジン被弾！ 48から55ブロックまで隔壁閉鎖！」
「推力が落ちます！ 高度、維持できません！」

「これでは、領海に落ちても仕方あるまい」

キサカが落ち着いた声で告げる。

「え？」

「あ！」

「心配は要らん。第二護衛艦軍の砲手は優秀だ。上手くやるさ」

「……分かりました。オーブ領海へ突っ込んで！」

「警告に従わない貴官等に対し、我が国は是より自衛権を行使するものとする」

「くっ……どうします？ アスラン？」

「一旦引こう、ニコル」

「ディアッカとイザークはどうしますか？」

「ボズゴロフに任せる」

ボズゴロフは海面に顔を出して待っていた。

「手荒くやられたようだな」

「ええ、現状では潜水は、不可能です。ですが、間もなく復旧する予定です」

「そうか、デュエルとバスターの救助をよろしく頼む。」

「さて、とんだ茶番だが、致し方ありますまい。公式発表の文章は……」
ウズミは秘書に促した。

「既に草稿の第二案が」

「いいでしょう。そちらはお任せする。あの船と、モルゲンレーテには私が」

「はー！」

「どうにもやっかないものだ、あの船は」
他の首長から声上がる。

「今更言っても、仕方ありますまい」

オーブの亀裂を徒にあきらかにする言葉に、ウズミは少しいらついた。

『指示に従い、船をドックに入れよ』

先導艦に従い、アークエンジェルはゆるゆると進んでいった。

「オノゴロは、軍とモルゲンレーテの島だ。衛星からでも、ここを伺うことは出来ない」

「そろそろ貴方も、正体を明かしていただけなのかしら？」

「オーブ陸軍、第21特殊空挺部隊、レドニル・キサカー佐だ。これでもアス八家の、カガリ・ユラ・アス八嬢の護衛でね」

「……そう。彼女が。我々はこの措置を、どう受け取ったらよろしいのでしょうか？」

「それは、これから会われる人物に、直接聞かれる方がよろしかろう。オーブの獅子、ウズミ・ナラ・アス八様にな」

「こんなふうにはオーブに来るなんてなあ」

「ね、さ。こついう場合どうなんの？ やっぱ降りたり、って出来ないのかな？」

カズイは弱気な表情を浮かべて言った。

「降りるって……」

「いや、作戦行動中は除隊できないってのは知ってるよ。けどさあ、休暇とか……」

「可能性ゼロ。とは言わないがね。どのみち、船を修理する時間も必要だし」

ノイマンが、カズイの言葉を否定した。

「ですよねえ」

「でもまあ、ここは難しい国でねえ。こうして入国させてくれただけでも、けっこう驚きものだからな。オーブ側次第ってところさ。

それは、艦長達が戻らないと、分からんよ」

「父さんや母さん……居るんだもんね」

「会いたいかな？」

「あー……」

「ん……」

「会えるといいな」

「御承知の通り、我がオーブは中立だ」

ウズミはマリユール達に言った。

「はい」

「公式には貴艦は我が軍に追われ、領海から離脱したということになっただけ」

「はい」

「助けて下さったのは、まさか、お嬢様が乗っていたから、ではないですよ」

「国の命運と甘ったれたバカ娘一人の命、秤に掛けるとお思いかな？」

「失礼、致しました」

「そうであつたならいつそ、分かりやすくして良いがな。ヘリオポリスの件、巻き込まれ、志願兵となつたというこの国の子供達。戦場での聞き及ぶ、Xナンバーの活躍。人命のみ救い、あの船とモビルスーツは、このまま沈めてしまつた方が良いのではないかと、大分迷つた。今でもこれで良かったものなのか分からん」

「申し訳ありません。ヘリオポリスや子供達のこと、私などが申し上げる言葉ではありませんが、一個人としては、本当に申し訳なく思つております」

「よい。あれはこちらにも非のあること。国の内部の問題でもあるのでな。我等が中立を保つのは、ナチュラル、コーディネイター、どちらも敵としたくないからだ。ま、力無くば、その意志を押し通すことも出来ず、だからといって力を持てば、それもまた狙われる。軍人である君等には、要らぬ話だろうがな」

「ウズミ様のお言葉も分かります。ですが、我々は……」

「ともあれ、こちらも貴艦を沈めなかつた最大の訳のお話せねばならん。ストライクの、これまでの戦闘データと、パイロットであるコーディネイター、ルナマリア・ホークの、モルゲンレーテへの技術協力を我が国は希望している」

「ああ……」

「叶えば、こちらもかなりの便宜を、貴艦に図れることとなるう」

「ウズミ様！それは……」

「……」

「……電話を、お借りできますか？」

「電話だと？」

「ええ。オーブなら、海中ケーブルでアメリカ大陸まで繋がっているはず。我々からはなんとも」

「表立つて交渉するなら、私が最初から地球軍本部と交渉しておるわ！」

「愚直と言われましようとも、本部に問い合わせできる状況なので、すからそうしたい、と私は考えます」

「確かに愚直だな」
ウズミは苦笑するしかなかった。
「……わかった。連絡するがいい。向こうも安心するだろう」
「申し訳ありません。ありがとうございます」

「艦長、アラスカからはなんと？」

マリユーがJOSH-Aとの交信を終えて帰ってくると、待ちかねたようにナタルが尋ねた。

「それが……最低限の修理で、高度と速度さえ出せるようになれば出港せよと……。ストライクの戦闘データはオーブに渡してやれとの事です。ルナマリア・ホークに関しても時間が許す限り、協力させてもよいと」

「最低限の修理で出港とは……俺達に沈めって事？」

「フラガ少佐！」

「迎えば、護衛は来るそうです。今日中に編成するとの事です」

「そうか……やれやれだな」

「これで一安心できますね」

ナタルがほっと溜息をつく。

「後は……会わせてあげたいですわね。ルナマリアさん達を、ご両親に」

「そうですね」

ナタルが気遣わしげな表情を見せた。

第十七話

『第6作業班は、13番デッキより作業を開始して下さい』

『機関区、及び外装修理班は、第7ブースで待機』

「驚きました。もう作業に掛かってくれるとは」

「ああ。それは本当にありがたいと思うが」

「おはよう」

「おはようございます、艦長」

「御苦労様です」

「既にモルゲンレーテからの技師達が到着し、修理作業に掛かっております」

「そう。ありがたい事だわ。ヘリオポリス組は？」

「は、すでに集めてあります。」

「家族に？」

マリューさんが、家族に会える事を伝えると、ヘリオポリス組の皆の顔が紅潮した。

「ええ。状況が状況だから、家にも帰してあげられないし、短い時間だけど、明日午後、軍本部での面会が許可されました」
皆大騒ぎになった。

「あー」

「わーいやったー!」

サイ やったよかった!」

「トール、どうしよう!」

「どうしようってミリィ、今から泣くなよ。」

「だって嬉しくって…会えるのよ?」

「元気かなあ?」

「細かい予定は明日通達…ちょっと、聞きなさい!」

私は……ちょっと複雑だった。なんで私をコーディネイターにしたのか。前々から思っていた疑問。それが心に淀んでいた。

「ホークご夫妻、ですな？」

「ウズミ様……一度とお目に掛からないという約束でしたのに……」
「運命の悪戯か、子供等が出会ってしまったのです。致し方ありません
すまい」

「……う……う……。どんな事態になろうと、絶対に私達があの子に真実を話すことはありません」

「姉妹の事も。ですな？」

「可哀相な気もしますが、その方がルナの為です。全ては最初のお約束通りに……ウズミ様にこうしてお目に掛かるのも、これが本当に最後でしょう」

「わかりました。しかし、知らぬというのも怖ろしい気がします。現に、子供達は知らぬまま、出会ってしまった」

「因縁めいて考えるのは止めましょう。私達が動揺すれば、子供達にも伝わります」

「わかりました。さあ、会って来なさい。ルナマリアさんは、だいぶ頑張ってきたようだ」

「はい……」

「「あー！」」

「「ああ！」」

「カズイ！」

「トール！」

「母さん！父さん！」

「母さん！」

「カズイ！」

「トール！ うっうっうっ……」

「父さん！」

「ミリイ！」

「よく無事で……」

「うん……」

「サイ！」

「よく頑張ったな」

「父さん、母さん！」

皆、家族と会えて嬉しそうだ。でも、私の両親は？……どこにもいない。

私が暗い想像をしていると、部屋の扉が開いた。

「ルナ！」

「パパ！ ママ！」

「遅くなってごめんなさいね、ウズミ様とちょっとお話をしていたのよ」

「よく、頑張っているようだな」

ママが私を抱きしめる……安心する。

最近思っていた、どうして私をコーディネイターにしたのかなんて、どうでもいいや。今は、この暖かさを感じていたい。

「まあ、ルナ！」

「え？」

「この傷は？」

あ……！

「一回だけ、切っちゃった。でも、もう切らないよ。自信、ある」

「そう……離れていても、ママはいつもあなたのそばにいるからね」

「うん……ありがとう」

「はあ、もう時間なんて……」

「仕方ないよ……」

「カズイ、船はいつまでここに居るんだ？」

「数日らしいよ」

「ミリイ、どうしてお前が行かなきゃならないの？」

「しょうがないわよ。志願しちゃったんだもん……」

「サイ、お前が決めたことならば仕方ないが……」

「大丈夫だよ。父さん」

親子の対面は、長いようで短かった。

もつと話したい事いっぱいあったのに。でも、いい。私は絶対帰ってくるんだ。両親の元へ。

「こつち！ あなたに見て貰いたいの」

その後、私はカガリと一緒に格納庫のような場所に案内された。

「ああ！」

これは、モビルスーツ！

「これを、オーブはどうするつもりなんですか？」

「これはオーブの守りだ。お前も知っているだろ？ オーブは他国を侵略しない。他国の侵略を許さない。そして、他国の争いに介入しない。その意志を貫く為の力さ」

「でも、カガリ様の言うことは事実よ。だから、私達はあれをもつと強くしたいの。貴方のストライクの様だね」

「え！？」

その日一日、私はオーブのモビルスーツ M1アストレイのサポートOSの作業に没頭した。でも、私の目から見ると、やっぱり基礎OSが不完全だ。ナチュラル用だと言うけどこんなもので本当に戦闘ができるのだろうか？ これなら私が組み上げた奴の方が……

「目下の情勢の最大の不安材料は、パナマだ。ザフトに大規模作戦有りという噂のおかげで、カーペンタリアの動きは、かなり慌ただしい」

キサカが、現状を完結に説明する。

「どの程度まで分かっているのですか？」

「さあな。オーブも難しい立場にある。情報は欲しいが、藪蛇はごめんね。だが、アラスカに向かおうという君等には、かえって好都合だろう」

「万一追撃があつたとしても、北回歸線を超えれば、すぐにアラスカの防空圏ですからね。奴等もそこまでは、深追いしてこないでしょう」

ノイマン少尉が言う。確かにそうだろう。マリューも納得する。そこまで行ってしまうえば、いくらザフトとて簡単に手はだせないはずだ。心配なのは……

「ここまで追ってきた例の部隊の動向は？」

「昨日から、オーブ近海に艦影はない」

「引き揚げた、と？」

「また外交筋では、かなりのやり取りがあつたようだからな。そう思いたいところだが」

「アスハ前代表は当時、この艦とモビルスーツのことはご存知なかつたという噂は、……本当ですか？」

「バジルール中尉……」

なにをわざわざ……とマリューは思う。だが、地球連合とオーブは手を組んでいたのになにをいまさら……と言う思いはアークエンゲルクルーの中にも多いだろう。

「確かに、前代表の知らなかつた事さ。一部の閣僚が大西洋連邦の圧力に屈して、独断で行つたことだ。モルゲンレーテとの癒着も発覚した。オーブの陣営を明らかにするべき、と言う者達の言い分も分かるのだがな、そうして巻き込まれれば、火の粉を被るのは国民だ。ヘリオポリスの様にな」

「あ……」

「それだけはしたくないと、ウズミ様は無茶を承知で今も踏ん張っておられるのさ。君等の目には、甘く見えるかもしれんがな」

「いえ……」

口ではそう言ったが、マリューは懸念を感じていた。旧世紀のスイスのように周囲から中立国と認められているのではなく、ただオーブが中立を宣言しているだけ。そんな物はいざとなったら第二次世界大戦のベルギーのように簡単に破られてしまうのではないのだろうか？ 中立を守ると言うその信念自体が国民に被害を生んでしまっているのではないのだろうか？ マリューは憂慮した。アーケエンジェルへのリオポリス組のためにも。

「修理の状況は？」

「明日中には、と連絡を受けております」

「あと少しだな。頑張れよ」

「キサカ一佐！」

「ん？」

「本当にいろいろと、ありがとうございました」

「いや、こちらも助けもらった。既に家族はないが、私はタツシルの生まれだね」

「あ……」

「一時の勝利に意味はない。とは分かってはいても、見てしまえば見過ごすことも出来なくてな。暴れん坊の家出娘を、ようやく連れ帰ることも出来た。こちらこそ、礼を言うよ」

もうオーブに入ってから3日目。修理の方も大体終わったらしい。明日、出港だそうだ。

カガリがいきなり、アーケエンジェルへやって来た。

「おーい、みんなー」

「あ、カガリ」

「でも、カガリがお姫様だったとはねえ」

「お姫様って言うな！ 今までどおりカガリでいいんだ、カガリで」

「おーけー、カガリ」

「本当はもつと、万全に修理してやりたいんだがな。アラスカ本部の命令なら仕方ない」

「気持ちだけで、充分よ」

あ！ 私は思いついた事があった。

「カガリ、ちよつと待ってて！」

私は、私室から戻って来るとカガリの手に小さなチップを何枚か滑り込ませた。

「これは」

私はカガリの耳元で言った。

「ストライクの基礎OSにサポートOS。それからいざ私がいなくなった時のためにつけて作ってた、ナチュラル用の基礎OSよ。ストライクの物だから、M1アストレイでどこまで使えるかわからないけど、私の判断じゃずつとましょ」

「いいのか？ こんな事して？」

「いいのよ。カガリの手柄にして頂戴」

「お前……」

カガリは涙を拭った。

「わかった！ 必ず役に立てて見せる！ ルナも、無事でいろよ」

「うん！ 私、結構しぶといから」

カガリは艦を降りると名残惜しそうに手を振っていた。

次に会えるのはいつだろう？ 全てが終わってからかな……

「注水始め！」

「注水始めー！」

アークエンジエルのドックに水が注ぎ込まれていく。

「オーブ軍より通達。周辺に艦影なし。発進は定刻通り」

「了解したと伝えて」

「護衛艦が出てくれるんですか？」

「隠れ蓑になってくれようってんだろ？ 艦数が多い方が特定しに

くいし、データなら後でいくらでも誤魔化しが効くからな」

「間もなく領海線です」

「周辺に敵影なし」

「警戒は厳に！ 艦隊離脱後、離水、最大戦速」

「艦隊旗艦より入電。我是ヨリ帰投セリ。貴官ノ健闘ヲ祈ル」

「エスコートを感謝する、と返信を」

オーブ艦隊は帰って行く。

「心細いなあ」

すぐ愚痴、弱気が出ると言ったらカズイだ。やっぱり、この子は戦争には向いてない。アラスカで降りられればいいけど。

かと言って、サイヤトル達が戦争に向いているとも私は言えない。

艦橋にいるから冷静になれている部分も多いのだろう。サイヤトルは、度々、モビルスーツの操縦に興味を示す。私が組み込んだナチュラル用のシミュレーションを面白がってやっている。本当は、みんなアラスカで降りてくれた方が気が楽だ、とも思う。でも、そうになったらそうだったので、寂しがるんだろうな、私は。

翌日深夜、人目のない海岸に半漁人のような格好で4人の人影が海から上がってきた。

「クルーゼ隊、アスラン・ザラだ」

「ようこそ、平和の国へ」

彼らは誰にも知られずに、オーブへ潜入を果たした。

「見事に平穏ですね。街中は」

「ああ。つい先日自国の領海であれだけの騒ぎがあったって言うのに」

「中立国だからですかねえ？」

「平和の国、か」

「おおっと。お嬢ちゃん、大丈夫かい？」

ディアツカが、小さな少女とぶつかっていた。

「ほら、ディアツカ、前を見てないから。大丈夫？　なんて名前かな？」

「エルって言うの」

「エルちゃんか、いい名前だね。ずっとここに住んでいるの？　なにか、最近変わった事なかった？　知らない船が入って来たとか？」

それは、ニコルが小さな子供を通じて情報を得ようと言う行為だったかもしれない。だが、返ってきた返事に彼らは言葉を失った。

「ううん、エルはヘリオポリスにいたんだよ。ザフトの奴ら、ひどいんだ。ヘリオポリスをめちゃくちやにして。それからもひどいんだ。私のお船、何度も何度も襲って来て……」

「……そうか」

彼らは、改めて思い知らされたのだ。もし、成功していたならば。もし宇宙でアークエンジェルを撃沈する事に成功していたら、この子も殺していた……。

相手が見えなかったならば、さほど気にはしなかったろう。だが、その相手が目の前にいる。

アスラン達は居心地の悪さを感じた。

「でもね！ ルナお姉ちゃんが助けてくれたの！ いつも！」

「ルナお姉ちゃん？ まさかそいつがモビルスーツのパイロット…

…」

イザークが反応した。

「うん、避難民のお姉ちゃん、モビルスーツも操縦できるんだよ！」

「……なんてこった。俺らは素人の女にきりきりまいさせられていたのかよ」

ディアツカが天を仰ぐ。

「エルちゃんねえ、心残りがあるんだあ」

「ふーん、なんだい？」

「だいはちかんたいでお船から離れる時、きちんとルナお姉ちゃんにお礼言えなかったの。お兄ちゃん達、ルナお姉ちゃん知らない？」

「いいや。だが、会ったら、伝えておいてやるよ」

「ほんと？ きつとだよ？」

手を振って向こうに駆けて行くエル。脇から出てきて、エルの頭を撫でているのはおそらく母親だろう。

ニコルがぼつりと言った。

「……パイロットが避難民なら、もう足付きを降りましたよね」

「わかんねえなあ。バルトフェルド隊長もモラシム隊長もやられた。そんなパイロットがほんと配属されるかな？」

「そう、ですよね……」

「ニコル、やらなきゃ、こっちがやられるんだ！」

「アスラン、泣いて……？」

「違う！」

アスラン達は無言で歩き続けた。

第十八話

アスラン達は軍港を始め、一般人が行ける所は隈なく廻った。だが……アークエンジェルは影の形もなかった。

「そりゃあ軍港に堂々とあるとは思っちゃいないけどさあ」

「あのクラスの船だ。そう易々と隠せるとは……」

「まさかあ、ほんとに居ないなんてことはないよねえ。どうする？」

「欲しいのは確証だ。ここに居るなら居る。居ないなら居ない。軍港にモルゲンレーテ、海側の警戒は、驚くほど厳しいんだ。なんとか、中から探るしかないだろ」

「確かに厄介な国の様だ。ここはっ！」

「はあ……モルゲンレーテを張るしかないか」

「モルゲンレーテ？」

「足付きはあれだけの被害を受けている。もしいるならば絶対修理するはずだ。物資の搬入の様子その他から当たりをつけるしかない！」

その頃モルゲンレーテ地下

「アサギ、マユラ、ジュリ！ どうだ？」

「すごい！ すごいですよ！ カガリ様！ まともに動きます！」

オーブのM1アストレイのテストパイロットの3人娘は歓声を上げている。

「そうか……よかった！」

「あーあ。ロウの所にわざわざ忍び込んだの、無駄だったなあ」
ジュリがため息をつく。

「ロウ？」

「ロウ・ギユール。MBF-P02 レッドフレームを手に入れたジャンク屋ですよ、カガリ様。彼はナチュラルなので、動かしているOSを手に入れようとジュリが接触したのですが……」
M1アストレイの主任設計技師エリカ・シモンズが説明する。

「多少は動かしやすくなっただけど結局使い物にならなかったのよね」
「」

「実は、ロウ・ギユールの一行、今日オーブに到着したんですよ。会ってみます？」

その時、廊下を歩いてくる足音がした。

「ははは！ ジャンク屋はだめで、ヘリオポリスの避難民の者が作ったら一発でOKか！ こいつは愉快だ！ オーブには広く人材が眠っている事を意味する。喜ばしい事だ。下賤なジャンク屋などに頼る事などない」

「ロンド様！」

エリカが振り向く。

「ロンド……？ ……なんだギナか」

さすがにオーブの五大氏族同士、幼い頃から知っているだけある。カガリは即座に相手の素性を当てる。

現れた男。それはロンド・ギナ・サハクだった。彼は、オーブの五大氏族長のひとりコトー・サハクの養子である。ロンド・ミナ・サハクと言う彼にそっくりな外見の姉がいる。

元来サハク家はオーブ五大氏族の中でも歴代軍事を司ってきた家柄で、言わば平和と中立を謳うオーブの国家理念と相反する裏の顔的な存在である。その所為か常に政の表舞台に立ち国家の象徴として君臨するアス八家には批判的な見方をする者の多い氏族ではあるが、ロンド姉弟は取分けその傾向が顕著で元首であるウズミに対しても公然とその統治方針に対する批判を口にする程だ。

「久しぶりだな。カガリ。放蕩娘が帰って来たか」

「なにを！？」

「家出して、世の中を見て何か考えが変わったかね？ 例えばウズ

ミの中立政策に対して」

「……まあいい。お父様の言う事は、夢だな。美しい夢。だが、それを他国の思惑に寄らずして自力で実現するためにはオーブは世界の覇権を握れるくらいの国力がなければ無理だろう」

「ほう」

そこまでは辿り着いたか。ギナは感心した。なにしろ彼らロンド姉弟が密かに抱いている野望。それはオーブによる世界の制覇。そして優れた者による大衆の支配なのである。

「まあ、とりあえずは合格かな」

「なにが合格なんだ！」

突っかかる力ガリを、もう用は終わったとでも言うように無視して、ギナはエリカに告げる。

「あのP02のパイロットか。興味がある。M1アストレイに乗せてみる」

「うひょー！　すげえ！　動かしやすい！」

ロウ・ギユールは有頂天になっていた。何しろ秘密基地のような地下の工場案内され、ずらりと並ぶオーブの秘密兵器に乗せてくれると言っただ。少年のような部分を残しているロウが喜ばないはずがない。

そして、実際に乗ってみたら、その動かしやすいさはレッドフレームと段違いだ。今まではレッドフレームに試験的に搭載されているナチュラル用OSと、『8（はち）』　ロウが宇宙空間を漂流していた宇宙戦闘機から発見したオーパーツのような人工知能搭載コンピュータの助けを得て操縦していたが、これなら自分ひとりでもコンピュータと同様に操縦できる！　と彼は思った。

「でしょー！？　オーブにもすごい人がいるでしょ？　ヘリオポリス崩壊の時から今までのたった3ヶ月で作っちゃったって言うのよ？」

ロウが座っている座席の後ろからジュリが我が事のように自慢げに言う。

「なあ。会ってみてえなあ、そいつに。どんな奴なんだ？」

「残念ね」

スピーカーからエリカ・シモンズの声が流れる。

「一日違いで、オーブから出発しちゃった所よ。16歳のかわいらしいお嬢さんだったけど」

「へー。そいつは残念だなあ」

「ロウ！ 鼻の下が伸びてる！」

「いててて！」

ジェラシーを感じたのだろう、ジュリが後ろからロウをつねる。潜入任務の時から、ジュリはロウが気に入っているようだ。

「なあ、シモンズ主任。頼み事があるんだけど」

「何かしら？」

「このOS、ぜひレッドフレームのOSの改良の参考にさせてくれ！」

「あら、あなたは立派にPO2を操縦してるじゃない？」

「まあ、そうなんだが……ちょっと……8（はち）頼りの所があったり……」
「こによこによ」

「……いいわ」

「本当か！？ サンキュー！」

「その代わり、ちよつとM1アストレイと模擬戦をしてほしいのよ。運動性を見たいの。レッドフレームに乗り換えてくれない？」

「お前もやるか？」

ギナはカガリに声をかける。

「んーん……」

カガリはちよつと考え込んだ。

「いいや。ギナと違って、私が乗れても大した事はないからな」

「ほう？」

めずらしい事もあるものだ、とギナは首を傾げる。昔ならこう言う事には真っ先に首を突っ込んできたのに。

「ルナマリアから言われたんだ。この世の中をよくするために、あなたは上で頑張れ、私は現場で頑張るから……」って。私が今しなきゃいけない事は、モビルスーツの操縦じゃない」

ルナマリア……あの天才プログラマーか。ギナはちよつと嫉妬を感じた。二人の関係にだろうか？ それとも、カガリが自分より少し先を行ってるように感じたからか。

「では、そこで見ておけ。私のダンスをな」

ルナマリア・ホークか……オーブ出身の連合のエースパイロット
不思議と、彼女と戦いたいと言う思いは起こらなかった。天才プログラマーと言う第一印象からだろうか？ 彼女は自分にとってダンスの相手ではなくダンスの演出家、振付師、あるいは服のデザイナー、仕立て屋に思えたのである。

だが、これから戦う相手は違う。自分に土をつけた男 見極めねばなるまい。その実力を。

……勝負は付いた。

終始ギナが押し気味に試合を運び、レッドフレームが実体剣を抜き押し返した物の、ギナはそれを白刃取りして奪い、逆に切りつけ、とうとうレッドフレームは倒れた。

「まるで素人のダンスだったな。殺す価値もない。こんな男……」
P02のコクピットが開いて、ロウ・ギュールが現れた。

「やあ！ あんたやるなあ！ まさかガーベラ・ストレートを受け止められるとは思っていなかったぜ！」

屈託のない笑顔。ギナはちよつとむっとした。

「お前は！ 戦いに負けて悔しくないのか！？ 恥ずかしいと思わないのか！？」

「別に だって俺はプロのジャンク屋だぜ？ あんたはプロのパイロットだろ？ 戦いで勝つのは当たり前じゃないか！」

ふいに、カガリにルナマリアが言ったと言っ言葉が蘇る。

『あなたは上で頑張れ、私は現場で頑張るから』

ギナはまるで、自分に言われているかのように感じた。

五大氏族の息子たる身が自らパイロットとして戦いたいと望むのは、本道から外れた我儘だと言っのか？

「それよりあんたの機体 早くメンテした方がいいぜ。無理な体勢でガーベラ・ストレートを振ったろ？ モーター類が過負荷で悲鳴を上げてるのが聞こえるぜ。俺のレッドフレームはOSからチューンしてあるから大丈夫だが」

「む？」

確かに腕にアラート表示が出ている。ガーベラ・ストレートと言っらしい実体剣を取り落とす。

「……メカを見る目は確かなようだな。ジャンク屋がやっていけないとなったらオーブに來い。雇ってやるぞ」

言い捨てる、ギナは模擬戦場を後にした。

オーブを出て2日も過ぎた頃だろうか？ ちょうどマーシャル諸島をすぎた辺りだ。

「レーダーに感！ これは！ F-7Dスピアヘッドです！ 数、

10機！」

「味方か！」

「とうとう來たのね……」

『こちら空母ジョージ・ウォーカー・ブッシュ所属航空部隊。貴艦

を護衛します』

10機のスピアヘッド中隊は、2機ずつ小隊を組んで5つに分かれて全包围からの敵の襲来を警戒している。

「感謝する、と返信を」

「はっ！」

それから1時間後。

「レーダーに感あり！」

「スピアヘッドは!?!」

「位置、変わりません！」

「これは……友軍です！ ラジエダ級護衛艦5隻！」

北進を続けるアークエンジェルに、護衛艦が5隻近づいて来た。

『こちらパスカルメイジ艦長、ミサキ少佐です。本部からの命令により貴艦を護衛します』

「了解しました。護衛を感謝します」

『それから貴艦に対する指示も預かっています』

「なんででしょう?」

『モビルスーツのパイロットと協力して、ナチュラル用OSを火急に作ってくれとの事です。モビルスーツは大分生産されていますが、OSがどうもうまく行かないようです』

「はっ。わかりました」

「……と言つ訳でね、せつかくのんびり出来る所を悪いけど、お願いできないかしら」

私は、マリユーさんにナチュラル用OSの制作を頼まれたのだった。

「……こんな事もあるのかと……」

「え?」

「ナチュラル用基礎OSなら、もう組んであります！ ストライクの中に！ シミュレーターの中にも移植してあります」

「きゃー なんて子なの?」

マリユールさんに抱きしめられた。

「じゃあ、早速乗せてみましょう。フラガ少佐や、ヘリオポリス組にも暇そうな顔しているのもいるし」

「えー、俺が乗るの？ 俺はアーマー乗りだぜえ？」

「時代は変わっていくんですよ。フラガ少佐。範を示す意味でも、どうか」

「しょうがねえなあ」

フラガはおずおずと乗り込んだ。

ルナマリアも下で手を組んでときどきのご様子だ。

「お？ お？ おおー！」

ストライクは、格納庫の中を一步一步、スムーズに歩いている。

「やったなあ！ お嬢ちゃん！ 自分で歩いてみても、俺が護衛してたパイロット候補生の動きよりだいぶんまじに歩いてるって事がわかるぜ！」

やったあ！ と声を上げてルナマリアはガッツポーズを作った。

「次、次俺！」

「いや、俺だ！」

「しょうがねえなあ。じゃんけん」

「やった！ 勝った！」

その後はサイとトールが争うようにして順番で乗り込んだ。

「おお！ 初めて乗るにしちゃあ、ずいぶん動きが滑らかじゃねえか！」

マードックさんが驚いたように言う。

「へへ。俺ら、ナチュラル用OS組み込んだシミュレーターでさんざんやりましたからね」

「なに？ お嬢ちゃん、そんな事までやってたのか？」

へへ。と笑う私。

「これなら、微調整程度で済みますわね」

「そうですね。幸いな事です。訓練もやらせましょう。……ルナマリア。お前を軍に誘った事、間違っただけではいかなかったようだな」
ナタルさんはにっこりと笑った。

念の為にとOS構築をやっておいたおかげで、私は空母護衛群本体と合流する時ものんびり見物できた。アークエンジェルは、旗艦のジョージ・W・ブッシュの右に占位した。
きつと、旗艦の人達もアークエンジェルが見たいんだろう。

「どうです？ ストライクの動きを見せちゃあ？」

「そうですね。慣熟訓練も兼ねて」

まず私が、エールストライカーで艦の周りを飛び回った。周りの船は甲板が鈴なり状態で、みんな声を上げているのがわかる。

次は、フラガさんだ。スラスターを慎重に使い、空母の甲板に降り立った。

『現在乗っているフラガ少佐はナチュラルです』
放送が流れると、どよめきが起こった。

「どうじゃな、お前さん。お前さん以外の者がモバイルスーツを扱えるようになって寂しいんじゃないのかね」

「あ、デングル先生。あー。んー。寂しいと言えば、寂しいです」
「正直じゃな。いい事じゃ。いいか。あんた自分の役割を取られたように感じているかも知れん。自分の存在価値が減ったような気がしているかも知れん。じゃが、それは間違いない。前にも言ったが戦争はいつか終わる。その時に自分が何をやりたいのかが大切じゃ。」

お前さんはたまたま兵士をやつとるが、本質は違つ。一個人のルナマリア・ホークじゃ。兵士のルナマリア・ホークじゃない。それを忘れなさんなよ」

「はい……」

それから五日程度の航海で、アラスカ本部に着いた。

4月3日か。こんなに早くアラスカに着けたなんて。オーブで徹底的に修理していたら、まだオーブにいたかも知れない。もし、オーブにいたら、上陸許可が出たのかもなあ。それを考えると残念。でも、うん、ザフトに用意周到に網を張られてせつかく修理したのが無駄になっていたかも。

アークエンジェルはすぐに修理ドッグへ入り、ストライクも基地内工廠に移動した。

「電磁流体ソケット摩耗が酷いな」

「駆動系はどこかしこもですよ」

「限界ギリギリで、機体が悲鳴上げてるようだぜ」

ストライクを見ている技師さん達が色々言っている。

頑張ってくれたもんね。ごめんね。そしてありがとつ。

第十九話

「ええー！ 私が中尉！？」

私が昇進をナタルさんから告げられたのは、翌日だった。

「本当だ。クルーゼ隊と渡り合い、アークエンジェルを守り、砂漠の虎を倒した。未確認情報だが、インド洋で破ったのは『紅海の鯨』の異名を持つマルコ・モラシムらしい。昇進するに十分な戦果だ」
「実感湧かないですねえ」

「お前だけじゃないぞ。フラガ少佐も中佐に昇進。さらに、パイロットになる意思を示した事だし、サイ、トールは少尉に昇進だ。その他のヘリオポリス組も二等兵から一等兵になる」

「わあ。すごいですねえ」

「……こうやって会えるのも、次はいつかな」

ナタルさんは寂しそうに言う。

「え？」

「転属命令が出ている。大掛かりだぞ。私にフラガ少佐、ジョン少尉、ルナマリアにそれからお前の友達のサイとトールもだ」

「そんなに…… ナタルさんはどこに？」

「ああ、新造艦の艦長らしい。少佐に昇進もさせてもらったよ。ルナマリアの余禄かな。ふふ」

「私達は、どこに？」

「なんでも量産だけはしていたモビルスーツがいきなり使い物になった物だから、フラガ少佐、いや、昇進して中佐か。を隊長にして、教導隊を作るらしい。ルナマリア、お前も、サイとトールもそこに行くらしい。あ、ジョン少尉だけは別だな。新設されたモビルスーツ隊に配属だそうだ」

「そうですか……」

「そう時化した顔をするな。軍と言う物は案外狭い。またすぐ会えるかも知れんぞ」

「はい。ナタルさんもお元気で」
「ああ。ルナマリアもな」

その日の夜、アークエンジェルクルーでちょっとしたお別れ会をやった。

さすがに修理中のアークエンジェルでやる訳にもいかなかった。豪勢にアラスカのレストランを借り切った。

店のキャパシティで、全員と言う訳にも行かなかったけど、ヘリオポリスからのみんなと、ジョンさんが出席。

そんなお金あるんですか？ とフラガさんに聞いたら、
「使う機会もなかったんだから、溜まってるよ。気にすんな」
と答えが返ってきた。甘えちゃおう。

……そう言えば、私もお給料出てるんだよねえ。ここで使おうとしても、アラスカ名物……思いつかない。サーモンぐらいしか。確かにこりゃ、お金溜まりそうね。

パーティは、マリューさんの発声で始まった。

マリューさんも寂しいだろうな。フラガさんもナタルさんもいなくなつて。

私は、ミリィと別れちゃうけど、まだサイヤートル。それにフラガさんもいる。

「ルナちゃん」

あ、マリューさんが絡んで来た。もう出来上がってる？

「あなたと離れ離れになるなんて、寂しいわ」

「そんなー。そう離れるわけでもないんだし。ナタルさんこそ、一人ぼっちで転属ですよ」

「ナタルは優秀だからいいのよ。いい？ つまりこの焼き鳥のようなものよ。この肉が私で、ネギがナタル。わかる？」

「さっぱりわかりません！」

「だからあんたは馬鹿なのよ」

「はいはい。お水、飲みましようね」

「う……甘い！ お酒じゃない。お酒はどこ？ お酒……」

マリユーさんはふらふらと行ってしまった。

代わりに、ナタルさんがやって来た。

「やれやれ。ここまで乱れる人だとは思っていなかったな」

「マリユーさんの事ですか？ 寂しいんですよ、きつと。みんなと離れ離れになつて」

「私も寂しいぞ。少人数でやってきた期間が長いせいかな？ 結構、辛い」

「でも、いきなり少佐になつて艦長ですよ。評価されてるんですよ」

「でも、誰も知らないメンバーの所に飛び込んで行くと言つのも、怖いぞ」

「ナタルさんでも、そうなんですか」

「そりゃそうだ。結構昔から内気でな。ルールがあるならそれに従えばいいが、それに外れた行動を取られると、混乱してしまう。だんだん慣れては行くが」

ナタルさんも結構酔つてる。こんなに打ち解けた話を聞いたのは初めてだ。

「だから、ルナマリア。お前は頑張れよ。お前は私が持った部下の中で一番出来がいい！」

「はい」

お別れ会は、順次お開きになった。

フラガさんはナタルさんを送って行くようだった。

「俺さあ、やっぱり、ミリイの存在が大きいと思うのよね」

酔つ払つたトールが言う。

「はいはい。ご馳走様」

「俺なんか、フレイを置いて、戦争やってるんだぜ」

サイも、やっぱり酔つ払つてる。

「フレイって言えば、今オーブにいるの？ それとも大西洋連邦？」
「大西洋連邦にいるってさー。オーブにいた時連絡取ったんだ。ル
ナお姉さまよろしくってさ」

「あはは」

最初は敬遠されてたみたいなのにね。なにがどうなったんだか。

「指導隊つてさ、教えて歩くんだろ？ できるかなあ。俺に」

「出来るわよ。私の作ったOSのシミュレーション、みっちりやつ
たでしょう？」

「頑張るよ、俺。頑張るからさあ」

酔っ払い二人を部屋に放り込むのは、結構骨だった。

異動翌日。私達に与えられたのは、私とフラガさんにストライクの
改造型。改造点はなんでも、モルゲンレーテ社から提供された技術
を組み込み、強化型バッテリーユニットである「パワーエクステン
ダー」の搭載によりエネルギー変換効率が向上し、機体の稼働時間
が大幅に延長されている点。そしてもう一つ。エールストライカー
を付けなくても、両腰のアーマー上部に常時ビームサーベルを装備
した事で、ランチャーストライカーを付けていても、接近戦に対処
できる点だろう。

トールはデュエルの量産機だ。デュエルダガーと呼ばれていて、フ
ォルテストラと呼ばれる追加装甲、スラスター、それに右肩部のリ
ニアキャノンや左肩部のミサイルランチャー等が付いている。

サイはバスターの量産型にあたるバスターダガーだ。両肩のミサイ
ルポッドはバスターの6連装から3連装に変更されているが、腕の
部分のハードポイントにビームサーベルを搭載することもできる。

これは明らかにバスターとストライクとの戦訓のおかげだろう。：

…すぐ落とされていたものね、バスター。

私の手でサポートOSまで完成されていたストライクと違って、デ
ュエルダガーやバスターダガーはサポートOSはこれからだ。私達

の訓練で、直す所が決まるのだと言う。

「でも、電圧を強くする事でPS装甲の耐久力が上がるなんて……今まではなんでやらなかったんでしょうか？」

私の横で、カラーリングが赤主体に変化した私のストライクを見上げているフラガさんに尋ねた。

「今までは、バッテリーの問題があつたからなあ。必要十分な強度があれば、わざわざ稼働時間を短くしてまで、電圧を高める真似はしないだろう」

「でも、少しだけど、ビームに対しても耐久力上がってるんですよ？」

「ああ、だそうだ。ほんとにほんの少しだそうだけどな」

「もつと赤くする事はできますか？」

整備員さんに聞くと、多少稼働時間が短くなるが大丈夫と答えが返ってきた。

そして、実際に真紅に発色するストライク。

「じゃあ、バッテリーに余裕があるんだし、私はこの設定で行きます。そうね、赤だから……これからあなたの名前はストライクルージュよ！」

フラガ教導隊には、サイとトール以外に三人の人が入って来た。

「スウエン・カル・バヤン少尉だ」

「ミューディー・ホルクロフト少尉よ」

「シャムス・コーザ少尉だ」

若い！ 一番年長のスウエンさんでさえ私より一歳上なだけだ。

スウエンさんは105ダガー、ミューディーさんはデュエルダガー、シャムスさんはバスターダガーが乗機だ。

新しく来た3人は、フラガさんと握手する時、なんとなく嬉しそうに見えた。そりゃそうだよな。フラガさん英雄だもん。

でも……私と握手する時はみんなむつつりしていた。

「コーディネイターはお嫌いですか？」

私は聞いてみた。自分でも、強くなったと思う。昔なら、泣いて、リストカットしていたかもしれない。

「ええ、嫌いよ」

ミューディーと名乗った女が、感情を見せない顔で言った。

「そうか。好悪の感情は人それぞれだ。今ここではとやかくは言わん。だが、俺達はチームだ。チームの連携を乱すような事は許さん」
フラガさんが、ぴしりと言ってくれた。

「それから、この隊の副長はルナマリアだ。一番モバイルスーツの経験がある。きちんと言う事聞けよ。さもなきゃ死んでも知らんぞ」
男二人は頷く。

「はい」

ミューディーさんは仕方なさそうな顔で気のなさそうな返事をした。

私はまず新しく来た3人と訓練した。

強い！ さすが指導隊に回されてくるだけあるわ。でも、ここで舐められたらたまらない。私はちよつと本気を出した。

シヤムスさんなんかは本気で悔しがっていた。

私は3人に良かった点、悪かった点を教えた。そう。ただ私が勝つだけじゃだめなんだ。皆が、それぞれ人に教えられるくらいにうまくならないと。

「いくわよう」

「手加減。手加減」

フラガさんと私が戦った後、サイとトルの相手をする。フラガさんは他の部署の人達と効率的なモバイルスーツ戦術を検討すると言う事で、途中で抜けた。

……ま、最初から全力出すわけにもいかないものね

それなりにサイとトールの相手をしてやった。でも、いくら105ダガーを基に高い柔軟性を持つと言っても砲撃戦用機とストライクとじゃ相性が悪い。トールのデュエルダガーがストライクに比較的善戦したと言う感じだ。

「でもわかってる？ 私達は巡回指導を行わなきゃいけないのよ？早く強くないと」

「まだまだ指導なんてがらじゃないけどなあ」

「もう、明日から指導の予定入ってるわよ」

「えひゃー！」

「なあ、ザフトでビーム兵器持ってるのってXナンバーだけだよな？」

サイが私に質問する。

「わからないわよー。技術はすぐに取り入れられるものだから。砂漠で、最初は持ってなかつたのに、ビームサーベル搭載のバクウスぐに出してきたじゃない。……あ！ビーム兵器、あつたわ。ザフトにも。ほら、ヘリオポリスでアークエンジェルが襲われた時、ジンが抱えてきた奴。確か……バルルス改特火重粒子砲とか言う大仰な名前だったわ。でも、威力はビームコーティングシールドで簡単に防げちゃう位だから。こっちのビームライフルの方が威力強いかも。取り回しやすいし。」

「そうか。バスターにはシールドないんだ。前に出ないように気をつけないとな」

「その代わり、バスターダガーにはラミネート装甲あるじゃない」

「PS装甲もそうかなあ。俺のデュエルダガーのリニアガンじゃ役に立たなくなっちゃうって事？」

トールが心配そうに言う。

「そーんな事ないわよ。PS装甲であっても、実弾兵器の着弾時の衝撃までは消せないわ。現に、私が最初にストライク乗った時、ザフトの重突撃機銃の衝撃、結構あつたもん。それにミサイルの衝撃も」

「そうかー。安心したよ」

「機体が無事でも、中の人気が絶しちやえばどうしようもないものね。だから、ダガーにはPS装甲は使われていないのかも？ 壊れる事で衝撃を吸収するように？」

「じゃあ、そろそろ再開しよう。次は2対1でいいか？」

サイが言う。
「えー。フラガさんとも戦って疲れてるのに。女の子に優しくくないなあ」

「たまには善戦しておかないと、精神が萎縮するからね。へへ」

「ちょっと待てー！」

何事？

「は！ 指導隊の宿営地に侵入しようとした者が居るのです」

「ああ！ ゲイツ博士！」

侵入者は、私がナチュラル用OSを納入した時に立ち会った、ビル・ゲイツ博士だった。

「どうしたって言うんです？」

「ルナマリア君！ 君は実戦部隊になんかいちゃいけない！ 君の納入したOSは完璧だ！ 君を失う事は人類の損失だ！」

「はいはい。ちゃんと許可取ってから来て下さいね。ここは軍機地域なんですから」

ゲイツ博士は引きずられて行った。

でも……そんなに期待されても困るのよね。あの時は、最初から答えがわかっているようにプログラムを組めたけど、今、他のプログラムを組めと言われても同じようにできる自信は無い。

スウェン達が、いつも耳にイヤホンを当てているのはちょっと話題になった。三人揃って音楽好きと言う事かも知れないが。

フラガが問いただと、スウエンは顔をしかめながら素直にイヤホンを渡してきた。

「なんだこりゃ!?!」

フラガが大声を上げる。

「お前ら……どんな育ち方をしてきたんだ?」

「それを言う事は許可されておりません」

スウエンはすげなく答える事を拒む。

「だいたい想像付くけどな。ブルーコスモス絡みの施設でも育ったか? コーディネイターと一緒に行動する事になって、洗脳を解いている最中か」

「答えられません」

スウエンの顔が強張る。

「まあ、早いとこ洗脳解いてくれよな。チームのためにも」
そう言うとフラガはスウエンにイヤホンを返した。

「一体、なんだったんですか?」

私はフラガさんに聞いた。

「ん〜。まー、あんまり気持ちのいい話じゃないよ?」

「私はチームの副長です」

「そう言われちまうとなあ」

フラガさんはしぶりながらも答えてくれた。スウエンさんが渡したイヤホンからは、

『地球連合に属するコーディネイターは信頼できる戦友だ』

とか言う言葉が延々と音楽に乗って繰り返されていたそうだ。

「あいつら、おそらく孤児だな。ブルーコスモスが運営する養護施設の中に、子供の頃から反コーディネイターの洗脳をして、戦闘訓練を施す施設があると聞く」

「そんな非人道的な事!?!」

「噂だが、確証は高いよ」

「私はどうすれば……」

「今までどおりでいいんじゃないか？ ほら、フレイって子がいた
る？ 最後には仲良くなれたじゃないか」

フレイ……フレイのような関係に、なれるのかな？ あの3人と。

第二十話

第1モビルスーツ隊……その名の通り、地球軍で最初に編成されたモビルスーツ部隊だ。

今日はそこへの教育に来ている。

「じゃあ、ギャバン隊長はルナマリア中尉から指導してもらってくれ」

「ん？ お前さんがやるんじゃないのか？」

第1モビルスーツ隊のギャバン・グーニー隊長はいぶかしがる。

「正直、自分より彼女の方が腕前は上でね」

フラガさんは肩をすくめる。

「そうかい。じゃ、一つ見せてもらおうかな」

私はギャバン隊長の席の後ろに座った。

隊長機と言っても、ストライクダガーだ。第1モビルスーツ隊は全部そう。と言うより、新設されたモビルスーツ隊は全部。フラガ教導隊が特別なのだ。

うん、じっくりくる。フラガ教導隊はいくら新型機の実験隊も兼ねていると言っても種類が多すぎて……

朝、教導隊のモビルスーツを見るたびに、地球軍にこの時期にこんなに多くの種類のモビルスーツがあったっけ？ と妙な違和感を感じてしまうのはなんでだろう。夢のように消えてしまいそうで不安になる。

ううん、埒も無い事考えないの！ 今は指導に集中しなきゃ！

「そうそう、いい感じ」

「あつたりまえよお」

「あ、そこは無理に動かさないで！ モーションが組み込んであるからそれに任せて！」

「う、なんか気持ち悪い」

「変な動かし方するからですよ。歩く時はオートに任せておけばいいのに」

「それでも、OSがへちやな頃から動かしてきたんだぜ」

「ええ、だいぶ筋はいいですよ」

「そおかあ？ へへ」

こうやって、技能が向上して、無事に生き残ればいいな。ギャバン隊長もみんなも。

自分達の技能向上と他部隊への教育で2週間が過ぎた。

「フラガさん、私達、だいぶ強くなりましたよね？」

「ああ。しかしアーマー乗りとしては空が飛べないのが不安だよ。

飛行ができるストライカーパックを開発してくれと上申しておいたが」

「そうなんですよねー。今までの戦いも、ストライクが空を飛べたらどれだけ楽だったか。あ、後苦労したって言えば海中！ 海中用のストライカーなんてできませんかね？」

「海中は、それ専用のモビルスーツを作るらしいぞ」

「そうなんですか。その方がいいかも知れませんか。……それにしても、ストライクダガー、どんどん新しい部隊が送られてきますね」

「ああ。ザフトが近々大きな作戦を立てているらしい。噂ではパナマのマスドライバーの破壊と言う話だが」

「……………」

……………あ。久しぶりに頭の中に淡々と文章を語る声が……………

少し、思い出した。この男の人の声……………これは、教室で先生が教科書を読んでいる声だ。

だめだ。先生の顔に霧がかかっていて、思い出せない。

『オペレーション・スピットブレイク ヤキン・ドゥーエ戦役に終止符を打つべくプラント最高評議会において可決された作戦だ。』

宇宙から大規模な攻撃部隊を地上の地球連合軍側の拠点に降下させ拠点を制圧するという強襲作戦だった。この作戦の前にプラントは地球と宇宙の行き来を可能とするマストライバーを持つ地上拠点のほとんどを掌握しており、地球連合軍のもとに残されていた宇宙港はパナマ基地だけとなっていた。このため、その最後の宇宙港を奪取することで地球連合軍の宇宙と地上の戦力を分断し、地球連合軍を地上に封じ込めることが可能になるとして、パナマ基地攻略を目標としてオペレーション・スピットブレイクは立案、可決された。

しかしパナマ基地の攻略という計画は表向きのもので、実際には地球連合軍最高司令部が存在するアラスカを強襲することが真の目的であった。オペレーション・スピットブレイクがコズミック・イラ71年5月5日に発動されると、同時に全軍に対し攻撃目標の変更が通達され、パナマ攻撃のために集結していた部隊はその進路をアラスカ地球連合軍統合最高司令部へと変更した。72時間後ザフト軍はこの作戦に降下部隊及び地上部隊の大半を注ぎ込み、アラスカ基地の防衛線を次々と突破して中心部へと迫った……」

「おい、どうした？ お嬢ちゃん。具合でも悪いか？」

「……ザフトが、来るわ！ パナマじゃない！ ここに来るわ！」

5月上旬、おそらく8日……」

「なんだって！？ 例の、予知って奴か？」

「ええ、そう。多分、当たるわ。当たらなくても、警戒だけはしておいた方がいいかも」

「……わかった。お嬢ちゃんの勘は当たるからな。5月までに、主なモビルスーツ部隊、戦車隊、航空隊も合わせて大規模な防衛訓練を行うよう、計画立ててくるわ」

「お願いします」

一週間かけて、フラガが主導したJOSH-A防衛計画もだいたい固められた。基本は、ザウートや水陸両用モビルスーツのようにリニアガンタンク部隊で対処できる物は、スエズで実証されたようにリニアガンタンク部隊で対処する。ディンのように飛行ができるモビルスーツにはスピアヘッド、スカイグラスパー隊で対処する。ディンに対して、戦闘機隊は決して無力な存在ではない。これにはザフトのモビルスーツとスカイグラスパーで戦い続けたフラガの発言が大きく影響した。そしてどうしても対処できないザフトのモビルスーツ隊には、こちらのモビルスーツ隊をぶつける。なにしろ地球軍のモビルスーツ隊は結成されたばかりだ。全兵種が一丸となって当たらなければならぬ。そしてフラガの方針は、未だ存在するモビルスーツに懐疑的な高級将校、そしてリニアガンタンク部隊、航空部隊の自尊心も満足させる物だったのである。

そして5月1日を期して行われた大演習では、ひとまず地球軍首脳部を満足させる結果となった。

懸念としてモビルスーツが補給に戻る距離が長い地点がある事が指摘されたが、その方面には修理になったアーケンジエルを配置する事が決められた。

アラスカの地下で、深刻な顔をして将官達が話し合っていた。

「オペレーション・スピットブレイク。ここまで戦力が揃えば、サイクロプスなど使わなくとも良いのでは？」

「ここまでの戦力を揃えておいて、自爆なぞいい物笑いだ」

「サイクロプスは、ユーラシアの力を削ぐと言う目的もある」

「前から言うように、私はそれには反対だ」

「おやおや、ユーラシアは信頼できる味方だとおっしゃる」

「そういう訳ではない！ プラントと言う敵がある以上、それに力を注ぐべきだといつとるのだ！」

「うふふふ。貴方はハルバートン派だから。しかし、戦争に勝つに

は汚い手も使わねばならぬ事、おわかりでしょう」

「まあまあ。しかし、今JOSH-A防衛策を立てて取りまとめに動いているのはあの『エンデュミオンの鷹』だと言うではないか。さすがだな」

「まあ、モビルスーツ開発はハルバートン少将以外に、今では大西洋連邦のアルスター事務次官も強力に推進するようになったからな。せいぜい良い結果を出して欲しい物だ。見事防いで見せれば我等の心証も上がる」

「しかし、演習でよい結果が出たからと言ってそれを鵜呑みにするわけにもいかん。兵器は実践でブルーフされてこそだからな」

「では、やはり念のために用意だけはしておくか」

「「異議なし」」

『総員、第一戦闘配備！ 繰り返す！ 第一戦闘配備！ これは演習にあらず！』

基地に、警報が鳴り響いた。

「やっておいて良かったですね。大演習」

「ほんとお！ さすが『エンデュミオンの鷹』って感じ？」

「いや。ははは」

シヤムスさんとミューデイさんがフラガさんに話し掛ける。

スウエンさんは黙々と出撃準備をする。

「頑張ろうぜ、ルナ」

「ええ！」

サイとトールが着替えに行った。

私も行こう。

私は嬉しかった。今まで一人で、ううん、フラガさんやジョンさんの支援はあつたけど、モビルスーツは私一人で……いつも怖かったんだ。

でも！ 今度は違う！ 仲間がいる！

私達フラガ指導隊は本部近くに待機していた。

！ 救援要請が入った！

「フラガ指導隊、出撃するぞ！」

「「おおー！」」

第二十一話

救援要請地点では、ザウートとリニアガンタンクの戦いにバクウが乱入し、暴れまわっていた。

「これ以上、勝手をさせるもんですか！」

私はエールストライカーを吹かすと突っ込んだ。

「私がかき回すから、その間に各自射撃を！」

「了解」

……ミューデー？ 彼女はデュエルダガーのフォルテストラ装備を拒否し、機敏に戦っていた。

「ミューデー！ ひとりで突っ込まないで！」

「こっちは任せた！ お嬢ちゃん！ 好きなようにやれ！」

フラガさんがミューデーの隣りで戦い始める。

「中佐！ 航空支援を頼みましょう！」

「こんな混戦の中でか？」

「爆撃してもらおうってわけじゃありません！ バクウが飛べなくなればいいんです！」

「わかった！」

程なくしてスピアヘッドの編隊が来る。そしてバクウに上空から銃撃を加える。

！ 今！ 私はジャンプすると上空からすくんでいるバクウの背中を撃つ！ ミサイルポッドが弾ける。急降下してリニアガン装備のバクウをビームサーベルで突き刺す。
メンバーのみんなも、一気にバクウを駆逐してゆく。

『フラガ教導隊、助かったぜ』

リニアガンタンクから通信が入る。

「あんたは？」

『エドモンド・デュクロ少佐だ。ここの小隊を預かっている』

「覚えとくよ。またいつでも呼んでくれ！」

一旦本部に戻ったものの、すぐに救援要請が来た。

今度は海辺だ。格闘性能がある水陸用モビルスーツに苦戦しているらしい。

……ゾノだ！ 私も苦戦した。

救援地点に行つて見るとそんな不安も吹き飛んだ。確かに陸上でも機敏に動けるみたいだけど、バクウに比べればどうと言う事もない！ でも数が、多いどころではなかった。これは苦戦する訳だわ。

「航空支援を要請する。皆、一旦下がれ！」

フラガさんから指示が飛ぶ。

スピアヘッドの編隊が来る。爆撃。岸边を満遍なく叩く。海へ戻ろうとした物も、水中爆発効果で被害が出ている事だろう。

「ようし、ザフトの奴らを海へ追い落とせ！」

グリーンは、砲撃にまかせていいよね。

私はゾノを狙う。

「インド洋でのお返しよ！」

こちらを狙うクローごと切払う。

フラガさんと私、スウェンさんとミューディーの攻撃で、ゾノは駆逐された。私達は一旦下がる。

サイ達とリニアガンタンク部隊が残ったグリーンに砲撃を浴びせる。

これで、ここも片が着いたかな？

「ちくしょー！ なんだこりゃー！」

「聞いてないぞ！ 地球軍にモビルスーツがいるなんて！」

そう言っている間にも、地球軍のモビルスーツは統制の取れた動きで射撃して来る。それを切り抜けても、

ビームサーベルの刃がジンを襲う。それはジンの重斬刀の刃も簡単に切り裂き、アンチビームシールドを持たないジンにとっては分の

悪い戦いだった。

それでも優勢に立つ局面もあるのだが、しばらくたつと、どうやら手だれを集めたらしい、様々な機体が混在したモビルスーツの小部隊が駆けつけ、押し戻されてしまう……ザフトの兵士に焦りが広がっていった。

私が行ける！　と思ったのは、いつだったろう。

相変わらず救援要請で忙しいけど、手ごたえが違ってきている。このままやっていたらしのげる、と言うように。

「お嬢ちゃん！」

「マードックさん！」

補給のためにアークエンジェルに寄った。久しぶりだ。

ここで、生活していたんだよねえ。懐かしい。

「無事なようで何よりだ。しっかり整備してやっから、休んどきな」

「ありがとう！」

「ふーん、ここが中尉の古巣って訳？」

ミューディーが話しかけてきた。

「ええ、そうよ。いい艦でしょう？」

「艦、配属された事ないから。ずっと地面の上ばかりだったわ。あはは。でも、いい艦ね」

そう言うと、艦のスタッフに話しかけに行った。

ちよっと、エキセントリックな子だ。他のスウェンさんやシャムスさんのように、用が無ければ話しかけられないのも辛いけど。でも、ミューディーの場合は、親しく話しかけてくれるけど、なにか投げやりな、心にぽっかり穴が空いた様な感じを受けるのだ。私に何が出来るだろう……そこまで考えて、首を振った。医者でもないのに、そんな事。

私の勳は当たった。もう何度目の救援要請かなんてわからないけど、敵が、前に進んで来なくなったのだ。いや、ゆっくりとだけど後退している！

「気を引き締める！」

フラガさんから叱咤の音が飛ぶ。

「まだ何があるかわからんぞ！」

シヤムスさんが突進する。

「ちくしょう！ お前ら空の悪魔なんて！ 逃がす物か！」

「シヤムス少尉、出過ぎです！ 戦列を保つて！」

「うるさい！」

「命令です！」

撤退するザフト軍。殿軍を志願したのだろう、シグー。おそらく上級者の腕前は、まだモビルスーツに乗って間もないシヤムスでなんとかなるものではなかった。たくみにシヤムスのビームサーベルを避け、重斬刀を叩き込む。

バスターダガーがよろける！

！ スラスターを吹かし、両者の間に飛び込む！ 振り下ろされた重斬刀の衝撃がシールドを伝わってくる。

私は更にエールストライカーのスラスターも吹かし、相手押し込む！ 倒れた相手にビームサーベル突き刺す。

……それが、アラスカで私が倒した最後の相手だった。

「やれやれ、勝ってしまったよ」

「勝って、嬉しくないのですかな？」

「元々この作戦はザフト軍の大半を誘い込み、一気に片を付ける作戦だった」

「それが、ザフトにそれなりの損害を与えたとは言え、撤退を許し

てしまった」

「その分、我々の被害も小さいと思いますが」

「まあまあ。ともあれ、地球軍製のモビルスーツの有効性は確認されたのだ」

「その通り。アルスター事務次官殿もお喜びだろう」

「ハルバートンの顔を思い浮かべると癩だがな」

「おいおい、ここにもハルバートン派はおるのだぞ。うふふふう」

「とにかく、今回の功労者も、ムウ・ラ・フラガ中佐でよいですな」

「ああ。まさか、我らのモビルスーツのお披露目の功労者をコーディネイターの小娘にする訳にもいくまいよ」

「では、フラガ教導隊全体を功労者として称える、でよいですな」

「「異議なし」」

「しかし、二度目の勲功章をもらうとはなあ」

「ふふ、フラガさん、あちこちまわって作戦立てて、この戦い勝ったのフラガさんのおかげじゃないですか」

「お嬢ちゃんも銀星勲章おめでとさん」

そう、私達フラガ教導隊は全員が叙勲されたのだ。軍が発行している新聞にも出てる。

「へー。ルナの事は、ヘリオポリスからフラガ中佐に付き従い支えた一の部下、だって」

トールが新聞を読む。

私も読むと、ヘリオポリスからストライクを操縦していたのはフラガさんみたいな微妙な書き方をしていた。私の事は、トールが言った程度しか書かれていない。私がコーディネイターな事も触れていない。少し、ほっとした。

サイとトールも、ヘリオポリスからの部下と言うことになっている。気になっていたスウエンさん達の経歴も、あまり書かれていなかった。軍学校で顕著な成績を上げ教導隊に抜擢された……くらいだ。

アラスカの町は、それなりに被害を受けていたけど、早くも飲食娯楽関係は復活しているようだ。

フラガ教導隊のみんなで祝杯を揚げる事になった。

「よお！ フラガ教導隊！」

「お？ 今日は助かったぜ！ ありがとう！」

基地を歩くと、街を歩くと、そこかしこから、声が掛けられる。

フラガさん、有名なものね。私達も適当に手を上げながらそれに答える。

ミューディーが言う。

「シヤムスはねー、ビリヤードが得意なのよー」

「お、いいねー。じゃ、プールバーでも行くか？」

フラガさんの鶴の一声で、シヤムスさん馴染みのプールバーへ行った。

「じゃ、私カルアミルク」

「私はブラッディマリナー」

私とミューディーは早速お酒を頼んだ。

「ソルティドッグを」

スウェンさんも頼む。

「おい、いいのかよ、お酒なんて頼んじゃって」

「サイ、固い事言うなよ！ 今日ぐらいいいんじゃないの？」
トールは飲みたそうだ。

「そうそう、飲んじゃいなよー」

ミューディーが誘う。

「じゃあ、なにか飲みやすい物を」

「はいよ！」

マスターが出してきたのはスクリュードライバーだった。

ビリヤード台ではシヤムスさんとフラガさんがゲームをしている。

ビリヤードはさっぱりなのでわからないが、どうやらシヤムスさん

が勝ったようだ。

「シャムスー！ ルナがビリヤードまったく知らないみたいよー」
え？ ちよつとミューディー！

「しょうがないなあ」

むつつりした顔でシャムスさんが言う。

「教えてやるから来い」

「いいか？ ビリヤードはメンタルスポーツのひとつとされ、個人の体格差・体力差による依存度は比較的小さい。まず落ち着いた気持で玉をまつすぐに突けるようになれ」

「はい！」

「チョークを付けるのも忘れるなよ。チョークを全くつけないとキユーミスが増える」

「はい！」

言われるままに、玉を突き、ポケットに玉を落とす。

「そうそう、やるじゃないか」

初めて、シャムスさんが私に笑いかけた。ビリヤードを覚えた事よ
り、それが嬉しかった。

「おいおい、スクリュードライバーがいくら飲みやすいからってこ
んなに飲んじまって！」

え？

フラガさんの声で振り返ると、サイとツールが潰れていた。

スウェンさんはくっくくくくと笑っていた。

「料理がたべたーい！」

ミューディーの一言で、河岸を変えることになった。

サイとツールはフラガさんとスウェンさんが担いで行く。

入ったレストランでは、もう人が一杯いて、向こうから声を掛けて

きた。

「フラガ教導隊の皆さんで？」

「ああ、そうだが、席は空いてるかい？」

「おい！ お前ら席詰める！ フラガ教導隊のお出ましだ！」

「「おおー！」」

「……ん、何？」

サイが目を覚ます。

「う、気持ち悪い」

「あんなに酒飲むからだ。さあ、ここに座って水でもたっぷり飲んで。じゃないと明日が辛いぞ」

フラガさんがサイとツールを座らせる。

「さあ、お嬢ちゃん達はこっちだ」

「あ、ありがとうございます」

私とミューデーは偉い人らしい人の横に座らされた。

「隊長ずるいつすよー」

「ははは、役得役得。そう言えば、俺の名前しらんだろう」

「あ、ええ」

「エドモンド・デুকロだ。あんたらに救援に来てもらったリニアガンタンク部隊の隊長だ」

「ああ、そう言えば、聞いたような気も……」

「ははは、今日は激戦だったからなあ。さあ、料理はまだまだ来るぞ。食べて食べて」

「あ、はい、ありがとうございます」

さすがJOSH-A近郊でやってるレストランド。おいしい！ ミューデーもおいしー！ と言いながら食べている。

「しかし、君らのような若者を戦争に出さなきゃならんとはなあ
デুকロさんは沈痛な面持ちで言う。

「……でも、きつとすぐ終わりますよ。プラントって人口少ないんでしょっ？」

「そうだな。……お嬢ちゃんは、戦争が終わったらどうしたい？」

「え？」

デングル先生にも聞かれた事だ。でも、私はどうしたいんだろう？
「すぐに答えられないのは、思いつかないからかな？ だとしたら、不幸な事だ」

「……」

「俺はなあ、戦争が終わったら、除隊して、DSSDに行こうと思っ
っているんだ」

「DSSD？」

「深宇宙探査開発機構さ」

「どうしてそこに行こうと思ってるんですか」

「とりあえず上を見ておこうかなってさ。ほら 横を見ると誰かに嫉妬して自分も欲しくなるだろ？ 下を見ると今の自分で助けてあげられる人がいて、彼らに必要とされてりゃ気持ちはいいけど、もしも自分よりも弱い者がいなかったらって思う。その時自分は何をやるんだらうって。だから、上を向いてる自分を確認しておこうと思っ
てね」

「私は、下を向いてばかりです。戦争があるから、みんな私を必要としてくれるって。ストライクに……モビルスーツに依存して……。私、コーディネイターなんです」

「そうか。俺の甥もコーディネイターさ。でも、今地上に残っているコーディネイターな事を幸せに思うべきだな」

「どうして、ですか？」

「プラントの奴らは、周り中同じコーディネイターだらけで、何かくじければ、何かあれば自分達は新人類だ、ナチュラル共とは違うんだって、そっちの方に流れやすい」

「……」

「今地上にいるコーディネイターは、そんな所に逃げれない。そんな考えをすれば、周り中が敵になる。克服するチャンスを与えられたと思うべきだ」

「克服する、チャンス……」

デユクロさんとの会話は、私の心に強い印象を残した。
上を向け、か。

ヘリオポリスから始まって、初めて私は本気に戦後を考え出した。

第二十二話

「うひょー！ 島だぜ！ これを人間が作ったとはなあ」

陸上戦艦レセツプスを修理した、ロウ・ギョール一行の移動基地「ホーム」は人口島ギガフロートへと到着した。

……モルゲンレーテでレッドフレームの改修を行い、OSの改良も行ったロウは、新しく付けたフライトユニットの試験飛行も兼ねてオーブの小島に住むと言うマルキオ導師を訪ねた。なんでも頼みたい事があると言う。

それが、マストドライバーを備えたギガフロート建設への協力の依頼だった。

マルキオ導師は連合にもザフトにも顔が利き、ジャンク屋組合にとつては創設者の一人と言つてよい。申し分の無い依頼だ。ロウは一も二も無く承諾した。

「気に食わんな」

オーブのある邸宅の一室で、長髪の男が口を開いた。

「気に食わん。こんな物が出来ればカグヤ・マストドライバーの価値は減じてしまうではないか」

「では、どうする？」

こちらも長髪の、しかし女性が問う。

「ギガフロートを完成する前に破壊する」

「簡単に言っな」

「ほら、この間アズラエルが寄こしてくれた技術があつたらう」

「ミラージュ・コロイドか？ しかし一機で大丈夫か？ 連合にやつたのが我らだと知られてもいかなのだぞ」

「私を誰だと思つている。 Rond・ギナ・サハクだぞ」

「……まあ、いい」

女の声が少し笑いを含んだ物に変わる。

「PO1を預けよう。やってみるがいい、弟よ」

アラスカ防衛戦から10日程経って、アラスカ戦の跡もだいぶ片付いた頃、私達は新たな命令を受けた。

私達フラガ教導隊が次に受けた命令はなんと！　アークエンジェルへの乗り組みだった。

パナマへ向かう地球軍初のモビルスーツ部隊である第1モビルスーツ隊の護衛を命じられたのだ。

彼らは、パナマで編成されつつあると言うモビルスーツ隊の教導隊としての役割も期待されて、パナマに赴く。

「またよろしく頼むぜ！」
ギヤバン隊長が挨拶に来た。

「こちらこそ。パナマの奴らはまだひよっこだ。お互いしっかり教育してやるっぜ」

「ああ！」

そしてギヤバン隊長は少し戸惑って言った。

「お嬢ちゃんを、ちよっと借りてもいいですかね？」

「ルナですか？　彼女がよければ」

「はあ。いいですけど」

隊長は、私を物陰へ誘った。

「なあ、お嬢ちゃん。結婚してくれ！　一目ぼれなんだ！」

「……ええ！？」

私は絶句した。

「いきなりだと思っか？」

「いきなりですよ！」

「今時は何でもいきなりだよ。敵の出現も、エネルギー不足も、命

のおしまいもな。だから、俺は後悔はしたくない」
「でも……私は……私、コーデーネイターですよ」
「関係ないさ。そんな事。返事は今でなくてもいいんだ。じゃー！」
ギャバン隊長は去って行った。
どうしよう。私、好きな人がいる訳じゃないけど、でも……

「トール！」

アークエンジェルに乗り込むと、ミリイが駆けて来る。

「ミリイ！」

トールも駆け寄ってミリイを抱き締める。

「また、無事なトールを見られるなんて……」

「な、泣くなよ」

「熱いねーお二人さん」

「ミューディー、邪魔しないの！」

「はいはい。休憩室はどこ？」

「あ、案内するわ」

「ここよ」

休憩室には、誰もいなかった。

「この自動販売機の飲み物は自由に飲めるから」

「ありがとうございます」

ミューディーはグレープフルーツジュースを取り出した。

「ねえ、中尉さん？」

「なに？」

「人を好きになった事ってある？」

「あるような、ないような……」

アスラン……仲良かったけど、あれを好きって言うんだらうか？

……なんか引つかかる。抱きあってキスマでした人がいたよな……

目が。目が浮かんでくる。真つ赤な、鋭い眼光をした目。夢に出てくる人？ でも、夢に出てくる人は、顔はわからないけど夢の中で私はまるで弟のように感じてた。こたえが出ないようで、もどかしい。もやもやする。でも、今までそんな人に会ったかな？ 気のせいよね。

「あたしはないんだあ。あたしがこれから言う事誰にも言わないですよ？」

「うん、言わない」

「あたしは孤児で、小さい頃から施設で軍事教練ばかりで、そんな暇なかったし……」

「やっぱり。フラガさんの推測は正しかった。」

「でもね、さっきのような見せ付けられちゃうと、こう、あたしの心の中にぽっかり穴が空いた気がするのよ」

「……」

「いつもは賑やかにしてるのにさあ、ふっと、全て空しくなっちゃうんだよね」

「ミューディー！」

私はたまらなくなつてミューディーを抱き締めた。

「ちよつと、中尉……」

「大丈夫、大丈夫よ。大丈夫だから」

いつかカガリにやったように、ミューディーの背中を撫ぜた。

「不思議……なんか安心する」

「ミューディー……」

しばらく私達は抱き合っていた。

ミューディーが静かに身体を離す。

「ふふ、今日は中尉にみつともないとこ見られちゃった」

ミューディーの頬には、涙の跡が残っていた。

「これから、明るいミューディーにもどりまーす！」

軽く敬礼すると、ミューディーは休憩室を出て掛けていった。

「ルナー！ どこに行ってたのよ」
格納庫に戻るとミリイがやって来た。
「あら、ツールとのせつかくの再開、お邪魔しちゃ悪いかと思って」
「ルナーもそういう事言うの？」
ミリイの頬が膨れる。
「ごめんごめん。会いたかったわ！ ミリイ！」
「私も！ ルナー！」
私達は手を広げてハグしあった。
「いっぱい、話したい事あるんだけど、何から話していいかわからないわ」
「私も。教導隊に入ってから色々あったの」
あ、そうだ。思いついた事があった。
「ねえ、ミリイとツールって、結婚とか、そう言う話、してる？」
「ぶっ」
ミリイが吹き出す。
「け、結婚!?!」
「した事、ないのね」
「だって、私達まだ16歳よ!?!」
「だよねえ」
「何かあったの？ そんな事突然言うって事は？」
「……プロポーズ、されちゃった」
「ええええええ！」
さすがに驚くよねえ。
「誰によ!?!」
「ミリイの知らない人。モビルスーツ隊の隊長よ」
「いい人そう？」
「うん。いい人そう」
「……ルナーって好きな人いないよね？ じゃあ、試しに付き合ってみたら」

「付き合つかー。ミリイと遊んでた方が気楽だなあ」

「お子様なんだー」

「なによー。自分は彼氏がいるからってえらそうにー」

でも、そうね。試しに付き合ってもいいかも知れない。戦争が終わったら。

戦争が終わったたら、付き合ってみてもいい。その事を伝えたら、ギヤバン隊長は大喜びしていた。

絶対、生き延びてやると言っていてウインクした。

本当に、無事に生き残って欲しい。自分の知り合いが死ぬのは、いやだ。

「ルナ、何してるの?」

「うん、ちよっとね、お守り作ってるの。協力してよ」

「うん、いいけど、どうやるの?」

「この赤い糸で一針ずつ縫って結び目作るの。本当は千人にやってみらうんだけど」

「千人!? アークエンジェルにはそんなにいないわよ」

「うん、残りは私がやるわ。要は、気持ちよ」

「な、何だ!? 何が起こっているんだ!??」

ロウ・ギュールはギガフロート各所で起こる爆発に慌てふためいた。

「マルキオ導師、こちらへ!」

山吹樹里がマルキオ導師を安全な所に案内しようとするが、彼は動かずじっとして耳をすませているようだ。

そして叫ぶ。

「ロウさん！ あちらです！ あちらに私の知らないモビルスーツの足音が！」

「なんだって？」

ロウは、マルキオの指差した方向に目を凝らす。が、何も見えない。

「何もいませんよ」

「しかし！ 感じるのです！」

「しかたねえな」

ロウはマルキオの指指した方向に向かってビームライフルを撃つ。

と、霧が晴れるように、奇妙な形のシールドを構えた漆黒のモビルスーツが姿を現した。

「な、なんだあ！ アストレイみてえな、いや、ちょっと違うか」
その漆黒のモビルスーツはいきなり走り出すとレッドフレームに向かって右腕を装着された盾ごと振り下ろす。

振り下ろされた瞬間、ビームサーベルの刃が出現するのをロウは見
た。

「うわっと あぶねえ！……消えた？ どこだ！？」

ロウはガーベラ・ストレートを抜き、辺りの気配を探る。

！ 後ろに突然漆黒のモビルスーツが現れ、レッドフレームを
締め上げる。

「くっ、後ろだったのかよ。おい！ お前は何者だ！ なんでこんな事をする！？」

返事はなかった。レッドフレームがガーベラストレートを取り落とすと、漆黒のモビルスーツは足払いをかけ、転がるレッドフレームの四肢にビームライフルを打ち込む。

「ふ、他愛もない」

ギナは一人ごちた。

「さあ、止めだ」

右腕を上げコクピットに狙いを付ける。

「やめてー!」

「うん?」

赤毛の女の子が、倒れこんだレッドフレームのコクピットに立って、コクピットを守るかのように手を広げる。

「興が削がれると言うに……まあいい。一緒に死ね!」

あらためてギナは狙いを付ける。

！ 衝撃がP01を揺らす!

「うう!」

なんだ? 手早くモーターをチェックする。海中からミサイル攻撃を受けている!

「くそう! 邪魔しおつて!」

ギナは海中に飛び込んだ。

「これは……P03か!」

海中用の装備を身につけているようだが、自分で開発した物だ。すくにわかる。

P03はスーパーキャビテーティング魚雷を撃ってくる。スケイルシステムによって水中の機動性もP03の方が上だ。

「く、ここまでか。まあいい。あれだけ壊せばもはやギガフロートの崩壊は止められまい」

ギナはすばやく判断を下すと撤退して行った。

「もう! ロウったら! 心配したんだから!」

崩壊寸前だったギガフロートの応急処置が済み、一安心した安心感からか、樹里がロウの胸をポンポン叩く。

「悪い悪い。しかし、今回はあんたらに助けられたぜ!」

ロウは効の方を振り向くと礼を言う。

「なに。ギガフロート建設の護衛が俺達の任務だからな。礼を言われる事でもない」

「でも、このギガフロートが完成したら、狙う者は多いでしょうね」
「ああ、連合にザフト。どっちも狙ってくるだろう」

効は妙な顔をした。なにしろ彼にギガフロート建設の護衛を頼んだのは連合なのだ。

「心配には及びません」
マルキオ導師が言った。

「このギガフロートは移動可能でもあるのです。戦時中で監視衛星が使えない現在、正確な位置などつかめませんよ。このマストライバーは、戦争に関係ない民間専用のマストライバーとして使用したいと思っています」

感銘を受けたようにロウがうなづく。

まあ、いいか。効は無責任に思った。

俺が受けた仕事はギガフロート建設の護衛だ。ミッションコンプライトだ。余計な事に首を突っ込みたくない。

うん。余分な苦勞などごめんだ。料金は前金でもらってある事だし。効は、マルキオ導師の話を聞かなかった事にした。

第二十三話

「よく来た、アスラン」

「はっ、父上」

「なんだ、それは」

「失礼致しました！ ザラ議長閣下！」

「状況は認識しているな？ やはり、地球軍のモビルスーツ、侮るべきではなかった。短時日で実戦配備してくるとは……」

「……」

「クラインら穏健派も騒いでおる。もう、失敗はできん。パナマのマストドライバーをなんとしても破壊するのだ！ アラスカで失敗しようとはパナマを叩く事が出来ればオペレーション・ウロボロスの目的は達成できる！」

アスランは、父の焦りを感じていた。そして、それにも関わらず父の心の底に自信があるように感じる。なぜだろう？

「お前は、パナマのマストドライバーの破壊と、地球軍パナマ司令部の破壊をやってもらおう」

「隊を持つのでありますか？」

「いや、単機でやってもらおう」

「……単機とは！？」

「お前は工廠でX09Aジャスティスを受領し、準備が終わり次第任務に就くのだ。ジャスティスはそれが可能な機体だ。ニュートンジャマー・キャンセラーを搭載した核動力機なのだ！」

「……ニュートンジャマー・キャンセラー！？ そんな……何故そんなものを！ プラントは全ての核を放棄すると……」

「勝つ為に必要となったのだ！ あのエネルギーが。お前の任務は重大だぞ。心して掛かれ！」

アスランは敬礼し、踵を返した。

「アスラン……」

後ろから声が掛かる。

「は。なんででしょう?」

「真に信頼できる者は少ない。だからお前に核動力機を託すのだ。頼むぞ」

アスランは、やや弱気な父の声に統治者としての悲哀を見た。

せめて自分が父を楽しにしてやらねば……

「わかりました。ご安心下さい。アスランは信頼を裏切りません!

……父上!」

アスランは意識して『父上』と言った。

「頼むぞ……」

パトリックも、息子の言葉に何かを感じたのだろう。もう言い直しを求めるなどと言う無粋なことはしなかった。

6日ばかりの航海で私達はパナマ基地に着いた。

アメリカ大陸の西沿岸を航海した事もあって、のんびり安心した航海だった。

シャムスさんは、なんでビリヤード台がないんだとぶつくさ言っていた。

元々宇宙艦だもん、しょうがないよね。

「君がホーク中尉かね」

廊下を歩いていると、声をかけられた。

「はい、そうですけど……」

声をかけてきた人は、大尉の階級章だった。この艦で大尉って事は

「私はこの艦の副長のイアン・リー大尉だ」
「やっぱり！」

「君の事はアルスター事務次官からよろしくと頼まれている。私も期待しているよ」

そう言うといアンさんは去って行った。

嬉しい。アルスターさん、ちゃんと私の事気にかけてくれているんだ。

イアン・リー大尉は、ナタルさんより物静かだけど、冷静な所がナタルさんに似ている。冷静に、マリユーさんを補佐している。いいコンビなんだろうな。

「ギャバン隊長！」

パナマ基地に降りたギャバン隊長を見つけて声をかけた。

「おお、お嬢ちゃん！」

「これ！ 持ってた」

「これは、なんだい？」

「千人針って言って、オーブに伝わる武運長久のお守りなの。お腹に巻いたり、帽子に縫いつけたりするらしいわ」

「……ありがとう！ 俺は今猛烈に感動している！」

情が移るって、こう言うのかな。なんか、ギャバン隊長が微笑ましく感じた。

それから一週間ばかりは、また新しい地球軍のモビルスーツ部隊の教育に頑張った。

そんな中、コーディネイターでありながら地球軍で戦っているというジャン・キャリー少尉と言う人に会った。

『煌めく凶星』』とも呼ばれているすごい人だ。

「やあ。地球軍に私以外にコーディネイターの兵士がいるとは聞いていたが、君のような少女がそうだったとはね」

「お会いできて光栄です！」

「何、ナチュナルでも扱えるモビルスーツもできたと言う事だし、私もそろそろお払い箱だよ」

「そんな事ありませんよ！」

「いや、部隊で疎まれているのを感じるんだよ。最近ね。なに、軍を辞めたら、また元の工学博士に戻ればいい」

「……私は、恵まれてるんでしょうか？ 一緒に戦う度に、ナチュラルとの垣根が無くなっていく気がしてるんです」

「恵まれているのかもな。あるいは、私の戦い方に問題があるのかもしれない」

「？」

「私は、プラントでも暮らしていたからね。敵の戦闘力のみを奪う戦い方を旨としている」

「！ それって、すごい腕前じゃないですか！」

「君は、プラントに知り合いはいないのかい？」

私は俯く。

「……います。その人、ザフトに入ってた、私と戦う事になっちゃって……」

「それは、辛いな。軍を辞めようと思った事は？」

「地球軍にも友達がいるんです。だから、今は、私が戦わなくちゃって」

「……戦争が早く終わって、無事だといいな。プラントの友人も、地球の友人も」

「はい……」

「おーおー。コーディネイターが御揃いで」

「コーネル隊長！」

キャリーさんと話していると、目つきの悪い将校が入って来た。

「やっぱりコーディネイター同士は気が合うのかねえ？ ん？」

何？ この嫌味な言い方？

「隊長、そのような言い方は！」

「ん？ 私はただ聞いたただけだよ？ それとも何かやましい事でもあるのかね？」

やっぱり、嫌な奴！

「ところでお嬢さん、君は敵と戦う時、ちゃんととどめを刺しているかね？」

「はあ？ 少なくとも相手が降伏するか戦闘能力を奪ったと確信できるまでは攻撃してまずけど」

「はははあ！ こいつはいい！ キャリー少尉、このお嬢さんはお前よりよっぽど戦争がわかっておいでだぞ！」

「……」

「お前も少しは見習えよ？ 敵に情けかけて中途半端な攻撃してるから逆襲されて怪我なんぞするんだよ」

そう、キャリーさんに声をかけると、コーネル隊長は出て行った。

「あの人が隊長？ 苦労するわね。キャリーさんも」

「はは……あの人の言ってる事も、わかるんだけどね……」

キャリーさんは気弱に笑った。

ザフト軍がパナマに攻撃を仕掛けてきたのは次の日だった。

アーケエンジェル隊 実質フラガ教導隊はアラスカと同じように
援護に当たる。

だけど、だんだん、救援を呼ばれる時間が間遠になり、アラスカと同じように、このまま守れるかな？ と私は思い始めていた。

「なんだ？ あいつは？」

ギヤバンは、空中から落ちて来る『何か』を見つけ思わず口を開けた。

「わかりません、空中から落ちてきて……」

「ギヤバン隊長！ ザフトの奴ら、あれを指しています！」

「何かしらねえが、邪魔すりゃいい事がありそうだな！ 行くぞ！」

ギヤバン達はその機械に辿り着いた時は、一機のジンがテンキーのような物を操作していた。

「戦場で敵に後ろを見せるってのは油断だぜ！ そらよ！」

ギヤバンはジンの背中を袈裟懸けにする。

「く、くそう……だが、もう遅い！ 低脳の地上の猿など滅びてしまえ……」

ジンは崩れ落ちた。

「なんだあ？ こいつは？ カウンターが……おい！ とにかくこいつを壊した方が良さそうだ！」

ギヤバンはその機械に向かって射撃を始める。

その時、衝撃が、走った。

「何が起こったの!？」

「わかりません！ 本部、各部隊との通信途絶！ 強力な電磁パルスの発生が確認されています！ まるで地上でローエン格林を発射したような！」

「そう……核……まさかね」

マリューは何が起こったのか思い悩んだ。

「無人偵察機を本部、マストライバー方面に出して！」

『艦長！ 私を偵察に出してください！ 第1モビルスーツ隊なら、先ほど救援したばかりで、至近です！』

「……わかりました。ではホーク中尉、アーガイル少尉、ケーニヒ少尉、偵察に向かってください。報告は密に！」

「はい！」

私が目的地点に着いた時、ザフトのジンが2機向かって来た。

私は一機を切り払う。残りの一機は、ツールとサイの砲撃を受けて爆発した。

そこには、トラックが停まっていた。そして、地球軍兵の死体の群れ……何が起こったの！？

あれは……！ 第1モビルスーツ隊の！

「エイムズさん！ ジョンさん！ 大丈夫ですか！」

「その声はホーク中尉か！？ 大丈夫だ！ だいぶやられちゃったが……ザフトの奴ら、降伏をした奴に銃撃してきたんだ！」

「何が起こったの！？ ギャバン隊長は！？」

「何しろ突然機体が動かなくなっちゃった！ 隊長は、コクピットを開けて、手を上げた所を撃たれた！ ジンの機銃で！」

「……ギャバン隊長！」

『ルナ、どうする？』

サイから通信が入る。

「……この人達を保護して、アークエンジェルまで戻りましょう。……あなた達、トラックに乗って！」

生き残りの兵がトラックの荷台に乗る。……十人もいるかどうか。

「サイ、トラック、頼むわ！」

『わかった！』

サイがトラックを持ち、私達はアークエンジェル目掛けて走る。

途中で、デインが私達を見つけて銃撃して来る！
やらせない！

ハイジャンプしてデインを撫で切りする。

！ あれは！

デインを片付けた私を見つけたのか、一機の赤いモビルスーツが飛行してこちらにやってくる！

ジャステイス。アスランの乗機……そんな言葉が脳裏を過ぎる。

「私が防ぐ！ サイトールはアークエンジェルに行つて！」

『無事でな！ ルナ！』

『後で必ず！』

赤いモビルスーツは地上に降りると、私と相對する。

『ルナか！？』

「アスラン！？」

やっぱり！

「アスラン！ これは一体どう言う事よ！？ 降伏した兵を虐殺するのが、ザフトのやり方なの！？ ビクトリアでも、パナマでも！」

『……くっ。行け！』

「え！？」

『いいから行け！ 俺が受けた命令はマスドライバーの破壊と地上本部の破壊だ！』

「……ありがとう、アスラン……」

『……そういえば、俺達がオーブに寄つた時、アークエンジェルの避難民だったと言うエルと言う子どもに会つた』

「え？」

『ルナお姉ちゃんにありがとうと伝えてくれと』

「そう。ありがとう……」

『これで約束が果たせた。デインに見つからないように行け』

「わかつたわ」

エールストライカーを使用せず、地上をひた走る。

ジャステイス……ザフトはデインの他にも次々に飛行ができるモビ

ルスーツを開発している。悔しい。

戦闘の場所らしい場所を見つける度に叫んだ。

「誰か生存者はいないの!？」

返事は無かった。

あ、あれは白いロングダガー！ キャリーさん！

「キャリーさん！ 無事ですか!？」

その声に答えて、白いロングダガーから人が降りてきた。

キャリーさん！

「無事だったの!？」

「ああ、お嬢ちゃんか。なんとか無事だよ。何が起こったんだ？

突然機体が動かなくなっちまった」

「よかった！ ザフト、降伏した兵も皆殺しにしてるから心配して

いたんです!」

「なんだって!？」

「こちらのコクピットに乗ってください!」

「ああ、わかった」

無事アークエンジェルに到着した時には、ほっとした。

アークエンジェルが、私達の到着を待っていたかのように最大戦速でパナマを離脱すると聞いた時には啞然とした。

「艦長、どうしてなんです!？」

「これ以上、私達がパナマにいる意味はないわ」

怒鳴り込んだ私に、無人偵察機が送ってきた、マストドライバーとパナマ本部が崩壊した映像が示された。

降伏した兵隊さん達が撃たれる光景も……

続いて、リニアガンタンク部隊が何発弾丸を送り込もうと、平気な顔をして現れ、駆逐する一機のモビルスーツが画面に映った。ジャステイス　アスランだ！

「これ以上ここに留まると、アークエンジェルも危険なのよ」
「……わかりました」

「これは……これは……非道な！」

ジャン・キャリーは齒軋りしていた。

彼の目の前には、降伏した地球軍兵がザフトの銃撃で殺されていく光景が映し出されていた。

その中にはコーネル隊長も　そして同じ部隊の仲間も含まれていた。

「許せん。許せんぞ！　ザフト軍！」

コーネル隊長は嫌味な奴で、反りが合わずとうてい好きになれなかったが、このような死に方をしていい訳ではない。

ジャンは憎しみを広げないための不殺と言う自分の行動を汚され裏切られたかのように感じていた。

不殺についてはあれこれ嫌味も言われもしたが、少なくとも一旦捕虜になった物を虐殺など地球軍はしなかった。

それに対してザフトはなんだ……！？

除隊などと言う考えはすっかり彼の頭から消えていた。残ったのは、ザフトに対する純粋な怒り……

「ギャバン隊長……」

落ち込んでいる所に、第一モビルスーツ隊のジョンさんがやって来た。

「ルナ中尉、ギャバン隊長は、中尉からもらったお守りを、それは嬉しがつていました」

「……せつかく作ったお守りも、効かなきゃ同じよ……」

「中尉……」

「ごめん。でも、今はそつとしておいて」

「……わかりました」

パナマから離脱して行くデッキから私は叫んだ。

「ギャバン！」

答えは、返って来なかった。

第二十四話

アークエンジェルはカリフォルニアのポイント・ロマ海軍基地に寄航した。

そこで中尉に昇進したキャリーさんも加えて、アークエンジェル隊が再結成された。

「じゃあ、エイムズさん達も、元気で」

「ああ、お嬢ちゃんもな」

第一モビルスーツ隊の生き残り　エイムズさん、ジョンさん達はこちらへ向かっていると云うアークエンジェルの姉妹艦、ドミニオンのモビルスーツ隊に異動するそうだ。

「聞いた！？　ドミニオンの艦長はナタルさんだって！」

「ほんと！？」

ミリイが教えてくれた。

「そうかあ、ナタル中尉がねえ」

「なんか、心強いね」

「うん！」

「アークエンジェル級が揃い踏みか」

そして……アークエンジェル隊に下された命令は　ビクトリア奪回！

それから忘れちゃいけない。アークエンジェル隊にまわされてきた新装備が一つ。ジェットストライカー　！　空飛ぶ翼！

「何たる様だこれは！　アラスカが防衛に成功しても、パナマを落とされてはなんの意味もないはないか！」

「パナマポートの補給路が断たれれば、月基地は早々に干上がる！」

それでは反攻作戦どころではないぞ！」

「ビクトリア奪還作戦の立案を急がせてはおるが……無傷でマストライバーを取り戻すとなると、やはり容易にはいかぬ」

大西洋連邦の要職者による会議は、パナマのマストライバー崩壊の報を受けて怒号が支配した。

「オーブは……オーブはどうなつておる！」

「再三徴用要請はしておるが、頑固者のウズミ・ナラ・アスハめ！ どうあつても首を縦に振らん」

「おや？ 中立だから、ですか？ いけませんねえそれは。皆命を懸けて戦つているといふのに。人類の敵と」

アズラエルが口を出した。ここにアズラエルが居ると言う事そのものが、ブルーコスモスの影響力を示している。

「アズラエル、そういう言い方はやめてもらえんかね。我々はブルーコスモスではない」

「これは失礼致しました。しかしまた、何だつて皆様この期におよんでそんな理屈を振り回しているような国を、優しく認めてやっているんです？ もう中立だのなんだのと、言つてる場合じゃないでしょう」

「オーブとて、歴とした主権国家の一つなんだ。仕方あるまい」

「地球の一国家であるのなら、オーブだつて連合に協力すべきですよ。違いますか？」

「うう……」

「なんでしたら僕の方で、オーブとの交渉、お引き受けしましょうか？」

「なんだと？」

「今はともかくマストライバーが必要なんでしょう？ 早急に。どちらかが、或いは両方が」

「それはそうだが……」

「皆様にはビクトリアの作戦があるんだし、分担した方が効率いいでしょう」

「ああ……」

「もしかしたら、あれのテストも出来るかもしれないね」

「あの機体を使うつもりかね君は……」

「それは向こうの出次第ですけど。そのアス八さんとやらが噂通りの頑固者なら、ちよつと、凄いことになるかもしれないねえ」

「でもさあ、ワン・アースアピール出されたる？ オーブ、どうすんだろ」

みんなでしゃべっていると、トールが言う。

そう、6月に入ってから地球連合から中立各国に連合への加入要求が行われたと言う話だ。そして、オーブはそれを拒否している。

私は最近また声を聞いた。そして夢を見た。どう考えればいいのか。声は地球軍によるオーブ侵攻を告げていた。

……でも夢では。私はザフトとしてオーブを攻めていた。どう考えればいいのか？

「このままだと、オーブは地球軍に攻められちゃうかも知れない」

「サイ、そんな無茶な!？」

「だって、地球軍はパナマを失って、マストライバー一つもないんだぜ？ 地球に残ってるマストライバーは三つ。ビクトリアとオーブとカオシュンだ。カオシュンはカーペンタリアに近い」

「オーブの方が、近いわよ」

「オーブはまだザフトの占領下にはないからね。余計に魅力的だろう。オーブが手に入ればカーペンタリアへの牽制にもなる」

「オーブも、なんだよ。モビルスーツとか戦艦とか作らせて置いてさあ、今更だよ」

「カガリがいるわ。あの子、ザフト嫌いだから、もしかしたらウズ

ミ様を説得してくれるかもしれない」

「……でも、そうになると、今度はザフトが攻めるかもな。せつかく地球軍のマストライバーをゼロにしたんだからな」

「カーペンタリアのすぐそばだしね」

私達は無言になってしまった。

「なるようになるわよ」

翌日の外出日、サンディエゴの町へ繰り出す私達。

いつまでも暗いヘリオポリス組を見てミュージーディーが軽く言う。

「でも、志願した時はこんな事になるなんて思わなかった……」

「そうよね、だってモビルスーツや戦艦をこっそり作らせるくらい仲が良かったって事でしょ？」

「そうだよな。作戦行動中で辞める訳にも行かない」

ミリイとトールがぼやく。

「国際情勢は複雑怪奇ってね。さあ、今日は楽しもうよ」

ミュージーディーなりに気を使ってくれるのだろう。

「そうよね。なるようにしかならないんだ。楽しめる時は、楽しもう？」

「ん、そうね」

私達はまずシーワールドへ行った。

シャチのShamur Rocks。

シャムー（シャチ）は結構リズム感がいい。トレーナーのお兄さん、お姉さんも踊りまくり。ギターのお兄さんもノリノリ！

大音量のロックのなかでのシャムーの演技が冴えている。観客の子供も踊りながら観てたりして、可愛い。

「こんなに復興できてるなんてね」

「あたし、こんなの見るの初めて！」

ミュージーディーとシャムスははしゃいでいる。スウェンさんも静かに楽しんでいるようだ。身体がリズムを取っている。

それからアシカとカワウソのショーを見た。シャムーのショーをパロディしてるみたいで笑える〜！ それからペンギンと直に触れ合えるスペースに行った！ かわいく〜！

……気が付いたら、日が落ち始めていた。

「Seaport Village通って行こうぜ」

シャムスが言った。なんでも、夕暮れ時はデートスポットになるそうだ。

小物売る店やレストランが並ぶ。店には大した物は置いてないけど、散策するにはいい雰囲気だ。ツールとミリイは二人の世界に入っちゃってる。

私は、湾岸に突き出た景色のいいシーフードレストランで夕食を取った。

うーん、今日はいい気分転換になったな。

「おい、あれ……」

ん？　なんか、周りから見られてる？

「けっ。コーディーの糞女が一丁前にお楽しみかい」

隣の恰幅のいい男が言う。

なに！？　なに！？　私は頭が真っ白になった。

「おいおい。止めとけよ」

連れらしい髭の男性が太った男をたしなめる。そしてこちらに謝って来た。

「軍人さん達ご苦労さん。どうもすまんね。すっかりあいつ酔っちゃまって。ほら、あんたらの事、新聞に出てるぜ」

髭の男性が新聞を振り投げてきた。

そこには、いったいどうやって撮られたのか、フラガ教導隊のメンバーが写真入りで紹介されていた。

そして　私の写真は特別大きく『地球軍で活躍するコーディネイター！』と、でかでかとキャプションが付いていた。

「おい、大丈夫か？」

シャムスが声をかけて来た。

「う、うん」

「思い切りショックを受けている顔だぞ」

「だいじよぶ。……いったい誰がこんな事……」

震える手で記事を読み進む。

「ジェス・リブルって奴か……」

顔をしかめながら記事の末尾を指差しシヤムスが言う。

ジェス・リブル　それが記事を書いたジャーナリストの名前だった。

「悪気はないみたいだが、無神経だな」

私達は黙りがちに基地へ帰った。

基地に帰ると、私の気持ちを明るくする知らせが待っていた。

常夏の国オーブ

政庁の会議室では熱戦が繰り広げられていた。

「お父様！　この期に及んでは、もはや躊躇っている時ではありません！」

カガリは叫んだ。

会議は紛糾していた。なにしろ実質的 대표首長の親子が論争しているのだ。

「お前には戦争の根を学べと言ったはずだ！　アフリカまで言って、何を学んできた！」

ウズミはつい、公然の秘密、と言う物まで公式の場で言ってしまう。

「ザフトの非道をです！」

父の叱責に屈せず、カガリは言う。

「元々、今回の戦争はザフトに非があったのです！　旧来の植民地独立戦争ではありません！　プラントは、元々理事国が建設した物です！　そして一定の自治、武装さえも認められていた！　父上は、

モルゲンレーテ社の社員が、自分達は独立国だと主張し始めたらどうするおつもりですか？」

「一定の自治とは、どうしてそう思うのだ！ プラント側は弾圧されていたと主張しているぞ」

「有名な、婚姻統制がそうですね！ 更に彼らの我々には理解しがたいコンピューター任せの選挙制度。これらは皆戦争前から導入されています。自治権なくして、どうしてそのような制度が取れるのか！？」

「ザフトの建軍もそうじゃな。彼らが言うほど弾圧されていたならば、そもそもそのような事すら不可能なはず」

コトー・サハクはどうやらカガリを応援する事に決めたようだ。

「先月のプラントの情報誌の記事では、プラントでは牛鍋が流行りだそうですね」

ウナト・エマ・セイランもさりげなくカガリの主張に沿った発言をする。

息子の婚約者、と言う事だけではないだろう。

「大洋州は親プラントですからな」

「地球の人々は食べるのに事欠く人々も多いのに……」
それに賛同する声がかかる。

カガリはそれらの声をバツクに言う。

「……お父様、今回の戦争は、戦争であって戦争ではありません。

ザフトと言う犯罪者に如何に対するか、それが求められているのです。地球上の国々に！ 犯罪者がいて、みんなで自警団を組んでいる時に、家訓だからと言って参加せずにいれば、どう思われるでしょうか？」

「うむ。ザフトの非道と言うが、血のバレンタインはどう考える」

「ザフトが強調する血のバレンタインは、地球連合の対プラント宣言戦布告後です。それに、宇宙では、核はただ威力の大きな爆弾と言うに過ぎません。宇宙放射線が常に降り注いでいるのですから」

「続けよ」

ウズミは言った。最初は、娘がただ感情的に対ザフトに論陣を張っているのだと思っていた。だが、なかなか言うではないか。これなら。オーブの次代は安泰かもしれない。……確実に次の世代は育っている。それを頼もしく思うと同時に少し寂しさも感じた。

「更に。血のバレンタインからエイプリルフルクライシスまで二ヶ月も無いのです。そのため開戦前から地上侵攻のためにニュートロンジャマーを量産してた疑惑、BC兵器工場との嫌疑がかかってたユニウス7を対連合世論喚起の生贄にした疑惑があります。ユニウス7攻撃は、正式な承認によるものではなく一部の者によって引き起こされている事はご存知でしょう。狙うなら中枢であるアブリリウスの筈なのに、何故か政治的には影響の少ない農業コロニーを狙っている。核を使うなら、圧倒的大火力で反撃の余地が無いほど徹底的に叩くのがセオリーなのに、何故か半端な攻撃に留まり、反撃の機会を許している」

一気に言ったカガリはここで息を継いだ。

「それは、想像に過ぎんな」

「確かにそれは認めます。しかし例えそれがただの疑惑だったとしても、ニュートロンジャマーの地球への散布は非人道的な大量破壊兵器の無差別な使用であって、ユニウス7核攻撃への報復としては到底正当化できません。ザフトは他のコロニーに対して攻撃を行い、大量の一般人の居るコロニーを大量に破壊し多くの人々の命を奪ったくせに自分達は条約違反のコロニー一基の被害で地球人口の一割を死に至らしめた……」

ウズミは眼を閉じカガリの主張を聞いていた。その様子からは、何を考えているのかわからない。

……ユウナ・ロマ・セイラン　カガリの許婚は、呆然としていた。子供だ子供だと思っていたカガリが、理路整然とした説得力のある発言で会議を主導している。

カガリから目が、離せない。頬が紅潮しているのがわかる。やばい。やばいぞユウナ。本気で惹かれちゃった。

くそうつ！ ユウナは悔しさを感じた。さすが五大氏族つて事か？
いや、認めない。認めてなんぞやるものか！ 家格による物だなどど。認めてしまったら、一生カガリに追いつけないじゃないか！
ユウナは決意した。セイラン家の力でなく。絶対に、実力で、カガリの夫には僕がふさわしいと言わせて見せる！
なってみせる！ カガリにふさわしい男に！

カガリの演説？は終盤に入っていた。

「それに！すでにオーブには、地球軍として戦争に参加している者もいるのです！それがオーブのためになると信じて！」
言うまでも無く、ルナマリア達ヘリオポリス組の事だった。

カガリは、極論すればルナマリアを祖国が裏切らないために今、父を相手に戦っているのだった。

「もうよい」

ウズミは手を上げカガリの発言を止めると、口を開いた。

「そうですね。赤道連合も、スカンジナビア王国そしてオーブも地球連合に参加を表明して来ましたが」

アズラエルは面白そうに言った。

「せっかくこれから最後通牒を突きつけようと準備していたのに、無駄になりましたねえ。まあ手間が省けたから良しとしましょう」
アズラエルは数枚の書きかけた原稿をごみ箱に放り込んだ。

「それはよかったですね、あれのテストが、できなくなりましたねえ」

「いえ、そうでもないようで」

「なんです？」

いぶかしげにアズラエルは秘書に問う。

「オーブが、予想されるザフトからの攻撃に対する防衛に対して協

力を要請して来ました」

「早速ですねえ。ま、いいでしょう。ザフトが攻撃して来るなら……いや、必ずして来ますか。あのパナマで見られたザフトの新型機相手にテストするとしましょう。そうそう。アルスター事務次官お気に入りのアークエンジェル。まだカリフォルニアですね？ ドミニオンと一緒にオーブ防衛に参加させましょう。オーブ出身の者がいるようですし気合も入るでしょう」

「はっ」

秘書は、アズラエルの命令を形にすべく出て行った。

アズラエルは、オーブを攻めなくて済む事に内心ほっとしている自分を感じていた。アルスター事務次官が知らせてきたオーブ出身のストライクのパイロット。

「ルナマリアとか言ったか……」

似ている。彼女　マリアはアズラエルより年上で、名前に似合わずガキ大将だった。アズラエルも、彼女のせいで散々な目にあっただが、それが嫌でなかったのは何故だろう。

その彼女もS2型インフルエンザであっけなく死んでしまった。

それ以降アズラエルは心の奥の宮殿に女性を住まわせた事はなかった。

「誕生日も7月26日……まるで生まれ変わりのような……ははは。馬鹿な」

アズラエルは自嘲した。

「まだまだ甘いな、僕も……」

（「人なんてあつけないよなあ」）

（「ああ……」）

（「先日まで元気だったのにさ。お嬢……。S2インフルエンザって怖いよね」）

（「……そういえば、さ。なんでお嬢の事お嬢って呼ぶようになったんだっけ？」）

（「覚えてなかったのか？ ムルタ？ お嬢をお嬢って呼ぶようになったのは、お前が原因じゃないか」）

（「え……？ 僕が原因？」）

（「お前、鈍かったからなあ。お嬢がお前の事好きだったのも知らないだろ」）

（「嘘だろ！？ お嬢が僕の事……」）

（「お嬢はムルタが関わるとコロつと態度が変わってたからね。ばればれだったよ」）

（「やったー！ あたしの勝ちね！ んー、じゃあ、今度は『お嬢様と下僕』ごっこ！」）

（「なんだそりゃ。なあ、アルベル、アンドレア？」）

（「きいいー！ なによ！ ちゃんと言う事聞きなさいよ？ ムルタ！ なんか飲み物買ってきなさい！」）

（「嫌だね。めんどくさい。誰がお前の言う事なんか」）

（「じゃんけんに負けたんだから当然でしょ！？ じゃないと背骨

折る」)

(「そ、それは止めてくれ」)

(「じゃあ、まず呼び方からね。『お嬢様』。ほら呼んでみなさい」

)

(「お嬢!」)

(「何よそれ! ちゃんとお嬢様って呼びなさいよ」)

(「お前なんかお嬢で充分だ!」)

……そうか、思い出した。

アズラエルは目を覚ました。

懐かしい、夢を見た。

「涙? はは」

知らずに泣いていたらしい。でも、不思議と心は満たされていた。たとえ夢でも、S2インフルエンザで死んだお前らに会えるなんてな。

「お目覚めでございますか」

「……ああ、今起きた」

「ザフトによる近時日のオーブ侵攻はほぼ確定的です。それから、カリフォルニアのポイント・ロマ海軍基地に第4洋上艦隊が集結を完了いたしました。ドミニオンも到着いたしました。例のあれも一緒です。アークエンジェルの準備も整っております」

「そうか」

とだけ、アズラエルは言った。

お嬢……これから、君じゃないけど、君によく似た人の故郷を守つてあげるよ。

ブーステッドマンに戦闘用コーディネイター……僕今がしている事を君が知ったら、君は僕を嫌うだろうね。でも君が笑ってくれるな

ら僕は悪にもなる。

第二十五話

「おい、ルナ！ 暇なら模擬戦しないか？」

「いいわよ。シヤムス！ なんならサイとか誘って二対二にする？」

「いや、今回は接近戦の腕を磨きたいからな。一対一でいい」

「おーけー！」

シヤムスは、私がパナマでギャバンを亡くしてから、私が一人で居ると気を使ってよく声をかけてくれる。

シヤムス達ともすっかり仲が良くなつたなあ。最初に会った時には仏頂面だったのに、今はこうして笑顔を向けてくれる。嬉しい。

休憩室を出る時、スウエンが何かいじってるのが目に入った。

「なあに、それ？」

「……ああ、星座板だ。今夜の星座を調べてたんだ」

「スウエンは星が好きなものな」

そう、スウエンは星が好きだ。私物で望遠鏡も持ち込んでいる。

「今夜はどんな星座が見えるの？」

「……白鳥座とかヘルクレス座とかだな……星ならベガ、デネブ、アルタイルの夏の大三角形とか。よかつたら、一緒に見るか？」

「うん、見たい！」

夜、デッキにスウエンの望遠鏡を持ち出して天文観測と洒落込んだ。スウエンの望遠鏡は反射式の本格的なやつだ。

「今の時間なら……ほら」

スウエンが望遠鏡を南の方に向け角度とか調整してくれる。

「うわぁ……！」

覗き込んだ先には、天の川のいつぱいの星空を背景に、メノウの玉のような球体が浮かんでいた。

「木星だ」

「……ここに、ツイオルコフスキーが行ったのよね……」

「ああ」

「木星か……人間はもうそこまで行ったんだな」

シヤムスが呟く。

「はい、シヤムス」

シヤムスに場所を譲る。

「おう……おう！」

シヤムスも感嘆の声を上げる。その後ろでわくわくしながらトール達が順番を待っている。

満天の星空を振り仰ぐ。

「怖いくらいにきれいな」

そっとミューディーが寄り添ってくる。

「うん」

本当に、こんな夜空を見ていると人間同士で争っているのが馬鹿らしくなる。

戦争、早く終わればいいのに……

私達がオーブ防衛のために南下する前日、ナタルさん始めドミニオンの幹部、そして国防産業連合理事、ブルーコスモスの盟主ムルタ・アズラエルさんの訪問を受けた。

なんでも、アズラエルさんもアークエンジェルの姉妹艦、ドミニオンでオーブまで行くらしい。

なんでアズラエルさんのような立場の人が、そんな事をするのかわからない。

スウエンさん達とはすでに顔見知りみたいで、会話を交わしていた。「君達の活躍は聞いています。僕も誇らしいですよ。頑張ってくださいよ」

「はい」

「はっ」

「あなたが『エンデュミオンの鷹』ですか。お目にかかれて光栄で

すよ」

「は。こちらこそ」

フラガさんの次にアズラエルさんは、私の前に来た。しばらく私を見つめている。妙な沈黙だった。

「ルナマリアさん、戦争が終わるまで死なないくださいね。絶対に」

そう言うと、サイたちの方へ歩いていった。なんだったんだろう？

「おねえちゃん、よろしくね〜」
ん？

「俺？ 俺はクロト・ブエル。地球軍の新型機、レイダーのパイロットだよ」

「そう。よろしくね？」

「へへ。俺達が来たからにはおねえちゃんの出番は無いぜ！」

「ふふ」

「あー！ 馬鹿にしてやがんの！ 気に入わねえ」

「あらら。頼もしいなって思っただけよ」

「ふ、ふーん。そう言う事にしといてやる」

「俺はオルガ・サブナックだ。行くぞお前ら」

「俺がまだだ」

「早くしろよ」

「シャニ・アンドラスだ。じゃあな」

最後に、イヤホンを首にかけた人が自己紹介して、ドミニオンのパイロットらしい3人は去って行った。

癖の強そうな人達だったなあ。ナタルさんも苦勞してそう。

「よお、姉ちゃん」
え？

「ドミニオンのモビルスーツ隊のパイロットのダナ・スニップだ。よろしくなー！」

「あ、まだパイロットいたんだ。よろしくね？」

「あんなブーステッドマンと一緒にするなよ」

「ブーステッドマン？」

私が聞き返すと、

「ダナ」

スウエンさんが静かな口調で止めた。

「おおつといけねえ。なあ、姉ちゃん。姉ちゃんはヘリオポリスの避難民だったんだって？ よく除隊せずにいるよな？」

「色々あつてね」

「ふふふ。俺は、君と俺は同類なんじゃないかって思ってたよお」

「同類？」

「そ。同類。戦闘に魅入られちゃった同類。じゃなきゃ自由を愛する俺が軍隊なんて居てやるものかよ」

戦闘に魅入られた？ 依存は、してるかもしれない。でも！ いか、うん。この戦争が終わればそんな事終わる！ 終わらせる！

「お、凶星？ 嬉しいねえ」

黙ってる私を見て、肯定と受け取ったのかダナさんが口を綻ばせる。

「……私は戦闘になんか依存しません！ しないようにしています。

勝てば確かにみんな誉めてくれるし嬉しいけど、だって、いつか戦争は終わるんですよ？」

私は、デンギル先生に言われた事をダナさんにぶつけてみた。

「俺だつて依存なんかしてねえよ。戦争が終わる？ 結構！ そんなときやそんな時。軍隊おん出て自由な暮らしてやつをするさあ。それを思うと戦争が終わるのが楽しみだね。じゃ、おい。エミリオ、黙ってんなよ」

「エミリオ・プロデリックだ」

ダナさんの後ろにいた神経質そうな顔の人は、それだけ言うつとぶいと向こうへ行ってしまった。

「あ、おいエミリオ！ しょうがねえなあ。じゃまたな！ 姉ちゃん」

「エミリオ……俺はあいつが嫌いだ」

え？ スウエンさんが珍しく感情のこもった声で呟く。

「上官の命令を無視して敵を虐殺した……俺はそんな奴は嫌いだ。俺はあんな風にはならない！」

「第一防衛線、突破されました」

「第6特化中隊、交信途絶！」

オーブが地球連合に組した事が発表された日から程なくして、オーブはザフトの攻撃を受けた。

カガリはじりじりしながら国防本部に座っていた。だんだんすり減らされていくオーブの戦力。

本当に良かったのか？ 自分のせいでオーブは地球連合に組した。だが、他の道はなかったのか？ いや、あくまで地球連合の要求を突っぱねても、地球連合と関係が悪くなったただけだ。それなら、今まで協力関係にあった地球連合と組んだ方がなんの関係も無いザフトと組むより100倍いい……カガリの思考は堂々巡りをしていた。

「カガリ、少し落ち着け」

「はい、父上！」

ふと、ユウナが目に残った。青ざめた顔をしながら、それでも腕組みをしてしっかりと戦況図を睨んで、時々傍らの士官と真剣な顔をして会話を交わしている。

そうだ、弱虫のユウナでさえ気張っている。自分もしっかりしなければ。

「もはや、賽は投げられたのだ。防衛の命令を出した後は、もはや地球軍の援軍を待つしかない。彼らもまさかオーブを放っておかぬ

だろうしな」

「はい！」

「学べ！ この場において、学べるほどよきことは無いぞ」

「はい！」

オーブをととうとつ視界に捕らえた！ 懐かしい故郷。でも、今そこは戦場で……

私とフラガさん、スウェンさんは一足先にジェットストライカーでアークエンジェルから飛び立つ。

サイ達は直接アークエンジェルでマストライバーのあるカグヤ島に突入すると言う。

「じゃ、ちよつくら行って来るわ」

「後を頼むわね」

「おう、任せとけ！」

「じゃあ、ルナマリア・ホーク、行きます！」

今度は負けない！ 地を這って逃げることにしかできなかったパナマとは違う！

『おねえちゃん！』

え？

レイダー……って事は、確かクロト・ブエル？ 背中にカラミティを乗せてる。

『ははははは！ 先行くねー！』

『馬鹿野郎！ むやみにスピードあげんじゃねえ！ 落ちるだろうが！』

『うつせーよ！』

『……先行くぞ』

その後から、あれはフォビドゥンか。

『あー、シヤニー！ ずるいぞ！』

レイダーとフォビドゥンは追いつ追われつしながらカグヤ島目指して進む。

『俺達も負けられんな』

「ええ！」

私達もジェットストライカーを吹かした！

カグヤ島には、たくさんのザフト軍が取り付いていた。

『味方が上陸する隙間を作る！ 海岸掃除だ！』

「はい！」

ミサイルポッドからミサイルを放ち、飛んでいるデインを、グウルを撃墜！

続いて空対地ミサイルを投下！

ミサイルは見事に海岸に取り付いているザフトのモビルスーツの真ん中で炸裂した！

スピアヘッドとスカイグラスパーの編隊が空中で戦闘に入る。

『よし！ 相手が混乱している内に叩くぞ！』

「はい！」

海岸でのろのろ歩いているザフトの水中モビルスーツに向かう。

片っ端からビームライフルで撃つ！ 撃つ！ 撃つ！

『君達は地球軍か！？ 助かった！』

オーブ軍から通信だ。

「まーかせて！」

私はひとしきり海岸のザフト軍を駆逐すると、また空へ舞い戻る。目に付く端から、デインを、グウルを墜とす！

そこへ待ちに待っていた援軍がやって来る！

次々にカグヤ島上空へとたどり着く大西洋連邦の軍用超大型長距離輸送機C-10ギャラクシーなどから、次々に地球軍のモビルスーツがパラシュート降下する！

とうとうアーケエンジェルはカグヤ島の海岸に乗り上げた。

「行くぞ！」

「はい！」

フラガ中佐がいないので、アーケエンジェル隊の指揮は先ごろ中尉に昇進したキャリー中尉が取る。

サイとトールは少し心細かった。フラガ中佐もルナもいないのだ。

「トール・ケーニヒ、デュエルダガー、行きます！」

「サイ・アーガイル、バスターダガー、行きます！」

「こんな形でオーブに帰って来るなんてなあ」

「私語は慎め！　ここは戦場だ！」

「は、はい！」

「ザフト軍モビルスーツ確認。相手の前衛は私とミューディー少尉で叩く。残りは任せる」

「はい！」

サイとトール、シャムスは後方のザフト軍モビルスーツに照準を合わせ、砲撃を開始する。

混乱した所にキャリーとミューディーが突っ込む。

「す、すごい！　ルナもすごいと思ってたけどこの人は別格だ！」

思わずサイが呟く。

「さすが異名持ちって事か……」

トールも呟く。

キャリーは、流れるような動きで一瞬も止まる事無く相手の攻撃を避け、攻撃ではほとんど一撃で相手のコクピットを潰し、鬼人のように暴れまわっていた。

「砲撃止め！　みんな突っ込んで来い！　私がフォローしてやる！」

「実戦は最大の訓練だぞ！」

「うおおー！」

そのキャリアの言葉に、まずシャムスがビームサーベルを取り出し真っ先に突っ込む。

「うひー」

サイとトールもそれに続く……

程なくして付近のザフト軍は駆逐された。

「ザフト軍はマスドライバーの破壊が目的のはずだ！ 防衛する。行くぞ！」

「はい！」

サイとトールのキャリアへの感情は強い信頼へと変わっていた。彼らの戦いは続く。

第二十六話

『軌道上から5つの降下物体を確認！ 気をつける！』

オーブ軍から知らせが入った。

あ……唐突に頭の中に先生の声が

『グングニール この兵器は強力な電磁パルス（EMP）を発生させ、電子部品だけを破壊する兵器だ。C・E・71年5月25日のパナマ攻略戦で使用された。このザフト軍兵器に利用されている「EMP」つまり「Electromagnetic Pulse」電磁衝撃波は電離層の乱れを引き起こし、通信や精密機器等を使用不能にする。使用側であるザフト製兵器（MSを含む）がEMP対策を万全に施していたのに対し、地球連合製兵器（MSを含む）及び施設が一応、施しているものの、強力すぎて対抗しきれず使用不能になり、パナマ基地陥落の最大の理由となった。なおこの兵器により、基地にあったマスドライバーもEMPに対し無防備であったため破壊された』

「こいつだわ！ パナマが陥落した原因は！ 強力なEMP兵器よ！ 破壊して！ ザフト軍をそいつに近づけさせないで！」

「わかった！」

「わかった！」

「わかった！」

オーブ軍からも地球軍からも応答がある。

まず一つ！ 空中で、私とフラガさん、スウエンさんで仕留めた。

『墜ちたのはあそこだ！ 行くぞ！』

「はい！」

ザフトのディンが！ 向かっている。

スピードなら、負けない！

ビームサーベルを抜き、デインを切り裂く。

『行け！ お嬢ちゃん』

「はい！」

私はグングニールの近くに舞い降りると、ビームライフルで撃った。爆発。

ひとつつつ、オーブ軍、地球軍が破壊したと報告が入る。

後ひとつ！

『うわー！ あ、あれは赤い悪魔だ！』

『誰か！ 誰か来てくれ！ 救援を！』

私達に救援要請が入ったのはその時だった。

『ちょうど、残るひとつが落ちた所だ。行くぞ！』

「はい！」

「アスラン！ 残りの四つはやられたようですけど、この一つだけでも、マストライバーは効果範囲に入るはずですよ！」

「ああ、ニコル！ しかし、こいつらしつこい！ なかなか近づけん！ なんとか破壊されないうちに突破しないと……！」

地上の地球軍のモビルスーツはじりじりグングニールに近づいていく。

「行きますよ！ フルバースト！」

ニコルのフリーダムフルバーストの一撃で5機を超える敵のモビルスーツが撃破される。だが、地球軍は雲霞のように湧いて来る。相手もここが勝負どころとわかつているのだろう。撃ち上げられてくるビームがまるでシャワーのようだ。

！ 飛んで来る物がある。あれは地球軍の新型機か！？
ニコルはビーム砲をそちらに向ける。

「ああ！ ビームが！？」

「どうした!? ニコル?」

「あのモビルスーツに撃ったビームが曲がりました! 気をつけてください! アスラン!」

「ああ。あ! あれは鳥か? いや違う、モビルアーマーだ!」

『お前の相手はこっちだよ! あはあは』

鳥の形状をしたそのモビルアーマーは、背中からバスタータイプのモビルスーツを降ろすと、こちらに向けて何かを放ってきた!

「あああ、こ、これは鉄球か!?!」

『ちっ、外しやがった。もう一回行くぜおらー! 滅殺!』

「なんて攻撃を! くっ、こいつら、強い!」

そう言っている間にも、下からバスタータイプのモビルスーツがビーム砲を連射してくる。

「アスラン! あれはストライクじゃ?」

「何!?!」

アスランが見ると、確かにパナマで見覚えのある、赤いストライクを含めた3機のモビルスーツが飛行してくる。

「くっ。ルナマリアか!?!」

そのストライクは真っ直ぐグングニールを目指して降下して行く。

「やらせませんよ! フルバースト!」

だが、ストライクは急激な機動をして躲す。

『あはは! お前の相手はこっちだー!』

「くっ。しつこいですね!」

ニコルはレールガンを撃とうとするが、そのモビルスーツは強大な推力を生かしてフリーダムの上へと移動する。

「これでは……ビームしか使えない! 厄介な!」

隙を見て素早くビーム砲を撃つが、相手も素早く対応して背部の装甲を被る。

「うわあ!」

「どうした! ニコル!?!」

「ビームをこちらの方向に曲げられて……廃熱板をやられました!」

爆発音がする。とうとう最後のグングニールもやられたようだ。

「この調子じゃ、俺達だけでマスドライバーを破壊するのは無理だ！ ストライクが攻撃に参加してくる前に引くぞ！」

「……仕方ありませんね。せっかく期待されて核動力機を託されたのに、悔しいです」

「いくら核動力でも、質は量が無限に増えれば潰されると言う事だろう。俺も悔しいが、仕方がない！」

アスランだろうジャステイスと、ザフトの砲撃戦用のモビルスーツ
フリーダムと言う名前が頭に浮かんで来た　　は、私達が最後のグングニールを破壊すると、撤退して行った。

「あの子達、強いね」

「ああ。追っていったがああの分なら、心配はいらんだろう」

最後のグングニールを破壊して程なく、ザフトは撤退を始めた。

「撤退する所を叩くぞ！　ここでしっかり叩いておけば、オーブも当分は安全だ」

「はい！」

！　ジャステイス！　フリーダム！

とうとう海岸まで敵を追い詰めると、そこには紅白二機の機体が暴れまわっていた。ザフトの潜水母艦を潰そうと、スピアヘッドが次々に飛んで来るけど、次々に落とされていく。

フリーダムのビーム砲2門、レールガン2門のフルバースト、ジャステイスの針ねずみのような火器の射撃は容易に近づけない。

「行くぞ！　お前ら！」

「はい！」

あの子達は……？　いない　　！　やられたの？　まさか！？

フリーダムは引き続き潜水母艦の護衛に当たるようで、ジャステイ

スだけがこちらに突っ込んできた。

くっ、パワーが違う！ ビームサーベルで攻撃を仕掛けるものの、ジャステイスもビームサーベルを抜き、打ち合う。

押しやられる！

「お前らコーデイネイターを相手に何をちんたらやっている！ さつさと殲滅しろ！」

え？ 見知らぬストライク、いいえ、あれはジェットストライカーを付けた105ダガーがビームライフルを撃ちながら突っ込んでくる！

ジャステイスはすつと一気に私から離れた。そしてブーメランを投擲した。それは突っ込んできた105ダガーの背中を襲い……真つ二つにされた105ダガーは海岸に落ちて行った。

「エミリオの馬鹿が。逸りやがって」

スウエンさんが呟くのが聞こえた。

どうやらザフトの潜水母艦が収容を終え撤退を開始したようだ。フリーダムとジャステイスが海上へと飛び去って行く。

「深追いは、やめとくか」

フラガさんがぼつりと言った。

「いやいや、お見事でした。流石ですな、サザーランド大佐」

「いええ、ストライクダガーは良い出来ですよ。オーブでアズラエル様が苦戦されたのは、お伺いした、予期せぬ機体のせいでしょう」

「まだまだ課題も多くてねえ。こっちも。しかしよもや、カラミテイ、フォビドゥン、レイダーで、ああまで手こずるとは思わなかった」

「さすがはプラントの技術力、と言う事でしょうか」

「どちらにしるあれは何とかしなきゃねえ。手に入れられるかな」

「それでご自身でカーペンタリアへと？」

「ああ、カーペンタリア、そこで出て来なきや宇宙へ上がってプラントを叩けば、防衛のために必ず出てくるでしょう？ あのとこの機体もしかしたら、核エネルギー、使ってるんじゃないかと思ってるさ」

「なんですと!？」

「確証はないけど。でもあれだけのパワー、従来のものでは不可能だ」

「ニュートロンジャマーも、コーディネイターの作ったものですからなあ。確かに奴等なら、それを無効にするものの開発も可能でしょうが、それが本当なら由々しき事態ですな」

「おいおい、国防産業理事の僕の目を疑うのかい？」

「いえ……そのようなことは……」

「大体我々は弱い生き物なんだからさ。強い牙を持つ奴は、ちゃんと閉じこめておくか、繋いでおくかしないと危ないからさあ」

「宇宙に野放しにした挙げ句、これでは、ですな」

「頑張つて退治してくるよ。僕も」

「しかし、さすが『煌めく凶星』『』ですね！」

アークエンジェルへ帰還する道すがら、トールはキャリーに声をかけた。

「感心しました。本当にお強いですね」

サイも、ため息と共に感嘆の言葉を掛ける。

「本当にさあ。ほとんど一撃で倒してるんだもんねえ」

ミューディーも感心したように言う。

「なに……」

だが、キャリーはちょっと困惑したような、不本意そうな声で応じる。

「どうせ殺すなら、できるだけ苦しませずにと思っているだけだ……」

その驕らぬ態度に、トール達は一層尊敬の念を新たにした。

アークエンジェルは、僚艦ドミニオンとさほど距離を置かずに海岸に乗り上げていた。

私は、アークエンジェルに降りる前にドミニオンに着艦した。海岸で見かけなかった、あの子達の事が気になったからだ。

「あ、ホーク中尉！ ご無事で！」

エイムズさんが話し掛けて来た。

「そうよ。あの子達は無事？」

「あの子達？」

「そう、確かクロトとか、オルガとか、シャニとか言ってた」

「あー。あの妙な子達かー」

「知ってるの！？ 無事？」

「彼らは無事ですよ」

後ろから声が掛かった。

「アズラエルさん！」

「あなたもご無事なようですね。よかった」

そう言つとアズラエルさんは微笑んだ。

「よかった……ジャ……いえ、ザフトの新型機二機と戦っていたはずなのに姿が見えなくなっていたから、心配していたんです」

「そうですか」

「……？ アズラエルさんの顔が歪む。

「……まあ、いいか」

「え？」

「来なさい。こちらだ」

私はアズラエルさんに着いて行つた。

向こうから呻き声が聞こえて来る。声の元へ向けて私は走つた。

そこでは、あの子達が頭を抱えてごろごろ転がりまくって呻いていた。

「これは！」

「貴方達、ルナマリアさんが貴方達の事を心配してわざわざ見に来てくれましたよ」

その声に、3人が頭を上げる。

「よ、よお、おねーちゃん」

クロトがなんとかと言った様子で返事をした。

「どうしたんです？ これは？ どこか怪我でも！？」

「いや……時間切れさあ……くっ」

「アズラエルさん、時間切れって……？」

「この子達には、コーディネイターに対抗するために、常人をはるかに超える能力を引き出す薬が与えられています。その薬の禁断症状ですよ」

「そんな、事って、まるで麻薬じゃないですか……！」

きつとなってアズラエルさんを振り向くと、そこには、泣いているような表情のアズラエルさんがいた。

「勝つために必要だったんです。家は伝統的に反コーディネイターでしてね。こんな研究も昔からやっているんですよ」

なら、なんで貴方はそんな、泣いているような顔をしているの？
気がつく、私はアズラエルさんの頬に手を当てていた。

「なっ！ なにを！」

アズラエルさんは後ずさった。

「ごめんなさい。なんだか泣いているように見えたものだから」

「泣いている！？ 僕が？ はは！」

「アズラエルさん……この子達を元に戻す研究はやってないんですか？」

「そんなもの、やってませんよ」

「じゃあ、やってください。戦争は、地球の国のほとんど全てが地球連合に参加しているんだから、もうすぐ戦争は終わるでしょ？」

「小さな小競り合いは、いつの世もありますよ」

「そうしたってこんな……！」

「大人の世の中は汚い物ですよ。そして、汚い事をしなけりや成し遂げられない事もあるんです」

悄然とした私を、アズラエルさんはストライクルージュの所まで送ってくれた。

やっぱり嫌われたかな。ははは。なんでわざわざ、露悪的な事をしてしまったんだろう。

アズラエルは自嘲する。

肩を落として歩く彼女を抱きしめてやりたくなる。

だが、自分にはその資格はないのだ。こんな汚れた手をした奴に、資格なんてあるものか！

……そうか。それははっきり自覚するために、こんな事をしたのか。

「じゃあ……送って頂いてありがとうございます」

その俯いた暗い顔を見て、つい、言ってしまった。

「検討してみますよ」

「え？」

「彼らの治療法の研究、検討してみますよ。まあ薬物依存の治療法にも応用できるでしょうしね」

「ほんとですか!？」

検討する　　どうとでも取れる言葉だと言つのに。

ああ、ルナマリア。なんてまぶしい顔で君は

「ありがとうございます！」

いいさ。その笑顔を見ただけで僕は。

第二十七話

「なんとか防げたようだな……」

オーブ国防本部では安堵のため息と歓喜の歓声が空間を満たしていた。

「では、私は地球軍幹部と会見をして来る。後を頼むぞ」

ウズミが立ち上がる。それをきっかけに、周囲は戦闘の後始末への奇妙な活気溢れた行動へと移って行った。

「では、ユウナ様、私はカグヤ島へ向かいます」

「待ってくれ、僕も行くよ」

「……戦闘の後と言うのは結構ひどい状況ですよ？」

「現場と言う物も知っておかなきゃねえ。君らだって現場も知らない者に命令されるのは嫌だろう？」

「確かに」

その士官は微笑んだ。

「では、行きましょうか」

「待て！ ユウナ、私も行く」

カガリも立ち上がる。

「カガリ……いや、君には君の仕事がある」

「え？」

「ウズミ様は地球軍の人達と話し合いが合って忙しい。オーブの国民は戦闘が終わったとは言えまだまだ不安だろう。ホムラ様と一緒に安心させるのが、君の仕事だ」

「ユウナ……」

「僕や他の氏族の者じゃだめだ。アス八家の君にしか出来ない、君の仕事だ。いいね？」

「……わかったよ。ま、安全だろうと思うが気をつけてな。私の代わりにはっきり現場を見てきてくれ」

「ああ。カガリもしっかりな」

二人は国防本部から出て行った。それぞれの仕事に向かつて。

「ようこそオーブへ。アズラエル殿。今回のご助力、感謝いたします」

ヤラファス島にある行政府を訪れたアズラエルに、慇懃な口調でウズミは言った。

「まったくですよ。貴方がもう少し頑固でなければ、こちらの戦力ももっと早く送り込めたんですがねえ」

皮肉な口調でアズラエルも応じる。

「何事にも、頃合と言う物があるのですよ。早すぎれば攻め落とされていたでしょう。パナマのように」

「ふ。まあいいでしょう。プラントへの反撃。全面的に協力していただけるのですよね？」

「オーブも腹を括りましたからな。しかし、ブルークコスモス盟主としての貴方に申し上げたい」

「なんです？」

「オーブは、ナチュナルとコーディネイターの共存と言う方針は変えませんが」

「ああ、ああ。いいですよ、それは。大西洋連合にもコーディネイターがない訳じゃありませんからねえ。地球上には人口比率こそ少ない物の、実数では2千万人以上、プラント以上のコーディネイターが住んでいるんですよ？ ちゃんとした心根を持ったコーディネイターなら、それはもう空の悪魔共とは別に扱いますよ」

「空の悪魔か……そう言つて相手を蔑視する事は正常な判断を妨げますぞ」

「おや、お気に召さない？ じゃあ、言い直しましょうか。プラントの奴らと」

「できれば、彼らと落とすどころを見つかるなり何なりして、早く平和になつてほしい物ですがね」

「平和！ 僕も望んでいますよ。早く平和にしたいとねえ」

「で、あれば、プラントの独立。認めてやっても良いのでは」

「残念ですが地球連合は、一遍しつかりとプラントを叩き潰さねば危険、と考えていますよ」

「あなたも、でしょう？」

「まあ、そうですねえ。なにしろ自分が出資したプラントを乗っ取られたんですよ？ 誰が黙って明け渡しますか。テロリストに交渉は不要なんですよ」

「しかし……彼らは不安だったのですよ。食料の自給率0と言うのは。地球にいる人にはわからんそうですよ。補給路が宇宙と言う心細さは。宇宙海賊と言う存在もある。何か事あれば飢える、と言うのは彼らにとつて我々が推し量る以上の恐怖だったのでしよう。何しろ彼らはコーディネーターだ。いざと言う時に切り捨てられるかもしれないと……」

「そう言う時は治安維持と食糧供給の確保を理事国の責任で行うことを求めるべきでしょう？ ヘリオポリスがプラントと同様の要求を一回でもしましたか？ 考えてみてください。オーブのどこかの街、コロニーがプラントと同じことを言つて独自軍隊の保持を認めるよう要求したら、政府はどう対応するでしょうか？ 普通拒否しますよね。そして政府の拒否を無視してその町が武装を進めたらどうなるでしょう？ さらに武装解除を求めて派遣された警官隊を返り討ちにしたら……」

「もう、平和の機会はないのでしょうか？」

「国連が存在していた時に、コペルニクスでこちらが出すはずだった条件、『武装解除すれば一切の罪は問わない』これを彼らが飲んでいてくれればねえ。話はそこで終わつたんですが」

「もし。もし彼らが今それを飲んだらどうします？」

「武装解除ですか？ まあ、まずは自治権は剥奪ですねえ。ずいぶ

ん彼らに辛い物になるでしょうね。こちらの出す条件は。彼らはそれだけの事をしてしまった」

「そうですね……」

ウズミはため息を吐いた。それは徒労感の籠ったため息だった。だが、そのため息には自分の国民に犠牲を強いらずにすんだ、と言う安心感も確かに込められていたのである。

「まあ、過酷に過ぎる事を要求するつもりはないですよ」

新たな同盟者に気を使ったのだろう、アズラエルが言った。

「我々は歴史を知っていますからね。ヒトラーが出現するような真似は、しません」

「わかりました。この話はそこまでにしましょう。ところで……」
オーブの政治家としての顔に戻ってウズミが言う。

「プラントへの反撃、協力はしますがそれなりの代価は払ってもらいますよ」

「いいでしょう」

アズラエルも応じる。そしていたずらっぽく笑みを浮かべて言った。

「ところで……連合のモビルスーツの技術、盗用しましたね？」

「な……！」

「いやあ、サーペントテイルと言う有名な傭兵グループ、知っているでしょう？ それにジャンク屋のロウ・ギユール。ちょうどヘリオポリス崩壊時にザフトのモビルスーツとはとうていかけ離れた形態のモビルスーツを手に入れたって言うから調べさせたんですよ。そしたら……ヘリオポリスで作られていたGにそっくり。オーブのモビルスーツ、M1アストレイもこれまたGにそっくりですし。代価、払ってもらえますね？」

「む……む、いいでしょう！ では、具体的な条件を詰めましょう……」

負けられん！ オーブの利益のためにも！

相手が一筋縄ではいかない交渉相手と知ってウズミも必死で弁舌を振るい始めた。

彼らの交渉はこれからが本番だった。

私達には、オーブ本土への上陸が許された。

マリユール艦長が配慮してくれて、ヘリオポリス組は真つ先に上陸！
ザフトの攻撃がカグヤ島に集中していた事もあって、街はいつもの
日常を取り戻していた。

「……今回のザフトの攻撃による民間人の死傷者は、政府の命令を
破りカグヤ島に潜入していた大西洋連邦国籍のジャーナリスト、ジ
ェス・リブルさん一ヶ月の軽傷一人で、当局は回復を待つて取調べ
を……」

ビルの壁面のテレビでニュースをやってる。

「そつか。オーブの民間人、死ななかつたんだ」

「よかつたな」

「うん、よかつた。俺達、オーブを守りきつたんだよな？」

「ええ、立派よ！ トールもみんなも」

ミリイが誇らしげに言う。

そう言えば、ジャスティスに撃墜された105ダガー。スウェンさ
んに聞いたたら、やっぱりエミリオさんだそうだ。

冷酷な奴だったから、気にする事はない。自分も嫌いだった、とス
ウェンさんは言ったけど、でも、やっぱりショックだろうな。知り
合いが死んで。

実際に顔を合わせた人が死ぬのは、やっぱり嫌だ。ギャバンを思い
出してしまっ。

「じゃあ、久しぶりに自分の家まで帰って来ようぜ」

「うん、じゃあ、基地でまた！」

私は駆け出す。自分の家に！ 見知った通りを走る。あの角を曲が
ればもうすぐ……。ここだ！ 私の家！ ベルを鳴らす。鍵が外れ

る音がする。私はドアを開ける。

「ただいま！」

ビクトリア宇宙港 C・E・70年3月8日、71年2月13日
の2度にわたりザフト地上軍から攻略を受け、奪われた地 ビク
トリア大虐殺の悲劇の地。そこに、再び地球軍の姿があった。

「どうやら向こうも迎撃準備は完了しているようだな」

「は！」

「大西洋連邦は、オーブのマスドライバーを無事に手に入れたらし
い。我々も負けてはおれんぞ」

「その事ですが、ザフトがマスドライバーの自爆を企むのではない
かと心配です」

「それほど心配はいらんよ。どうやらザフトは自分のやった事
虐殺をやりかえされるのが怖いらしい。現地住民の情報では、宇宙
へ撤退する準備が進んでいるようだ」

「大西洋連邦からは、パナマ、そしてオーブでザフトがEPM兵器
を使用したとの情報が来ております。油断は禁物です」

「そうだな。機動上から落下して来る物体があれば、最優先で叩く
ように、命令しておけ」

「は！」

「調子はどうだ？」

ロンド・ギナ・サハクは自分の下につけられた部下に尋ねた。

「調子？ いいぜえ」

エドワード・ハレルソンが答える。彼は南アメリカ出身の軍人だ。

「問題ありません」

四郎、六郎、七郎、十一郎、十三郎と言ったソキウス 地球連合に作られた戦闘用コーデイナーも答える。彼らはアズラエルから一時的に Rond 姉弟に預けられている。

本来は譲渡されるはずだったが、はっきりとした証拠はつかまれているものの、ギガフROOT建設の際の襲撃者の様子をサーペントテイルから聞いたアズラエルが Rond 姉弟に疑念を持ち、譲渡を取りやめたと言うのも、彼らの知らない裏事情である。

彼らの東アジアニホン地区、そしてオーブでも付けられるような名前は、最近付けられた。少し前まではフォー、シックス、セブンと言った味も素気もない名前で呼ばれていたのだが、ふらりとムルタ・アズラエルが施設に立ち寄り、名付けていった。ソキウス達は今までのようなもろに数字の名前ではなく、人名らしい名前を付けられた事を素直に喜んでいる。

彼らの機体はエドワードと四郎が、カラミティの派生機、ソードカラミティ。七郎と十一郎がカラミティ、十三郎はレイダーの制式仕様機だ。

ギナ自身はオーブがヘリオポリスで開発していたアストレイゴールドフレーム改修機に乗っている。ギガフROOT襲撃時より一番大きく変化した所はどのような交渉をしたものか、アズラエルからPS装甲の技術を与えられ、バトルエリアなど一部がPS装甲化している所だろう。全身ではない。だが、ギナはまったく不安に思っていないかった。ミラージュコロイドもあるし当たらなければよい、と考えている。自信家である。他に左前腕部にツムハノタチと名づけたPS装甲化する鉤爪が付いた事、腰にビームサーベルが装備された事くらいだろうか。

轟音が遠くから聞こえて来る。ギナのモバイルスーツによって拡大された視力は空の片隅に飛行機の群れを捕らえる。

おそらく奪回されたスエズ基地から発進したユーラシアのTu-9

9 戦略爆撃機だろっ。

「時間どおりだな」

しばらく待つうちにTu-99は頭上に達し、ザフトのモビルスーツの到達し得ない高空から爆弾を投下し始めた。NJの影響下にあつても、ジャイロ、加速度計を使った慣性誘導は可能だ。ぶれが大きくなるが。

爆弾を投下し終わると、Tu-99は大きく旋回して帰って行った。「うひょー！ 敵さん大混乱だね〜！」
エドワードが歓声を上げる。

敵の陣地のあちこちで、大爆発が起こっていた。

「爆発が終わったら、出るぞ」

「おう」「了解しました」

「くくく。私とダンスを踊れる者がいるかな？」

ギナの目は不吉に輝いていた。

「もう、帰ってしまうのねえ」

「そうだな。今度はたっぷり休暇取って来い」

「うん、今度来る時は、ゆっくり来るわ」

久しぶりのママの手料理、おいしかった。

きちんと掃除されている私の部屋。嬉しかった。

「ママ、今度来る時は、私、退役してるかも」

「まあまあ、そうなら嬉しいわねえ。今は毎日心配なもの。毎日、神様とご先祖様にルナの無事をお祈りしているのよ？」

その気持ちが嬉しい。私もしてこっ。

まずは神様。神棚の前で二礼二拍手。次にご先祖様。お仏壇にはお線香を上げて、両手の手と手のしわを合わせて、しあわせ。

後ろで、パパとママも手を合わせていた。

「じゃあ、行って来ます！」
「いつてらっしゃい。気をつけてね」
ママは玄関に立った私に切り火を切る。
名残惜しいけど、もう行かなきゃ。振り向くと、パパとママは玄関の前に立ってこちらを見ていた。きっと私が見えなくなるまでそうしているのだろう。
……ちよつと、涙が出た。

基地への帰り道、繁華街を通った。あ、りらつくまのクッション！
クレインゲームの中に入っていた。
まだ、時間あるよね？

……取れない。
「お姉ちゃんへただなあ」
え！？ 聞き覚えのあるこの声は……振り向くとそこには赤い目をした10歳くらいの少年がいた。
「シン！」

思わず声が出ていた。
「なんだあ？ どつかでお姉ちゃんに会ったっけ？」
シン！ シン・アスカ！
頭が……痛い。

その少年に手を伸ばす。手と手が触れ合う
「大丈夫かよ、お姉ちゃん？」

ああ、聞き覚えのあるその声。背中に当てられた手から伝わる熱。
あふれる。流れ込んで来る。私の身体に隠されたもう一つの私の記憶。夢に出てきた断片的な記憶が繋がる。その膨大な、私が今まで生きて来た量と同じくらいの量の記憶が頭の中に展開されていく

こみ上げる想いに耐え切れず私は眼を閉じた。
「ちよつとあなた、大丈夫？」

少年の後ろにいたフレイよりちょっと年下くらいの少女が私を気遣うように問い掛ける。

「弟の、知り合いですか？ あ、私、マユ・アスカって言います」「マユ！ シンの妹！ でも今、なんて言った！？ シンの事、弟って言った？」

「あ、私は、ルナマリア・ホークです。シン君に、とってもよく似た人を知ってるもので、つい」

「へえ。その人の名前はなんて言うんですか？」

「シン・アスカって言うんです」

「……まあ！」

マユちゃんはあんぐりと口を開けた。

「名前まで一緒なんて！」

「でも、私の知っているシンは16歳ですけど」

そうなんだ。確信する。ここは、やっぱり私のもう一つの人生の記憶 夢の世界とは違うんだ。

「うふふ。お兄さんなんだ」

「でもさあ。お姉ちゃんも、ルナお姉ちゃんも声がそっくりだなあ」

シンが、口を挟む。

「目を閉じて聞いてると、どっちがどっちかわからないや」

「……そうなの？ 自分じゃわからないのよね。自分の声は骨を伝わる音を聞いているから。でも、そうなんだ？ 私ってこんな声なんだ？ 不思議ですね。なんか、ルナマリアさんには縁を感じますあ、そう言えば！」

「シン君。この間オーブが攻められた時、ご家族に怪我とかした人はいない？」

「いないよ。みんなちゃんと避難してたもん」
よかった

（シン。私、シンとシンの家族を守ったよ……）
夢の世界のシンに向けて心の中で呟く。

シン。あなたを愛したから私は私になれた。その顔、その声。私が

ずっと探してきた、こたえ。

……でも、目の前の少年は、私の愛したシンじゃない。違うんだ。心が痛いけど。

「じゃあね。私、そろそろ行かなきゃ。お姉さんと仲良くね」

「ん。これ、あげる」

「え？」

差し出されたのは、りらつくまのクッション。

「お姉ちゃんへただだからさあ。取ったのやるよ」

自慢気に言うシン。……だめだ。許されなくても一度だけ。

「な、なんだよお姉ちゃん」

私は、シンをぎゅっつと抱きしめた。

頬に伝わる涙が、ずっと求めていた、こたえ。でも、もうお別れしなくちゃ。

「ありがとう」

「サザールランド大佐、カーペンタリア攻略のために、ニューギニア島のこのあたりに基地を作りたいのですが」

副官が地図を指し示す。

「ああ、ウエワクか。いいだろう……にしても、この地域は貧乏らしいな。職もなくその日の生活にも事欠く住民が多いらしい」

「では、慰撫工作の一環として仕事を与えてはどうでしょう？」

「そうだな。雑用の他、少々効率が悪いが基地の建築も少し手伝ってもらおう。協力して大事を成し遂げれば、兵と現地住民の結束も固くなるうというものだ」

「反連合のゲリラやテロリストの攻撃も懸念されます。フェンスを張り、武装した兵を警備に立てましょう」

この会話が後にある事件の解決につながる事を、彼らは知らなかつ

た。

第二十八話

アークエンジェルに戻って、泣いているところをミリイに見られた。「どうしたの？ もうホームシック？」

ミリイ。ミリイは私がザフトでアークエンジェルを追っていた時、あそこに居たの？ アークエンジェルを墜とした時、怪我とか……死んだりしなかった？ ううん、他のヘリオポリス組の人達も、私
が、もしかしたら殺した可能性がある。

私は身震いした。

ううん、まだ混乱してる。切り替えなきゃだめ。あれは夢の世界のお話。この世界には関係ないの！

私は涙を拭いて言った。

「ちよつとね。昔の、一つの恋が終わったのよ」

……一体何なんだろう。このもう一つの記憶は。やけに生々しい。自分が直接体験したかのように。メイリン。愛しい私の妹。ここには、この世界にはいない。それとも……いるのだろうか？ プラントにでも。歴史……もう一つの記憶で教えられた歴史。同じように微妙に違ってる。思い出した記憶では、アラスカではサイクロプスが使われ、オーブは地球軍に侵攻されていたはず。やっぱり……違う。

フラガさんは夢を見たら教えてくれと言ったけど。言わないで置こう。蘇った記憶の事。だって、もう違う歴史を歩んでいるのだから。ここで、向こうでは。きつと……ここではユニウス7は落ちない。落ちないといいな。でも注意しておいた方がいい。

どうしよう……。あ、アズラエルさんがいた！ アズラエルさんなら、きつと、地球軍に影響力あるし、なんとかしてくれるはず。さつさとユニウス7を壊すとか……。馬鹿ね。まだ戦争も終わってないのに。今は、終わらせる事だけを考えよう。

戦闘が始まってから一週間が過ぎ、ビクトリアの攻防戦も終わりを迎えようとしていた。

マストドライバーから、残存兵を乗せてシャトルが次々に飛び立つていく。

「ふん。どいつもこいつも踊り甲斐の無い奴らだったわ。やはり下賤の者に期待するだけ無駄と言う事か。ふふふ」

ギナはひとりごちた。

目の前にジンが現れる。ギナはビームサーベルを一閃した。

「さあ、我に最後に倒される奴はどれかな？」

地球軍はストライクダガーの大量投入もあり、終始優勢に戦いを進めた。

ギナの部下達も素晴らしい活躍をしている。

エドワードは、「切り裂きエド」の二つ名を確固たる物にした。

ソキウス達の働きも目覚ましい物だった。

ギナは満足感を感じていた。

どうやら戦いは終わりのようだ。立ち向かってくる敵も、もういない……いや、いた！

小部隊がマストドライバー施設への道に立ち塞がっている。

おそらく味方が逃げる時間を稼いでいるのだからその部隊は、手だれを集めたのか、ストライクダガーが蹴散らされている。

そして……隊長機であろう新型機。ビームライフルを使っている。

「お前達！ あの部隊を排除する！ あの新型は私に任せろ！」

「了解」

ギナ達はそのザフトの殿軍部隊に殺到する。

「ビームライフルか……確かに脅威だが……これはどうかかな？」

ギナはミラーージュコロイドで姿を隠した。

ザフトの新型機は一瞬うろたえた様子を見せ、ギナの方向に向かっ

てビームライフルを連射したが、すぐに止めた。

「ほほう。ではもう少し近づくか」

ギナは更に近づく。

その気配を感じ取ったのか、ザフトの新型機は盾の付いた左手を振り上げる。その盾の先に、二つの光の爪が現れた！

「馬鹿め！ シールドと一体化した攻撃兵器など、攻撃に移れば防御がから空きだと言う事ではないか！」

ギナは自分のP01のトリケロスの装備でその種の装備の欠点を嫌と言うほど知っていた。そのために、左前腕部にツムハノタチと名づけたPS装甲化する鉤爪を付け、腰にビームサーベルを装備し、格闘戦になった時はトリケロスを防御に専念できるようにしているのである。

今、ギナはビームサーベルを抜き放ち、相手を袈裟懸けにしようとした。

！ 何かを感じたが、遅かった。P01は敵の新型機から発射されたロケットアンカーに捕まった。

「く、こんな隠し手を持っていたとはな！」

悪い予感に従い、すぐさまビームサーベルの軌跡を変え、ロケットアンカーを断ち切り、距離を取る。

「ふふ、危ない危ない。しかし、一度見たからにはもう終わりだ！」
敵の新型機はビームライフルを乱射してくる。だが、ギナはそれを冷静にトリケロスで捌く。

再び両機は近づき格闘戦に入る。

ザフトの新型機は再び光の爪の付いた盾を振り上げる。それしかやりようがないのだ。

ギナはそれをまたトリケロスで防ぐと見せかけ、トリケロスのビームサーベルを発動させる！

ザフトの新型機の盾は内側から破壊された。

「これで、終わりだ！」

一応まだ知らない武装を用心し、一步離れた所からレーザーライフ

ルで止めを刺す。

「ふふふ。いいダンスだったよ」

マスドライバーへの道が開いた。

『特殊部隊がマスドライバー施設へ突入を開始しました！』
通信が入る。

「これで終わったな……」

ギナは嘆息した。

「どうだ、ハレルソン。この戦いが終わったら、正式に私の部下にならんか」

「うーん、ありがてえ申し出だけど、遠慮しとくわ。やりたい事もあるもんでねえ」

「そうか。残念だな。……お前のやりたい事とはなんだ？ 興味が湧いたら手伝ってやってもいいぞ」

「うーん、考えとくわ」

エドワードは言葉を濁した。

この日、ビクトリア基地宇宙港は陥落した。オペレーション・ウロボロスは完全に失敗、頓挫し、プラント最高評議会は翌26日、宇宙戦力の増強を決議する。

「……以上だ。パナマでの戦勝があったとは言え、アラスカ、オーブそしてビクトリアでの敗退。ザフトの消耗と共に地球軍はマスドライバーを二つも手に入れてしまった」

「……むっ」

「この責任は重大である。危急の時でもある。私は、パトリック・ザラ評議会議長の解任を要求する！」

「……意義なし」

「シーゲルめ！」

その日、パトリック・ザラは評議会議長を解任され、シーゲル・クラインが再び評議会議長に返り咲く事になる。

「父上！」

プラントに帰還したアスランは、真つ先に父の元へ向かった。

「ああ、アスランか」

久しぶりに見る父は、一気に年を取ったようだった。

「パナマ、オーブではご苦勞だったな」

「いえ、そんな事。オーブでは使命も果たせず。父上の苦勞に比べれば……」

「ははは。今はすっかり暇さ。評議会には出るがね」

「しかし、父上が解任されるなんて……」

「私の戦争指導が悪かったのだそうだ。確かに戦況は厳しい。しかし、それもジエネシスが完成すれば片がつくはずだった。わからないよ。シーゲルが何を考えているのか」

「ジエネシス、ですか」

「ああ、ヤキン・ドゥーエにある巨大なガンマ線レーザー砲だ。あれを突きつけられればいかな地球軍とて妥協を……いや、愚痴になったな。……どうだ、これからレノアの墓参りにでも行くか？」

「は、はい！」

「久しぶりだな。お前とここに来るのも」

穏やかな声でパトリックは言った。

「ええ。正直、申し訳ないです。今の任務に精一杯で、母上の事を思い出すのも間遠になって行きます」

「それでいい。人は思い出を忘れることで生きていける。だが、決

して忘れてはならないこともある。レノアはそのかけがえのないものを私に教えてくれた。私はその確認をするためにここへ来ている」「はい。私も決して忘れません。……早く戦争が終わって、ユニウス7の人達の遺体を収集できたらよいのですが」

「ああ、この墓もただの飾りだ。遺体はない。だが、すべては心の中だ。今は、それでいい」

「はい！」

「ん？」

墓石を掃除するために、かがみこんだパトリックが訝しげに言った。

「どうしたのです？ 父上？」

「これが……墓石の裏に埋めてあった」

困惑した表情でパトリックは答える。その手には、白い封筒が握られていた。

「父上？ もしや危険物では？」

「まあ、大丈夫だろう。失脚した私を狙って今更どうしようと言うのだね」

無造作にパトリックは封筒を開けてしまう。

「……こ、これは!？」

パトリックの表情が変わる。

「何が書いてあったのです？」

お前も読め、と言うようにパトリックはアスランに封筒を渡した。そこには、

『「コペルニクスの悲劇」および「ユニウス7の悲劇」はシーゲル・クライン、マルキオ導師および彼らの属する秘密結社ターミナルの引き起こした自演である』

と書かれていた。

「こ、これは……!」

「馬鹿馬鹿しい！ 自演だなどと……いったいそのような事をしてシーゲルになんの得があると言うのだ！ おまけにマルキオ導師、だと?」

「そう、ですよね？」

「いやしかし……どうせ暇だ。調べてみるか。ターミナルとやらを」
パトリックの目には、久方ぶりに生気が漲っていた。

月が変わった7月。カーペンタリア攻略に向けて続々と戦力が集中しつつあるオーブ、オノゴロ島。

「なんだと？ その情報は確かか？」

突然飛び込んで来た情報に、サザーランドは副官に問い直した。それほど突拍子も無い情報だったのだ。

「は。この辺りの現地人は、ギガフロートなど知りもしないはず。現地の者が、ローエンガウの親戚が妙な物を見たと伝えて来た情報は、ギガフロートと一致します。」

ギガフロート 地球連合がマルキオ導師を通じてジャンク屋組合に建設を依頼した、マストライバーを備えた全長数十kmに及ぶ浮体構造物 それはまさに人工の島と言ってよい。それは不可思議な事に完成目前になって、マルキオ導師の言によると、どこの誰ともわからない集団に強奪されたと言う。そして戦況の逼迫もあり、今日まで追求もされず行方不明となっていたのである。

「どちらの方向へ向かっていたのだ？」

「ゆっくりと、西方へ向かっていたそうです。おそらく、戦火をさけるためでしょう」

「そうか。地元民と融和に努めた甲斐があったな。こんな情報が飛び込んで来るとは。……それにしても、ギガフロートを強奪したのはどこのどいつだ！ きついお仕置きをくれてやらねばな」

「とりあえず、ギガフロートの予想進路を出してみました。今まではビスマルク海に潜んでいた模様です」

「うむ。赤道連合の多島嶼海域へ向かっているようだ。そこに逃

「げ込まれる前に捕まえられるか？」

「速度を考えれば、直ちに搜索部隊を出した方がよいかと」

「わかった。では、ジョージ・W・ブッシュにアーケエンジェル、アズラエル様に頼んでドミニオンにも出てもらおう」

「アーケエンジェル級を、2隻もですか？」

「ああ。ギガフロートは、もしやザフトに占拠されているのかも知れん。用心にしくはない。アーケエンジェル隊とドミニオン隊がいれば、大抵の兵力には対応できるだろう。敵兵力が過大な場合にはそこで耐久してもらい、増援を出す」

「は！」

地球軍は、モルゲンレーテにグウルのようなサブフライトシステムの開発を依頼している。

どうも、地球軍のモビルスーツ開発方針はジェットストライカーの様な物でモビルスーツに直接飛行能力を与える方針らしくて、それまでの繋ぎ、と言う訳でモルゲンレーテへの依頼はさほど重要性は高くないらしい。

試作で、私達アーケエンジェル隊が今協力して試験している物はザフトのグウルの倍以上の大きさを持つホバークラフト。モビルスーツが2機搭載可能な程だ。それゆえにか性能は高い。

大きさによるモビルスーツ搭乗時の安心感はもちろん、機首下に全周射界を持つ対地対空兼用のビーム砲塔を一基備える。最大速度はマツハ0・83。ホバークラフトにも関わらず、かなり高空まで運用可能だ。

モルゲンレーテではベースジャバーと呼ばれている。

試験中の私達に、呼び出しがかかった。出動だ！

「いったいどこに出撃するんだろう？ まさかカーペンタリアじゃないよねえ？」

「ニューギニア島北岸を西進してるみたいだな。えらく、急いでる」
一緒に出撃したジョージ・W・ブッシュからまたスピアヘッドの一群が発進する。

『先行しているスピアヘッド3番機より入電！ 目標は艦隊より西北西52海里にあり！』

ここで、私達に目標が教えられた。ギガフロート マスドライバ
ーを備えた人工島だ。

『APU起動。カタパルト、接続。ストライカーパックはジェットを装備します。ジェットストライカー、スタンバイ。システム、オールグリーン。ストライクルージュ、どうぞ！』

「ルナマリア・ホーク、ストライクルージュ、出るわよ！」
アークエンジェルから発進すると、フラガさん、スウエンさんと編隊を組む。その後ろに、ベースジャバーに乗ったキャリーさんのロングダガーとミューディーのデュエルダガーが続く。ドミニオンからも、モビルスーツが発進している。

スピアヘッドに誘導され、10分程の飛行で目標地点に着く。
「うわあ！」

海を真四角に切り取った、まさに島！

「おい！ あれはジンじゃないか!?!」

「デインもいます！ こちらに向かってきます！」

「ちつ。ギガフロートの強奪犯はザフトって事か！ 行くぞ！」

「はい！」

スピアヘッド隊と私達3機は上昇してきたデイン目掛けて一斉に空対空ミサイルを放つ。

少なくとも数のデインが撃破され、ばらばらと落ちていく。

「よし！ 上空はスピアヘッドに任せて、ギガフロートを制圧する！」

モビルスーツ隊はギガフロートに着陸する。

「お前ら！ くれぐれも施設を破壊するんじゃないぞ！」

「わーってるって！」

「うぜー」

ジョンさんの声だ！ 見上げると、ライダーにフォビドウン、ドミニオンの105ダガー隊が降りてくる。

「行くわよ！」

こちらに向かって来るジン目掛けて駆ける。相手が振りかぶる重斬刀ごと、ジンの腕を切り落とす。

！？ ハッチが開く！ 手を上げて出てきたのは、無精髭を生やしたむさ苦しい男だった。

なんか妙な……？

違和感を感じながらも、ジンの脚を切り裂き、そしてジンは倒れる。パイロットは慌てて飛び降りた。

「私達はザフトとは違うからね！ 降伏した者を虐殺なんかしない！」

次の敵に向かう。ジンの群れは、後退して重突撃機銃、無反動砲等で弾幕を張ってくる！

「スウエンさん！ 私とフラガさんの影に！」

「お嬢ちゃん！ PS装甲を信じて！ 二人で突っ込むぞ！」

「はい！」

フラガさんと私はシールドを構えながらジンの群れの真ん中に突っ込む！

同士討ちを恐れてか、ジンからの射撃が止む。

慌てて重斬刀を取り出そうとしているようだけど、させない！

周り中敵って判断に楽よね！ 当たるを幸い切り倒す！

！？ あれは？

「きゃー！」

重斬刀が叩きつけられ、コクピットを揺さぶる。

しまった！ 気を取り直して、目の前の相手を斬る。

私を気を取られてしまった物は、ジンの後方に見えるあれは……ス

トライクダガー!?

「フラガさん、ビームに気をつけて! ストライクダガーが奥にいます!」

「わかった! ……にしても妙だな。こいつらやけに弱いぞ。……

ん? あれは! ジヤンク屋組合のマーク!」

「ジヤンク屋組合!?!」

「降着地点確保!」

エイムズさんの声だ!

ちらつと見ると、大西洋連邦の大型輸送ヘリ、スーパースタリオンが次々に降着し、完全武装の兵が一機あたり50人程次々に吐き出される。

彼らは閉じられたギガフロート内部への入り口を爆破して、突入していく

「なんですつて!?! ジヤンク屋組合!?!」

ギガフロートの奪回に成功した、と言う報告を受けたアズラエルは、ギガフロートを占拠していた者達の正体を聞かされると思わず叫んだ。

「はあ。しかも、彼らは自分達がギガフロートを強奪した、と言う意識が無いようで。あくまで民間用のマスドライバーを作ろうと言うマルキオ導師の呼びかけに賛同してジヤンク屋組合が建設した、との認識のようです」

「資金は? ギガフロートの建設のために連合が出資した莫大な資金はどう説明しているんです?」

「マルキオ導師は、自分の考えに賛同してくれる民間の大口出資者が幾人もいる、と説明していたようで」

「……最初からギガフロート持ち逃げする気満々じゃないですか! 腐れ坊主が! すぐにホワイトハウスに連絡を。マルキオを秘密裏に指名手配に なんとしてもマルキオの糞坊主の身柄を確保するんです!」

「はっ。あと、拘束したジャンク屋どもが抗議をしておりますがどうしますか？」

「よーっく説明してあげるんですね。ギガフロートは元々地球連合の物だって事を。納得しないならするまで、とーっくくりと説明してあげてください。時間はいくらでもありますからね。納得するまでね、ふふふ……。まあ、飴も必要でしょう。マストドライバーの数にも余裕が出来ましたからね。連合に協力的なジャンク屋には地球連合が所有するマストドライバーの使用を融通するとも伝えなさい」

「はっ」

「ジャンク屋組合……彼らに与えた強すぎる特権もそろそろ考え直す時期ですね」

サザーランドが出て行くと、アズラエルはむっつりと考え込んだ。

特殊部隊がマルキオの住む邸宅に踏み込んだ時、そこには家事をする女性と子ども達しかいなかった。警察は彼らを取り調べたが、彼らは何も知らされておらず、マルキオの消息はようとして知れなかった。

第二十九話

あ、アズラエルさんだ。

私が休憩室で休んでいると、アズラエルさんは私を見つけてこつちに歩いてきた。

「やあ。ルナマリアさん。今回はギガフロートの奪回ご苦労様でしたね」

「いえ。占拠していたのはジャンク屋だったんですね。ザフトと戦うより、よっぽど楽でしたよ」

「まあ、彼らも被害者と言え言えますか。今回はね、見事に裏切られましたよ。マルキオに。」

「私、ジャンク屋、嫌いなんですよね」

「おや。どうしてですか？」

「奴らを見ると、ヘリオポリスに居た時のごみ回収業者のジジイを思い出すんです。あ、ごめんなさい、ジジイなんて言葉使って」「ははは」

アズラエルさんは、気にした様子もなく、愉快そうに笑った。

「いや、かまいませんよ。僕が小さい頃、ガキ大将の女の子がいましてね。彼女を思い出して懐かしい気持ちになりました。それで？」

「私がマンシヨンの表に停めて置いた自転車を勝手に持って行こうとしたんですよ？ 鍵二つも付けてたのに。それを、廃品だと思っ

たと言い張って返そうとしないから、結局警察沙汰になっちゃった」「それはとんだ目に遭いましたねえ。……確かに、悪質なジャンク屋も多いですよ。海賊と兼職してるような、ね。そこまで行かなくても意地汚いジャンク屋は多いですねえ」

「ジャンク屋って、ううん、ジャンク屋を自称して、見つけた物をジャンクと見なせば物が手に入っちゃうんですよね？ なんでそんな強い権利持つてるんですか？」

「痛い所を突かれましたねえ。まあ、ニュートロンジャマーのおか

げでエネルギー不足になりましたからね。リサイクルできる物はできるだけリサイクルしなくちゃなくなっただけですよ。そこをマルキオを始めとした所謂有識者にうまく突かれて、大層な権利を認める事になってしまったんですよ。元々は彼らはスペースデブリ化した宇宙機器等が本来の取扱品目であつたりしたんですけどね。戦争が始まって荒稼ぎをしようとする者も増えましたね。すみませんねえ、地球連合がもつと力があれば……」

「そんな……アズラエルさんは頑張ってるじゃないですか」

「はは。そう言ってくれると助かります。まあ、質の悪いジャンク屋が蔓延るのも今の内ですよ。戦争が終われば、当然軍隊を治安回復に投入できますしね。現在のジャンク屋の権利を取り上げて登録制にして、本来のスペースデブリの掃除屋に戻していこうと考えていますよ」

「早く、戦争が終わればいいですね。みんな、話してるんですよ。」

戦争が終わればああしようしようって」

「そうですね。頑張りましょう！ お互いに」

「はい！」

オーブ行政府での会議の休憩中

テレビではビクトリア奪還の特別報道番組が流されている。

スクリーンではザフトの捕虜の様子が流されていた。

画面が変わる。

あちこちで地面が掘り起こされている。見えてくるのは、早くも白骨化した部分を見せる、地球軍の軍服を身に着けた、遺体、また遺体。

ここで、過日のザフトのビクトリア基地奪取の際の地球軍兵虐殺の事実を重々しい口調でキャスターが伝える。

ザフトのまだ若い捕虜が、自らの行いを告白し涙ながらに悔いている様子が流される。

キャスターがあらためて虐殺された地球軍兵の冥福を祈る。

再び画面が変わる。

一転してレポーターの明るい声が響く。

ビクトリア奪回で活躍した兵士が紹介されてゆく。

そしてカメラは黒い長髪の男性を映し出す。

『次にご紹介しましょう！ オーブから馳せ参じた勇士、ロンド・ギナ・サハクさんです！』

ギナはにこやかにレポーターの質問に答えている。

「ふん、いい気なものだ。サハク家が勝手にモビルスーツを開発していたおかげでえらい損をした。アズラエルとやりあうのは、なかなか楽なものではなかったのだぞ？」

ウズミが愚痴る。

「いいではないか。どうせいずれはわが国でもモビルスーツを開発しなければならなかったのだ。金で時間を買ったと思えばよかろうしれっとした顔でお茶を啜りながらコトーが応じる。

「……まあ、地球軍に対してオーブの貢献をそれとなく主張できてよかったと前向きに思っべきでしょう。兄者も、お茶をもう一杯どうかな」

ホムラが代表首長席からウズミに声をかける。

「ああ、もらおうか」

ホムラは立ち上がって自分の前に置かれたヤカンを持ち、給湯室へ行くと古いお茶葉を捨て大雑把に新しいお茶の葉を入れ湯を注ぎ、しばらく待ち、ウズミの茶碗に注いだ。なにしろ機密保持のため雑用も自分達でやらなければいけないのだ。

コトーがそのヤカンを取ると、自らの茶碗にお茶を注ぐ。そして隣の席へまわす。

「そう言えば、カガリ嬢とユウナ君、最近仲がよろしいようですね」

カガリとユウナは、本日一緒に軍の視察に行っている。

「若い者が仲いい事は善き事ですな」

ホムラが応じる。

「ユウナ君も、昔に比べるとずいぶん頼もしくなってきた様だ。国難がそうさせたのでしょうかな」

ウズミも応じる。

「いやあ。この間のカガリ嬢の演説には感心しました。防衛戦が終わってからの国民への演説にも。それに比べればユウナはまだまだです。しっかり鍛えてください」

まんざらでもない顔でウナトが答える。

……退室していた者達もおいおい帰って来た。また長い会議が始まる。

マストドライバーを3つ確保した事により、地球軍では一気に宇宙への機運が高まった。だが、アズラエルはカーペンタリア攻撃にこだわりを見せる。

「別に、攻略できなくてもいいんですよ。とにかく、パナマとオーブに現れたザフトの新型機が気になるんですよ。カーペンタリアに一当たりして、奴らが出てこなければ、包囲の輪を締め付けるに留めましょう」

「もし、出てくればどうしましょうか？」

「決まってるじゃないですか。捕獲なり、撃破して残骸を分析するなり、するんですよ」

ギガフロートを奪還した私達アークエンジェル隊は、自分達の訓練

の他に、次々に送られてくる新設モビルスーツ隊の訓練にと忙しい日々を送っていた。

そんなある日、私達を訪ねて来た人がいた。

「ああ、アークエンジェル隊の諸君、元気かい？」

「あ、はい」

広報の人は、後ろに包帯を巻いた男の人を連れていた。

「この人は軍事ジャーナリストだそうだね。ちょっと取材に協力してくれんか？」

「ええ、いいですよ」

男の人は、笑顔で私達に握手を求めて来た。

「怪我、さなつたんですか？ 大丈夫ですか？」

「ああ。ザフトがオーブを攻めて来た時に、へまこいちゃってね。ありがとう」

彼はにっこり笑う。

「僕はジェス・リブルだ。よろしく！ ようやく正式に取材できて嬉しいよ」

ジェス・リブル？ なんか聞き覚えがあるような……？

あ！ 体が震える。サンディエゴのレストランで投げつけられた罵倒の言葉が蘇る。

「どうした？」

トールが心配そうに聞いてくる。

「あ……さ、サンディエゴの……」

それだけ言うのが精一杯だった。

「あ、ひよつとして、カリフォルニア日報の記事を見てくれたのか？ 奇遇だなあ。君達が地方紙のちょうどあの日の記事を読んでくれたなんて！ すごい偶然だ！」

私の様子に気づかぬ様子でジェス・リブルが近づいてくる。

「……や……来ないで！」

必死で彼の手を振り払う。

「この野郎！」

鈍い音がすると彼がよろめく。

眼鏡をかけた黒人の少年から突然殴られて、ジェス・リプルはよろめいた。

「なんだ！？ いきなり過ぎて、訳がわからない。」

「お前が、あの記事を書いた奴か！」

「え？」

「お前がルナの事をコーディネートだって写真入りで、でかできと書いてくれたおかげで、ルナがどんな目にあつたと思ってるんだ！？」

「え？ だって、真実だろ？」

「真実！？ 真実がなによりも尊いとも思ってるのか！ 教えてやる！ ルナがどんな目にあつたのか！ ルナは、サンデイエゴの町であの記事を見た奴から、『コーディーの糞女』と罵られたんだぞ！」

「なんだって！？」

「俺は……俺は、ナチュラルとコーディーネイターが協力してるのが嬉しくて……」

「それにしても、記事を書く時には、本人に了解を取ってからにすべきだったな。ルナマリアは、コーディーネイターと言う事を隠している訳じゃないが、おおっぴらに触れ回っている訳じゃない」

落ち着いた感じの青年が出て来て、眼鏡の少年の肩に手を置き、彼を静めるように数回叩いた。

「……その通りだ。それに、盗撮みたいな真似しやがって」

「あ、あれは……俺は無名だから、基地の広報に申し込んでも許可が出なくてしかたなく……」

ジェスの言葉は、次第に小さくなって、消えた。

「……」

沈黙が、痛い。勇気を振り絞ってジェスは言葉を紡ぐ。

「で、でも！ 今のままじゃいけないんだ！ このままじゃナチュラルとコーディネイターの溝は埋まらない！ 積極的に真実を報道してこそ溝は埋まる！ きつとナチュラルとコーディネイターが手を取り合って笑える日が来る！」

「また真実かよ！ ルナの顔見て何も思わないのかよ！ ルナは今泣いているんだ！ あんたのしてる事はただのパラッチだ！ パラッチはパラッチらしく芸能人でも追っかけてるよ！」

「！」
ジェスは、今度こそ言葉を失った。

「行こうぜ」
アークエンジェル隊の皆が立ち去っていく。ジェスは一人取り残された。

「真実、か……」
ルナマリアの泣き顔が脳裏に浮かぶ。真実であろうと、弱者を傷つける報道になんの意味があるのか
自分が今まで夢中で追いかけてきた『真実』が急に色褪せて感じられた。

翌日、広報センターに顔を出したジェスは思わぬ人物の訪問を受けた。

「こ、これはルナマリアさん！ どうしたんです？」

「ちょっと……」

「とりあえず、あそこに座りましょう」

「では……」

部屋の窓際に置いてあるテーブルに向かい合って腰を下ろす。

「……」

「……」

沈黙が続く。ジェスは耐え切れなくなって口を開く。

「申し訳なかった！ 考え無しに記事にしてみました。君を傷

つけてしまった。すまない」

頭を下げ一気にしゃべった。ジエスは昨日から抱えてきた重い荷物を降ろせた気がした。

「あ……」

「俺は、報道する事でどんな事が起こるのか、それを考えなかった。考えて来なかった。単に自分の興味が向くままに真実って奴を追いかけて来た。記事にして来た。これじゃあ、確かにそこらのカメラ小僧と変わらない。パパラッチと言われても無理はない」

「あ、ありがとうございます……私は、私、ジエスさんの言う事にも肯ける所があるって言いたくて。ジエスさんの言う通り、真実を知らせる事は、大切だと思います。私、コーディネイターって事知られたおかげで、そんな事関係無いって言うってくれる大切な友達も出来て。……でも、私は弱いから、コーディネイターって事隠さなのが精一杯……」

ルナマリアはうつむいた。

ジエスは釣られて彼女の視線の先を見る。そこにあるのは、傷だらけの手首。思わず息を呑む。

それに気づいたらしく、彼女は照れたように笑った。

「えへ。学校で、コーディネイターだつていじめられてた時に……自傷です。でも今は少しは強くなれたから、大丈夫」

ジエスの罪悪感がますます強くなる。

「いつか……ナチュラルもコーディネイターも関係なくなる日が来ますよね」

「ああ。ああ、きつといつか……」

「じゃあ、私そろそろ行かなきゃ。ジエスさん、世の中が良くなるような報道、頑張ってください。私も頑張るから」

ルナマリアはそう言うのと、立ち上がってぺこりとお辞儀をして広報センターを出て行った。

ジエスは思った。今までは真実をそのまま伝えるのが最上と信じていた。だが違った。間違えていた。

間違えていたなら、直せばいい。
ジャーナリズムの基本は伝えることではなく弱者の訴えを代弁する事。大昔そんな主張をしていたジャーナリストがいたな、とジエスは思う。確か今の東アジア共和国ニホン地区の……誰だっけ？ そうだ。弱い者を力づけられるような報道をしよう。傷ついた者が癒されるような報道をしよう。ジエスは心に誓う。
ジエス・リブルの新たな出発だった。

宇宙

ロウ・ギュール一行はギガフロート建設の仕事を果たし、宇宙へ上がっていた。

新しく手に入れたホーム　リ・ホームと名づけられた生活の本拠地。それは元が地球軍のコーネリアス級だ。以前のホームより格段に良くなっている。

「なあ、マルキオ導師が指名手配されたって、ギガフロートが地球軍に接収されたってほんとかなあ」

ロウがプロフェッサーにぼやく。

「残念ながら事実よ。それは」

「そうか。地球軍の野郎、汚い真似しやがって！」

「……それはどうかしら」

冷たいとも言えるような声でプロフェッサーが言う。

「え？」

「連合がギガフロート建設に莫大な出資をしていたのはどうやら事実みたいよ。連合がマスドライバーを作るためにマルキオ導師を利用したのか、マルキオ導師が民間用のマスドライバーを作るために連合を利用したのか……それは私達外野の者じゃわからないわ。確かなのは、ギガフロートは連合の物になり、マルキオ導師は連合か

ら指名手配されてしまったと言っ事だけ」

「……俺達やどうすりゃいいんだ？」

「幸い私達にはオーブに強いコネがあるわ。連合は、協力的なジャンク屋にはマスタライバー使用を融通してくれるとも言っているしね。オーブに身元保証してもらえれば、ビクトリア、カグヤ、ギガフロートの3つのマスタライバーを使えるようになって今までより便利になるかも」

「今までどおりでいいって事ですね」

リーアムがほっとしたようにため息をついた。

みんなの気が緩んだその時、アラートが響いた。

「あ、これは！ 救難信号です」

「なんだって？」

「距離約2000、グリーンン262、34マーク9ブラボアの地点です」

「ようし、行くかあ！ その船が壊れていたら商売になるしな！
リ・ホーム全速前進！」

第三十話

ロンド・ギナ・サハクはビクトリア奪回から程なくして宇宙に上がり、オーブの宇宙ステーション「アメノミハシラ」を拠点に宙域のザフト軍に対して通商破壊活動を行っていた。

「ふん！ 他愛もない。新装備の訓練にもならんではないか」

その台詞を聞く人は誰もいない。その日、ギナは大胆にも一人でザフト軍を攻撃していた。

PO1 ゴールドフレームは外見が一変していた。

背部に装備された翼状のデバイス ミラージユコロイド技術の応用で、接触した相手のバッテリーを強制放電させ自機のエネルギーとして吸収できるマガノイクタチと言うオーブで開発した武器がある。

この装備により、現在のモビルスーツとは格段の稼働時間の長さを誇っている。

そのほかにネットクガードなど細かい部分が改修されている。

「ん？ あれは……これはこれは」

PO2 レッドフレームが、こちらに向かって来る。

『ゴールドフレームか！？ ずいぶん形が変わっているじゃないか！ なんでもかんでも壊しやがって！』

「ふん。私は地球軍だ。ザフトの軍艦を攻撃して何が悪い！」

「……くつ。もう相手に戦う意志などない！ 救難ポッドまであなたは破壊している！」

「まだ相手は残っている！ 2隻もな！ 降伏もせず反撃してくるのだ！ 攻撃を止める理由などない！」

「それにしたって、救難ポッドを！ やめろ！」

「こちらは一人だ。一人で捕虜など取っていられる余裕なぞあるものか！ ここで見逃せば彼らは程なく新たな武器を手にこちらに襲い掛かってくる！ 敵に情けを掛けて味方を殺せとでも言うのか！

貴様は！」

「くっ。それでも俺は！」

ロウはビームライフルを撃つ。

「下賤な者が……所詮理解できぬか」

ギナはロウが撃ったビームライフルをシールドで軽く受け流すとマガノシラホコと言う、マガノイクタチに付属する射出武器を射出する。

マガノシラホコはまるで2匹の生き物のようにレッドフレームを襲い、ビームライフルとシールドを弾き飛ばす。

「消えた!？」

P01が姿を消した。ロウが驚愕の叫び声を上げる。ガーベラストレイトを抜き放ち、辺りの気配を探る。

「うわあああ！」

「ふふふ。私はここだよ」

レッドフレームの後ろから、マガノイクタチがレッドフレームを締め上げ、レッドフレームのバッテリーを強制放電させる！

「やらせないわ！」

「ん？」

ギナが見やると輸送船がこちらに突っ込んでくる。

「無駄な事を！」

攻盾システム「トリケロス改」のランサーダートを輸送船の艦橋目掛けて射出する。

「なにい！」

ギナは思わず叫んだ。輸送船は上部のアームを動かしてランサーダートの艦橋への直撃を避けたのだ。

「おのれ！」

ギナはビームライフルを連射する。

再び輸送船のアームが動きシールドのような物を展開する。それはビームをたやすく吸収した。

「ラミネート装甲か！ 小ざかしい真似を！」

「隙有り！」

レッドフレームはなんとかマガノイクタチのあぎとから逃れると力
ーベラストレートを振りかぶった。

「反撃行くぜえ！ でやあああ！」

「それは一度見た。効かぬ！」

ギナは一瞬の間左手でガーベラストレートを支えると、トリケロス
改の硬化処理された刃をガーベラストレートに思い切り横合いから
叩き付けた！

ガーベラストレートは、一瞬その力に耐え……そして折れた。

「……嘘だろ？ ガーベラストレートが折れるなんて……」

「これで終わりだな！」

「くそう、くそう。まだまだ！ まだ終わらんよ！ だがどうする……
…どうしたらいいんだ……」

その時、近づいて来る一揆のモビルスーツがあった。

「戦う気力がある限り、負けたとは言えない！」

「あ、あんたは！」

「ちつ。乱入者か。……なんと、P O 3ではないか！」

「ロウ・ギユール。お前の信念を貫け！ お前の作ったタクティカ
ルアームズ！ これを使え！」

タクティカルアームズ それはロウ・ギユールがブルーフレーム
のために作ったラミネート装甲を持つ巨大な実体剣である。

「おっしやあ！」

「虚仮脅しが！ P O 3共々葬つてやるわ！」

「この！ もう止めてくれ！ ゴールドフレームだって無意味な破
壊は望んじやいないはずだ！」

「なにをほざく！ 先程私が言った事をちつとも理解していないで
はないか！ やはりお前達ジャンク屋は下賤な豚だ！ その豚ども
によって豚小屋のように汚された社会を、高貴な人間のための理想

社会として建て直すのだっ!!」

「何が理想社会だっ! お前のすることは、世の人々を虐げ、冷酷に支配することではないか!!」

「私をよく知りもしないくせに言うわ!」

細身のカーベラストレートから大きな広刃のタクティカルアームズ……その取り回しには差異がある。慣れるまでの若干のタイムラグ。ギナはその隙を見逃さず、トリケロス改をレッドフレームの左腕に叩き付けた!

レッドフレームの腕はちぎれ飛ぶ。

「これで終わりだ……!!」

ギナはレッドフレームに止めを刺そうとした。

! ギナはコクピットに衝撃を覚えた。見ると、PO3が横から組み付きPO1のコクピットにアーマーシュナイダーを突き刺そうとしていた。

「敵は倒せる時に倒す　それが傭兵のやり方だ　」

……あれ!?

珍しい事に効は焦った。このアーマーシュナイダーはモビルスーツの装甲など、アストレイの装甲など容易く突き通すはず。それが突き立たない。

とっさにギナはブルーフレームを振り払う。

「ふ……はははは!　無意味と思っていたPS装甲に助けられたか!」

その時、こちらに向かって来る戦艦があった。

「ロンド様!　無事ですか!」

「くっ!　イズモ級まで出て来られては!　ロウ・ギユール、悪運を祈る!」

効はすばやくタクティカルアームズを回収すると、撤退して行った。

「ちい!　すばやい奴!」

「もう止めて！　ロウを殺さないで！」

「なんだ!？」

女の子の声がするとザフトのバクウのようなモビルスーツが輸送艦から出て来た。そしてレッドフレームを守るかの様に立ちふさがるふと。前にもこんな事があったような　既視感を感じる。

「興が削がれてしまったな……おい！　ジャンク屋！　船の責任者は誰だ？」

「私、かしらね」

プロフェッサーが答える。

「そうか。さあ、選ばせてやろう。」

1、ジャンク屋ギルドは地球軍とザフトの戦いに介入したばかりでなく一方的にザフト軍に肩入れをする行動を取った。

2、ジャンク屋ロウ・ギユール一味は地球軍とザフトの戦いに介入したばかりでなく一方的にザフト軍に肩入れをする行動を取った。

さあ、どちらで報告されたい？」

プロフェッサーは困り果てていた。

PO1　ゴールドフレームがおそらくオーブのマスドライバーの価値を上げるため、ギガフロートの破壊に来た事があった。その時の様にゴールドフレームが謎の存在なら、戦闘してもなんとでも言い訳は立った。

だが、今やオーブは地球連合に組し、PO1ははっきりと地球軍であると言って戦闘をしていたのだ。ごまかしようがなかった。

プロフェッサーの額を冷や汗が流れる。

どっちにしる私達は終わり、規則を破った犯罪人となるだろう。ジャンク屋ギルド全体を巻き込む事などできない。なら……

「に、2番を……」

「ふふ」

ギナは薄く笑った。

「3番目の道を教えてやろう」

「え!？」

「私に従え。そうすれば不問にしてやる。とりあえずは……ザフト艦も逃げたようだしな。そこらへんに漂っている救命ポッドを回収しろ。助けたかったのだろう？ アメノミハシラまで捕虜として連行して来い。逃げれば……わかつているな？」

プロフェッサーはうなづくしかなかった。

「馬鹿馬鹿馬鹿！ ロウが死んじゃったらどうしようと思ったじゃない！」

「悪い、樹里。でも、俺がつくづく悪運強いよなあ。ははは……」

「笑い事じゃありませんよ！」

リアムが珍しく怒っている。

「ジャンク屋ギルドは中立。その原則があるから権利も守られるんですよ？ それを考え無しに戦いの中に飛び込んで！ あなた一人の行動でジャンク屋ギルド全体に迷惑が掛かるんですよ？ わかっているんですか？」

「うー、黙って見てられなくてさあ。悪かったよ。反省してる」

「……『私に従え』って、どう言う意味かしらね」

「うーん、ジャンク屋廃業して部下になれ、とか？」

「もしそうならずいぶん高く評価されたものね、私達」

「なあ、プロフェッサー。オーブのエリカ・シモンズさんとは知り合いなんだろ？ なんとかならないのかよ」

「無理ね」

プロフェッサーはにべも無く断言した。

「彼女だったただのモビルスーツ開発主任だけよ。立場があるし、やれる事にも限界があるわ。それに……私の判断からすると、アメノミハシラに来てって事はゴルドフレームに乗っていたのは、オーブのサハク家の人間よ？ エリカがどうにかできる相手じゃないわ」

「はあ……命があっただけでもめっけもんよ。ロウ、これに懲りて

考えなしに勢いで首突っ込むのやめてよね」

「そうですね。じゃあ、救命ポッド回収始めましょうか」
彼らは渋々作業に取り掛かった。

7月20日 地球軍は大洋州攻略作戦を発動する。オーブからカーペンタリア攻略部隊が出発、同時にマストライバーからいったん宇宙に上がったモビルスーツ部隊がオーストラリア大陸中央部への降下作戦を実施し、オーストラリア東・北岸の攻略を目指す。

「いよいよかあ。カーペンタリアは地上のザフトの本拠地だろ？
やっぱり抵抗厳しいだろうな」

休憩室にはパイロットが全員集まり、出勤まで待機している。

「そうだな。でも、今の地球軍には勢いがあるからな。攻められる立場より気が楽だよ」

サイがトールに答える。

「もしかしたら、今回は戦わずに済むかも知れんぞ。ザフトの新型が出てこなければな」

「いつかは戦わなきゃいけないけどな」

そうなのだ。アーケエンジェル隊とドミニオン隊は、カーペンタリア攻略には加わらない。ザフトの新型モビルスーツ ジャスティスとフリーダムは捕獲あるいは撃破が任務だ。

如何にザフトの新型であろうと、これだけの数に掛かられば撃破出来ようと言う考えからだ。

アスラン……出てくるのかな。出てこなければいいけど。戦いたくないよ。

ルナマリアの希望は叶えられた。

「そうですか。例のザフトの新型は出てきませんか……」
地球軍がカーペンタリア攻略作戦を発動してから二日目。

アズラエルはドミニオンでカーペンタリア攻撃の様子を観戦していた。

「は。しかし、ビームライフルを装備したザフトの新型モビルスーツと思われる物が少数ですが確認されています。ビクトリアで少数見られた物と一緒に」と

「見せてください」

「は！」

しばし、映し出された画面をアズラエルは見入った。

「……確かに新型のようですね。ストライクダガーよりも性能も良いようです」

「まあ、ストライクダガーはあくまで量産までの期間短縮を優先させた簡易量産機ですから。ダガー（通称105ダガー）の量産も進んでおりますし、ストライクダガーにつきましても現在ストライカーパックを使用可能な改良型、ダガーLの量産が始まっておりますので、その数が揃えば対応は出来る物と……」

「いいでしょう。見た所、オーブで確認された2機程の圧倒的なパワーは無いようですし、おそらく通常のバッテリー動力機でしょう。ああ、一応捕獲は心がけて置くように司令部に伝えてください」

「はっ」

「では、後は攻略艦隊司令部に任せてドミニオンとアークエンジェルは一旦オーブまで下がらせてください」

「はっ」

結局、私達は何にもせずにおーぶに戻った。

アスランと戦わずに済んで、私はほっとした。

「これから俺達どうするんだろっな」

今まで訓練に回っていた、オーブに集まった地球軍のモビルスーツ部隊もカーペンタリア攻略に出撃して、私達は久しぶりに暇な時間を過ごしていた。

「ねえ！ ザフトがジブラルタルを放棄したって！」

ミューデーが休憩室に駆け込んで来た。

「ほんと！？」

「そうかあ。これは、いよいよ次は宇宙かな」

「宇宙かあ。私地球しか経験ないのよね。頼りにしてるわよ、ルナ」

そうか、そう言えばこの中で宇宙でモビルスーツ動かした事あるのって、私だけじゃん！

「ふふふ。宇宙に行っても、しばらくは特訓ね」

アークエンジェルが宇宙へ行く準備は着々と進んでいる。

ジェットストライカーは降ろされ、出力を強化されたエールストライカー改が積み込まれる。

今日は、フラガさん専用の新しいストライカー　ビームガンバレルストライカーが運ばれて来た。

スカイグラスパーも降ろされ、コスモグラスパーが積み込まれる。

そんなある日……

第三十一話

「ありがとうございます！今日は私なんかのためにわざわざ……」
「なに、ジブラルタルの奪回祝勝会と、いよいよ宇宙へ出撃するための景気づけも兼ねていますからね。気にすることはありませんよ」
アズラエルさんが笑う。

今日は7月26日。私の誕生日だ。オーブの首都オロファトのヤラファトホテルでパーティが開かれている。

アズラエルさんは、誕生会はついでだと言っけれど、ステージの垂れ幕にはしっかりと『ルナマリア・ホーク中尉誕生日おめでとう！』と書かれている。ちょっと恥ずかしい。

「そうそう。ルナマリアさんにプレゼントを用意してきたんですよ。」
「はっ」

お付の人からアズラエルさんは小箱を渡された。なんだろう。

「……わあ！きれいな赤！」
開かれた小箱の中には、1cm位の大きさの深紅の宝石のネックレスがあつた。

「7月の誕生石のルビーですよ。それに……ルナマリアさん、こんな色好きでしょう？」

「はい！よくわかりますね」

「そりゃあ、モビルスーツとか服装とか見ればねえ、ふふふ。このルビーはピジョンブラッドと言っんですよ。あまり小さいと暗いだけの赤になってしまつて価値が激減するのですが、3カラットもあればやはり見栄えがしますね。オロファトの宝石店で見つけて買ったのですがなかなかいい物を揃えていました。さすがオーブですね。さあ、つけてあげましょう」

「あ、お願いします」

私は後ろを向く。後ろからアズラエルさんの手がまわされ、胸元に

ルビーが置かれヒヤツとする感触。

「さあ、できました。見てみますか？」

「あ、はい」

私達は鏡のところまで歩いていった。

胸元で真紅の輝きを放つルビー……自分で言うのもなんだけど、似合ってる。

えへへ。顔がにやついてしまっ。

「ありがとうございます！ こんな素敵な物を！」

「ふふふ。喜んでもらえて嬉しいですよ。……では、一曲踊っていただけますか？ レディ？」

「はい、喜んで！」

「あ、ルナ。今日はおめでとー！」

「カガリ！ 来てくれたのね。ありがとう」

「まあ、私は父の代理ってとこだな」

カガリは、髪をアップに結びグリーンタイトなドレスを着ていた。

「……やっぱりカガリ、ドレス似合うわね。私はどう？ 変じゃない？」

「変じゃないぞ。赤いドレスが、髪に合って綺麗だ。ネックレスもいいな」

「ネックレスは、さっきアズラエルさんがプレゼントしてくれたのよ」

「ふーん。私が見るところ、結構良い品だぞ。いい貰い物したな」

「そうなんだ？ まあアズラエルさんが直々に選んだんだから品物に間違いはないわよね。大事にしなきゃ。ところで、カガリのお連れの方はどなた？」

カガリの後ろには、髪を肩まで伸ばした男性が私達の会話を微笑みながら聞いていた。

「ああ、私の従兄で、婚約者のユウナ・ロマ・セイランだ」

「よろしく！ カガリが世話になったそう。色々活躍を聞いているよ。紅の戦乙女殿」

ユウナさんが手を差し出して来た。握手をする。

「セイラン家は大西洋連邦に知り合いが多くてな。アズラエル家とも昔から知り合いだそう。オーブが地球連合に参加してから、色々と役に立ってくれている。……あ！ ユウナ、この機会だ。ムルタ・アズラエルに紹介してくれ！ 顔繋ぎをしておきたい。直接知り合いになっておくに越した事はないからな」

「そりやもう、カガリのためなら！」

「じゃあ、またな。ルナ」

「うん、頑張つてね、カガリ」

カガリとユウナさんはアズラエルさんの所へ歩いて行った。

うん。カガリ、頑張っているなあ。ユウナさんも、カガリの事が本当に好きそう。よかった。

「よう、姉ちゃん。楽しんでるか」

「あ、ダナさん」

ダナさんがグラス片手に話しかけてきた。顔がほんのりと赤くなっている。

「ここはいい酒が置いてあるねえ。こんな酒が飲めるのも姉ちゃんのおかげだよ。誕生日おめでとさん」

「ふふ。私の誕生日はついですつてば。宇宙に行くのを前にした景気づけが目的のパーティーですから、しっかり鋭気を養ってくださいね」

「おう、しっかり養ってるよ。食い物もうまいしな。それにしても宇宙かあ。わくわくするねえ、宇宙なんて初めてだから」

そう言えば、ミューディーも言ってたな。宇宙は初めてだって。

「ひょっとして、アークエンジェルとドミニオンも併せて宇宙でモビルスーツ動かした事あるのって私だけ？ 教えきれるかなあ、そ

んなにいっぱい」

「んー？ 月にもモビルスーツ隊が編成されてるって話だろ。そいつらを教官にして教われればいいさ。姉ちゃん一人で気張る事もないさ」

「そうか、そうですよね。ありがとうございます」

「なーに。お、また新しい料理が来た！ じゃ、またちよっくら鋭気を養ってくらあ」

後ろ手に手を振りながら、ダナさんは運ばれて来た料理の方にふらふら歩いて行った。

んー？ ドミニオン、宇宙。なんか引つかかる。何か忘れてるような……

まあいいか。大切な事ならその内思い出すだろうし。

「サイ、残念ね。フレイがいればあんなように踊れるのに」

「しょうがないさ。オーブはカーペンタリアに近すぎる」

私達の視線の向こうではミリイとツールが楽しそうに踊ってる。

フレイとはサイから連絡先を教えてもらってこの間電話してみた。

フレイは宇宙から地球に降りた時、オーブ本土には寄らずに大西洋連邦に帰ったと言う話だった。

マストライバーがあつてカーペンタリアにも近いオーブは危険だと言っ判断だろう。

「そう言えばカズイ、アークエンジェルから降りなかったのね」

「そうだな。お前は降りてるかと思った」

「馬鹿にするなよ。みんなを置いて僕だけ軍を抜けられる訳ないじゃないか」

「馬鹿にした訳じゃないさ。お前は優しいからな。軍隊には向かないんじゃないかと思ってた」

「僕にだって、CICで座ってるぐらいできるさ。サイヤトルやルナほど危険な訳じゃない。それに……安全だと思ってたオーブも結局攻められちゃうしさ。絶対に安全な所なんてこの世に存在しないじゃないか」

「そうね。……なんか、カズイ、きりつとして男らしくなったね。見違えた」

「そうだな。なんか遅しくなったな」

「よしてくれよ。照れるじゃないか」

カズイは顔を赤くして手を振る。

「ふふ」

もうそろそろ料理も出尽くし、帰る人も出始める頃、ふとアズラエルさんがテラスで風にあたってるのが目に入った。

思い出した！ どうして思い出さなかったんだろう……自分で経験した事じゃないからね、きっと。授業で習っただけだったから

……夢の世界の記憶。

私はアズラエルさんに駆け寄った。

「どうしたんです？ そんな緊張した顔をして？」

「聞いてください。笑われるかもしれないけど、御伽噺のような、

夢の話だけど、でも

「落ち着いて。聞きましよう。なんですか？」

私は、かいつまんで夢の世界の事を話した。私にもう一つの人生の記憶がある事を。そして

「ふーむ。すると、その夢の世界では、僕はヤキン・ドゥーエで戦死すると言っ訳ですか」

「はい。どんな状況かまでは教わりませんでしたけど、夢の世界ではアズラエルさんはプラントの、コーディネーターの敵の大物として有名でしたから、そのくらいは……笑いますよね？ でも、思い出したら心配になって、それで……」

「笑いませんよ。ありがとう、心配してくれて」

アズラエルさんは微笑んだ。

「しかし、興味深い。平行世界、とても言うのでしょうか？ 別の世界である事は確かそうですね、ルナマリアさんはプラントではなくオーブに生まれているし。しかし、参考になる事は確かです。うーむ、ジェネシスですか？ その戦略兵器は。調査の必要がありそうですね」

「でも、この世界にはないかも知れませんよ？ 無駄骨になるかも」

「大丈夫ですよ。相手がこう言う仕様の物を作っているか否かを探り出すのは、どんな物を開発してるかをあいまいに探るより簡単なんです。しかも、そんななどでかい物ならね。作られていないならいなくて安心できます。……僕はやっぱりドミニオンと一緒に死んだのかな？ くやしいな。結構愛着持ってるんですがね、あの艦に」

「んー、私がザフトに入ってた時はドミニオンって艦の名前聞いた事ないんですよ。あ、でも！ アークエンジェルなら戦った事あります！ パワーアップもしてました」

「パワーアップですか？」

「ええ！ 敵だったから細かくはわからないけど、ジェットストライカーを着けたストライクと同じ位高く飛べるんですよ。思い出した時悔しかったなあ。あれだけ高く飛べれば、アフリカからアラスカに行く時も楽に来れたのにつて。ザフトの水中モビルスーツに一方的に攻撃されてどんなに悔しかったか……あ！ それからローエングリンも地上でも発射可能なように、汚染が無いように改良されました。地上の砲台に設置したりして……ザフトの艦にも搭載した新型艦あつたんですよ。実は私が配属された最新鋭艦あつたんですよ」

「面白いですね。研究させて見ましよう。うーむCE・73年ですか、2年もあればそんな事も可能なんですよ。夢の世界では、アークエンジェルはどんな活躍をしたんですか？」

私は、知ってる限りの夢の世界でのヘリオポリス崩壊からのアーク

エンジニアルの行動を話した。

「……ちよつと待つてください。三隻同盟ってのは何なんです!？」
「アークエンジェルは地球軍から脱走したみたいで……そのう、ア
ラスカでザフトを誘い込んでサイクロプスで壊滅させるための罠に
させられたのが切っ掛けらしいですけど……」

アズラエルさんの口元がひくついた。

「あつたんですか？　そう言う計画」

「……正直に言えば、ありましたよ。ユーラシアと東アジアの軍隊
を罠にしたね。しかし、その世界の僕は何を考えていたんだ？　ア
ークエンジェルと言う高性能な最新鋭艦を罠にするなんて。僕には
理解できない。……なんでその計画が実行されずに終わったか
わかりますか？」

「えーと、なんでですか？」

「ルナマリアさん、あなたのおかげですよ」

「私!？」

「ええ。あなたの活躍のおかげで、低軌道会戦で第八艦隊は勝利し
た。アルスター事務次官もハルバートン提督も死なずに済んだ。結
果、我が軍のモビルスーツの開発が夢の世界より進んだ。そして、
ナチュラル用のOSをルナマリアさんが早期に完成してくれたおか
げでモビルスーツ隊の編成がスムーズに進んだ。サイクロプスによ
るアラスカ本部の自爆と言う奇手に頼らずともザフトを撃退できる
目算がついた。僕は神を信じたくなくなりましたよ。あなたに夢の世
界の記憶を与えた神をね。」

アズラエルさんは、真剣に私の話を聞いてくれた。夢の世界で再び
戦争が始まった後。私がザフトで戦っていた時の事も。ロー
ド・ジブリール。夢の世界での私達ザフトの一番の敵だった人。
彼は、この世界でも存在するようだ。過激すぎて苦労している、と
アズラエルさんは苦笑していた。

「彼は真剣にコーディネイターを憎んでいるようですからねえ。困
った物です。ユニウス7への核攻撃もどうやら裏で彼の差し金らし

くてねえ。人が作った物だと思つて気楽に壊しやがつて！ いや、失礼……ジブリール家はプラント建設にさほど関わっていないかつたのですよ」

「アズラエルさんは、コーディネイターを、その、どう思っているんですか？」

「うーん、やつかみ半分つて所ですねえ。実は子供の頃コーディネイターに憧れていましたね？　なんで自分をコーディネイターにしてくれなかつたのかと親を恨んだ事もありました。はは」

「コーディネイターになつても、幸せが約束される訳じゃないですよ」

「そうですね。失礼ながら、ルナマリアさんを知つてからコーディネイターに対するトラウマは消えました。それに、ナチュナルの可能性を信じさせてくれる人も見つけましたし」

「どんな人ですか？」

「傭兵のサーペントテイルつてご存知ですか？」

「あ、なんか聞いた事あります」

「優秀な傭兵グループですよ。何回か仕事を頼んだ事があるんですが、ギガフロート建設の警備とか。そのメンバーにイライジャ・キールと言う男がいるんですよ」

「あ、ギガフロートの」

「彼はコーディネイターですが、免疫系しかいじつてないそうです。それにも関わらず、努力の末サーペントテイルの一角を担うに相応しい実力者に成長しています。みんなサーペントテイルのエースの^{ムラクモガイ}叢雲効に目が行つていますけどね、僕はイライジャ君に注目しているんですよ。それに、我が地球軍にもコーディネイターに負けない活躍をしてくれている人達がいっぱい居ます。ジブラルタルで名を上げたジェーン・ヒューストン、ビクトリアで活躍したエドワード・ハレルソン、それに地球連合軍カリフォルニア士官学校の教官だった、彼らを鍛え上げたレナ・イメリア……。コーディネイターにも負けないナチュナルが居るつて証明されれば……そうすれば危険を

犯して子供をコーディネイターにしようなんて誰も思わなくなるでしょうし、コーディネイターは出生率が低いから自然と滅びます。僕はナチュラルの可能性を信じてるんですよ……人類はそのままでも前に進んで行けると……」

そうか。そんな人達がいるんだ。会ってみたいな。平和になったら、会って見よう。

「しかし、心配でしょう。妹さん、メイリンさんですか。もしこの世界にもいたら」

「ええ、でももしこの世界にメイリンがいても、向こうは私を知らないだろうし……無関係なんですよね、結局。夢の世界の知り合いに拘るより、こちらの世界の家族、友達を大切にしたい……」

「夢の世界では……恋人とか、いたんですか？」

「……あは。いたんですよ」

「会いたかったり、しますか？」

「それが、笑っちゃうんですよ。その人オーブ出身だったんですけど、この間、こっちの世界でも会っちゃったんです！」

「……そ、そうなんですか」

アズラエルさんは、なぜかとてもショックを受けたような顔をした。「でもね？ 夢の世界じゃ、私より一歳年下だったのにこっちの世界じゃ、まだ10歳以下だったんですよ。いくらなんでも恋愛対象外ですよ。私シヨタコンじゃないし。それに彼には妹がいたはずなのに、こっちじゃ私と同じくらいの年の姉がいるし。やっぱり、夢の世界とこの世界は違うんだなって思い知らされました」

「そうですか。ふう……」

アズラエルさんはため息をついた。

その後も話は弾んだ。結局、パーティが終わるまでアズラエルさんと話し込んでしまった。

私が乗った、そして敵にしたザフトの新型モビルスーツにはとても

興味を示してくれた。そしてニューヨークンジャマーキャンセラーの存在を知ると、とても喜んでくれた。私が、技術までちゃんと習ってない事が……詳しく教えられない事が悔しい、と言うと、確実に出来ると言う事がわかるだけで、非常に役立つと言ってくれた。

……今まではフラガさんに、予知夢と言う事で話したただけだったけど、アズラエルさんにはすべて話せて、すっきりした。うん、やっぱり吐き出したかったんだ。もう一つの人生の記憶なんてね。アズラエルさんに荷物を持ってもらったようで、楽になった気がする。

艦に帰る車の窓から入る夜風がとても気持ちよかった。

第三十二話

「いよいよ見えてきましたね」

「ああ……」

宇宙を進むリ・ホームの前に、オーブの宇宙ステーション『アメノミハシラ』が姿を現し、次第に大きくなっていく。

「ザフトの捕虜達の様子はどうですか？」

「一人騒いだのがいたでしょう。彼にはおねんねしてもらっているわ。それより、そろそろアメノミハシラの管制と連絡しなくちゃね」

「ああ」

プロフェッサーに言われて、ロウはアメノミハシラの管制に連絡する。

「アメノミハシラ！　こちらジャンク屋ロウ・ギユールだ。ザフトの捕虜を連れて来た。どうすりゃいい？」

『こちらアメノミハシラ。ロウ・ギユールか。話は聞いている。そのまま入港せよ。ユーコピー？』

「アイコピー」

リ・ホームは管制に従いアメノミハシラに入港した。

「うへえ！　なんだか兵隊さんが集まってきてらあ。悪い事にならなきゃいいがなあ」

「不安、ですなあ」

リーアムも眉を潜める。

……ロウ達の心配は杞憂だった。集まってきた多くの兵隊達は、捕虜を受け取りに来たのだった。

「さて！　お疲れ様でしたね、あなた達」
残ったオーブの士官が言った。

「なに。俺達はこれからどうすりゃいいんだ？」

「このアメノミハシラの責任者、ロンド・ミナ・サハク様がお待ちです。案内するように言われています」

「不安、ですねえ」

リアムはため息をついた。

「ははは！ 大丈夫ですよ。心配しなくても。確かに迫力がある方達ですけどね、サハク様達は。さあ、カートに乗ってください」

ロウ達はカートに乗り港から居住区に入り、更に嚴重に警備されたエリアへと入り、廊下を歩いて行く。

「この部屋です。どうぞ」

ドアが開く。

部屋の奥には背の高い黒い長髪の人物が二人、一人は椅子に座り、もう一人はその傍らに立っていた。

「……え、えーと」

秀囲気に吞まれてロウは舌がもつれる。

「ふふふ。アメノミハシラへようこそ、と言ったところかな。私はロンド・ミナ・サハクだ」

椅子に座った人物が口を開く。

「私が弟のロンド・ギナ・サハクだ。ロウ・ギユール、お前と戦った相手だ」

続いて立っていた人物も自己紹介をする。

「……あ、あの時はあんだったのか！ ……しかし、ほんとにそっくりだな、あんだ達。どっちがどっちだかわからねえや。俺は

……」

「よい」

自己紹介しようとしたロウを、ミナが遮る。

「お前達の事は調べさせてもらったよ。くくく。悪運に恵まれたジヤク屋が」

「い、いやあ。弟さんには見事に負けまして」

「ふふ。弟が命を取らない気になったと言っただけで、充分悪運が強い」

「そうか。あははは……」

「それで……私達をどうなさるおつもりかしら」

ロウに任せていると話が進まないと見たのだから、プロフェッサーが口を挟む。

「さて……どうした物が」

ミナの傍らに立っていたギナがあごをさすりながら答える。

「面白そうな人材だと思ってな、とりあえず手元に置いて置こうと思っただが」

「……それだけですか！？ それなら解放してくださいよー！ ジヤंक屋の仕事だってあるのに」

「うーん？」

ギナは樹里の方をちらりと見る。

「ジヤंक屋か……いつまでも続けられる商売ではあるまい。お前達は幸運かも知れんぞ。私の配下になれるのだからな」

「もうすぐ戦争も終わる。地球連合は現在のジヤंक屋組合に与えた権利を大きすぎる物と考えている。戦争が終わり次第、それを取り上げる方針だ。これは確定事項だ」

ミナがギナの発言を補足する。

「ジヤंक屋の天下も終わりだ。廃業するにしろ、戦争前のようなデブリ掃除屋に戻るにしろ、オーブとのコネは無駄にはなるまい。

確かに、悪運が強いな。お前達は」

「はー。わかりましたよ。とりあえずあんたらの手下をやりますよ。

……じゃあ、休んでいいですかね？ 色々疲れて……」

「悪いが、休むのはイズモ オーブの宇宙戦艦の中でにしてもらおうか」

ロウの願いはギナに素気無く断られる。

「私はこれから出かける。供をせよ」

「へいへい。どこに行くんで？」

「月だ」

「ふーむ。ロウ達はとどめを刺されずにザフトの兵士を回収した後
アメノミハシラへ向かったか……何か言いつけられでもしたかな？」
ロウ達の動きを知ると効は感心したように言った。彼なりに心配し
て様子を伺っていたのだ。

「ああ、悪運の強さは健在のようだな」
イライジヤも答える。

「一安心だ。な、風花」

「うん！」

「しかし、エリカ・シモンズにはなんと報告したものかな……ロン
ド・ギナ・サハク。態度は傲慢だが、言っている事は頷ける点がな
いでもない……」

「イライジヤー！ 仕事だー！」

そこヘリード・ウェラーが部屋に駆け込んで来る。

「ほう、俺にか？」

「おう！ なんとあのムルタ・アズラエル直々のご指名よ！」

「内容は？」

「オーブから、月基地へのシャトルが打ち上げられる。今回は、な
にか特別な物でも打ち上げられるのか、軌道上の打ち上げ予定宙点
付近から月基地までの経路を念入りに哨戒してくれってさ。もちろ
ん地球軍も哨戒はするだろうがな、目立ちすぎる。念のためにつて
事だろう」

「わかった。油断しなきゃ楽な仕事だな。受けよう」

「でも、効じゃなくてイライジヤをご指名とは、やるわね！」

ロレッタがイライジヤの背中を叩く。

「イライジヤ、頑張ってるもんね！」

風花もはしゃぐ。

「ムルタ・アズラエルか……」

効はちよつと考えこんだ。

「どうした？」

「あ、いや。なんでもない。しっかりやってくれ」

「ああ、もちろん！」

久しぶりの宇宙！

私達はオーブのカグヤマスドライバーから月基地への補給物資の護衛として打ち上げられる貨物シャトルと一緒に宇宙に上がった。

幸いザフトの妨害を受ける事もなくすんなり月のプトレマイオス基地に着いた。

地球からはアークエンジェルとドミニオンが上がり、そしてオーブの宇宙ステーション「アミノミハシラ」からも戦艦イズモが合流して来た。

「おお！ マリユール・ラミアス！ 元気そうだなあ！ 活躍は聞いておるぞ！」

あ！ ハルバートン提督が早速駆けつけて来てくれた！

「ハルバートン提督こそ、よく宇宙で頑張っていてくれました。おかげでいよいよ反撃の時です！」

「おう！ お、フラガ中佐！ アラスカでの活躍は聞いておるぞ。モビルスーツ隊が活躍できたのも君の作戦案あつての事だったと聞く」

「いやあ。皆が頑張ってくれたからですよ。ホーク中尉とか」

「おお、ホーク中尉もよくやってくれた！ 地球軍のモビルスーツが早期に完成したのも君が作ったOSがあつてこそだよ。礼を言わせてもらつ」

「そんな……もう一度やれと言われてもたぶん出来ませんよ？ ぶん」

ハルバートン提督は、ドミニオンの人達が降りて来ると、真つ先にアズラエルさんの所へ挨拶に行った。

「アズラエル理事、モビルスーツの開発には常日頃から尽力頂いているそうで。ありがとうございます」

「何、当然の事をしてるまでです。モビルスーツの有用性は僕もすっかり理解していますからねえ」

「理事の発案で新型モビルスーツも開発されたそうで。これからもよろしく願います……お、バジール少佐！ 立派になったなあ……」

ハルバートン提督はそのままナルさんとかとも話をしてる。

あ、今度はオーブ艦から人が降りてきた。

うわあ、あの長髪の人、背が高いなあ。あれ？ もしかしたらビクトリア奪回のニユースで出て来た、サハク家のギナ様？

「あ、あんた、ルナマリア・ホークさん？」

「え？ そうですけど」

オーブ艦から降りて来た赤いバンダナをした人が声をかけて来た。

「俺、ロウ・ギユールってんだ！ いやーM1アストレイに乗せてもらったんだけどさ、あんたが作ったナチュラル用のOSに惚れちゃまって。あんなに動かしやすいのは見た事がない！ 会いたかったんだ！ どんな人か。こんなに可愛い女の子だったなんて！」

「オーブの関係者ですか？ よろしく願います。それから……オーブのM1アストレイのOSの作者については秘密にしてくださいね？ 地球軍にはれると困るんです」

私はにっこり笑った。

「あー。なんか事情がありそうだな。了解！」

「後ろ……女の子が睨んでますよ？」

「え？ あー、樹里ってんだ。おい、何ふくれっ面してるんだよ」

「もうロウったら、鼻の下伸ばして！ 知らない！」

樹里と言っらしい、ロウを睨んでた茶髪の外跳ねした髪の女の子は目に涙を滲ませて行ってしまった。

「お、おい！　じゃあ、あんだ、またな」

「女の子泣かせちゃだめよー！」

ロウは女の子を追いかけていった。

ひとまず基地の居住区画に落ち着く。今日はこのままお休みだ。1
／6の重力が、うーん、ふわふわマシユマロみたいでいい感じ。
まーるまっしゅまるまるまっろーん　　私はいいい気持ちで眠りにつ
いた。

翌日。アークエンジェルやドミニオンのみんなはプトレマイオス基
地のモバイルスーツ乗員から、宇宙でのモバイルスーツ操縦の訓練を受
けている。オーブから来た人達は……何をしてるんだろっ？　宇宙
ステーションから来たから宇宙での訓練は必要ないだろうし。
私は一人、アクタイオン・インダストリー社の人の訪問を受けてい
た。

「……いや、私共もユーラシア連邦の依頼を受けて自社でモビルス
ーツの開発をしていたのですが、ユーラシア連邦は大西洋連邦のダ
ガーシリーズの供与を受ける事に決定してしまい……」

「はい」

それで？　何が言いたいんだろっ、この人達。

「悔しいですよ！　このままでは終われない！　モビルスーツの
開発も、大西洋連邦の技術も取り入れて自社独自で継続しています。
いずれあなたにも乗ってもらおうと思っっています。今回は新しい
ストライカーパツクの試験をして頂きたいのですよ」

「新しいストライカーパツク？」

「ええ。実際に見てもらった方が早いでしょう」

私はアクタイオン・インダストリー社の格納庫に案内された。

「こ、これは……」

私は絶句した。

そこには、全長100mにも及ぶかと思われる一門の巨大なビーム砲　戦艦の主砲？　がそこにあつた。その両側にあるのはウエポンベイ？　そして、数機付けられているあれはブースターユニット？　「どうです？　このデーパーストライカーは」

アクタイオン・インダストリー社のカトキハジメ設計主任は自慢げに言った。

「デーパーストライカー？」

「現在我が社で開発されているモビルスーツ、コードネーム（イオタ）の強化パーツとして作られた物ですが、ストライクにも、もちろん装着可能です。その名の通り、莫大な加速力で敵陣深くに突入し、戦艦の主砲で一点突破を図るといふ強襲型のコンセプトです。艦船攻撃用の大型ビームサーベルも装備されております。その他、ウエポンベイにはマイクロミサイルがたつぷりと詰まっております。モビルスーツの迎撃に威力を発揮する……予定です。防御面でもパイロットの生残性を高めるため、我が社が誇る技術　アルミューレ・リュミエールを短時間ですがモビルスーツ本体前面に展開可能です！」

「アルミューレ・リュミエール？」

「ヘリオポリスに住んでいた事があるなら聞いた事があるでしょう？　ほら、L3のアルテミス要塞の全方位光波防衛帯ですよ。それを改良しまして内側からの攻撃を可能にしております」

「そんなにたくさん武装、私一人で扱えるでしょうか？」

「心配はいりませんよ。デーパーストライカーには、（イオタ）に搭載される予定の人工知能『ALICE』が搭載されています」

「ALICE？」

「ええ。Advanced Logistic&Intelligence Sequence Cognizing Equipmentの略です。これを生かした簡易ガンバレルも装備されています。一般人でも充分扱えますよ。まあ2次元的な挙動が限界ですがね、敵

の意表を突ける点で効果が高いでしょう」

「でも……この大きさだとアークエンジェルに収容できませんね」

「はっはっは。まあ、しょうがないですよ。それは。基地から発進させるか、戦艦の甲板から発進するかにしてください。なにしろまだ試作段階の物なので、運用まではまだ手がまわらんです」

「はあ……」

私はなんとも言いようが無くそう言うしかなかった。

「地球軍もいよいよ宇宙で反撃ですか。でも、俺達、ザフトと戦う気は無いかな。俺達は兵士じゃないんだ。それだけは言うっておくぜ、ギナ様」

ロウは、それだけは譲れない、と言う様に力を込めて言う。

「ああ。別にジャンク屋のお前達を戦力に数えるほどオーブは落ちぶれてはいないぞ？ まあ暇だったら基地の見物でもM1アストレイの整備の手伝いでもしておけ」

「あー。はいはい、あー！ 整備って言えば！ ちょっと行きたい所があるんだが……」

「ああ、話は後にしろ。これから私は地球軍の幹部達と会議だ。その後聞いてやる」

ギナはロウ達を置いて会議に行ってしまった。

「……本当に、私達ギナ様の気まぐれで連れて来られたみたいねえ」
プロフェッサーが嘆息する。

「みたいだな。まあ、こうなったら思いっきり見物して回ろうぜ！
ジャンク屋の俺達が地球軍の基地に来られるなんて滅多に無いからな！」

第三十三話

「うあー、疲れた！」

「よお！ お疲れさん！」

デープストライカーのテストを始めて数日。

ロウがテストが終わった頃を見計らって、声をかけて来た。

「ほんとにもうくたくたよー。デープストライカーってGがきつくて」

「じゃあ、ちよつくら骨休みしないか？」

「え？ 何かするの？」

「俺達これから、イズモでデブリ帯のグレイブヤードに行くんだが一緒に来るか？」

「へえ！ 技術者が移り住んだって言うコロニーね。そこに何しに行くの？」

「レッドフレームのガーベラストレートが折られちゃってね。打ち直しに行くんだ」

「面白そうね。ちよつと待ってて。カトキ主任に言ってくる」

「来れそうか？ 一週間以上かかるかも知れんぞ」

「テストは私一人で適当にやってるからね。融通が利くよ。最悪みんなが訓練終わるまでに帰ればいいし」

私達はオーブの戦艦イズモに乗ってグレイブヤードに向かう。

「それにしても、何と戦ってガーベラストレート折られたの？」

グレイブヤードに着くまでしばらくかかるので、私達は休憩所だべっている。

「ええ！？ うーん……」

ロウは困った顔をして向かい側の席をちらりと見た。

視線の先には、黒い長髪の背の高い男性　オーブのサハク家のギ

ナ様が座っている。

「ふふん。私がザフト艦隊を沈めまくっている時に、そのジャンク屋がちょっかいをかけてきたのだな。返り討ちにしてやったのだ」
「えー!? ロウ達ってジャンク屋だったの!? ジャンク屋って中立じゃなきゃいけないんでしょ!？」

「……ふふふ。その通りよ。不問にしてもらおう代わりに当面ジャンク屋休業して、ギナ様の手伝いをしてるって訳。ほんとにもう、この熱血馬鹿には困っちゃうわ」

プロフェッサーがしれっときつい事を言う。

「うう……反論できねえ……」

「もう、プロフェッサーたら。ロウも反省してるんだしいじめないでくださいよ」

茶髪の子がロウをかばう。

あら? この間のロウを睨んでた子? もしかしてこの子……うふふ。

廊下でその子 山吹樹里と二人きりになった時、聞いてみた。

「ねえ、あなた。ロウの事好きでしょう?」

「な、な、なんでわかるんですか……!？」

うわぁ、顔がいきなり真っ赤になった。可愛い。

「だって、いつもロウの事心配そうに見てるし……私とロウが話してる時も心配そうに見てるでしょう? わかるわよ」

「うう……顔に出やすいんですかねえ。サーペントテイルの風花ちゃんにも見抜かれちゃったし」

「でも、わからない朴念仁が一人いるようねえ」

「ああ、どうしたらいいんでしょう? ルナマリアさん? 気づいてもほしいし、気づかれるのも怖いし……」

「私だったら、積極的にモーションかけるけど、人によるからね。樹里さん向きじゃないみたい。空気みたいになればいいんじゃない

かな？ いつも居て当たり前、居るとくつろげる存在に。そうして
たまに離れた時に寂しい思いをさせてあなたの存在の大切さを思い
知らせるのよ！」

「うう、頑張ります！」

ああ、他人の恋愛って楽しいなあ。私の勘だけど、ロウと樹里の二
人はそのうちくつつくんじゃないかな。自然に。

「蘊奥の爺さん、いるか！？」

グレイブヤードに着いた私達は、ロウを道案内にコロニーの奥へと
入って行った。

「にゃ〜ん」

ロウの声が聞こえたのか、奥から赤いちゃんちゃんこ風の服を着た
体長1メートル程の大柄な猫が出て来た。

「お、ブータ！ 元気だったか？」

「にゃ！」

「ブータ？」

「ああ、蘊奥の爺さんの飼い猫だ」

「うにゃ〜ん！」

ブータは、ロウのズボンの裾を啜えると、通路の奥へ引つ張って行
こうとする。

「ロウ、これって……」

「蘊奥の爺さんに何かあったのかも知れねえ！ 急ぐぞ！」

「おい！ 爺さん！ しっかりしろ！」

私達が駆けつけると、畳の部屋に倒れているお爺さんをロウが抱き
かかえていた。

「大丈夫！？」

「わからん！ なあ、ギナ様！ イズモから医者……」

「……う……む」

「お、気がついたか！ 爺さん！」

「……馬鹿もん！ わしゃ寝てただけじゃ！」

「……でも、口から血が……」

「リンゴを食いすぎただけじゃ！」

「なんだ……驚かすなよ、爺さん」

ロウは気抜けしたようにへたりこんだ。

「今日はえらいにぎやかじゃな。何があった？」

「そうそう、それ！ 実はガーベラストレートが折られちまってさ、

直しに来たんだ」

「折られたじゃと？ どんな使い方をしたんじゃ？」

「それが……振り下ろしたら片手で白刃取りみたいに止められて、

そこを横殴りに一撃されて」

「ふーむ。片手か。止められる様なお前の腕がまだまだ未熟だと

言う事じゃ！」

「うっ……」

ロウはうな垂れる。

「ご老人。部下の未熟さはお詫びしよう。ところで、直しついでに

私にも一振り作ってもらえないだろうか？」

「む？ おぬしは？」

「私はオーブの Rond・ギナ・サハクと言う者です。実は私の乗る

モビルスーツは、このロウの乗る物と兄弟機とも言うべき物にして

彼の機体で有効な装備は、私の機体にもきつと役に立ちましょう」

「打ってやってもいいが、本人の剣術の鍛錬も必要ぞ？ 本人の肉

体の動きの理解無くして日本刀は本来の威力を発揮できぬ」

「では、一つご教授頂きたく。強くなれる機会を逃したくはありま

せんからな」

「めずらしい。ギナ様が敬語だ……」

ロウがつぶやく。まあ、ギナ様いつもはえらそーなしゃべり方だも
んね。

「ルナ、お前はどつする？ 作るか？」

「うーん、作ってもらえるなら、作ってもらおうかな」

「おーけー。地球にいた時、海の底から面白いレアメタル大量に引き上げたんだ。硬度もあるし靱性も大したもんだから、今回はそれで作ろうかと思つてさ。大量にあるからいくらでも作れるぜ」

お爺さんがこちらを向く。じつと見つめられる。落ち着かないな！

「こりや娘っ子。おぬし剣術の経験があるな」

「はい、うちの家族は日本文化が大好きで、剣術も小さい頃から習いました。空鈍流の奥伝まで許されております」

「ほほう、空鈍流とな。知らぬ流派じゃ。立ち会つてみたい。よいかの？」

「はい、かまいません」

皆は広い板の間に移動した。

ロウは二人の立会いに胸が躍るのを感じた。

ルナマリアは竹刀を受け取ると、青眼に構え目を閉じ、しばらく氣息をととのえているようだった。ルナマリアの目が開く、と同時にゆるゆると構えが変わっていく。

ロウの胸に衝撃が走った。ルナマリアの構えが想像を絶したものだ。だからである。ルナマリアの右手の竹刀は八双の位置で天を指していたが、左腕は軽く前方に伸びて何かの舞の型に見えた

「大丈夫か爺さん！」

ロウが駆け寄る。蘊奥は片膝をついて荒く呼吸をしている。

蘊奥さんは強い！ 強かった！ 空鈍流の秘剣村雨を持ってしても勝てなかった……自分でも信じられない。村雨は無敵だと思つていたのに。

今、蘊奥さんが片膝ついているのは単にお年寄りで長い立ち合いに

疲れたからに過ぎない。

「大事、ない……見事じゃ、ルナマリア殿。この年になってこんな物を見れるとは思わなかったわい。もう滅んでいくしかないと思っておった技術が若い者の中に生きておった……嬉しい事じゃ」

蘊奥は満足げに笑みを浮かべた。

「やる気が出たわい。ロウ！ 刀を打つ用意をせい！」

「がってんだ！」

「私も立ち合わせて頂きたい」

「私も、手伝わせてください！」

「もちろんじゃ」

蘊奥は私達に向かってにつこり笑った。

「わしが持てるだけの知識を教えてやる」

丸々10日、かかって三振りのガーベラストレートが完成した。

「きれいねえ」

「うむ」

「ああ、そうだ。きれいで、そして強い」

私とロウとギナ様は、それぞれのガーベラストレートを惚れ惚れと眺めていた。

蘊奥さんはちよつと疲れが見える。刀を打つ監督と、暇があれば私様に稽古をつけていたからだ。

「お茶入れました。一服しましょう。どうぞ」

「おお、すまんの」

茶碗に手をかけた時 警報が鳴った！

「む、侵入者じゃ！」

「不運な奴らだなー」

「そうね。私達が居る時に進入してくるなんて」

「ふふふ。試し切りをしてくれよう」

ギナ様の瞳が怪しく光る。

私達はそれぞれのモバイルスーツに乗り込んだ。

侵入者達は、ゲイツに乗っていた。この時期でこの装備は……ザフトの正規軍！？

「一応警告するわ。死にたくなければ出て行きなさい」
私は警告した。

「うるさい！ 我々のレアメタルをおとなく渡せ！ 横取りしたジャンク屋がここにいると情報が入っているのだ！ 言い逃れはできんぞ！」

返ってきたのは罵声だった。

「かまわん。ロウ！ ルナマリア！ やってしまえ！」
ギナ様が檄を飛ばす。

「がってん承知！」
「敵はザフトの新型よ！ ビームライフルにビームクローを持つてるわ！ 気をつけて！」

私は仲間に警告するとエールストライカーを吹かしてゲイツの群れに突っ込む！

ゲイツは同士討ちを怖れてビームライフルを撃てない！
刃が相手に垂直に当たるように……切る！

ゲイツの片腕がビームライフルを持ったままゴトリと落ちる。

すごい！ ジンの重斬刀とは比べ物にならない！
ゲイツはビームクローを展開して来た。

でも、対ビームコーティングされたこの剣なら……！
ガーベラストレートはゲイツのビームクローのビームをシャワーに棒を当てたように切り裂き、そのままゲイツのシールドを、左腕を切り裂く。

「胴ー！」

深く踏み込んだ一撃は、ゲイツの上半身と下半身を真つ二つにする。そのままの勢いで更に深く踏み込み……

「面！」

次のゲイツの真上からガーベラストレートを振り下ろす。

ゲイツは胴の部分まで左右に切り裂かれる。

残ったゲイツはとうとう逃げ出した

「わははは、そっちはトラップエリアじゃ……う……む……」

突然、蘊奥さんのジーンが片膝を付いた。

「どうしたの？ 大丈夫？ 蘊奥さん！」

急いでジーンのコクピットを開く。

蘊奥さんは胸を押さえて浅く早い呼吸を繰り返していた。

「畳の部屋に運びましょう！ そおっと」

蘊奥さんの寝起きしている部屋にそっと抱えて連れて行く。

布団を敷いて寝かせる。

「ギナ様、お医者さんを……」

「うむ。樹里、イズモへ行って呼んで来てくれ」

「は、はい」

「無駄じゃ……」

「蘊奥さん！ 気がついたのね！」

「うむ……寿命じゃよ。宇宙白血病じゃ。長年患っておってな。つ

いに死神に捕まってしもうたようじゃ」

「爺さん、そんな事言うなよ！ すぐにまた元気になるって！」

白血病……そうか、あの歯茎からの出血……

「何、死神にもだいぶ待たせたからの。お釣りが来るくらいじゃて

「しゃべるなつて！」

「言わせてくれ……わしは滅び行く技術と共にここで朽ち果てて行くつもりじゃった。それが人生の最後になって素晴らしい弟子を三人も持つ事ができた……わしは幸せ者じゃ」

「……」

私達……ロウ、ギナ様に私は頭をうな垂れる。

「縁がありついでに頼みがある」

「なんででしょうか？ 蘊奥殿」

蘊奥さんのそばに片膝をつきギナ様が答える。

「ブータの事じゃ。あれももう年寄りじゃ。すまんが世話を……」

「するよ！ するとも、爺さん！」

「ありがとう……」

私は綿に水を吸わせ、蘊奥さんの口元に当てる。でも、吸ってくれる様子が無い。

蘊奥さんは小さく、口を開いて何か言おうとする。

「……………遅かったじゃないか……………佐々木……………宮本……………眞子様……………」

佳子様……………」

蘊奥さんの意識はすでに混濁しているようだった。

がくりと、蘊奥さんの首が傾く。

「なんだって？ 爺さん！ 爺さん！ 起きてくれよ！ 爺さん！」

ギナ様が蘊奥さんの胸に耳をつけ、鼓動を、呼吸を確認する。

「ロウ。もう蘊奥殿は……………静かに眠らせてやろう」

ギナ様が蘊奥さんの両手を胸の上で組み合わせる。

「う……………うあああー！」

ロウさんの慟哭の声が響いた。

蘊奥さんの遺体は、とりあえずイズモに運んで冷凍カプセルに入れられた。

「なあ、ロウよ」

「なんでしよう、ギナ様」

「蘊奥殿が亡くなった以上、グレイブヤードは無人となる。侵入者に略奪され放題となるであろうな」

「そう、なるでしょうね」

「……………ここで亡くなった技術者達の墓、技術データをオーブに移すと言っのはどうだ？ そしてその技術を知りたい者が現れれば、す

ぐに参考にできるようにするとするのは……。死者を冒瀆する事にはならんか？」

「とんでもない！ いいアイデアですよ！ それ！」「うん、きつと喜んでくれる！」

「そうよね、ブータ？」

「にゃん！」

「……あれ？ 気のせいかな？」

特に差し許す　　と言う声が聞こえた気がした。

私の脳裏には、暖かな日差しがあたる青い海の見える丘で安らかに眠る蘊奥さんが思い浮かんだ。

第三十四話

私達が、グレイブヤードの技術データ、それからお墓をイズモへ移すのに3日掛かった。

ようやくプトレマイオス基地へ帰還の途につく。

「あ、そろそろブータに猫缶あげる時間だね。ブーター！」
「にゃーん」

探すまでもなく、ブータが休憩室に入って来る。

「ほーら！ おいしい猫缶よ。今度はヘルシーグルメ まぐろとろみソース仕立て 白身魚入りよ」

容器に猫缶の中身を開けてやると、ブータはがつつと食べたす。

「またたびもあるから食べ終わったらあげるからね」

「ルナ、もうすっかりブータ係だなあ」

ロウが感心した様子で言う。

「楽しくって。だってずっとコロニーにいたでしょう？ こんな風にずっと一つの動物と一緒にいるなんてなかったのよ。コロニーじゃ人間以外の動物見た事もなかったわ。学校じゃ水槽で小魚飼ってたけど、それくらい」

「じゃあ、ブータはルナが引き取るか？」

「そうしたいけど、今は戦争中だからねえ」

「じゃあ、ルナが落ち着くまで俺達が預かる。これでどうだ？」

「ありがとう！」

『……これは！ ギナ様！ 救難信号です！』
ブリッジのクルーから通信が入る。

「ん？ ……救難信号？ 助けるぜ！ ギナ様！」
つくづくロウは困っている者を見つけると放っておけない性質なのだ。

「あ？ いいだろう」

「じゃあ、私が行って来るわ！」

暇なのでロウ達としゃべっていた私は志願する。

「おう、頼むわ！」

「……救命ポッドじゃない。船ね」

近づいていくと、救命ポッドじゃないのがわかる。輸送船だ。エンジン付近をやられてる。近くに、モビルスーツがぶかぶか浮いている。一瞬ぎよつとしたが、ハッチを開けて乗員が出てきたのでほっとする。落ち着いてよくみると、皆、頭部だけをやられてる。

「いつたいどうしたの!？」

『わからねえ! あつという間に襲われた! 積荷を取られた!』

依頼主がまだ中にいる! 心配だ!』

「わかったわ。行きましよう」

近づくとも格納庫辺りをぶち破られてる。海賊にでもやられたのかな? モビルスーツの乗員と共に船内に入る。

「これは……モビルスーツ!」

格納庫に入ると、一体のモビルスーツが横たわっていた。

「でも頭がない。ゲイツ……に似ているわね。ザフト?」

「いや、あれは……蛇のマークのモビルスーツだった。確か、傭兵部隊サーペントテイル。なぜかこのモビルスーツの頭だけ奪って行きやがったんだ」

私の疑問を勘違いしたのか、ずれた答えが返って来る。

「変なの。そう言えば、あなたたちも頭部だけ破壊されてたのよね? 頭を100個狩るとか誓いでも立ててんのかしら」

私は用心しながら居住区に入ってしまった。

「プレアの坊ちゃん! 無事ですかい!？」

私達はブリッジに入った。! 人が倒れてる!

「大丈夫!? しつかりして! 何があつたの?」

「……来て、くれたんですね……頼みます! ドレッドノートの頭部を取り戻さなければ……マルキ才様の遺志を……」

弱々しい声でその人は言った。

「ともかく、イズモに収容するわ。知ってる？ オープの戦艦で強いよ。もう大丈夫だから！」

イズモが近づいて来る。私はその人と護衛のモビルスーツの人達、そして積荷の頭の無いモビルスーツをイズモに収容した。

「大丈夫ですか？ 襲撃されたみたいなんです」

私は倒れていた人の様子をお医者様に聞いた。倒れていた人は、金髪巻き毛のかわいらしい子だ。

「うーん、特に外傷もないが……病気の？ なにやら弱っていたからとりあえず栄養剤を注射してみたが……お、気がついたようだ」

「大丈夫？ ここはイズモの中よ！ もう安心だからね」

「ありがとうございます、助けてくれた人ですね？ 大丈夫です。」

……僕はプレア・レヴェリーと言います」

「襲われていたのは海賊に？」

「……傭兵部隊のサーペントテイルに……」

「そう。あの人達が言っていたのは本当だったのね」

「ほう……私を殺そうとした奴だな」

ギナ様が口を挟む。その言葉にプレアさんはびくつとする。

「殺す……？」

「ああ。色々彼らとは因縁があつてな。少年、彼らに狙われると言ふ事は、単なる海賊に襲われるのとは訳が違う。理由の検討は付いているのか？」

「……ここは、オープの船、ですよね？」

ちよつととまどつて、慎重に、確かめるようにプレアさんは質問する。

「ああ。そして私はサハク家のロンド・ギナ・サハクだ。安心しろ。オープの大抵の事なら顔が利く」

ほつとプレアさんが溜息をつく。

「秘密に願います」

「わかった。皆もいいな？」

「はい」

「了解！」

「……ザフトでは、ニュートロンジャマーの影響を打ち消す装置を開発していました」

「ほう、やはりな」

ギナ様は頷くと、先を促す。

「それをニュートロンジャマーキャンセラーと言います。完成したそれを組み込んだモビルスーツをドレッドノートと言います。僕と一緒に収容された物です。元々テスト機だったドレッドノートは、テスト終了後にはバラバラのパーツに分解され、核エンジンおよび機密パーツ以外は廃棄処分されるはずでしたが、地球の深刻なエネルギー不足を憂いたマルキオ様はそれを解決する為、僕にドレッドノートをオーブのウズミ様に渡すように頼まれたのです。ですが、肝心のニュートロンジャマーキャンセラーが搭載されている頭部をサーペントテイルに奪われてしまったのです！ 頼みます！ どうかマルキオ様の遺志を無駄にしないために、協力してください！ 取り戻す事を！」

「待て、マルキオの遺志と言ったか？ 死んだのか？ 彼は？」

「……多分。亡くなられました。殺されたんです」

！

私達の間を目に見えない衝撃が走る。

「誰に殺されたのだ？ 地球連合が彼を手配していたのは知っているな？ 連合の手の者か？」

「……いえ、プラント評議会議長シーゲル・クラインにです」

！

再び私達の間を目に見えない衝撃が走る。

「一体何が起こったのだ？」

「わからない……わからないんです……お二人はナチュラルとコー

デイナーとの融和を図る同志で居られたはずなのに……プラン
トでの隠れ家もシーゲルさんが手配してくれて。ただ、最後の日、
クライン邸に出かけられる前、言い残されたんです。時間までに戻
らなければ、シーゲルさんに殺されたものと思って、速やかに脱出
しドレッドノートをオーブに届けると……マルキオ様は、それきり
戻って来られませんでした」

「……」
医務室を沈黙が支配した。

「いやー、びつくりしたなあ！」

ブレアさんはその後ぐったりして、ドクターストップがかかり、私
達はひとまず医務室から解散した。

「ほんとにねえ。マルキオさん、よく見つからないなと思っていた
ら、プラントに逃げていたのね」

「ああ。プロフェッサーはどう思う？」

「仲間割れ、かしらね。でも、単純じゃ無さそうね」

「あ、ひよつとしたら！」

私は口に出す。

「シーゲルさんで地球にニュートロンジャマー打ち込んだ人よね？
その効果が無駄にするような事をしようとしたマルキオさんが邪
魔になったとか」

「うーん、そつかも知れねえなあ。しかし、ショックだよ。俺達マ
ルキオ様に会った事あるんだぜ」

「確かに知り合いが死ぬのはショックよね」

「ああ……」

「いったい何が起こったんだろう？ 何かが、確実に起こっている……」

プラント。アプリリウス

『召集ラツパの元に

最後の戦闘準備は整った

間もなく全ての通りに

ザフトの旗がはためき

隷属の時は終わるのだ

旗を高く掲げよ！

堅固なる隊列を組み

ザフトは行進する

一糸乱れず確固たる歩みで

同志よ、反動勢力を撃ち

我らの隊列に魂を込めて進軍せよ！

旗を下げよ、死者の前に、瀕死の者に

ザフトの名に於いて堅く宣誓するのだ

来るべき時が来た

尊き犠牲には報復でもって応えろと

その時こそ、あまねく祖国に

幸福と安泰が響き渡るだろう！』

パトリックは息子のアスラんと、エザリア・ジュール、その息子の
イザークを連れて港湾部へと向かっている。

車中にまで、士気高揚のための軍歌が聞こえてくる。

「やれやれ、私が議長だった時以上だな。この軍歌の流し様は」

「ジブラルタルも放棄して……カーペンタリアはまだ耐久しているようですが食料や物資の配給制度も始まり……ジェネシスの方もより一層完成を早めるようにと発破を掛けられています。一体、ザラ議員の評議会議長解任はなんだったのかと……」

悔しそうにエザリアが応じる。

「所詮、この状況では誰が議長をやるうと出来る事は同じなのだ。連合と講和するにしても、地球にニュートロンジャマーを打ち込んだシーゲルに対して優しくしてくれるとは思わんがな。それならいつそアイリーン・カナバを議長にした方が講和に乗ってくる可能性が高いと言うものだ」

車が港湾施設に着いた。四人は車を降りる。

「気にせず歩けよ、アスラン。慌てるそぶりを見せるな」

「はい、父上」

モビルスーツへの格納庫に向かう通路を四人は進む。

「しかし、本当に危険が迫っているのでしょうか？」

「エザリア、私を信じる。私が『彼』の秘密を知ったと言う事は早晩『彼』に知れよう。そうなってからでは遅いのだ。このままプラントにいれば、私と私の右腕の君は確実に消される……それだけの闇がプラントにあったという事だ」

「右腕……は、はい……」

エザリアは頬を染めた。

「おい、アスラン。貴様どこまで事情をわかっている？ 俺はさっぱりだ」

アスランと共に先頭に立って歩いているイザークが小声でアスランに尋ねる。

「さあ。とにかく父上がこのままプラントにおいては危険だと判断したのだ。俺は父上を信頼している。それで十分だ」

「そうか。俺も母を信じるだけだ」

「ああ」

「しかし、シーゲルが議長に返り咲いてから、ラクス嬢がテレビによく出るようになったな」

パトリックが声を大きくして周囲に聞かせるように話題を振る。

「ええ。以前とは違って、我々ザフトの士気を鼓舞するような演説をされるようになりましたね」

「そうですね。以前はテレビに出ても政治的な発言はしなかったのに」

「彼女もわかっているのでしょう。今がプラントにとって正念場だと」

「兵のための慰問のコンサートも頻繁に開かれているようですね」

「アスラン、お前は最近はラクス嬢と会ってないのか？」

「ええ。軍務が忙しくて。コンサート一度くらいは見えておかないと次に会った時に悪いかな？」

いよいよ彼らは格納庫の扉の前に来た。

「こ、これはザラ前議長にジュール国防委員長！ お揃いでどうな

されたのですか？」

警備の兵が尋ねる。

「なに、最新鋭のモビルスーツを見物に来たのだよ」

普段と変わった様子など毛ほども見せずパトリックが応じる。

格納庫の扉が開かれる。

パトリックは堂々とした態度で中へと入って行く。

「では、イザーク君、エザリアを頼むぞ」

「はっ！」

「アスラン、行こうか」

「はい」

パトリックは近くの兵に歩いて行き、命令する。

「ジャステイスとフリーダムだが、私達が実際に乗って飛んでみたい。私達が乗り込んだらハッチを開けてくれ」

「え？ ご自身で操縦するのです？」

「息子達だよ。そのためにわざわざ連れて来たのだ」

「了解しました！」

パトリックとアスランはジャステイスに、エザリアとイザークはフリーダムに乗り込む。

「いいぞ。ハッチを開けてくれ」

エアロックが開かれる。ジャステイスとフリーダムは宇宙に飛び出す！

「……ほほう。これがモバイルスーツから見るコロニーの景色か。面白いな」

「父上、急がなくてよろしいのです？」

「しばらくは近くを飛び回ってやらんと警戒されてしまう。徐々に離れるのだ」

「はい」

ジャステイスとフリーダムは、しばらくコロニーの周辺を飛び回りながら次第に距離を取り、それから一気に加速してプラントから離れる。

「おい、ジャステイスとフリーダム、いつのまにかあんなに離れちゃったぞ！」

「ザラ議員！ ジュール国防委員長！ 何があったのですか？ 離

れすぎです！」

「事故か？」

「二機ともか？ まさか！」

「しかし、万が一と言う事もある。救助に誰か出せ！」

事態が本部に上がり、警報が出されたのは、二機が既に充分プラントから離れた後だった……

第三十五話

「ははは！ パトリックが自ら核動力機で逃げ出したか！ こいつは痛快だ！」

クルーゼは背を反らして高笑いを上げた。

が、この程度では到底クルーゼの歓喜は収まらない。腹筋が痙攣する。

「くははは……も、もう我慢できん！」

ソファに置いてあったりらくまのクッションを抱え込むと床に倒れこんでうーうーと唸ってごろごろ転がりまくる。テーブルに当たり置いてあったウイスキーの瓶、グラスが床に落ち、たちまち絨毯の上に水溜りを作っていく。気にせずクルーゼは床に落ちたウイスキーの瓶を手に取ると直接瓶に口をつけてごくりと飲み、祝杯を掲げるかのように瓶を掲げる。

「これで……これでニュートロンジャマーキャンセラーがアズラエルに渡る！ ざまを見る人類どもめ！ もっと……もっと殺しあえ！」

ノックの音がする。

「どうしました！？ クルーゼ隊長！ 何かあったのですか！？」
副官の声だ。

「なんでもないよ。ちょっとお誘いの手紙をもらってね、興奮してしまつたようだ」

ふふふ、益々面白くなってきたじゃあないか、この世界は！ ザラ派の私に果たして何が目的かな？

クルーゼはテーブルの上を見る。

そこには、とあるクライン派の著名な人物の名前で呼び出しの手紙が置かれていた。

「ずいぶんと、あなた達と過ごしちゃったなあ。別れるのが名残惜しいくらい」

「ああ。俺もだ。だが、永の別れって訳じゃねえ。イズモはプロレマイオス基地にいるし、会おうと思えばすぐ会えるさ」

「うん、そうよね」

「にゃー」

「お、ブータも挨拶に来たか？」

「にゃおん」

ブータは、ぶるると体を揺ると、器用に首輪を外した。外れた首輪を啜えて、こつちに持って来る。

「えーと？ もしかして、くれるのかな？」

「ははは。ずいぶん気に入られたようじゃないか。もらっとけよ」

「じゃあ、せつかくだから、頂くね？ ブータ！」

「にゃうん」

私が首輪を取ると、ブータは満足そうに鳴いた。

「首輪というよりも、ベルトに近いわね」

試しに自分のウェストに巻いてみる。けっこう、しっくり感がある

「へえ、いいじゃないか。似合ってるぞ」

「そう？ えへへ、ありがとね、ブータ」

もう一度ブータにお礼を言う。

「……？ なんだか身体が軽いような……？ 気のせいかな？」

「こんにちは」

「あ、プレア！ 調子はどう？」

「ええ、いいですよ」

プレアは時々胸を押さえて苦しそうに息を止めている事があった。

プレアは大した事は無いと言っけれど、私はそれが心配だった。

ブータがプレアに近づき、手をぺろりと舐める。

「あなたとも、妙な縁だったけど……なんか他人のような気がしないわ。弟が出来たみたいで楽しかった」

「ええ、僕もねえさんが出来たみたいで嬉しかったです」

「時間が出来たら、また来るからね。あなたは取り返す物を取り返したらオーブに降りるのよね？ オーブには私の家もあるの。」

もし、行くあてがなければそこで暮らさない？ あなたみたいない子なら、両親もOKだと思うわ」

「え！？」

ブレアはびっくりして目を見開いた。

「ふふ。よかつたらって事よ」

私はブレアの頭の毛をなでた。

！？

その時、世界が変わった

まるで世界に私とブレアしかいないような、それでいて妙に知覚が広がったような、妙な感覚

「ブレア……あなたは……！？」

「……わかってしまっんですね。もしかしたらあなたも……ニュータイプかも知れない」

「ニュータイプ？」

「特殊な空間把握能力を持ってガンバレルなんかを操作できる人を、僕達はニュータイプと呼んでいます。ニュータイプ同士ではよくこう言った精神の交感が起きるんです」

「すごいよね……こんな力が……」

「僕にもあなたがわかる。ずいぶん辛い思いをしてきたんですね。でも、それを乗り越えてあなたは今、強い」

「強くなんか、ないわよ」

「強いですよ。ちゃんと、上を見ている」

「私の辛さなんか、あなたに比べればなんでもないわよ。なぜ、あなたはそんなに強いのか？」

「僕だつて強くない。僕に残された時間は少ない。それならせめて後悔しないで死にたい。それだけです」

「月並みな言葉なんて言えない。でもあなたには生きて欲しい！ プレア！」

叫んだ瞬間、急速な勢いで世界が戻る。

私はプレアの頭に手を当てたまま。目の前には、プレアの瞳があった。目が、離せない。手が離せない。離したらどこかに消えてしまふいそう。

……もし、望めば、あの精神の交感は起こるのだろうか？

私はプレアの宿命と気負いを知ってしまった。どうしようもなく分からされてしまったのだ、あの空間で。また、あの状態になったら、耐え切れないかもしれない。

「にゃー」

ブータが体を擦り付けてくる。魔法は解けた。

「……あ、あれ、本当にあった事なのよね？」

もしあれが私を見た一瞬の幻覚だったら人にはまるで意味の通じない言葉を口に出す。

「……ええ。あんな風に、人はわかりあえるんです」

「他にもこんな人が？」

「ええ、僕の死んでしまった兄弟達……」

そうだ。プレアは失敗したクローン。プレアには常に死の影がまとわりついている。

「みんなあんな風に分かりあえたら、人類もきつと……よりよき道を辿れるかも知れないのに……」

「わかつて、理解しても、譲れないものも、あるわ。いくらあなたの命が長くないって思い知らされても私は嫌だ！ プレアに死んでほしくない！」

「ありがとう……」

ブータが今度はプレアに体を擦り付ける。

私はプレアとブータをぎゅっと抱きしめた。

「いきなりどうしたんだ？」

さっぱり訳がわからないと言う目でロウが私達を見てた。

「よう、お帰り！ ルナ」

「サイ！ トール！ しつかり訓練やってた？」

「もつぱうちりさ！ とりあえず宇宙での機動に心配はないね。何しろ上から一方的にやられないってのがいい」

「そうそう。ジェットストライカーだったルナにはわからないけど、ろうけどさ」

「私だって！ ジェットストライカーになるまではどんなに悔しかったか……デインとか……水中用モビルスーツとかさ」

「そうだったな」

「宇宙には、宇宙の怖さもあるのよ？ 推進部が壊れて漂つ羽目になつたら、味方が見つけてくれなきゃ窒息死」

「地球だって、空飛べたつて撃墜されりゃ墜落死だろ？ それぞれの死に方があるってだけさ」

「俺は……ミリイが待つてるからな。絶対生きるのをあきらめないよ。救急キットにあるメルカトランフェラーゼを注射して、出来る限り生きるさ」

メルカトランフェラーゼ 宇宙では救急キットの中に含まれている。これを注射して、コクピット内を4 に設定すると

代謝が抑えられて半コールドスリープ状態になり、酸素の消費量が減り長期間の生存が可能になるという。試した事ないけど。

「でも、今度は地球軍は攻める側だから、その点は気が楽よね。な

にかあっても、きつと可能な限り探してくれる」

「そうだな。じゃあ、ルナ。模擬戦やるうか？ 腕鈍っていないだろうな」

「失礼ね！ じゃあ、あなた達の腕前がどれだけ上がったか試してあげるわ」

「そうだ、ドミニオンの連中に声かけて紅白戦やるうぜ」
「いいわね」

ドミニオン隊にお誘いを掛けたら喜んで乗ってきた。

紅白戦が始まった。

合図と同時に5機の105ダガーが突っ込んで来る。

……手強いのが2機！ 誰？ ジョンさんやエイムズさんじゃない、ダナさん？ でも、後もう一人いる！

「スウェン、ミューデー、シャムス！ 俺達は第2期シリーズの3機に向かうぞ！ 残りそのままダガーを引き付けて耐久しろ！」
フラガさんの指示が飛ぶ。

「はい！」

「サイ、トール！ 手強いのが2機いるわ！ それは私とキャリィさんに任せて！」

「わかった！」

言ってる間にも相手は切り込んで来る。

模擬刀同士がぶつかる！

……この2機、連携がいい！ 隙があれば後ろのデュエルダガー、バスターダガーの方を狙われる。

その度に、攻撃のチャンスを挫かれる。気が抜けない。

あ……なに？ これは？

相手の位置が、これからの行動が、感覚でわかる……？

今までたまにあつたような、集中力が限界まで高まったような感覚とはまた違う感覚。

あ、一瞬、フラガさんと繋がったような……側面から迂回してるのがわかる。

一体何なの？

不思議に思いながら、時間が過ぎる。

『ヒュー！』

警告音が鳴る。

『シヤ二機、撃墜されました』

『オルガ機、撃墜されました』

『クロト機、撃墜されました』

立て続けの報告。

「待たせたな、お嬢ちゃん！」

『七郎機、撃墜されました』

私の目の前の105ダガーが動きを止める。横方から105ダガーを撃墜したのは、フラガさんのビームガンバレルだった。

……紅白戦は、アークエンジェル隊の勝利で終わった。

「あんなのありかよー！ あんな武器持って来られたらどうしようもないぜ」

クロトだ。

「違うな。俺が普通のエールパック付けててもお前らやられてたよフラガさんが指摘する。」

「お前ら、一機一機は強いが連携がなっちゃいない。それを見て取ったもんでな、そこを突破口にさせてもらった」

「あはは。その通り。こいつら、てんで統制が取れないでやんのよ。」

好き勝手にやらせとくしかなくってさあ」

ダナが苦笑して答える。

「だってよー、戦闘になるとつい暴走しちゃうんだよ」

「……でも、前よりかは暴走しなくなってきたんじゃないか？ 俺

ら？ 最近減薬されてるし」

「でも、なんか前より覚醒感なくなってきたんだぜ？ いいのかわ
？ なんだか弱くなった気分だぜ？」

「まあ、アズラエルのおっさんがやってるんだ。かまわんて事だろ
う。その代わりってゆーかOSも付きっ切りで改良してるみたいだ
し」

そうか……アズラエルさん、この子達治療してくれてるんだ……よ
かった。

「強いですね。さすがです、ホーク中尉」

この通信は……私が戦っていた105ダガーから？

「あなたもね。手強かったわ。名前を聞かせてくれる？」

「私達はまだ顔を合わせてなかったですね。最近ドミニオンに配属
されたものですから。私は七郎・ソキウスです。」

隣で戦っていたのが十一郎・ソキウスです。どうぞよろしく」

「よろしくね。あなた達、兄弟？」

「そんなような物です」

「おい！ お前ら！ 未確認飛行物体だ！ 距離約2000、
イエロー262、34マーク9チャーリー！」

会話はフラガさんの声で断ち切られた。

私達は一斉に警戒態勢に入る。

だんだん近づいてくる未確認飛行物体……あれは！ ジャステイス
にフリーダム！？

「近づいて来るモビルスーツ！ 止まれ！ 止まらなければ攻撃する！」

フラガさんが警告する。

2機のモビルスーツは速度を落とした。

『その赤いモビルスーツ、ルナマリアか！？ 俺はアスラン・ザラだ！ プトレマイオス基地の最高責任者と話がしたい！』
アスラン！？

「おい、どうするんだ？」

「基地の最高責任者って誰になるんだ？」

「名前しらねーぞー」

「馬鹿ねえ。アズラエルさんがいるんだからアズラエルさんに繋がばいいじゃない？」

「そうだな。では、その2機、着いて来い。おかしな真似はするなよ？」

『了解』

私達は、ジャステイスとフリーダムを囲んで基地に帰還した。

「……はい。了解しました」

「なんて？」

私は七郎に聞いた。

「アズラエル様はお会いになるそうです。一行に知り合いがいるあなたに連れて来て欲しいと」

「わかったわ。護衛は……大丈夫かしら？ アスランなら、変な事はしないと思うけど」

「大丈夫です。アズラエル様の護衛は、私のような者……次郎と三郎が務めております」

「ひよつとして、あなた達、コーディネイター？」

「ええ。あなたには話しても良いか……戦闘用コーディネイターと言うものです。一般のコーディネイターになど遅れは取りません」

「戦闘用……？」

「その話は後で。今は、案内を」

「う、うん」

「どうぞ。アズラエルさんがお会いになるそうです」

「うむ」

ジャステイスとフリーダムから出てきたのは、驚く事にパトリック・ザラ前プラント評議会議長に、エザリア・ジュール国防委員長だった。

「いったいプラントに何があったの!？」

第三十六話

一体プラントに何が起こったと言うんだ？ まあいい。これからの会場でわかるだろう。

ドアが開く。アズラエルは立ち上がった。

開いた扉の向こうには、テレビなどで見知った顔、パトリック・ザラとエザリア・ジュールが立っていた。

「どうぞ、中へ。ああ、ルナマリアさん、ありがとございました」「いえ。では私はこれで」

扉が閉まる。

「ようこそ、と言うべきでしょうか。パトリック・ザラ前プラント評議会議長に、エザリア・ジュール国防委員長、そして……」

「アズラン・ザラにイザーク・ジュール。私達の息子達だ」

「どうぞ、おかけになってください。こちらは……」
アズラエルは壁際のソファの後ろで立っている次郎と三郎を指し示す。

「僕の護衛です。お気になさらず」

「ああ、では座らせてもらおう」

四人が座るのを待って、アズラエルもソファに腰を下ろす。

「で、今回は何用で来られたんですか？ まさか亡命？」

「……近いかな。プラントに対する責任感は1mたりとも失ってはおらん。だが、命を狙われる危険が出てきたのだ」

「誰にです？」

「……シーゲル・クラインにだ」

「詳しく、聞かせてもらえますね？」

「無論、そのつもりだ」

パトリックは自身が探り出した秘密結社ターミナルとシーゲル・クラインとの関係について語った。

「ちょっとすぐには信じられませんがねえ。秘密結社、ですか」

「私も、すぐには信じられなかった。だが、証拠が出てきたのだ。まず、ユニウス7への核攻撃……」

ここで、パトリックは亡き妻の事を思い出したのか、目頭を押さえた。

「攻撃したのは無論そちらだ。だが、こちら側の防備がユニウス7周辺だけ故意に薄くされていた事が判明した。私が探り出した所、その原因はシーゲルが直々に出した防備命令だった」

「アズラエルは先を促すようにうなずいた。」
「続いて地球上へのニュートロンジャマー投下だ。本来これは、遠隔操作によりスイッチのオンオフが出来ると説明されていた。それを持って連合に交渉を迫ると聞かされていた。だが、実は試験段階で、ニュートロンジャマー自体の作用で遠隔操作が出来ない事が判明していた……そのデータはシーゲルの所で握り潰されていた。試験の担当者は不審死を遂げていたため、発覚しなかった」

「うーん。何かをシーゲルさんが企んでいる事は確かなようですが、一体、ターミナルの目的とはなんなんですか？」

「難しい質問だ。一応地球圏を支配する事ではないかと想像しているが、あるいはもつと非論理的な目的かもしれない」

「わからないと言う事ですね。……ところで、ザフトでジェネシスって兵器、開発してますか？」

「……掴んでおったか。確かに、開発している。強力なガンマ線で地球のオゾン層を破壊し、地上に被害を与えるものだ。無論通常のガンマ線ビーム兵器としても使えるがね。私はこれをもって連合に妥協を迫るつもりだった」

「実際には使うつもりはなかったと？」

「ああ。旧世紀の冷戦時代の核と同じだよ。抑止力であってこそ意味がある。使ってしまったら終わりで。なにしろプラントは未だに食料を地球に頼っているのだ。地球が滅べばプラントも滅びる。だが、シーゲルは何をやるかわからん。奴の思考が読めんだ……」

「教えてくださってありがとうございます。では、ぶっちゃけてお

聞きしますが、貴方がここへ来た目的はなんですか？　こちらに情報を教えてくれるためだけに来た訳じゃないでしょう？」

パトリックの顔が一瞬ゆがむ。

「……もはや、プラントに残された道は敗北か、地球人類全てを巻き込んだ心中しかない。どうかプラント市民に寛大な条件で和睦を……そしてもう、C E 6 3 年のような、プラントのエネルギー事情を無視したような過大なノルマを課するような事は止めて欲しい。それがきっかけでプラント内で独立論が声高に叫ばれ始めたのだから……確か、その年はプラントエネルギー部門が故障したんでしたっけ。まあ、こちらにもプラント運営に関して不手際があった事は認めましょう。……和睦ですか。プラント本土までザフトを押し込めた所で名目上講和、としてあげても構いませんけどね、僕としては。プラント市民が武装を放棄してまともな労働者に戻ってくればねえ。ニュートロンジャマーによる被害なんて天文学的な数値になるだろうし、とてもプラントに払えるとは思えない。締め上げすぎて新たなヒトラーを生む原因にもしたくない」

「おお……」

「でも、足りませんね。まだまだ。これまで貴方がしゃべってくれた事だけではとても、釣り合わない。持つてるんでしょう？　交渉材料？」

「……ニュートロンジャマーの効果を打ち消す装置、ニュートロンジャマーキャンセラーが、プラントでは開発されている」

「やっぱり開発されていましたか！」

「一つ、条件がある」

「なんです？」

「この技術を、軍事転用はしないで欲しい。例えば核ミサイル、核動力モビルスーツ……」

「まあ、いいですけど？　まずは各地のエネルギー事情の改善に使いたいですからねえ。でも、その好転したエネルギーで兵器を生産して戦場に送れば同じ事ですよ？」

「それはしょうがないでしょうな。ともかく、プラントには過敏すぎるほどの核アレルギーがあると理解頂きたい。どのような形であれ、兵器として核を使われれば、それはプラントを皆殺しにする意思と取る者が多いでしょう。皆殺しになるならばいっそジェネシスを撃つてしまえ。そうなる事を私は怖れる」

「わかりました。ザフトが核兵器を使わない限りこちらから先制して核兵器は使用しないと約束しましょう。では、データを渡して頂けますね？」

「……今までに貴方が言った言葉、信用してよろしいのですな？」

「僕は商人です。取引の信義は守りますよ」

アズラエルはにいつと笑った。

「では……」

パトリックは懐からデータチップを取り出した。

「全てはここに……」

「確かに」

アズラエルは慎重にデータチップを受け取った。

「さて、これからのあなた方ですが。とりあえずは僕の家の特荘にでも隠れて頂こうと思うのですが、いかがですか？」

「結構だ。場所は？」

「北アメリカ、スコットランドとありますね。ああ、この間オーブの小島も買いましたね。なかなかいい所ですよ、オーブは」

「では、オーブに願います。コーディネーターがいても目立たぬでしょうから」

「わかりました。それで……」

ここで、アズラエルはいたずらっぽく笑った。

「安全のために偽名を名乗って頂きたいのですが、どうします？」

「う……む、偽名か……。そうだな、パトリック・コーラサワで」

「コーラサワ？」

「コーラサワ」

「おいしそうな名前ですね」

「なに、子供の頃に見たアニメの登場人物さ。確か『ガンダム00』とか言ったかな」

「ふむ。機会があれば見てみましょう。ジュールさんはどうされます?」

「え、ええと……」

話を振られて口ごもるエザリアに、パトリックが口を挟んだ。

「エザリアは、私の妻と言う事でいいだろう。私達は家族と言う事で。それが一番自然だろう」

「つ、妻……?」

「嫌かね? エザリア?」

「い、いいえ! とんでもありません! それでかまいません!」少女のように頬を赤らめてかぶりを振るエザリア。

それをイザークは複雑そうな、なんともいえない表情で見つめていた。

ふと、アスランと目が合う。

「兄弟かよ……」

イザークは小さくため息をついた。それを見てアスランが口を開く。

「イザークお、お兄ちゃん?」

「……貴様ー! 気持ち悪い呼び方をするな!」

「あはは。ごめんごめん」

「ぷ。ふふふ」

「ははは」

パトリックも、アズラエルも笑い出す。部屋は笑い声に包まれた。

「……そう。あなた達は地球軍が作り出した戦闘用コーディネイター……」

七郎から七郎達の素性を教えられた私は、気分が暗くなった。

「アズラエルさん、そんな事してたの……」

クロト達強化人間の事は、知ってたけど……

「ああ、勘違いしないでください。アズラエル様と自分達の年齢差を考えてください。私達が生まれた時、アズラエル様はほんの子供です。これは、彼の父、ブルーノ・アズラエルが始めた事で、彼は事業としてそれを引き継いだに過ぎません」

「でも、ナチュラルルに攻撃できないようにされてるんでしょう？もしナチュラルルから攻撃されたらどうするのよ？」

「一方的に攻撃されるしかないなんてひどすぎる！」

「服従遺伝子ですか？ ふふふ、そんな不完全な物、とっくに効果は切れてますよ。アズラエル様もご存知です。でなければ、同じナチュラルルからも攻撃される危険があるお立場と言っのに、我々を身近な護衛になど使いません」

「……服従遺伝子、効いてないの？ なら、なんであなた達……」

「アズラエル様に従っているか、ですか？ 洗脳が解けたからと言って、反抗するだけ取る道ではありません。洗脳が解けたと言っても、ナチュラルルのためになりたいと言う欲求は残っているのですよ。……アズラエル様は、面白い方だ。ナンバーで呼ばれていた我々に名前を付けようと考える人など今までいなかった。我々は見守っているのですよ。彼が世界のためになるか否かを」

「もし……ためにならないと判断したら？」
不安げな表情が出てしまったのだろうか、七朗は私を安心させるように微笑んだ。

「さあて。遠くに逃げ出して高みの見物と言っのも一つの手ですがどうせなら関った方が面白そうですね。身近にいればお互いに影響も与えられますし」

「そうよね。人が、間違っていたら、それを正せばいい……」

「私も一時悩んだ時期がありました。そしたらある人に言われたんですよ。『なんのための耳だ口だ脳だ！！ 人体は正しく使え！！』とね」

「正しく使え？」

「どう言う事だろう？ よく、わからない。」

「わかりませんか。実は私もよくわからなかったです。そしたら、
『口は、思いを伝えるために、頭は考えるためにある、耳は人の話を聞くためにある。言葉にして伝えなきゃ伝わるもんか。伝えずにして』分かってもらおう』なんて、甘い!』ってね」

「あは。いい台詞ね」

確かに、確かに、言わずともわかってもらえるはず、と思うのは遠回りな場合もある。それより口に出して言ったほうがわかってもらえることもある。

「逆も、言えるんです。相手の事をイメージだけでこうだと決め付けて何もしないのは、だめなんです。直接知らなきゃ、わからない。叱られましたよ。知らない・知らなかったこと』は恥でも罪でもないが、『知ろうとしないこと』は大きな恥であり、罪だと。で、思い切って当たってみたんです、アズラエル様に。そしたら思ったよりユニークな方だったので今に至ると」

「そう、あなた達自分の意思でアズラエルさんのそばにいるのね。なんか嬉しいな」

「……ふふふ。それは、あなたもアズラエル様に好意を持っているからでしょうね」

「え……やだ! 好意って!?!」

ああ、なんで!? 顔が紅潮するのがわかる!

「ふふふ。好意と言うのは恋愛以外でも使いますよ?」

「……あ……もうっ! 七郎ったらいじわるね。……でも、ユニークな人ね、その人も」

「ええ、ユニークな変わり者でした」

「会ってみたいな。何て言うの? その人?」

「それが……名前は聞かず仕舞いで」

残念そうに七郎は言った。

「でも、縁があればいつかまた会えるでしょう。そう思わせる人でした。ああ、そうだ! 確か、連れていた犬の名前をマイフレンドと……」

「犬の名前がマイフレンド？　ほんと、ユニーク」

「ええ、ユニークです」

そう言っていると七朗は目を閉じ懐かしむようにかすかに微笑んだ。

「やあ、お嬢ちゃん」

「あ、フラガさん」

自室に戻ろうとすると、フラガさんがいた。

「驚いたよなあ。いきなりザフトの大物が亡命だなんて」

「声が大きいですよ」

「はは。誰もいないさ、ここには。んー、お客さんのおかげで言いそびれちまったんだがなあ」

「なんですか？」

「まー、なんと言うか。模擬戦の時、お嬢ちゃん何か感じなかったか？」

「！」

「そんな顔するって事は、なにか感じたんだな？」

「あ、はい。その、フラガさんを……んー、何してるかが見てないのにわかるみたい。フラガさんだけじゃない、他のみんなの動きもです。これからどう動くかわかっちゃうような。今までにもすごい集中して、相手の動きを予測してつてのはありましたけど、それとも違う感じなんですよね」

「そうか……お嬢ちゃん、俺の同類かもなあ」

フラガさんはなんか嬉しそうだった。

「同類、ですか？」

「メビウス・ゼロ部隊ってあつたら」

「あ、はい」

「そこにはなあ、ガンバレルを扱える特殊な空間把握能力を持つ奴ばかり集めた部隊でな、隊員同士でなんかいきなり相手の事がわかっちゃう、みたいな感じがよくあつたんだ。模擬戦の時、いきなり

お嬢ちゃんの事が見えた感覚がしてな、念のために聞いてみたのさ」

「そっか、もしかしてプレミアのオリジナルもそこに……」

「ん？」

あ、つい口に出ちゃった。フラガさんが怪訝な顔をしている。

「あ、いえ、ナチュラル、コーディネイター関係ないんだ？」

「みたいだな。お嬢ちゃん、ガンバレル使えるかも知れないぜ」

「ガンバレル……」

「ま、機会があつたら試してみようや。引き出しがいっぱいあるに越した事はないからな」

ぼん、と私の肩を叩くとフラガさんは去って行った。

ガンバレルか……簡易なガンバレルはディープストライカーで試してみたけど、本式のガンバレル、私に使えるかな？

不安なような、楽しみなような。

第三十七話

アスラン達はオーブに降りる事になったと言う。

降りる前に、ちょっとアスラン達と会う事ができた。

「君がルナマリア君かね」

「あ。はい」

「息子がコペルニクスでは世話になったな。その後、色々あったが戦争だ。気に病まん事だ。君も息子も無事だったのだからな」

「はい」

「息子も君と話したがっている。短い時間だが、話すといい」
そう言つてザラさんはシャトルに向かつて行つた。

パトリック・ザラさん。正統的な軍人のような雰囲気の人だ。とてもエイプリル・クラインスを引き起こすような人には見えない。
ううん、アズラエルさんの話だと、黒幕はシーゲル・クラインだったのよね。

「貴様が赤いストライクのパイロットか」

……？ 銀髪の人が話しかけて来た。顔に、傷跡が残っている。

「はい……大丈夫ですか？ その傷？」

「ん？ ふふ」

その人はちよつと皮肉そうに笑つた。

「俺はイザーク・ジュールだ。この傷は、お前に付けられた傷だぞ」

「え！？ あ……その、すみません」

「ははは。屈辱を晴らすまではと思つて残しておいたんだがな。もう消そうと思う。意味が無くなつたしな」

「ええ。その方が男前になりますよ」

「ふん。まあ、頑張れ。ここまで生き残つたんだ。やられるんじやないぞ。そして戦争が終わつたら昔話でもしようぜ」

「はい！」

最後に、アスランが話し掛けて来た。

「ルナ……」

「ほんの一ヶ月前は、こんな風に落ち着いて会えるなんて思わなかった」

「俺もだ。事態の急展開に驚いてる。」

「色々あったね」

「ああ……お前はまだ戦うんだな」

「……うん」

「相手がザフトだからな。頑張れとは言い辛いけど、無事で……」

「うん、ありがとう」

アスランが手を差し出す。私もその手をしっかりと握った。

「戦争が終わったら、きつと会おうね？」

「ああ。じゃあ、そろそろ行くよ」

「うん」

アスランは、シャトルの方へ去って行った。

さあて！ 気持ちを切り替えなくちゃ。今までのテストの遅れを取り戻さなきゃね！

私はディープストライカーのテストの日々に戻る。上の方の意向としては、できればボアズ攻略に使いたいのだそうだ。

私はディープストライカーが与えてくれる加速度が好きになっていた。

そんなある日……

「あれ？ あれは……何か、近づいて来る」

アスラン達が飛び込んで来た時の事が頭をよぎる。

ザフト？ まさかね。アスラン達が演習宙域に飛び込んで来たせいで、警戒網は広げられているのだ。もし、外部からプロトレマイオス基地に向かって来たとしたら、試験宙域に近づく前に哨戒線に引

かかっている。

！

ビームが向かって来る！

あ、またあの時の感じ……ビームの軌跡が……わかる！
とつさにブースターを吹かして避ける。

敵？ まさかと言う思いを抑えてアンノウンに向かう。相手の敵意は疑いないのだ。

通信！？

「ルナマリア・ホークだな！？」

少女の声だった。

「そうよ！ 何よ！ いきなり攻撃なんかして！ あなたは誰！？」
通信が入った事に少し安心してしまつて私は答える。

「あなたが、成功した唯一のスーパークーディネイターなんて認めない！ 私はあなたを倒して私が成功体だと証明する！」

相手がビームライフルを構える！ まずい、もう避けきれない！
通信が入った事で気を抜いた！ 私の馬鹿！

「光を！」

とつさに私は叫ぶ。

「光が欲しい？ 欲しいのなら、あげましょう！」

私の声に「ALICE」が答える。「アルミューレ・リュミエール」
が機体の前面に展開される！ アンノウンのビームが弾かれる！

「なにいい！？」

アンノウンの少女の動揺した声が伝わってくる。

どうする？ デイープストライカーは格闘戦に不向きだ。デイープストライカーをパリジする？ それもだめ！ 機動力が落ちてしまう。

なら！

「マイクロミサイル発射！」

ウェポンベイから三角柱が発射され、マイクロミサイルを周囲に乱射する！ この飽和攻撃なら！

「　　なによ、あれ！」

今度は私が動揺した。アンノウンが機体をまるっと全周を囲むように展開したのは、あれは　　！

『これが本物のアルミューレ・リュミエールよ！』

勝誇ったような声が通信機から流れてくる。

「くっ」

簡易ガンバレル！　なんとなく今までよりもスムーズに扱える気がする。アルミューレ・リュミエールの発生基部を狙う！

避けられた。でも、これで隙ができた！

アンノウンからのビーム！　先読み出来る！　当たらない！

方向を微調整、そしてブースターで急加速してアンノウンのすぐ横をすれ違い、引き離す！

アンノウンは最後に大型ビームを放ってきたけど、この猛スピードのデーパーストライカーに当たるもんですか！　徐々に進路をプロレマイオス基地の方へ修正して撤退する！

アンノウンは、さすがにこの速度に追っては来られなかった。みるみるうちに小さくなっていくアンノウン。

……基地に着くまで、私の頭は一つの事を考え続けていた。

しゃべり方は変わっているけど。ううん、違うけど、あの声は……

私は唇をぎりっと噛み締めた。

メイリンだ。

基地へ戻って、襲撃された事を報告したら、大騒ぎになった。

それはそうだろう。アスラン達の侵入からこっち、警戒を強めていたのだ。それが　　無駄だった事になる。

「大変でしたねえ、ルナマリアさん」

アズラエルさんも、慌てて飛んで来てくれた。

「警戒を強化したのに、こんな……」

「警備の人達を責めないでください。実は……」

私は、報告の時に伏せていた事を話した。

「相手も、アルミューレ・リュミエールを展開したんです」

「それは……相手はユーラシアの者だったと？」

「戦闘記録を見てもらえばわかりますが、相手は『これが本物のアルミューレ・リュミエールだ』と言っていましたからおそらく。報告の時には、大事になりそうなので伏せておきましたけど」

「……いや、いい判断です。確かに身内に敵が入り込んでいるなんて事がおおっぴらになったら大変だ。ひそかに憲兵を動かしますよ」

「お願いします。あと、一つ……」

「なんですか？」

「相手が、私の事を、成功した唯一のスーパーコーディネーターと呼んでいたんです。何の事かわかりますか？」

「……あー、うーん……あ、そうだ！ メンデルって知ってます？
L4にあつた実験コロニーなんですけどね。そこで行われていた実験に確かそうした物がありましたよ。確か、コーディネイトしても母体で成長する過程で母体の影響を受けてしまうので、人工子宮で理想的な環境を作りコーディネイトした結果を100%引き出す、と言ったような物でしたかね。スーパーと言うよりはパーフェクトコーディネーターと呼んだ方がいいですかね。それが、あなただと？」

「ええ。そう呼んでいました。私……私の両親は？ 私、メンデルで作られたの？ 私……！？」

「……うーん、こう言っちゃ何ですがね、あまり気にしない事ですよ。あなたのご両親はあなたに愛情を注いでくれたんでしょ？
なら、いいじゃないですか。もし本当の両親でなくとも。僕にとってもそうです。あなたがスーパーコーディネーターなんてご大層な物だろうとそうでなかつた関係ありません。メンデルの連中は実験に狂って100%に拘ったようですが僕に言わせりゃ90%も100%も大して変わりないですよ。それに計算外の事には喜びもあれば悲しみもあるんです。それが面白いんじゃないやありませんか」

「そう、ですよね。でも、あの子は違った。それに拘ってる……」
「あの子？」
「どうしよう!? アズラエルさん!? メイリンなの! メイリンの声だったの! メイリンが恨みの籠った声で私を襲って来るの! 私を倒して成功体になるって!」
「落ち着いて、ルナマリアさん! メイリンって、あの、夢の世界の妹さんですね? ユーラシアの部隊を調査させましょう。あなたは、自分の身を守る事に気を使ってください。いいですね?」
「はい……」

翌日から、デープストライカーの試験には護衛が付く事になった。

「くそう! 私はあああ! 認めない! 認めない! 奴よりも私が劣っているなど!」

「落ち着け! デープストライカーの性能は君も知っているだろう? 逃げに持ち込まれたら追いつけない!」

「そう、そうよね。私とした事が……」

「落ち着いた所で、君に通信が来ているが……ガルシア司令だ!」

「いいわよ。出るわ。出して!」

マーク・ピステイスはコンソールを操作した。

『頑張っておるかね。メイリン・パルス』

「なんの用?」

『相変わらずつつけんんだな。まあいい。ルナマリア・ホークを狙うのはしばらく中止しろ』

「なぜ?」

『ふふふ、お前の機体のパワーアップによい情報があるのだ』

「なによ? 期待はしてないけど言ってみなさい!」

『驚くぞ。ザフトの通信を解析していたところ、面白い命令をキャ

ツチした。核エンジン搭載モビルスーツを奪還せよとな！」

「……へえ、面白いじゃない！」

『当然それはニュートロンジャマーを無効化する装置の存在も意味する！ それを手に入れば私も……』

「あんたの事なんてどうでもいいわよ。今どこにあるかの情報は無いの？」

『あるぞお！ ケナフとか言う情報屋が売り込んで来てな。正確にはニュートロンジャマーを無効化する装置のありか、と言う事になるか。信頼できるかわからんが、一応行ってみるがいい。座標を送る』

「了解した」

『しかし！ 守っているのはあの名高いサーペントテイルだそうだぞ。お前に勝てるかな？』

「関係ないわ。私とハイペリオンならね！」

『そう願いたいものだ。私もあいつらには貸しがあつてね。では幸運を祈るよ。くっくっ』

通信は切れた。

「信用するのか？」

「……畏だつたら、噛み千切るまでよ。ちよつど基地近くで奴を襲つちやつて、憲兵が動いていると言つわ。ほとぼり冷ますためにもちよつどいい！」

「ふむ。これはいったいどうしたものかなあ」

効は悩んでいた。

「確かになあ。ドレッドノートを運んでいた連中はオーブの戦艦イズモに収容された。ところが！ プトレマイオス基地にはザフトの新型の核動力機が逃げ込んだ。ニュートロンジャマーキャン

セラールの技術は地球連合に渡ったと見ていい。ドレッドノートの頭部を持つている意味はもうねえな」

リードが答える。

「アレは俺達が預かるのが今はベストだと思ったから奪ったのだが、こうも急速に事態が動くとはな……」

「しかし、ザフトから最新鋭の核動力機が二機も亡命なんて、プラントには何か起こっているぞ、効」

「ああ。気になって調べさせてはいる」

ロレッタも心配気な顔をする。

「もし、地球軍の人達がアレを間違った方向に使ってしまったら……大変な事になるわね」

「ああ。俺達にできる事は、地球連合の上層部が愚かでない事を祈るだけだな」

「でもまあドレッドノートの頭は返すしかないか。……ねえ、返すって言うても、プレアさんは地球軍に保護されたって事でしょう？へたにプロレマイオス基地に近づいたら、拘束されかねないわ」

「アタシが行きます！」

「風花……」

「確かに、風つ花なら、危険には思われなくても知れねえなあ。ロウ・ギョール達は当の戦艦イズモにいるんだろう？彼らを頼って

……なんとかなるかも知れねえなあ」

「任せて下さい！ちゃんと事情を説明して来ますから！」

風花は幼い顔を上気させ気負った顔で胸を叩いた。

『警戒！ 警戒！ アンノウンがそちらに向かってる！』

その日もディープストライカーのテストをしていた私達は、哨戒部隊の警報を受けた。

「……ほんとに、なんでこうも私が出動している時に限って闖入者が続くんדרらう?」

「逆を言えば、あなたが出動している時は警戒態勢を上げるようにすれば効率的な運用が出来るでしょう」

「ふふ、七郎、それはいい考えだ」

「あはは」

105ダガーで護衛についてくれる七郎が真面目な声で冗談を飛ばす。

私と十一郎は笑う。

『アンノウンは小型艇の模様!』

「まあ、とりあえず基地に引き返しますか?」

「そうですね」

アンノウンから通信があつたのはその時だった。

『地球軍の皆さん、こちらに敵意はありません! アタシは傭兵の風花・アジャーです! オーブの戦艦イズモにいるロウ・ギュールさんに会いに来ました! 取次ぎをお願いします!』

第三十八話

「ロウに？ まあ、本人に聞いてみますか」

私は戦艦イズモに連絡を取り、ロウを呼び出した。

「……という訳なのよ。子供のような声だったけど、知り合い？」

「ああ！ 確かに風花はサーペントテイルの一員だ！ 会った事あるぜ！ 確かにまだ6歳の子供だけ」

「サーペントテイルってプレアの船を襲った？ って6歳！？」

「ああ、年齢の割りにしっかりしてるんだ。たいした子だけ」

「そう。じゃあ、案内していいのね？」

「頼むわ。俺もサーペントテイルがなぜプレアの船を襲ったのか聞きたい」

私は警備隊に、風花・アジャーの艇をイズモに連れてくるよう伝えた。

私もディープストライカーをドックに入れると、イズモに向かう。

「ひっさしぶりー！」

「おう、ひさしぶりだな、ルナ」

「風花さんは、もうすぐ来ると思うけど。プレアの調子はどう？」

その時、ちょうどプレアさんが顔を出した。

「おひさしぶりです。ルナマリアさん」

「ひさしぶり、プレア。……体の調子はどう？」

「ええ、おかげさまで。それで……これからサーペントテイルの人が来るんですよね？ 僕も同席させて下さい」

「……確かに、プレアにはその権利あると思う。どう？ ロウ？」

「そうだな。とりあえず、直に事情を説明してもらわなきゃプレアも納得いかんだろう。いいぜ」

『ホーク中尉、風花・アジャーの船をお連れしました』

ちょうど、警備兵から連絡が入る。

「ありがとう。今ハッチを開けさせるわ。……じゃあ、行きましょ

う

「ああ」

私達は格納庫へ向かった。

ちょうど、風花・アジャーの乗った小型艇が収容されたところだった。

小型艇のハッチが開く。

「案内ありがとうございます。サーペントテイルの風花・アジャーです！」

きりつとした顔をして、小さな女の子が出てきた。

「確かに風花だ。ひさしぶりだなあ」

「ロウさん！」

女の子の顔がぱつと明るくなり、ロウに駆け寄る。

「私は地球軍のルナマリア・ホークよ。ロウの知り合い。まあ、ここじゃなんだし、部屋を用意してあるの。プレアさんが待ってるわ。行きましよう。付いて来て」

「はい。ちゃんと、ご説明します！」

「あなたが、サーペントテイルの人ですか？」

風花さんを見た時、プレアは軽く驚いたような表情を見せた。

「これでも立派にサーペントテイルの一員です」

風花さんはちよつとむつとしたようだ。そんな表情も、風花さんの年齢ではなんともかわいらしいのだけだ。

「まあまあ。驚くのも無理はないがな、風花はサーペントテイルの交渉やなんかきちんとやってんだ。しっかりしてんだぜ」

ロウがフオローする。

「そうですね。能力に年齢は関係ありませんか。では、聞かせてもらえますか？ あなた達がなぜ僕を襲ったのかを」

プレアが顔を引き締めて風花さんに向き直る。

「はい、実は……」

「ああ、座って頂いて結構ですよ」

「はい。では失礼します。……依頼人の名前は明かせませんが、依頼があつたんです。プレアさんが持っているニュートロンジヤマーキャンセラーを奪取せよと」

「僕達はプラント評議会議長の庇護下にあつたのに、その人には、そこまで掴まれていたと言う事ですか……理由は聞いていますか？」

「はい。今の段階で地球連合にニュートロンジヤマーキャンセラーを渡すと、核兵器が復活される恐れがあるからと……でも、別ルートでニュートロンジヤマーキャンセラーの技術は地球連合に渡ってしまったようですね」

「なんだって!？」

あ……私が口を挟む時間も無く、ロウ達がざわめき出す。しまったなあ。

「もう、アタシ達が持つていても無意味なのでプレアさんに返還しようと思つて、その前にこうして事情説明に来たんです……」

風花さんはすつと立ち上がった。

「プレアさん、ご迷惑をかけて申し訳ありませんでした」

風花さんはプレアに向かつて深々と頭を下げた。

「事情はわかりました。頭を上げてください、風花さん」

プレアは溜息をついた。

「そうですね……地球連合の手にはすでにニュートロンジヤマーキャンセラーが……」

「まだ極秘事項よ？　こんな形で漏れるとは思わなかったけど。口ウモいいわね？」

「ああ、他には漏らさねえよ。ルナは知つてたんだな？」

「まあ、その場に立ち合わせちゃったしね」

「しかし驚いたな。ニュートロンジヤマーキャンセラーか」

「マルキオ様はオーブのウズミ様なら軍事転用する事はないだろう

と言っておられたのですが……無駄になりましたね。核ミサイルの復活　ユニウスセブンの悲劇……ああ……そんな事にならなければよいのですが」

んー、ちよつと聞き捨てならない！

「あら？　アズラエルさんだつて、ニュートロンジャマーキャンセラーを軍事転用する気なんてないわよ？」

「「え？」」

プレアさんと風花さんの声が被った。

「もつ。ずつと先の事までは保証できないけど？　アズラエルさんが私に説明してくれたんだけど、製造には莫大なコストがかかる上に材料も稀少なものが多いため、大量生産が不可能なんだつて。まずは地上のエネルギー状態を改善する事を最優先にするそうよ？　たつくさんある核ミサイルに搭載なんて無駄遣いする訳無いじゃない？　コロニー壊すつてんならもつと楽な方法もあるし……」

思い出しちゃった。　そう。ヘリオポリスは、たった数機のモビルスーツの手で……

「アズラエルさんって以外に理性的なんですね。驚きました」

落ち込みそうになった私の耳に、プレアさんの声が入って来た。

「以外つて」。アズラエルさんは理性的な人よ？　ユニウスセブンは一部の過激派の仕業らしいわ。ブルーコスモスつて言っても穏健派から過激派、色々な派閥や、ただブルーコスモスの名前を使っているテロリストから、色々あるのよ。アズラエルさんはプラントを元のように使いたいって考えね。自分が建設したプラントが壊されて怒っていたほどよ？」

「アズラエルさんを誤解していたようですね。でも、よかった。そういう人で。人類はまだ捨てたもんじゃない……」

「色々、誤解があつたようですね。すみませんでした」

もう一度風花さんは頭を下げる。

「いいんですよ、もう。でも、ドレッドノートの頭はちゃんと返してくださいね？　ニュートロンジャマーキャンセラーの技術が地球

連合に既に渡っているとしても、僕は、ウズミ様に渡りたいから

「はい！ お約束します！」

「ありがとう。これで心残りなく……」

「え？」

「あ、何でもありません。じゃあ、僕はこのままイズモにいます。

よろしく願いますね」

「はい、すぐに連絡を取ります！」

風花さんは元気に手を振って去って行った。

「……………」

急に、プレアさんが胸に手を当てて苦しみます。今までにも苦しそうな様子を見せる事はあつたけど……！ こんなひどいのは初めて！

「どうしたの！？ 大丈夫！？ お医者さんを！」

「はい！ すぐに呼んで来ます！」

リアムが慌てて駆け出していった。

「あ…… 大丈夫…… もう、落ち着いてきました」

「ひよつとしてプレア、本当は重い病気なんじゃないのか？」

ロウが気遣わしげに問う。

「ええ。困った事に、治せない病気なんです。不治の病ってやつです」

プレアさんは、透き通った微笑で告げた。

「なんだよ！ なんとかなるって思わなきゃあ、なんとかなるもんもなんとかならんだろう」

「残念ながら…… 僕に残された時間は残り少ない」

プレアさんはかぶりを振った。

「僕は…… 失敗したクローンなんです。クローニング技術が不完全な……」

「なんだって！？」

「告白させてください。僕はメンデルで作られ、それから色々あつ

てマルキオ様の所に辿り着きました。前々から発作は始まっていて、自分でも長くはないなと感じていたんです。でも、どうせならこの世に僕の生きた証を……なにか世の中のためになる事をしてから死にたい。そう思っていました。マルキオ様は、それを与えてくれたんです……だから、あなた達には感謝しても足りない。あなた達には話してもいいでしょう。ドレッドノートの頭部は広範囲型ニュートロンジャマーキャンセラーです。プロレマイオス基地に亡命したと言うモバイルスーツにつけられている物は、デチューンされ、そのモバイルスーツしか効果の無い物でしょう。ドレッドノートのニュートロンジャマーキャンセラーは通信の回復にも役に立つはずです。有効に役立ててください」

「プレア……」

ロウ達はそれきり言葉が継げず、俯く。

「私も告白するわ。私もメンデル生まれらしいの。あなたは言わば……私の弟よ。あなたは一人じゃない」

「……！ ルナマリアさんが、ねえ、さん……？」

「そうよ。あなたがもしこの世からいなくなっても、私は絶対あなたを忘れない。約束するわ」

私はプレアを抱き締める手に力を込めた。

「ねえ、さん……ねえさん！」

プレアは私の胸に顔を埋めた。

私はプレアをぎゅっと抱きしめた。

「そう……わかったわ。引き続き情報を集めて頂戴」

「わかりました。では……」

地球連合軍特殊情報部長マティスは、部下が収集した情報を整理すると、取捨選択してアズラエルをはじめとする地球軍上層部に送る。

「ふう……」

マティスは憂いの籠ったため息をついた。

「結局ニュートロンジャマーキャンセラーはアズラエルに渡ったか……サーペントテイルに依頼したのが無駄になっちゃったわね。まあ、いいか。プラントに対して使われても……地球に対して使われないように注意しておけばね。それよりも……問題はザフトの秘密兵器よね」

状況はさらに悪くなっていた。

パトリック・ザラの情報に比べて、ジェネシスは強化されているようだった。特に防御力。全体にPS装甲を張り巡らせ、核攻撃でも破壊できるかどうか。

そして……ジェネシスの目標として地球が予定されていると言う。

そんな事とんでもない！ 人類絶滅だ！

……実は、マティスは表には知られていない裏の顔を持っていた。

人類を存続させると言う大目的のため、時には戦争すら画策する組織 人類の大多数に幸福を実感させると言う目的を持つその秘密組織の名を『一族』と言う。

マティスはその『一族』の党首だった。

当然、人類全体を思いやる責任感が強い。

だが、この状況に及んでは彼女にやれる事はそう多くは無かった。

この戦争は『一族』が引き起こした、そう、ちよっとした動乱に終わるはずだった。

まさか人口千万単位の集団が、人類を滅ぼす力を持つに至るなんて悪い冗談だ。

どこでどう間違ってしまったのだろう。

ちらり、と一枚のリストに目をやる。

マティスが『一族』党首になってから作らせた物だ。

『一族』の不利益になるかもしれない恐れのある者達 マティスは彼らを「イレギュラー」と名づけた。

これでは……「イレギュラー」達への対処は後回しになりそうね。

それにしても……

マティスは「イレギュラー」リストの一番上を見る。そこにはシーゲル・クライン と記されていた。

一体シーゲル・クラインは何を考えているの？ このままでは人類絶滅よ？

「そうなの！？ 風花、うまく言ったのね？」

『うん、うまくいったよ！ 無事口ウ達に会えて、プレアさんにも会えた』

「よかった……」

『それからね、朗報があるの。地球連合のアズラエルさんも、ニユートロンジヤマーキャンセラーを軍事転用する気無いつて！』

「なに？ 風花、それは本人から聞いたのか？」

効が思わず口を挟む。

『ううん、でも、アズラエルさんから直接そう聞いてるって、ルナマリア・ホークってお姉ちゃんがそう言った』

「効、ルナマリア・ホークって言えば地球軍のコーディネーターのエースだよな？」

「ああ、まあアズラエルはオーブのロンド姉弟と接触があったりと単純なコーディネーター排斥論者では無い事は確かだが」

『ルナお姉ちゃん、ずいぶんとアズラエルさんと親しそうなの口ぶりだったよ』

「男は女に弱いつて事かな？ くひひっ」

酒の小瓶をぐびりとやりながらリードが笑う。

「そうか……アズラエルが愚かでなかったのは喜ばしい事だな」

ふ……と効は微笑む。

「じゃあ、あなたはそのままイズモにいなさい。こちらの船でドレ

ツドノートの頭届けに行くから。識別信号伝えておいてね？」
『うん、わかった。じゃあまた後で！』

「結局、俺達のやった事は徒労になっちまったなあ、効」

「ああ、しかし、あの時点ではしょうがない事だった」

「みんな！ 話してるとこ悪いけどこちらに近づいているモビルスーツがいるわ！」

ロレッタが警告の声を上げる。

「追っ手か!？」

「わからない。識別コードに反応しないわ」

「風花からはうまく言ったと連絡があった……とするとザフトか？」

「わからん。地球軍も一枚板ではない」

「どっちにしるこのままじゃ補足されるぞ、効」

「ああ。アレを第三者に渡す訳にはいかない！ 出るぞ、イライジヤ！」

第三十九話

効とイライジヤは宇宙船を守るように出撃した。効は折りたたみ式の砲身を持つ大型ビームライフルを備えた、長距離射撃用スナイパー・パツクを選んで出撃する。

効は妙な感覚を感じていた。

「なんだ？ この妙な存在感は？」

「効、どうした、効！」

「イライジヤ気をつける！ 相手はただのモビルスーツじゃない！」

「何！？」

その、モビルスーツが、見る見るうちに迫って来る。

「なんだ、貴様は？」

アンノウンはモビルスーツはビームライフルを構えると言った。

『お前達、サーペントテイルよね？ おとなしくニュートロンジヤ

マーキャンセラーを渡しなさい』

イライジヤは驚いた。

「女か？」

「なぜ知っているか知らんが、渡す事はできん！」

同じく驚きながらも効は拒絶する。

『そう。ならば、消えうせろ！』

アンノウンはいきなりビームライフルを連射する！

「くそ！ いきなり！ 連射速度が速い！」

アンノウンからビームライフルを向けられた時から、測距を開始していた効は狙い済ました一撃を放つ。

「落ちろ！」

大型ビームライフルからビームが一直線にアンノウンに向かう。アンノウンはまぶしい光に包まれた。

「直撃だ！」

イライジヤが歓呼の声を上げる。

「いや、まだまだ！」

「なににい！」

ビームライフルの光が消えたそこには、左腕に逆三角形の光の盾を構えたアンノウンが変わらず存在していた。

「何だ！ あのシールドは！？」

『面白いわね。でもその強さ、生かしては置けないわ！』

宣言すると、アンノウンはビームライフルを連射しながら突っ込んで来た。

効とイライジャの攻撃、それを妙な光の盾で捌きながら、アンノウンは二人を翻弄する。

「くそ、この装備では！」

取り回しが利かん！

頭の中で悪態をつきながらスナイパー・パツクを投棄し、効はアンノウンに攻撃を続ける。

「……な、なんて速さだ！ 二機の動きが追えん！」

イライジャは劣等感を刺激されていた。

「これでは援護も出来ん！」

それほどに効とアンノウンの戦闘は速かった。

「ちくしょう！ 俺だって！」

イライジャは気持ちを奮い立たせると、アンノウンに立ち向かう。

「でやあ！」

だがその一撃はやすやすかわされる。

『雑魚が！ 引っ込んでなさい！』

アンノウンのビームライフルから突然何かが！

射出されたビームナイフは、イライジャのジンの左腕にダメージを与えた。

「うわ！ ……レベルが違いすぎる……なんて無様なんだ、この俺は！」

再び劣等感がイライジャを襲う。

「イライジャ！ 回り込め！ 同時に挟んで攻めるぞ！」

「了解！」

効の言葉に気を取り直すとイライジヤはアンノウンを挟んでブルーフレームと正対する位置につく。

『なるほど。よい攻め手ね　ならば見せてやるわ！　ハイペリオンの輝きをね！』

アンノウンのパイロットの言葉と同時にアンノウンに変化が表れた。背中に背負っていたウイングの様な物が肩に担ぎ上げられ、ランチャーを担いでいるように見える。そして　アンノウンは光の膜に包まれた。

「　！　これは……」

『アルミューレ・リュミエール！　モノフューズ光波シールド！　ビームだろうが実体弾だろうがこいつを破る事は不可能よ！』

「くそ！」

効とイライジヤは光の膜に包まれたアンノウンを攻撃するが、アンノウンのパイロットの言葉どおり、光の膜で弾かれてしまう。

『ふん、無駄よ！　遊んでる暇はない！　決めさせてもらうわ！』

「なにに！」

光波シールド……それは双方向からの攻撃を封じる筈。それがアンノウンは光の膜の内部から一方的にこちらに攻撃を仕掛けてきている。

『これで終わりよ！』

アンノウンが肩に背負ったランチャーに光が集まり、放たれる！

その先はブルーフレーム！

「効——！」

頭部の左半分を持って行かれたものの、まだブルーフレームは存在していた。

『なにに！？』

くそう！　落ちろ！　落ちろ！　落ちろ——

！』

アンノウンが焦りを見せてビームライフルを連射する。

「なるほど『アルテミスのか』か。光波防御帯をモビルスーツに応用したと言っ訳だな」

冷静に効は分析する。

その間にもイライジャは攻撃を続けている。

「くそう！ 弾切れだ！ どうする、効！」

「確かめたい事がある　！」

効はアンノウンに向かってブルーフレームを突っ込ませる。

「効ー！ー！」

効は突っ込みながら見当違いの方向へ射撃をする。

『あはは！ 何を　くっ！』

効が狙ったのは、先ほど投棄したスナイパー・パックだった。アンノウンの至近でそれが爆発し、閃光を放つ。

『　無駄な事を……！』

「今だ！」

効は耐ビームコーティングされたアーマーシュナイダーをアンノウンの光の膜に突き立てる！

「やはり……そうか！」

アーマーシュナイダーは何も通さないはずの光の膜を貫いた。だが、しばらくの間を置いて光の膜に耐え切れず崩壊する。

「イライジャ！　時間は十分稼いだ。撤退するぞ！」

「お、おう！」

『逃がすか』

その時、アンノウンの光の膜が、消えた。

『こんなところで時間切れ！？　運のいい奴！　次に会ったら必ず仕留めるわ！』

アンノウンのパイロット　メイリン・パルスはつぶやいた。

「効！ 大丈夫なの！？」

「ああ」

効とイライジャは無事宇宙船まで撤退した。

『時間を稼いでくれたおかげでこちらは無事よ』

『しかし、お前さんともあるう者がひどくやられたもんだな』

リードがブルーフレームのやられた頭部を見て言う。

『そんなにできる奴だったのか？』

「ああ。あのパイロット、俺と同じコーディネイターだ。しかも黒幕は……ユーラシア連邦だろう」

「そうか！ あれは『アルテミス』か！」

「そうだ、イライジャ。だが、大体の相手の能力はわかった。次は……負けん！」

「とは言え、さっさとドレッドノートの頭、返した方がよさそうだな」

「ああ、さあ、中に戻ろう。プトレマイオス基地まで急ぐぞ！」

『通信が来ております。サーペントテイルと名乗っています。風花さんをお呼びです』

「風花、サーペントテイルの船から連絡だったさ」

「はい、わかりました！ ちょっと行って来ます」

風花さんは休憩室から出て行った。

すぐに戻って来た風花さんは慌てていた。

「サーペントテイルの船は、こちらに急行中です！ でも途中で二ユートロンジャマーキャンセラーを狙った何者かに襲撃されたそうです！」

「わかった。地球軍に話して警戒度を上げさせよう」

ギナ様は通信機に向かって指示し始める。

「……でも何者が……」

「わかりません、一機だけだったそうですが、効のブルーフレーム

が損傷を受けて、イライジャのジンも損傷を受けたそうです」

「一機でか……」

「大丈夫だって！ 地球軍も警戒してるんだしさあ」

「そうよ。気を楽しにして？ ね？ じゃあ、またサーペントテイルが着いたら呼んでよ」

「おう」

私は一旦イズモを後にした。

マティスのシーゲル・クラインを探ろうとする試みは続いていた。だが……

『マティス様、これが最後の報告となるかかも知れません。シーゲル・クラインはああ人間ではありません！ 彼の周囲を探るようになってから、変な視線を感じじたり、突然奇妙な物音が聞こえるようになああ、窓に！ 窓に！！』

この報告を最後に、また一人プラントに潜り込んでいる『一族』が消息を絶っていた。

どう考えればいいの？ シーゲル・クライン、あなたは……何者！？

程なく。サーペントテイルの皆さんがプトレマイオス基地に入港したと言う知らせを聞き、私は再びイズモへ急いだ。

イズモに着くと、そこは奇妙な緊張感に包まれていた。

「……どうしたの、ロウ？」

小声でロウに聞く。

「いや、サーペントテイルの連中も着いたばかりなんだが、なんか

サーペントテイルの効とギナ様が睨み合っちゃって……口が出せん
雰囲気だ……」

その時、ギナ様が口を開いた。

「お前がP03のパイロットか。以前は世話になったな」

「……ああ……」

「で、今後も世話をしてくれるつもりなのかね？」

「……いや、とりあえずその予定は無い」

「ふ……」

ギナ様はにいつと笑みを浮かべた。

「では、お前達に頼みたい事がある」

「……なんだ？」

「プレア・レヴェリーがオーブへ降り、ウズミにニュートロンジャ

マーキャンセラーを渡す。その護衛を頼みたい」

「了解した」

「……いいのか？ 報酬も聞かずに即答して」

「あんたなら、つまらん値切りはしないだろうと信用しているよ」

「ふ……」

ギナ様は苦笑した。

「ところで、イライジャ・キールとやら。お前の乗機はジンだそう

だな」

「あ、ああ。それが何か？」

突然話を振られたイライジャはどもりながら答える。

「ジンもいい加減古い機体だ。旧式化している。そろそろ新しい機

体が欲しいのではないかな？」

「つまり？」

「報酬はM1アストレイの最新バージョン一機だ。ああ、それから

損傷したP03、修理させよう」

思わぬ破格の報酬にサーペントテイルの面々は顔を見合わせる。

「いいんじゃないか？ ちょうどイライジャのジン壊れちまってる

し」

「ああ……！俺もM1アストレイなら文句は無い」

「よし。報酬の件、了解した」

「M1アストレイはすぐに渡せるが、修理は一旦、アメノミハシラに寄ってくれ。そこからシャトルでオーブに降りてもらおう。まあ、M1アストレイの頭部でよければ、すぐやるが」

「ギナ様、すみません。僕のためにこんな……」

プレアが恐縮した顔をする。

「気にするな。お前のおかげでオーブはより優れたニュートロンジヤマーキャンセラーを手に入れられるのだから」

ギナは優しい声でプレアに語る。

病弱なプレアに対する気遣いだろうか。

ギナ様も最初に会った頃から比べれば丸くなったものだと思おう。蘊奥との出会いによるものか、プレアとの出会いによるものか

……

ロウは、ギナが変わったのはロウに出会ってからではないかと、効が興味深い視線を自分に向けている事に気がつかなかった。

「な、なんですって!?!」

ガルシアは、上官の詰問を受けていた。

「だから言つたらう、ガルシア君。我が国は既にモビルスーツについてはストライクダガーの供与を大西洋連邦から受けている。これは高度な政治的判断なのだよ。それになんだね？君の特務部隊はよりよってプトレマイオス基地の近くで地球軍の味方を襲撃したらしいな」

「い、いえ！決してそのような事は！襲つたのは傭兵部隊で……」

……

「ふう……ガルシア君、地球軍の耳は役立たずではないよ？これ

以上勝手な事をされては我がユーラシア連邦の不利益な事になるのだ。はつきりした証拠が掴まれない内に、危険な火遊びはやめるのだな。いいね?」

そう言うと、通信は一方的に切られた。

「く、くそー！ これもメイリンがのろのろしてるからだ！ 奴を拘束しろ！」

月面プロレマイオス基地

そこには毎日のように地球からの補給部隊が訪れ、ボアズ要塞攻略のための物資が着々と蓄えられていく。

その日も

「うわああああ！」

「敵だ！ 敵襲だ！」

「なんだと!? レーダにも目視にも何も写つとらんかったぞ！」

「船を守れ！ 守るんだー！」

補給部隊は突然の襲撃を受けた。

「相手は一機だぞ！」

「ぐわっ！」

「っ、強い！」

襲撃者は通常のモビルスーツより一回り大きなモビルスーツだった。

「くそ、道連れだ！」

一機の損傷を受けたストライクダガーがそのモビルスーツに組み付

く 爆発！

「やったか！」

だが。

「へへへ、ばーか！」

その襲撃してきたモビルスーツ

ザフトの開発中のモビルスーツ、

リジエネレイトのパイロット　アッシュ・グレイは健在だった。実はリジエネレイトはコクピットがバックパック部分に存在し、それ自体が「コア・ユニット」と呼ばれる1対のサブアームを持ったパーツに分離する。

「そんな部分やられたってどうって事無いぜ！」
近くに漂うコンテナからパーツが飛び出し、コア・ユニットと合体する。

リジエネレイトの人型部分は多数の予備が存在する使い捨てパーツに過ぎず、戦闘中この部分を破損しても新たなパーツ、あるいは破損パーツから使用可能な部分を再構成してドッキングする事で、パーツの供給が続く限り何度でも機体を再構築する事が出来のだ。リジエネレイトは完全復活した。

「ははは！　全部殺しまくってやるぜえ！」
アッシュ・グレイは吼えた。

第四十話

「補給部隊との通信は？」

「依然途絶したままです。ギナ様」

「そうか あれは何だ!？」

窓の外を、楔のような形の……大型モビルアーマーだろうか？ さまざまな速度であつという間に通り過ぎて行った。

……その後、補給部隊が救難信号を発した地点にギナが辿り付いた時、発見できたのは残骸のみであつた

「くつくつく、今日も殺しまくつたぜえ！」

ギナが見た大型モビルアーマーらしき物 その中にアツシュ・グレイは居た。

そう、リジエネレイトはモビルスーツ形態とモビルアーマー形態が取れる可変型の……そして核動力機であつた。

「ふふふ。今夜は気持ちよく眠れそうだ……」

彼は口を歪めて笑つた。

「じゃあ、とりあえずブルーフレームは修理しなくても大丈夫なのね？」

「ああ。襲撃してきたアンノウン対策も兼ねて、セカンドレクティカル・アームズを使う。頭部もそれ専用に取り替えるからな」
「タクティカル・アームズ？」

プレアとドレッドノートはサーペントテイルの船に移される。私は、プレアが心配で効さんに色々聞いてしまう。

「襲撃者は、アルテミスの光波防御帯の改良型を使ってきた。タクティカル・アームズはラミネート装甲された実体剣だ。そいつを貫ける」

「試したの？」

「ああ、耐ビームコーティングしたアーマージュナイダーでな。もつともそいつは光波防御帯を貫いたものの、長さも足らず有効な攻撃が出来なかった。耐え切れず短時間で崩壊したが、ラミネート装甲ならかなり持つ筈だ」

「そう……耐ビームコーティングね。ありがとう」

効さんの言葉を聞いて私には一つメイリンへの対抗手段が思い浮かんだ。ガーベラストレート。あれなら……

「なに……役に立てれば光栄だ。そう言えば、君に聞きたい事があった。アズラエルを君はどう思う？ ブルーコスモスの盟主と

言くと、俺のようなコーディネイターはつい身構えてしまうのだが」

「アズラエルさん？ うーん、別におっかなくないわよ？ そりゃ敵対する人にとっては怖いだろうけど。反コーディネイターって言ってもアズラエルさんの場合は、これ以上コーディネイターが増えないように、犯罪を犯したコーディネイターは隔離するようにって感じね。知ってるかもしれないけど、地球上のコーディネイターを保護しようとしてるし……小さい頃、コーディネイターに憧れてたんだって。ふふ。プラントに関しては反コーディネイターってより工場を労働者に乗っ取られた経営主の感覚で怒ってるし。私達コーディネイターにとって普通に敵と言えるのはブルーコスモスじゃロード・ジブリールじゃないかしら。何かにつけて砂時計は全部ぶっ壊せ、コーディネイターは皆殺しにしろって喚いて……アズラエルさん達プラントを正常な状態にしたい人達からは輿論を買っているそうよ？」

「ロード・ジブリールか。過激派だとは聞いている。ありがとう。色々事情がわかったよ」

「どういたしまして」

「メイリン」

ピステイスが強張った顔をしてメイリンに話しかけた。

「どうしたの？ そんな硬い顔して」

「ガルシア司令から、あなたの拘束命令が出ております」

「なんですって!?!」

「どうやらユーラシアの上の方に訓練中の地球軍モビルスーツを襲撃したのがばれたらしく、この特務部隊の解散も命じられているとか。ハイペリオンの開発もとうとうストップが決まったそうです」
メイリンの顔は怒りのために紅潮した。

「……ふっざけないでよ！ 今更やめる!?! 誰が止めてやるもんですか！ 私は！ ルナマリア・ホークを倒してスーパーコーディネーターになるのよ！ そのためには……」

メイリンはピステイスを見つめた。

「私は一人でもやるわよ。あなたは邪魔をする?」

「……いいえ。この特務部隊は、そもそも我がユーラシアが大西洋連邦に対抗せんとして作られた物。祖国が大西洋連邦の膝下に入るなど我慢できない者ばかりです。あなたがその気なら、我々一同付いて行きますよ」

「……そう。じゃあ、すぐにアルテミスからの出航準備を！ 邪魔をする者は今までの味方であっても撃つ！」

「な、なにが起こった!?!」

突然の揺れにガルシアは副官に怒鳴った。

「オルテュギアが！ 強引に出航を試みているようです！」

「なんだと!?!」

その時、オルテュギアから通信が入った。

『あらあら、慌てちゃって』

「メイリン！ 貴様！ 何をやっている！ すぐさま艦を止め降りて来い！」

『ふふふ。私がそんな命令に従うと思つて？ 拘束命令まで出したそうじゃない。それで私はモルモットに戻れと？ ふざけんじ

やないわよ！ 私はルナマリア・ホークを撃ち私が成功体だと証明するわ！ 元々はあんたらが出した命令かも知れない。でもね？

もう私自身の目的になっているのよ。後悔するならそんな命令を出した自分を恨む事ね。……で、シャッター開けて欲しいんだけど？

なんならオルテュギアの艦砲でぶち破ってもいいのよ？』

「……わ、わかった、シャッターを開ける！ これ以上基地を壊すな！」

『ふふふ。ありがと』

ぶちんと通信は切れた。

「……くそう、あのあま、いい気になりやがって！ バルサムを呼べ！ 追撃をかけるんだ！」

「はっ」

「うーん、どうしようかなあ」

先ほどからロウは部屋の中を熊みたいにうろつろ回っている。見かねてリーアムが声をかける。

「どうしたんです？ ロウ？」

「プレアの事だけだよ……。……うしっ、決めた！ 一緒にオーブに行くぞ！」

「なんです、急に」

「いやあ、ほつとけないって言うか、心配だろ。ルナもかなり心配してる。ルナはここを離れられないから俺達が代わりに着いて行ってやるのさ……」

「あー、どうなんでしょう、ギナ様」

「まあ、とりあえずやってもらう事も無いしな。いいだろう。本土に行つて来い」

「やったー！ さすがギナ様話が分かる！」

「やったー！ ロウも来るのね！」

風花も嬉しそうだ。

「じゃあ、リ・ホームの準備しなきゃね。あ、エリカにお土産買つて行こうかしら？ プトレマイオス饅頭とか」

「プロフェッサー、何ですかそれは？」

「売店に売つてたのよ」

「また妙な物を……」

再び地球に向かう　　ロウ達を妙な活気が包んだ。

「メイリン、アルテミスからモバイルスーツの出撃を確認。ハイペリオン2号機と思われませう」

「やっぱりね。黙つて出してくれるとは思わなかつたわ。出るわ。

用意して！」

「はい！」

出撃したメイリンは追つ手と対峙する。

「おい、メイリン、さつさと投降しろよ」

「バルサムね。まさか今更そんな事をすると思つ？」

「ふん、じゃあ失敗作のお前を倒して本当の撃墜マークを付けてやるだけだ！ 行くぜ！ 模擬戦で！ 七機撃墜！ エースの、『アルテミスの荒鷲』の攻撃を受けてみる！」

バルサムはアルミューレ・リュミエールを展開するとビームサブマシンガンでメイリンのハイペリオンに向ける。

「馬鹿ね！ いきなりアルミューレ・リュミエールを張る所が、所

詮は模擬戦だけのお坊ちゃんよ！ 同スペックの機体でそんな戦い方で倒せると思つて！？ 時間切れを狙つても良いけど、時間がもつたないから真つ向から倒してあげる！ 人生の最後に先達の技を見せてあげるわ！ アルミューレ・リュミエールにはこう言う使い方もあるのよ！」

メイリンもアルミューレ・リュミエールを展開し、パルサム機に突進する！

メイリンは徐々にアルミューレ・リュミエールの展開角度を変えて行く。

「見なさい！ これがアルミューレ・ランスよ！」

槍状になったアルミューレ・リュミエールがパルサム機のアルミューレ・リュミエールを貫く！

「うわあああ！」

それがバルサムの最後の声だった。

「ふふふ。ハイペリオン2号機、せつかくだから予備部品に使つてあげるわ。くくく」

静かになった空間でメイリンは一人笑った。

……アツシュ・グレイは目覚めるとコップに水を一杯飲んだ。

「くそう！」

寝る時には消えていた焦燥感がまた蘇っている。

「昨日あんなにぶち殺したつて言うのに！」

アツシュ・グレイの事を人は血に飢えた獣と呼ぶ事もある。だが……彼とて最初からこうではなかった。

彼は、幼い頃特殊な病気に罹っていた。同じ病気の仲の良い少女が居た。だが……彼女はある日突然いなくなつた。死んだと聞かされた。アツシュ・グレイ自身は運良く完治し、退院した。

しかし……ある時、患者仲間から聞き逃せない情報が入った。それは……あの仲の良かった少女が、ある大物政治家の息子の臓器移植のために殺されたというのだ。

最初は疑った。だが……調べていくほどに真実だと思わざるを得なかった。

その政治家の息子はザフトに入ったと言う。アッシュ・グレイは迷わず、ザフトに志願し、彼と同じ部隊になるように工作し……そして首尾よく彼を謀殺した。復讐を果たしたのだ。

しかし、アッシュ・グレイの心は満たされなかった。

敵を殺した時だけ、少し心が晴れるような気がした。だが、眠りに就いて翌朝起きると心の渴きは更に大きくなっていった。彼は更に殺戮を求めた。

「まあいい……今日も殺しまくるか！ ははは！」

哄笑が部屋の中に響く。その声はどこか悲しい響きを帯びていた。

「どうした、ハーネンフース」

「あ、サトー隊長」

休憩室で休んでいたシホ・ハーネンフースは立ち上がるとアナベル・サトーに向かって敬礼する。

シホはナスカ級高速戦闘艦ハーシエルのモビルスーツ隊の隊長。サトーは同じ艦のもう一つのモビルスーツ隊の隊長だ。

「ははは。あまり堅苦しくなるな」

サトーは自動販売機からパック飲料を取ると、シホと向かい合って座る。

「……すまん。俺だけゲイツを受領してしまつて」

「いえ……軍人は与えられた装備で全力を尽くすのみです」

この時期、ザフトの新型機ゲイツの配備はかなり進み、隊長機はほ

ばゲイツに替わっていた。だが……シホの乗機はビーム兵器試験機のシグーデープアームズのままであった。

露骨な懲罰措置と言えた。現在のハーネンフース隊。前の名前はジュール隊。隊長をイザーク・ジュールと言う。

「まあ。イザークもなあ……。まあ、あまり気にするな。幸い俺達が出たような、奪われた新型機が戦場に投入もされていないようだからな。アスランもだが、親と一緒に逃げると言われちゃ、断れんだろう。俺だって死んだ妻と娘が生きていて、戦争なんかやめてどこかで静かに暮らそうと言われたら、ザフトなんか辞めちまうかも知れんよ？」

サトーはちよっとおどけた仕草をした。

シホは小さく笑った。

「まあ、色々言う奴もいるだろうが、その時は俺の所に言って来い！」

「はい。ありがとうございます」

そのシホの姿に、サトーは娘の大きくなった姿を重ねた。なんとなく、似ているのだ。

出来る限り守ってやる。

サトーは心に誓った。

プレアはこれからリ・ホームに乗り込む。

護衛には、サーペントテイルの他にオーブの新型護衛艦ハツユキ級護衛艦が4隻付くそうだ。オーブも本気らしくて心強い。

「じゃあ、プレア……」

言葉はいらぬ。でも、言葉にしたい。

「ルナ、ねえさん……」

「オーブに行ったらちゃんと、ギナ様の紹介状使うのよ？ 生活の

面倒も、もし具合が悪くなった時もそれで大丈夫だから」

「ああ、遠慮なく使ってくれ。まあ、ウズミが気を利かせて色々世話してくれるとは思うが」

「ギナ様にも、お世話になって……」

「なに、かまわんよ」

ギナ様が手を振る。

「ウズミ様にニュートロンジャマーキャンセラー渡したら、後はオリーブでゆっくり体を休めるのよ？」

「わかっていますよ」

「絶対に……」

「ええ、また、会いましょう」

プレアが、そう言っただけで名残惜しそうにリ・ホームに乗り込む。

私はストライクルージュに乗り込む。発進させる。

基地上空で、護衛艦と合流するまでの間だけでも……そばにいたい。

……プレアは無事護衛艦と合流を果たすと、アメノミハシラに向けて旅立っていった。

プレアと、また会えるだろうか？ 私は嫌な予感を打ち消す。

絶対に、会うんだ！

……ピー……

通信？

『ホーク中尉！ 基地が襲撃された！ 早く帰還を！』

なんですって!？

「一体どこなの!？ ニュートロンジャマーキャンセラーは!？

くそっまた雑魚が!」

メイリンは現れたストライクダガーを2射で片付ける。

彼女は困惑していた。プトレマイオス基地にザフトのニュートロンジャマーキャンセラー搭載機が亡命した事は確か。てっきりその技術を使って核兵器を使用可能にしていると思っただのに……戦前からある核兵器保管庫 てつきりそこにニュートロンジャマーキャンセラーがあると踏んでいたのに、まるきり見当たらないのだ。

「 ! 動くな! 動けば撃つ! 」

逃げ惑う警備兵にビームサブマシンガン突きつける。

「さあ、吐け! ニュートロンジャマーキャンセラーはどこ!?」
警備兵は怯えながら言った。

「し、知らない! そんな物見た事も無い! あ、あんたも見たるう! ここにそんな物は無い! 納得がいかなけりゃ行くまで探せばいいさ! 」

! またストライクダガーが現れた。だが、核兵器に当たる事を恐れてか撃つて来ない。

「くっ、時間が! これまでか! 」

メイリンは一気に兵器庫から飛び出すと、壁の向こうに隠れたストライクダガーにビームナイフを突き刺して片付ける。

「脱出する! 」

第四十一話

私は急いでエールストライカーを吹かして基地に戻る。

基地上空で、前に私を襲ったアンノウンに似たモビルスーツを、ビームガンバレルストライカーを付けた105ダガーとストライクダガーが包囲していた。

フラガさん!? ……ううん、違う。
通信が入る。

『その色はホーク中尉か! 手出しは無用だ! ユーラシアの裏切り者はユーラシアの俺の手で片付ける!』

ユーラシア!? この基地でフラガさん以外にガンバレル使う人って……モーガン・シュバリエ大尉!

私は戦いの行方を見守る。

シュバリエ大尉は巧みにガンバレルを操りアンノウンを翻弄する。

あ! アンノウンがアリユミューレ・リュミエールを全周展開する!

『くつ、これがアルテミスの傘を応用したと言う……少々厄介だな。お前らは撤退しろ!』

シュバリエ大尉の部下の人達が撤退して行く。

『なあに、どんな物にも弱点はある! ……見えた! そこか!』

しばらく戸惑っていたシュバリエ大尉だけど、さすが歴戦の勇士、アリユミューレ・リュミエールの発生装置にガンバレルで集中攻撃を加えようと……

避けられる!

あ……シュバリエ大尉がやられる光景が、脳裏に……

「シュバリエ大尉!」

ストライカーを切り離して! 早く!

『何!?』

……言葉より先に、心が走った。

シュバリエ大尉がストライカーを切り離す
一瞬、遅れて、アンノウンからの大型ビームがストライカーを吹き飛ばす。

「シュバリエ大尉！ 下がってください！」

『すまん！ ホーク中尉、後を頼む！』

シュバリエ大尉は基地に撤退して行った。

アンノウンはアリユミューレ・リュミエールの展開を止めるとこちらに向き直る。

『ルナマリア・ホー……ク……！』

この声は メイリン！

『さーあ、今度はあなたにアリユミューレ・リュミエールは無いわよ？ ひとりぼっちでどうする？ 逃げ回れ！ 怯える！ 泣いて縋れ！』

「だ、れが！ あなたなんかに！」

エールストライカーを吹かす。

「アリユミューレ・リュミエールを全方位展開されなければ、あなたもシールドを構えた唯のモビルスーツに変わりは無い！」

私はエールストライカーが与えてくれる大推力でアンノウンを翻弄する。

「さあ、さっきの台詞は口だけだったの！？ メイリン！」

『……な、なぜ貴様、私の名前を知っている！？ くっ手配がここまで回っているのか？ でも私はあ！ あなたに勝つ！！』

メイリンはアリユミューレ・リュミエールを全方位展開した。

『これであんたは手も足も出ない！ 行けー！ フォルファントリ
ー！！』

！ 大出力のビーム砲が狙って来た。勝負を決めに来たわね！

あ……またあの感覚……動きが……わかる！

私はガーベラストレートを抜き放つ。

シユバリエ大尉のガンバレルはうまくかわされたけど、線で攻撃する剣なら！

アンノウンの射撃をかわしながらガーベラストレートでアリユミューレ・リュミエールに切り込む！

『なに！』

アリユミューレ・リュミエールを切り裂くガーベラストレート

メイリンの驚いた声が聞こえる。

アンノウンの左肩から展開されたアリユミューレ・リュミエールの発生装置のスティックを断ち切る！

一気に左側半分ほどのアリユミューレ・リュミエールが消え去る。

「見えた！」

スラスターを急加速、アンノウンの背後に回り込み、そのまま、残った中央と右側の展開装置を切り飛ばす！

慌ててこちらに向き直るアンノウン。だけど　！

「これで、終わりよ！」

アリユミューレ・リュミエールが消え去りから空きになったアンノウンの頭上から、ガーベラストレートで切り込む！

アンノウンの左腕を切り飛ばす！

「あんたは命は取らない！ このまま基地に連行する！ おとなしくしろ！」

メイリン……例え世界は違っても私の妹。話したい……

『くっそおおお！ 私はここまでかあああああうえっ！』

あ……なに……メイリンの悲しみが……胸に……

涙が、溢れて来た。

！

「あう！」

なに？ この衝撃？ あ、メビウス！

『パルス特務兵！ 無事ですか！』

一群のメビウス隊が私に向かって攻撃してくる！

くっ！ メイリンとの間に割ってくる！ 引き裂かれてしまう。

『……ああ、無事だ。撤退する！ 覚えてろ！ 次は倒す！』

「メイリン待つて！ ああ！」

隙を見せず攻撃するメビウスによってメイリンとの距離が広がっていく。

メビウスに護衛され離れていくメイリン。

私達、このまま敵同士なの？ あなたの悲しみ、癒してあげたいのに、お姉ちゃん何もできないの？

プレアとロウ達は無事にオーブ本土に着いた。

「調子はどうだ？ プレア」

「はい。大丈夫です。……うーん？」

「どうしたんです？ プレア？」

「どうしたものかと思って。マキキオ様の紹介状と、ギナ様の紹介状があるけど、マルキオ様の紹介状どうしましょう……」

「ああ、微妙だもんなあ」

「……決めました。両方出します。僕はマルキオ様を信じているから」

「そうか、頑張れ！」

ウズミ・ナラ・アスハに面会を申し込んで程なく、面会許可が下りた知らせがやって来た。

「では、お連れ様はここでお待ちください」

「じゃあ、行ってきます！」

「しっかりやれよ！」

プレアはウズミの待つ応接間に入って行った。

「……これで、ミッションコンプリートだな」

効はつばやく。

「ああ、お疲れさん。何事もなくてよかったよな」

「ああ……」

「これからどうすんだ？ お前さん達」

「傭兵は次の仕事を探すだけだ」

「アタシ、プレアが心配だなあ……」

風花が心配そうにつばやく。

「お？ 風花、初恋か!？」

「ば……ばっかじゃないの!? そんなんじゃないわよ!」

「ははは、怒るなよ」

「……そうだな。オーブはいい土地だ。しばらく骨休みでもするか?」

「ほんと？ 効?」

「よかったわね」

ロレッタが風花の頭をなでる。風花は嬉しそうに笑った。

「……以上です。この運んで来たニュートロンジャマーキャンセラ
ー、どうか有効にお使いくください」

「あいわかった」

ウズミはプレアに向かって微笑んだ。

「大変であったな。マルキオ殿の事は私も残念だ。マルキオ殿から、
君の事をよろしく頼むと書かれている。住居などはさっそく手配さ
せよう。生活の事も心配はいらん。どうか、遠慮なく骨を休めて欲
しい」

「ありがとうございます。もう一つ、頼みたい事があるのですが…

…

「なんだね？ 言ってみなさい」

「はい、ありがとうございます。それは……」

ブレアはオノゴロ島の地下工廠に案内された。

「エリカ・シモンズ主任設計技師だ。君の役に立つだろう」
ウズミはブレアにシモンズを紹介した。

「プロフェッサーから聞いています。大変だったわね。それで、私に手伝ってもらいたいと言うのはどんな事かしら」

「はい。ザフトは核動力機を完成させました。その内戦場にも現れるでしょう。核動力機のパワーは段違いです。通常のモビルスーツでは対抗できないでしょう。その時のために持ってきたモビルスーツ　ドレットノートを完成させ、贈りたい人がいるんです」

「大切な人なのね」

「ええ……僕の……姉です！」

「すまんかったなあ、ホーク中尉。とんだ、みつともないところを見せてしまった」

基地に戻ると、シユバリ工大尉が話し掛けて来た。

「いえ。相手は強かったですから。装備も実力も、本当に」

「ハイペリオンと言うんだ、あのモビルスーツは。ユーラシアで開発していた」

そうか、あのアンノウン、ハイペリオンって言うんだ。

「しかし、ガンバレルを使う事がわかってから浮かれてしまっていたようだ。ガンバレルさえあればと……。気を引き締めんな。そう言えばフラガ中佐から聞いたが、君も素質があるらしいな」

「あは。どうも、そうらしいです」

「じゃあ、どうするかな？ 明日は空いてるかな？」

「デーパーストライカーのテストですけど、まあ融通は利きます」

「よし、では明日は我が部隊で護衛をするから、ガンバレルのテスト

トをしてみないか？」
「いいんですか!？」
「もちろん!」

翌日。私はガンバレルストライカーを付けて試験宙域にいる。

「ようし、じゃあ教えたとおりにやってみる!」

「はい!」

意識を……広げる。宙域の全ての物を把握するように……感じる! 標的を感じる。あれを……意識すると、ガンバレルが標的の周囲から包み込むように、動く。

発射……標的が消滅するのがわかる。

「いいぞ! ホーク中尉! その調子だ!」

「はい!」

その日のテストは、上々の結果を示した。

とは言えガンバルストライカーがすぐに支給されるはずもなく。私の担当もデীবストライカーに変わりは無く、遂にボアズ攻略の日を迎えた。

アッシュ・グレイは一通の命令書を手にしていた。

「はっ!?! リジエネライトでヤキン・ドゥー工要塞防衛に参加せよ!?! 俺みたいなたテストパイロットと試験機を実戦に投入するな。んざ、ザフトも焼きが回ったもんだ。ザフトのお偉方は何やってやがんだ、馬鹿野郎共が!」

アッシュ・グレイはザフトの上層部を罵倒した。

「まあ、いいか。通商破壊でこそそこそちまちま敵をぶつ殺すより、大会戦で一気にぱーっと殺せば、すっかり気分も晴れるかもなあ！
殺して殺して殺しまくってやんよ！」

「いよいよだね」

「ええ。じゃあ、そろそろ私は一足先に行くわ」

「やつかいな新型兵器だよなあ。まあ頑張れ」

「ふう」

そろそろ配置点だ。私はアークエンジェルの外に出て、デッキに係留されているストライクルージュに近づく。

なぜ外に係留されているかと言うと、ディープストライカー付きだからだ。ほんとに厄介！

「お、嬢ちゃん。いよいよ出撃かい」

「ええ。マードックさん。ありがとう。整備大変だったでしょう」

「なーに、いって事よ。どんなに技術が進んでもこれだけは変わらねえ。機械を作るやつ、整備するやつ、使うやつ、人間の側が間違いを起こさなけりゃ機械も決して悪さしねえもんだ。嬢ちゃんもしっかりな」

「ええ！」

私はストライクルージュに乗り込む。

アスラン達がプロレマイオス基地から去ってしばらくして、地球軍はいよいよボアズ攻略に取り掛かった。

この作戦で私に与えられた任務は、陽動、遊撃。要するにディープストライカーの実戦試験を兼ねて好きにやれと言う事だ。

いよいよ攻撃が始まる。

私も、行く！

ブースターに点火される。一気にかかるGは何度経験しても慣れな

い。

「うきやー！ー！」

悲鳴上げてばかりはいられない。

「そろそろ、攻撃、しなきゃ！」

手近な戦艦に狙いを定める！ 『ALICE』の補助のおかげで狙いを付けるのは楽だ。

一隻、撃沈！

爆発の余波を避けるために急角度で進路を変える。

混乱するザフト艦隊を尻目に、次の戦艦に狙いを定める！ また撃沈！

『ピーー！』

5隻撃沈した所でアラートが鳴る。

「エネルギー無くなるの早っ！ もう、撃てないわね。ビームサーベルに切り替え！」

大型ビームサーベルが展開される。

「そろそろ、撤退しなきゃ、やばい！」

第四十二話

「おー！ 見事なもんだ。姉ちゃんやるなあ」
ダナは呟いた。

ルナマリアの出撃はドミニオンでも確認されていた。ルナマリアの突入した地点からザフト艦隊の動揺が波のように広がっていくのがわかる。

ハルバートン提督から指示が届く。

その地点に向けて、一斉射撃の後、集中攻撃、突破せよ

「行くぞ、お前ら！」

「わーってるって」

「うぜー」

つとにこいつらブーステッドマンは。ダナは苦笑する。

「了解」

「はい！」

反対にソキウス、そしてジョン、エイブズからは素直な返事が返ってくる。

ダナは出撃の命令を待った。

地球軍艦艇は、ハルバートンの指示通り、ルナマリアの突入した地点に向けて己の持つ最大の攻撃を放った。

主力となるネルソン級宇宙戦艦から大型ビーム砲、対宙魚雷が発射される。アガメムノン級からは225cm2連装高エネルギー収束火線砲ゴットフリートMk.71、そして大型ミサイルが。最も小さなドレイク級宇宙護衛艦も対宙魚雷を放つ。

アークエンジェル級の2艦はもちろんローエン格林、ゴットフリート、バリアント、艦対艦ミサイルスレッジハンマーを乱れ撃ちに撃つ。

すさまじいばかりのエネルギーの激流が狭い空間を支配する。ザフトのナスカ級が、ローラシア級が、次々に飲み込まれ爆発し、自らもエネルギーの乱流に加わる。

地球軍は、ルナマリアの突入した穴を大きな破孔に拡大する事に成功した。

「よし！ カル・バヤン隊左翼を任す！ キャリー隊は右翼だ！」
「了解！」

フラガはアークエンジェルのモビルスーツ隊を2小隊に編成していた。

第1小隊はフラガ、スウエン、ミューディー、シヤムス。

第2小隊はルナ、キャリー、トール、サイ。

現在はルナがいないのでスウエンとキャリーにそれぞれの隊の指揮を任せてい、自らは総指揮を取っている。

アークエンジェル隊の横を、他の艦のモビルスーツ隊、モビルアーマー隊が追い抜いていく。

「ようし、俺達もGOだ！」

「了解！」

今、まさに地球軍の攻撃はボアズへと奔流の様な様相を見せていた。

アーネスト・キング　CE31年に大西洋連邦航空宇宙軍兵学校へ入校。卒業後、建設なつたばかりの月面プロトレマイオス基地に配属、その後様々な勤務を経験し、大佐時代に48歳でパイロットの資格を取り、航空畑に入つて宇宙母艦レキシントン艦長となる。さらに航空宇宙軍大学校で学び、CE63年、この年起こつたプラント技術者のサボタージユに対しモビルアーマー部隊を率い鎮圧、少

将に昇進。CE68年、大西洋連邦宇宙軍第三艦隊司令官、中将。CE70年2月、地球軍発足に伴い宇宙軍第七艦隊司令長官、大将。上司からも部下からも嫌われやすい性格の持ち主だが、宇宙軍士官としての有能さは、彼を嫌う人々でさえ認めざるを得ないものである。

この日、彼はドミニオンが第七艦隊にいない事にほっとしていた。本来ならば、ボアズ攻略総指揮官である彼の直率艦隊である第七艦隊にいる事が正しいのだろう。だが、彼はアズラエルが大嫌いである。もつとも彼が軍内に好意を持つ者が居るかと言うといないであろう。彼が好意を持つ人間がいたとしたら、それは間違いなく女性だ。彼は女性、ギャンブル、酒に目がない上にだらしがなく歯止めが効かず、パーティーでは淑女たちに露骨に嫌がられ同席を拒否されることしばしばで有名である。

そんな訳で、自分に命令される事が嫌いなキングは、横紙破りをされる恐れのあるアズラエルをハルバートンの第八艦隊に押し付ける事に成功して上機嫌だった。ボアズ攻略も順調に進んでいる。だが、ザフトの抵抗もさすがに激しく、先鋒である第六、第八艦隊の損害も無視できない物である。彼は、予備兵力である自分の第七艦隊を叩き付ける時期を慎重に検討していた。

マティスは無力感を感じていた。

今さつき地球軍上層部に最新の情報 ジェネシスの最終目標、地

球 およびシーゲル・クラインの分析結果 人類絶滅を希求
を送った所だ。

しかし、この段階でそれらの情報がどれだけ役に立つだろうか？

「それもこれも、シーゲル・クラインのせいだ！」

壁に貼られたシーゲル・クラインの写真にダーツを投げつける。

そう、この戦争は『一族』により計算され始められた戦争だったはず……それが、どこで狂ってしまったのだろうか。

すべてはシーゲル・クラインだ。マティスはそう思った。

ニユートロンジヤマー開発の裏には、彼の数々の技術的助言があったと言っ。

そして、血のバレンタインの報復　プラント評議会では当初、当時の国防委員長ザラを初めとして限定的な地球への核攻撃案が支配的だったと言っ。

それが……彼のごり押しにより万単位と言っ馬鹿げた数のニユートロンジヤマーの投下が変わった。

さらに、リーダーの効かないニユートロンジヤマー下で猛威を振るっているモビルスーツの開発にも、彼は深く関わっているらしかった。

そう。今プラントがここまでの力を持ったのはまさしくシーゲル・クラインによる物と言っても過言ではない。

であるのに。まるで、行動が読めない。まるでプラントが滅びてもいいと言わんばかりの行動……

いや……認めたくなかっただけだ。彼は、人類の絶滅を希求している。集めた全ての情報がそう考えると、辻褄が合っ。一体なぜか……それは『一族』が総力をあげても掴めなかった。

ふと、マティスの胸に疑問が生じた。何故、シーゲル・クラインはここまでの幅広い能力があるのか？　元々専門は宇宙生命学や天文学だったはずだ。それがニユートロンジヤマーやモビルスーツなどまるで畑違いだ。如何にコーデイネイターと言っても、頭脳的には記憶力、理解力が優れていると言っに過ぎない。技術を進歩させるにはひらめきが大切だ。

それはナチュラルにもコーデイネイターにも平等だ。母数が大きければ開発に向いた人材も多い。現に地球連合は緒戦ザフトのモビルスーツに圧倒されても、ビーム兵器、独自のモビルスーツ開発、P S装甲、ミラージュコロイド、陽電子砲、ラミネート装甲と次々に

新技術を開発し戦局をここまで挽回してきたのだ。

大昔の発明家が、『発明は1%のひらめきと99%の努力』と言ったが、その言葉は逆説的にいくら努力してもひらめきがなければだめ、と言う事を示している。

それが……ある時期から、シーゲル・クラインはまるで解答が予めわかっているかのように、次々とプラントの驚異的な技術発展を導いた。その事をもっと疑問に思うべきだったかもしれない。

「でも、もう遅い。私にもう出来る事はない……」

情報では、ジエネシスの目標には確実に地球が含まれている。だが、ジエネシスを破壊しようにも……ジエネシスの装甲は起動時にはPS装甲を展開する。通常PS装甲はビームなど高エネルギー兵器にはほぼ無力だが、ジエネシスはその超広大な装甲面積によりエネルギー許容量がモブルスーツのそれより遥かに高いため、核では破壊不能、事に依ると陽電子砲ですら破壊は不可能かもしれない。

「彼らに、頼るしかないか……祈るしか……」

マティスの視線の先にはジエネシスを破壊できるかも知れないと、状況を打破出来るかも知れないと『一族』が結論した者達のリストがあつた。

皮肉な事にその全員が、マティスが「イレギュラー」と呼ぶ、本来『一族』の不利益となると見做された人物達のリストに含まれていた。

「強すぎる力は不確定要素。人類を正しく導くには排除しなければならぬ。でも……今はその力を信じたい……」

「アズラエル様」

「なんだい？」

キングに厄介払いされた形のアズラエルはこちらもまた、清々とした気分だった。彼の方でもキングは嫌いだったのだ。抜け目なく子飼いとと言えるサザールランド率いる部隊を第七艦隊へ送り込んでい

たが。

「特殊情報部のマティス様から緊急通信です」

「わかった」

アズラエルは自分の前にあるコンソールを操作し、送られて来たデータを解凍、復元する。

「……ふうん」

アズラエルは一瞥すると詰まらなそうな顔をした。

マティスからは、ザフトの切り札、最後のより所と思われるガンマ線レーザー砲『ジエネシス』の予想される目標　月面プロレマイオス基地。最終目標　地球　が示されていた。

そして、シーゲル・クラインについての分析。理由はわからないが、人類の絶滅を望んでいる恐れ、大。

「いまさらですね。遅過ぎます。今からどうしようと？　ザフトに時間を与えるだけだ。地球を狙われているならば、なおさら速やかにボアズ、ヤキンドウーエを攻略し、ジエネシスを破壊しなければ……。まあ、プロレマイオス基地は最小限の人員を残して周辺宙域に退避しているように命令を。それ以外変更は無いです」
そう。既に賽は投げられているのだ。

「マティス様、通信が入っております。話したいと……」

「何？　邪魔しないで言うておいたはずよ？」

「そ、それが……すみません、直接話していただいた方が早いかと。お繋ぎします！」

スクリーンには、凜々しい、と言ってよいだろう若い男性が現れた。

『久しぶりだね。マティス』

「……あなた！　マティルダ！」

『僕をその名前で呼ぶな！』

今の僕は、サー・マティアスさ！』

それは……

『一族』には奇妙な掟があった。「党首は女性に限る」と言う物であった。

スクリーンに現れたのは、男装に凝り過ぎ、党首として相応しくないとして『一族』から放逐された、マティスの姉、マティルダであった。

「なんで、あなたが……今は何をしているの？　ずっと心配していたのよ？」

『ああ、やっぱり子供の頃から教え込まれた事を生かすのが一番手っ取り早かったんでね、裏社会の情報屋みたいな事をやっているよ。放逐されたと言っても『一族』の者達とは今も接触がある。……マティスの事は僕もいつも気にしていたよ。今回は愛しい妹が困っているのを見ていられなくてね。出て来たというわけさ。ふふ……教えてやるうか？　僕が掴んだジエネシスの弱点！』

私は撤退路を検討する。

まっすぐ味方の艦隊に向かって、へたすれば味方の攻撃に曝される。遠回りでも、ザフト艦隊の周辺部へ向かって進路を取る！

もう撃沈なんか狙わず、すれ違いざまに戦果も確認せずに斬り付けるだけ斬り付ける！

『ピュウー！』

またアラートが鳴る。

う、ますますエネルギーが減ってる！

ビームサーベルの展開を長さ短めにする。艦船攻撃はもう終わりね。ああ、もう！　主砲が完全にお荷物だわ！　主砲だけ切り離せたらいいのに！

……げ！　周辺部で、まだ地球軍の攻撃に余り曝されておらず余裕があるのだらう。ザフトはモビルスーツ隊を繰り出して攻撃して来た。

デープストライカーの前面はモビルスーツが7分、宇宙が3分だ！
遠くでマズルフラッシュの光がいくつも瞬く。弾道がデープスト
ライカーを掠める！

「光を！」

『光が欲しい？ 欲しいのなら、あげましょう！』

『ALICE』の声と共に、モノフェーズ光波防御シールド『アル
ミューレ・リュミエール』がストライクルージュの前面に展開され
る！

……！？ これは？ こんな機能聞いてない！

『アルミューレ・リュミエール』はまるで甲冑を着けた女性のような
形をして、ストライクルージュ全体を包み込む。

まあ、防御範囲が広がってるならそれでいいか。考えてる暇は、無
い！

ウエポンベイ開放！ 三角柱のコンテナが前方に射出され、更にそ
れからマイクロミサイルが射出される！

マイクロミサイルの乱射に遭い、混乱するザフトのモビルスーツ隊
を突破！

……しばらくの後。すべての武装を撃ち尽くし、バリアーを張るエ
ネルギーも無い状態で、私はアークエンジェルに帰還した。

「うー……」

デープストライカーを切り離し、私はアークエンジェルの格納庫
に着艦した。

「おい！ お嬢ちゃん、大丈夫かー？」

「なんとかねー」

しばらくコクピットの中で休んでから、降りると艦内通話機でブリ
ッジに繋いだ。

「ホーク中尉、ただいま帰還しました」

あ、マリューさんが出た。

「ご苦労様。味方は、無事ボアズに取り付く事に成功したわ。あなたはゆつくり休んで頂戴」

「はい」

部屋へ向かおうとすると、わくわくと言った感じでアクタイオン社の人達が駆けて来た。

「どうでした！？ どうでした！？ 地球軍はあなたが作った混乱に乗じて、ザフトの陣を突破したんですよ！」

「あは。そうなんだ……」

急に腹が立って来た。

「僥倖ですよ！ そんなの！ …… 主砲は数発しか撃てないわ、ビームソードもすぐエネルギー切れになるわ、バリアーは5分しか持たないわ、欠点だらけよ！ 私が帰って来れたのだってラッキーだったからよ！ 危険すぎるわ！ もっと稼働時間が長くならなければ、もうディープストライカーには乗りませんからね！」

「ええー？」

急にアクタイオン社の人達はしょんぼりとなった。

「……でも、でも！ その欠点を直せば、また乗ってくれますよね？
ね？」

立ち直るの早っ。

「ま、まあ、欠点がなくなればね……。そう言えば『アルミューレ・リュミエール』が女性の形を取ったけど、あれは何？」

「……！ とうとう、目覚めたのか？ アザゼルが！？」

「ほかに、ほかにどんな事が起こりました？ アザゼル いや、『ALICE』から何かルナマリアさんに働きかけはありませんでしたか？ 話し掛けて来たりとか？」

わあ、っと、私の周りに人が群がる。

「いや、他には別に……。じゃあ、私、休みたいから」

強引にこの場を立ち去る。

アクタイオンの人達は、隕石だの珪素生命体がどうか話してる。「よし、仕切りなおしだー！」とか叫んでる人も居る。タフだ。

「そうか……ボアズに取り付いたか。これで一安心だな」

ハルバートンは戦況を聞いてため息をつく。そこに副官のホフマン大佐が駆けて来た。

「閣下！ 総指揮官のキング大将から通信です」

「わかった。繋げ」

「はっ」

画面にキング大将の顔が映される。

「ハルバートン少将、君の第八艦隊を下がらせる。第六艦隊も下がらせる。ボアズ攻略の仕上げは私の第七艦隊で行う」

「……はっ。了解しました」

「まさか手柄を取られる、などと考えるはいまいな？ 個人の名声など、現代戦には不要だ。第七艦隊がまだ消耗してなく、第六、第八は消耗しているから切り替えるだけだ」

「わかっております」

これだからこの人は。とハルバートンは思う。キング大将は有能なのは確かだが、人の気持ちを気にしない所がある。だから、上からも下からも嫌われるのだ。

まあ、いい。確かにボアズへの道を開くまでの戦闘で第八艦隊が消耗しているのも確かなのだ。休ませてもらおうか。ハルバートンは艦隊に後退を指示した。

第四十三話

「じゃあ、ルナマリアさん、また！」

「ええ、この戦争が終わったらまた会いましょう」

第八艦隊が後退するのに伴って、アクタイオン社の人達は、ディー
プストライカーを持って、引き上げていった。

入れ替わりのように、アークエンジェルのモビルスーツ隊の帰還が
伝えられる。

「お帰りなさい！ みんな無事ね？」

「ああ！ お嬢ちゃんも良くやった！」

「ちえ！ もうちよつとでボアズ攻略できたのになあ！」

トールがぼやく。水を取り出して一気に飲み干す。興奮しているみ
たいだ。

「無理は禁物！ へたして怪我でもしたら、悔しいでしょ？ まあ、
のんびりしようぜ！ 第七艦隊が攻め切れなきゃ、また俺らの出番
がやって来る」

フラガさんも水の入れ物を取る。

「トール！ 無事だったのね！」

ミリイが飛び込んで来た。ミリイも休憩なんだろう。

「必ず帰って来るって約束したろ？」

「でもでも、いつもトールが出撃の時は心配なんだからね！」

ミリイがトールに飛びつく。トールはミリイの背中を優しくなでる。

あー。ご馳走様。

「キング大将、我が軍はすでにボアズの80%の区域を制圧しまし
た！」

攻め手が第七艦隊に交代して1時間ほどもたった頃だろうか。報告
が入る。

「ふふふ、圧倒的ではないか、我が軍は。我が艦もボアズに寄せろ。真っ先に入港してやるのだ」
「はっ」

第七艦隊旗艦ルーズベルトはボアズに砲撃を加えながら接近を始めた。

同時刻ヤキン・ドゥーエ

「ジエネシス照準、ボアズ！……本当によろしいのでしょうか？ あそこではまだ我が将兵が戦っていると云うのに……」

「ボアズはどの道程なく落ちる。プラントを守るために必要な犠牲だ。我がザフト兵士達は喜んで納得してくれる者達ばかりだよ。君は彼らの忠誠を疑うのかね？」

シーゲルは目に力を込めた。見つめられた防衛指揮官はびくつと体を震わすと、目をそらし、スクリーンに目をやる。

「いえ……では、発射用意！ カウントダウン、始め！」

「10…9…8…7…6…5…4…3…2…1…発射！！！」

あ……一瞬何かが私の体を走った。

「どうしたんだ？ おい、ルナ！？」

「だ、駄目よ、前へ進んじや駄目。光と人の渦がと、溶けていく。あ、あれは憎しみの光……」

「おい。おい？ ルナ？」

「どうしたんだ？ 一体？」

「変ねえ、どうしたの？」

「ぜ、全滅じゃないけど、ぜ、全滅じゃないけど……」

アークエンジェル艦橋

「なんなの？ あの光は」
マリューは不吉なものを感じた。
「ボアズの方角ですな」
リーが顎を触りながら答える。
「一体何が？」
「すぐにメネラオスに問い合わせを！」
「はっ」

「ルーズベルトは、キング大将は出ないのか！」
ハルバートンは怒鳴った。
「は、まったく出ません！ ルーズベルトの識別信号途絶！」
「ボアズの様子はどうか！？ この混乱で逆撃されると第七艦隊は全滅するぞ！」
「ボアズからの反撃、ここから見た様子では皆無です。まるで誰もいなくなったかのような……」
「第七艦隊はボアズ攻略完了していたのか？ もしやザフトはそれでやけくそで……」
「ボアズを攻略出来たとの報告も来ておりませんです」
「各艦から、先ほどの光はなんだと問い合わせが来ておりますが」
「後回しにしろ！ 今は状況把握が先だ！」
副官のホフマン大佐も怒鳴る。
「第七艦隊で交信できる中で最上級者は誰だ？」
「……それも未だわからない状態です。どえらく混乱しております」
「……」
ハルバートンはしばし考えた。
「よろしい。一旦本官が第七艦隊の指揮を取る！ ボアズ近辺は危険だな。この宙域まで撤退せよと命令しろ！」
「はっ」

「第12分隊はサフランだけだ」

「シスコも被弾している」

「こちらは三隻ね。ずいぶん傷付いてるのがあるわ」

ハルバートンの元に第七艦隊の状況が集約されてくる。

「ずいぶん、やられてるな」

「ずいぶんどころじゃありません。壊滅です」

「サザールランド大佐と連絡が付きました！ 現段階で最上級者です
！」

「ハルバートン少将、アズラエル理事から通信です」

「繋げ」

「はっ」

アズラエルの姿がスクリーンに映った。

『やあ、ハルバートン少将。第七艦隊は手荒くやられたようですね』

「はあ。残存艦をこちらに撤退させているのですが、この様子では、
1/4残ればいい方かと」

『ハルバートン少将、何にやられたか見当は付きますか？』

「おそらく、アズラエル理事からの情報にあつたヤキン・ドゥーエ
要塞のジエネシスかと」

『僕も同じ意見です。直ちに散開してヤキン・ドゥーエに進軍する
べきと思いますがいかがでしょう？ 特殊情報部の情報ではザフト
は数発は撃てるだけの核を保有しているとの事です。もし地球を撃
たれたら人類滅亡です！』

「その通りですな。幸い、第二射までには時間がかかるそうですか
ら、なんとしても急行させてジエネシスを破壊せねば！」

『その通りです！ ハルバートン少将、第七艦隊の残存各艦はこの
際護衛無しでプトレマイオス基地まで独行で撤退、第六、第八艦隊
はただちにヤキン・ドゥーエ攻略に向かうと言う事でいかがです？』

「了解しました。……ホフマン、第七艦隊残存艦には直接プトレマ
イオス基地に撤退するように伝達せよ。第六、第八艦隊はこれより

ヤキン・ドゥー工要塞、ジェネシス攻略にかかる！」

「第七艦隊、サザーランド大佐からです。我が隊被害少なし、ヤキン・ドゥー工攻略に参加する、と」

ふ……とハルバートンは口をほころばせた。

「いいだろう。ただし待つてはやれんぞ。サザーランド大佐に被害の少ない艦をまとめさせ、後を追わせる」

「はっ」

「くそう！」

アズラエルは壁を殴りつけた。

「理事、どうされたので？」

ナタルが気遣わしげに聞く。

「いや、ジェネシスを撃たれるんだったら核ミサイルもつと大量に配備しておくべきだったかなと思いましてね。ワシントンに配備した分で足りませんか？ まあいまさら言ってもしょうがないか。ワシントンから何か報告は？」

「問題はないようです」

「そうですね。こうなったら遠慮なく使わせてもらいましょう。核ミサイルを」

「アズラエル様。マティス様から、ジェネシスの弱点を掴んだと、通信が！」

「なんですつて！？ それで……いや、自分で見た方が早い」

アズラエルはコンソールを操作する。

「……ふうむ。ジェネシスのPS装甲は一枚板じゃない。ジェネシス表面には少なくとも数の作業用の開口部が存在する、か。いけるかもしれませんね！ そこを狙わせるんです！ すぐにワシントン、それとアークエンジェルとイズモにも情報の伝達を！」

「我が忠勇なるザフト軍兵士達よ！ 今や地球軍艦隊の半数が我がジエネシスによって宇宙に消えた。この輝きこそ我らザフトの正義の証である！ 決定的打撃を受けた地球軍にいかほどの戦力が残っていたしようと、それはすでに形骸である。あえて言おう、カスである！ それら軟弱の集団がこのヤキン・ドゥーエを抜くことはできないと私は断言する。人類は、我ら選ばれた優良種たるプラント国民に管理・運営されてはじめて永久に生き延びることができる。これ以上戦いつづけては人類そのものの危機である。地球軍の無能なる者どもに思い知らせてやらねばならん、今こそ人類は明日の未来に向かつて立たねばならぬ時である、と！」

演説を終えて奥に引つ込んだシーゲルの耳に拍手の音が響いた。
ラウ・ル・クルーゼだった。

「なにかね」

「いや何、やけに熱が籠っていましたのでね。あの演説、本当に自身で信じておられるのかと思ひまして」

「何をいまさら」

シーゲルは手を振った。

「人類絶滅。それが私の望みだと言つたらう」

「初めて聞いた時には本気とは思ひませんでした」

「なら、今なら信じられるだろう？」

シーゲルは傲然と笑った。

「ジエネシスの第二射でプロレマイオス基地を撃つ、そして後顧の憂いなく最大出力の第三射で地球を撃つ。めでたく人類滅亡だ！」

シーゲルは凄みのある笑みを浮かべて腕を広げた。

「それが君の望みでもある。違うかね？」

「そうですね、なぜか？ と思うのですよ。私には人類を憎む理由

がある。あなたは？」

「私にもあるのだよ。人類を憎む理由がね。……進化の枠から外れた奇形人類を！ いや……なんでもない……」

「……まあ、いいでしょう。あなたがそうお考えの限り、協力させていただきましょう」

「頼むぞ。ジエネシスの防衛がすべてなのだからな。だからお前にプロヴィデンスを託すのだ」

「了解いたしました！ 最高評議会議長殿！」

クルーゼは見事な敬礼を見せるとシーゲルの前から去って行った。

「いい？ 核ミサイルを装備したワシントンのピースメーカー隊がジエネシスを攻撃するわ。私達はなんとしてもその血路を開かなきゃいけないの。ボアズと連戦で疲れているでしょうけど、皆、踏ん張って頂戴」

マリューさんが作戦を説明する。

「ああ、踏ん張ってやるぜえ！ 最後の戦いのために！」

フラガさんが声を張り上げる。

「最後の戦いのために！」

「戦いを終わらせるために！」

みんなが手を突き上げ、叫ぶ。

そうだ。これが最後の戦い。最後の戦いにしなきゃ。終わらせなきゃ！ こんな戦い！

私はゼリー飲料を飲み干すとパイロットスーツに着替える。

「無事でな。一緒に行つてやれないのが残念だけど」

「ホントにね。無事で帰つて来てね」

ミューディーがハグしてくれる。

そう、アークエンジェル隊で出撃するのは三人だけだ。アークエン

ジェル隊の最精鋭、フラガさんにキャリーさんと私。ツールとサイ、カル・バヤン隊のみんなは予備兵力として残る。

「うん、ちゃんと無事で帰ってくるわ！」

さあ、最後の戦い！」

「ルナマリア・ホーク、ストライクルージュ、行きます！」

ザフト軍はヤキン・ドゥーエ前面に厚い陣を敷いていた。私達はすぐ乱戦に持ち込まれる。

「くそ！ みんなは無事なの？」

「俺は後ろにいるぞ」

フラガさんだ。

「後ろは任せろ！」

「隣は任せてもらおう」

キャリーさん！

「ええ！ みんな、行方不明にならないでね！ 帰ったら乾杯しましょう！」

「OK！」

みんな、一丸となってザフトの陣を突き進む！

「あう！」

何？ 何事？ ちゃんと注意してたのに！？

「おい！ そのメビウス！ こっちは味方だ！」

キャリーさんが怒鳴る。

「う！」

キャリーさんがメビウスから攻撃を受けた！

「キャリーさん！」

「大丈夫だ！ こいつら変だ！ ザフトの偽装かもしれん！」

『ルナマリア・ホーリークロー！』

あ！ この声でわかった！　メイリンだ！　なんて時に！　いや、この乱戦になる時を狙っていたのだろう。

「みんな、気をつけて！　こいつら敵よ！　前に私を襲ってきた奴！」

メビウスに紛れて、こちらに突進してくる、もう見慣れたアンノウン　ハイペリオン！

「モビルスーツは私に任せて！　みんなはメビウスを！」

「わかった！」

「あんたを倒す！」

「　メイリンー！」

さまざまな思いを込めて私は叫んだ。

ここまで来たら……倒さなきゃいけないかもしれない！

「一気に決めてやるわ！」

メイリンはアルミューレ・リュミエールを展開した。

私はガーベラストレートを抜く！

「そう何度も！　同じ手に引っかかるか！」

メイリンは、アルミューレ・リュミエールの角度を調整し、ガーベラストレートに対して槍の様に形作った。

ああ……！　ガーベラストレートが！　ビームの槍の作る分厚いビーム層により、とうとう中ほどが崩壊して、折れた。

でも！　私はガーベラストレートが崩壊しそうになったのを見ると、左手でビームライフルを取る！

「いい手だったけど、抜かったわね！　ガーベラストレートに気を取られすぎて、背中がから空きよ！」

メイリンがアルミューレ・リュミエールを槍の様にした事で、逆にハイペリオンの防御がお留守になってる。

私はすばやくハイペリオンの背後に回りこみ、アルミューレ・リュミエール発生装置が出ているウイングバインダーを撃ち抜いた！

破壊されたウイングバインダーから盛大に放電が発生し、メイリンは体勢を崩す。

「さあ、もうあんたを守ってくれるアルミューレ・リュミエールは無いわよ！」

『くっそおおお！』

メイリンは両手にビームサブマシンガンを持って連射する。連射の速度はこちらより上だ。弾数が多い！

焦るな、集中しろ！

私はビームライフルを連射せず、ゆっくり狙って引き金を絞る。ハイペリオンの左腕のビームサブマシンガンが爆発する。やった！

「っつっ！」

こっちも被弾した！ エールストライカーに当たってしまった！いきなり速度が落ちてしまう！

『ちやーんす！』

メイリンは左手の壊れたビームサブマシンガンの残骸を手放すと、左手にビームナイフを構えて突っ込んで来る。その姿は無防備に見えた。

私はビームサーベルを抜く！

！

「なに！？」

小さな衝撃で座席が少し揺れる。

ストライクルージュのビームサーベルはハイペリオンの左腕を断ち切った。

でも ストライクルージュの左腕も失った。

左腕の付け根に深々とビームナイフが突き刺さり、付け根の間接部分が小さな爆発を起こして、ストライクルージュの左腕は取れてしまった。

そのビームナイフはハイペリオンの右腕のビームサブマシンガンから発射された物だ。こんなギミックが仕込まれているなんて！

私はとっさにスラスタを吹かすとハイペリオンを蹴り飛ばす！ビームサブマシンガンがハイペリオンの右手から離れる。

『あう！』

メイリンの声。だがメイリンはすぐ立ち直ると、右手にビームナイフを取りストライクルージュの左脚を切り飛ばす。

「負ける、もんですか！」

ハイペリオンの胴体を狙った私の斬撃はうまく避けられハイペリオンの左足を切り飛ばす。

『油断したわね！』

しまった！ ビームサーベルを蹴り飛ばされた
ハイペリオンのビームナイフが迫る！

『これで終わりよ！』

「まだよ！」

私は残った右手で、頭上に漂っていた、半分程に刀身の長さを減らしたガーベラストレートを掴むと、そのままハイペリオンに振り下ろした
！

第四十四話

『……私の、負けね…… うううううう……!!』

半壊したハイペリオンからメイリンの、慟哭の泣き声が聞こえる。

私の目の前に、すべての攻撃手段を奪われ、頭部と右足だけを残した凄惨な姿でハイペリオンは漂っている。

私も…… ストライクルージュも、きつと外から見れば同じようにぼろぼろだろうな。

メイリンと一緒に襲ってきたメビウスは、フラガさんとキャリーさんに追い払われたみたいだ。

……甘いかな。止めを刺さなかったのは。

あの時、私は咄嗟にガベラストレートの軌道をずらし、ハイペリオンの正中心ではなく右腕を断ち切った。

ぎりぎりの勝負だった。自分が負けていれば死んでいただろう。でも……

「メイリン。わかってもらえなくてもいいけど。私は、あなたと姉妹だと思っているわ」

『……そんな事、そんな事……』

『おーい！』

あ、この声は、ロウ？

リ・ホームが、戦場の流れ弾をうまく避けながらこちらに向かって来る！

『探すのに苦労したぜ！ ずいぶんやられてるな、無事か？』

「なんとかねー！」

『ちようどいい……って言や、なんだけどもさ、プレアからの贈り物があるんだ』

「なに？」

『ちよつとこつち来いよ！』

「なんだ？ ルナ！ 護衛は俺達でしといてやるから！」

「ありがとう、フラガさん！」

私はリ・ホームに乗り移った。

「これは……！」

リ・ホームの格納庫に横たわっていたのは、灰色の、背中にまるでXを背負ったようなモビルスーツだった。

「これが、完成品のドレッドノートさ！」

「完成した、ドレッドノート？」

「ああ、こいつの一番の特徴は核エンジン搭載のパワーに背中のみミック　ドラグーンが、ガンバレルみたいに動かせるって事さ。

無線式のガンバレルってとこかな。ビーム砲と多数の推進・姿勢制御用スラスタを備え、高い攻撃力と機動力を持つてる。腰に付いてるビームリーマーもドラグーンと同じように扱えるが、接近戦用のビームスパイクとしても使える。ルナなら扱えるだろうってプレアが。細かい仕様は地球軍式にチューンしてある。PS装甲も、ルナ用に調整済みだ！」

「プレアが？」

「ああ、ルナに使ってもらいたってさ」

「……わかったわ。ありがたく、受け取る！」

私は乗り込んでスイッチを入れる。識別信号などを確認して、最後にPS装甲のスイッチを入れる。今まで灰色だった機体は深紅に輝いた。

「そう言えばさー、お前と戦ってた奴、どうする？」

あ！

「収容して！ 私の姉妹みたいなもんなの！ でも、気をつけて！」

半壊したハイペリオンから救出され、リ・ホームに収容されたメイリンは、すっかりおとなしくなっていた。

私の夢の記憶より少し大人びた姿をした、メイリン。

私を見る目に、力がない。まるで腑抜けのようだ。

「……メイリン。あなたは騙されていたのよ」

「騙され……？」

「私は戦闘用コーディネーターって人に何人も会った事がある。友人よ。文字通り戦闘用に特化されてコーディネイトされて生まれてきた存在……」

「……」

メイリンはわずかにこちらに目を向けた。

「私より、あなたより、戦闘に関してはずっと強いわ。ううん、ナチュラルにも、私が剣術でとうとう勝てなかった人がいたわ。あなたはスーパーコーディネーターって言うけど、それは人類で一番のような、万能の神の様な、そんな存在じゃない。ただ母体の影響が排除されて、設計図通りの結果が出た、それだけの存在よ。あなたがもし私に戦闘で勝ったって、その瞬間はいい気持ちかも知れないでも、一時の夢よ。そんなの全然偉くない！ 例えあなたが私を倒しても、あなたは私にはなれない。人は結局、自分の人生しか歩けないのよ」

「……」

「あなたを戦闘に駆り出した人がなんて言ったか知らない。でも、スーパーコーディネーターってそれだけの物なのよ。戦争はこの戦闘で終わるわ。ううん、終わらせる。そうしたら、私は戦う事を止めるわ。あなたも、出来れば別の道を探して頂戴。戦闘だけが、あなた……私達の能力じゃないわ。あなたの能力を生かす道は一杯あるはずよ」

「なんで……なんでそんなに優しいのよ！ 私はあんたを殺そうとしたのに！」

「……言っただでしょ？ あなたは、私の……あなたを姉妹みたいに思ってる」

私はぎゅっとメイリンを抱きしめる。メイリンの、体の震えが、熱が伝わって来た。

「じゃあ、ルナマリア・ホーク、ドレツドノート、行きます！」
メイリンを口ウに託し、私はリ・ホームから離艦した。

「へえ、面白い形だなあ」

「フラガさん、これは私の弟が託してくれた大事な機体なのよ」

「はは。でも、そのカラーリング、似合ってるぜ」

「ありがとう！」

「じゃあ、行こうか！」

「ええ！」

私達は再びジエネシスを目指す！

あれは……ビームだ！

レナ・イメリアはザフトのビーム光である事を確認した。

「行くわよ！」

「了解！」

この戦いでザフトは大量に新型機を投入して来た。隊長機はもれなくビーム兵器を持った新型だ。

「隊長機さえやれば、後は烏合の衆よ！ 個人主義のコーディネイターなんて！ 我々の連携攻撃を味合わせてやりなさい！」

「了解！」

シホ・ハーネンフースは接近して来る地球軍機を見て両肩のビーム砲を発砲する。

「くそ、連射性が低い！」

このままではあっという間に接近されてしまう。

せめて機体が……シグーディープアームズではなくゲイツだったら！

ジュール隊長がザフトを脱走した後、残された隊員がどれだけ理不尽な白眼視に耐えてきたか……

もし、イザーク隊長に再び会う事があつたら、絶対ぶん殴つてやる！
そう決意しながらシホはレーザー重斬刀を取り出し、部下に発破をかける。

「接近戦に移る！ 気を抜くな！」

「了解！」

「接近戦に移ってきたか。思い切りがいいわね。でも私のバスターダガーを舐めるな！」

イメリアはビームサーベルを抜くと、スラスターを生かして軽快な機動を開始する。

「重斬刀？ そんな物で！ 死ぬ！ ザフト！ 弟の仇！」

イメリアはミサイルを乱射する。

相手を砲撃戦用機と見て迂闊に近づいたのがまずかった！

シホは意外に軽快な相手の機動に焦った。

その時、相手がミサイルを乱射して来た。

何発か喰らうか！？

シホは衝撃を覚悟した。

その時、横合いから、ビームが飛んで来、ミサイルを叩き落す。

「大丈夫か！？ シホ・ハーネンフース！」

「サトー隊長！」

ミサイルを叩き落したゲイツに乗っていたのは、周囲から白眼視されるジュール隊改めハーネンフース隊を陰日向にかばってくれたサトーであった。

「協力して、叩くぞ！ 包囲しろ！」

「了解です！」

くそ！ 嫌な時に敵の増援が！
イメリアは心の中で罵った。
「包囲されるな！ 散開しろ！」
「了解！」

「相手は散開した。確実に一機一機仕留めて行け！」
「はい！」
シホとサトーは協力して敵機を確実に仕留めて行く。
さまを見る。妻と娘の仇だ。
サトーは唇を歪めた。

「くそ、このままでは……近くに誰かいないか!?!」
このままでは逃げられもしないまま全滅してしまう。イメリアは救
援を呼んだ。

…… 応答がないまま、時間が過ぎる。
部下達が、一機、また一機とやられていく。
ここまでか……

その時、赤いモビルスーツが飛び込んで来た！
「イメリア教官！ 無事か!?!」
「その声！ エドワード・ハレルソンか！ よく来てくれた！」
「押し返すぜ！ 教官！」
「ああ！」

エドワードのソドカラミティは、サトーのゲイツと戦い始める。
彼の連れてきた部下達も、ザフトのモビルスーツと戦闘に入る。
もうすぐだ。もうすぐ、ジェネシスに核の花が咲く。そうならばザ
フトなぞ終わりだ。

弟の仇が取れる。ざまを見る。
イメリアは唇を歪めた。

「道は、開けたか」

「ええ、なんとか。ワシントンがジェネシスに接近する事に成功しました」

ワシントンからピースメーカー隊が次々に発艦して行く。

「これで終われば、よいのだがな」

「そう願いましょう」

……ジェネシスに接近したピースメーカー隊が次々に核ミサイルを投下する。

花火のように、数々の光が乱舞する。

「なにい！？」

アブラエルは目を疑った。ワシントンからのピースメーカー隊が核攻撃を終えた後、何も変わらない姿をジェネシスは現したのだ。

！

ジェネシスが光を放つ。

「やばい！ 全軍に伝達！ ジェネシスの射線から離れる！」

慌てて動き出す地球軍艦艇。

「ふ……さすがだな。核攻撃などなんともないわ。……にしても地球軍もジェネシスの恐ろしさを思い知ったようだな。散開攻撃をしてきおる。これでは狙えんな。まあいい、幹を切り倒せば枝も枯れると言っものよ。第三射まで時間を稼がねばならんな。やつらも必

死になるぞ。ジェネシス自体に取り付かれては、さすがに厄介だ。ジェネシス発射後、ジェネシスに再び接近されんようにヤキン・ドゥー工防衛隊は第1を残し、第2から第10まで全て、ジェネシスの防衛にまわせ」

「了解です！」

「さあ、ジェネシス第二射、目標、月面プトレマイオス基地！」

「はっ。目標、プトレマイオス基地！」

ジェネシスの本体内部で炸裂した核から発生したガンマ線レーザーは一次反射ミラーに照され、さらに一次反射ミラーでガンマ線レーザーを拡散、増幅させ本体に設置された二次反射ミラーに照射される。

増幅されたガンマ線レーザーは二次反射ミラーで更に増幅され……その射線は月に向かった。

「ジェネシス、第二射発射されました」

ホフマン大佐がハルバートンに告げる。

「そんな事言われんでもわかるわ！ 目標はどこだ！？」

「目標、月面プトレマイオス基地と思われませう！」

「プトレマイオス基地との通信途絶！」

悲鳴のような報告が相次ぐ。

「核攻撃にも耐えるとはな。こうなれば……直接乗り込んで破壊するか……全軍、目標ジェネシス！」

「はっ、目標ジェネシス！」

ジェネシスから放たれた光は……あれは月の方向！？

「お嬢ちゃん！ ジェネシスはどうやら核攻撃にも耐えやがったみたいだ！」

「内部から、破壊するしかないか……」

「そうみたいね。急ぎましょう！」

「……ジエネシスの弱点、作業用の開口部は？ 狙えなかったんですか？」

平坦な声でアズラエルは尋ねる。

「さすがに……ザフトの抵抗もあり、そこまで肉薄は出来なかったようです」

「……………。スパルタの母の教え 刀の短さを嘆くより、もう一步踏み込め、か。こうなれば……作業用の開口部に直接陽電子砲をぶち込んでやりますか……………」

「アズラエル理事！ オーブ艦隊、戦艦イズモから入電！ 『我、我がローエン格林4門の力を以ってジエネシスを破壊せんとす』
以上です」

「わかってるじゃあないですか！ 承知したと返信を！ ドミニオン前進！ アークエンジェルにも伝える！」

アズラエルは、ふうつと深呼吸をするとマイクを握る。

「全軍、聞いてくれ。ジエネシスの攻撃力は凄まじく、地球を撃たれば世界が滅びるのも時間の問題だ。希望は一つしかない。今、この場でジエネシスを破壊する！ それだけが人類が助かる道である。連戦を続ける地球軍の戦力は少なく、ザフトの反撃は強固だ。だが、それでも我々は戦わねばならない。なぜなら……地球軍は敵に背中を見せないからだ！ 残された戦力を結集して、ジエネシスに最後の攻撃をかける。総員戦闘を開始せよ！」

第四十五話

レナとエドワード、対シホとサトーの隊は互角の戦いを続けていた。
いきなり、サトーの部下のモビルスーツが被弾をする。

「何事だ！」

「わかりません！　うわああああ！」

「イメリア大尉、応援に来てやったぞ！」

「　　！　　シュバリエ大尉！　　ありがとう！　　ハレルソン！　　シュバリエ大尉の隊と協力して敵を包囲するぞ！」

「はいよ！」

先程とは敵味方を変え、再び包囲戦が始まる。

「く、何なのだ！　あのモビルスーツは！」

サトーは罵った。

互角だった戦いは、シュバリエ隊の介入でサトー、ハーネンフース隊の敗北へと急速に天秤を傾けていった。

「ハーネンフース！　俺が突撃する！　その間に生き残った者をまとめて撤退しろ！」

サトーは覚悟を決めた。

「でも！　サトー隊長！」

「若い者に先に逝かす訳にはいかんだろうが！　後は任せた！　お前はなんとしても生きろ！」

娘のようなお前を助けるためなら、この命も惜しくはないさ……

サトーは砲撃戦用機らしいモビルスーツに向かって突撃した

「！」

イメリアは息を呑んだ。

バスターダガーのミサイルは撃ち尽くしていた。

イメリアのバスターダガーはサトーの突撃により、右腕を持っていかれた。

「教官！ そいつから離れろ！」

エドワードのソードカラミティが背後からゲイツを襲う。

「く、まだまだあああ！」

サトーは振り向きざまに両腰からエクステンショナル・アレスターを射出する。

「なんだあ！？」

振り下ろしたソードカラミティの左腕が、アンカーに捕捉される。

「掛かったわ！」

エドワードはアンカーを切って逃れようとする。が 一瞬遅く、

サトーは2連装ビームクローを振り下ろし、対艦刀ごとソードカラミティの左腕を破壊する。

「そこまでだ！」

モーガンのガンバレルが四方からゲイツを襲う。

「……くそ！ せめてお前だけでも道連れに……この隙に早く逃げろ！ ハーネンフース！」

サトーはソードカラミティに組み付こうとする。

「往生際が悪い！」

モーガンのガンバレルが再びサトーのゲイツを襲う。

サトーのゲイツは爆発した。

「さあ、残りも逃がしやしないよ！」

イメリアは残った左腕のビームサーベルを振ると舌なめずりをする。

「逃がしやしないぜ！」

エドワードも右腕で残った対艦刀を構える。

「く……残った部下だけでも　！」
シホと、残った部下3機はハレルソン達の部下達に邪魔されて突破する事はできず。

シホはサトーの作ってくれたチャンスを生かす事ができなかった自分を責め、ぎりつと歯軋りする。

「あなた達！ 私が突撃したら……！」

その隙になんとしても突破しろ

言い終える前に、周囲で爆発が起きる。

なに！？　もしかして援軍！？

死を覚悟していたシホの胸に希望が甦った。

「……ぐわあああ！」

いきなりハレルソン達の部下の機が爆発する。

「なんだ！？」

「ミサイル群、急速接近！」

「くっ、避ける！」

「　ハーネンフース、大分やられたようだな。ここは私に任せて、撤退しろ」

「あなたは！　あのフェイスのラウ・ル・クルーゼ！？」

「地球軍！　もう勝ったつもりでいるようだな。だが、このプロヴィデンスとミーティアの力を持つてすれば……ははは！　教育してやろう！」

ミーティアの巨大ビーム砲が、ミサイルが、次々に地球軍のモビルスーツを破壊していく。

エドワードのソードカラミティとシュバリエのガンバレルダガーも例外ではなかった。

「では、ラウ・ル・クルーゼ。後をお任せします！」

シホは残った部下を引き連れ撤退して行った。

対してイメリア、ハレルソン、シュバリエ側は、クルーゼに翻弄され、被害続出という事態の急展開であった。

「部下が、全部　！」

「魔女の婆さんの呪いか！」

「くそう、こつちもやられちゃった！」

「まだまだ！　でかぶつが！　ガンバレルを舐めるな！」

モーガン・シュガリエのガンバレルが、生き物のようにミーティアの攻撃を掻い潜りミーティア本体にビームを叩き込む！

ミーティア内部のミサイルが誘爆したのか、ミーティアが大きく爆発し決れる。

「やったか！？」

「ふ……所詮は防御も無いでかい武器庫だったか。だがなあ！　プロヴィデンスにはドラグーンがあるのだよ！」

クルーゼは壊れたミーティアをパージするとドラグーンを射出する。

「有線式のガンバレルなど！　無線式のドラグーンの威力を見せてやる！」

モーガンはガンバレルを操って対抗せんとするものの、11基ものドラグーンに翻弄され、とうとうガンバレルを全て落とされてしまう。そしてドラグーンの攻撃はモビルスーツに向かう。

「きやああ　……」

イメリアのバスターダガーがドラグーンの作るビームの網に絡めとられ爆発した。

「　イメリア教官！」

「ハレルソン！ 相手が悪すぎる！ 撤退できる内に撤退するぞ！」
「ちっ、了解！」

「逃がしはせんよ！ む、この感じは！？」
ガンバレルのビームが、プロヴィデンスを襲ってきた！

「ははは！ 面白い奴に出会ったものだ！ これが運命という奴か！？」

私達3機は一路ジェネシスを目指す！

私のドラグーン、フラガさんのガンバレルで敵を翻弄し、キャリーさんが止めを刺していく。

このまま、行ければ！

！

あれは！ シュバリエ大尉のガンバレルダガー！ やられてる！
あぶない！ 思いもよらない方向からビーム攻撃が来た！ なに？
その方向にモビルスーツなんかいない！

『このまま行かせはせんよ！ あれは私の夢！ 私の希望！』
何？ あのモビルスーツは！？ まるで円盤を背負ったような……

！

またビーム攻撃！ 危うく避ける！

よく見ると、周囲をドラグーンが飛びまわっている。

『ははは！ ムウ・ラ・フラガか！ よろしい！ 決着をつけてやる！ このプロヴィデンスの力を見せてやる！』

「貴様！ ラウ・ル・クルーゼか！ こんな時に！」
フラガさんのガンバレルが、動く。

『こんな時だからだよ！ 線付きではなあ！ 稼動範囲も知れたものだ！』

「ふざけるなあ！ 道具って物は使い方なんだよ！」

一瞬

「うわあ！」

ドラグーンがいくつか爆発する。

「ただ、フラガさんのガンバレルストライカーは破壊されてた。」

「フラガさん！」

「……つつう！ 無事だ！ お嬢ちゃん！」

あ……この感覚……

フラガさん？ 違う。フラガさんじゃないけどフラガさんにそっくりな人が、私の前に居た

あなたは、ラウ・ル・クルーゼ？

お前は、誰だ？

私は、ルナマリア・ホーク。あなたと同じ、メンデルで作られた者

……

これは……人類の革新？ 私もそうだと言うのか？

あなたの悲しみが、苦しみが、伝わって来る……

ええい！ 同情などいらん！

世界が戻る。ドラグーンが襲ってくる！

わかる！ 相手の動きがわかる！ かわせる！

ドラグーンの数じゃ、分が悪いけど、その分集中できる！

「なんで、あなたはそうなの！？ 分かり合えたじゃない、私達！」
私の悲痛な叫びを他所に、クルーゼはドラグーンで攻撃を仕掛けてくる。

『如何に分かろうと、理解しようと、譲れない物もある！ お前も見たのだろう！ 私を！ 未来が見たければ、この私の屍を超えて行け！』

「なんでよーーー！」

涙がこぼれる。

『く、ドラグーンが！ なぜ避けられる！？ なぜお前にやられるのだ！？ 私が劣っているからか！？』

悲痛な声……

「違うわ。あなたも見たのでしょ？ 人類の革新を…… 人類の行く先を…… 受け入れて！」

『受け入れるか！ 私は私だ！ 例え死のうと私は私のままで居る！』

あ……これは……この感じは……プレア……！？

僕に合わせて……僕とルナの想いを合わせて……全てを包み込む

「……いいわ……私はあなたごと、全てを包み込む……感じて……」
ドレッドノートのドラグーンの作り出すバリアが、プロヴィデンスをドラグーンごと正四面体に包み込む。

『これは……伝わって来る……これが想いの力だというのか？』
「認めて……受け入れて……」

『……認めん！ 認めんぞ！ 私は私のままで逝く！』
プロヴィデンスの大型ドラグーンの9門のビーム砲が、小型ドラグーンの2門のビーム砲が、一斉に光る。

「やめて！ クルーゼさん！」
『破れええええ！』
残ったドラグーンから一斉にビーム砲が発射される。

それは、ドレッドノートのドラグーンバリアを破る事無く、反射し……何度も、何度もプロヴィデンスの機体を貫き、そして消えた。

「クルーゼさん！ クルーゼさん！」
『……よし。お前の勝ちだ……。私の屍を踏み越えて、お前は、お前の作る明日へ往け……』

その弱々しいけれど、しっかりした言葉を最後に、私はクルーゼさんが逝ったのを感じた

「プロヴィデンス、識別信号が消えました!」

「クルーゼがやられたか……不甲斐ない。では私も出るかな? 後は任せた」

「クライン評議会議長、なにを!？」

「フリーダム2号機で出る。なに、もう私がここにもしてしようがないのでね。一次反射ミラーを交換次第、令なくして地球に向けてジエネシスを最大出力で発射せよ」

「な!？」

「ちよ!!! 議長!？」

言い捨てる、慌てるオペレーター達を振り切ってシーゲルは司令室を後にした。

「やったか？」

「……逝ってしまったわ。クルーゼさんは」

「そうか。奴とは妙な因縁があつてな……。まあ、今更言つてもしようがないか。奴は、誰かに自分を倒してもらいたかつたのかも知れないな……」

そう。最後の攻撃はまるで自殺だった。クルーゼさん……

「おい、まだ戦いは終わっちゃいない。追憶に浸るのは後にしてくれ」

キャリーさん

「そう、そうよね。まだ終わってないんだ! フラガさん、ガンバレルがやられて武器が無いでしょう? 私のビームライフルを!」

「ありがとよ、お嬢ちゃん!」

再びヤキン・ドゥーエを目指す私達。

「 あれは！」

ヤキン・ドゥーエ前面で、いくつもの爆発が……あれは……味方がやられてる？

その中心に、小型の戦艦のような物が見つけた。

ヤキン・ドゥーエから流星のように現れたそれ。小型の戦艦のよう。まるでデープストラーカー？ 大型ビーム砲4門、大型ビームサ―ベル2本が地球軍の戦艦を撃破していく。そして、一斉に大量に放たれるミサイル。ヤキン・ドゥーエを目指す地球軍のモビルスーツが次々に駆逐されていく。

「くそう、なんだ、あの数のミサイルは！？ これじゃ、倒そうにも近づけんぜ！」

「 私が！ やる！」

「 お嬢さん、私も居るって事忘れるなよ！ 後ろは任せろ！」

「 俺もな！」

「 ありがとう！ 行きましょう、みんな！」

集中してドラゲーンを射出する。 わかる！ ミサイルの軌道が！ ドラゲーンのビームが、小型の戦艦みたいなのを貫く！

爆炎の中から何かが現れる。それは確か……アスラン達が乗ってた？

そのトリコロールカラーのモビルスーツから、何本も一斉にビームが放たれる！

『 はっはっはあー！ 私からすれば、お前達の強さなんて赤子同然なのだよ！ 喰らえ！ ディアボリック・デスパースト 死魔殺炎烈光！！！！！！』

叫び声が聞こえる度に、そのフリーダムから光が放たれ、地球軍のモビルスーツ、モビルアーマーがやられていく。

「……これ以上は！ させない！」

ドラグーンのオールレンジ攻撃！

避けられる！？

「ドラグーンか！ ドレットノートか！？ ザフトから盗まれた奴だな！ そんな物が私に効くと思うのかね！？ 君達より進化した人類の私に！」

ああ！？ フラガさん！ キャリーさん！

ビーム砲？ レールガン？ そいつが装備した砲が光る度に、ドラグーンが、やられる！

こうなったら！ 接近戦を……！ 複合兵装防盾のビームサーベル起動！ 突撃！

「ははは！ 無駄無駄無駄ああ！」

推力が！ こつちよりはるかに大きい！

あっという間に接近され……複合兵装防盾を装備した左腕を切り落とされた。

ざわわ……私の肌を違和感が走る。違う！ 私があんのかに目覚めてから、どんな人間にも感じる感触が、魂の感触が、無い！ 人類を憎んでいたクルーゼさんにもあった魂が……空白だ！ こいつは

……人間じゃ……

「あなたは、何者！？」

第四十六話

「私かね。プラント評議会議長、シーゲル・クラインさ」

「!? そんな人がなぜ!」

「ザフトが予想外に不甲斐なかつたからね。このままじゃあ地球を撃つ前にジェネシスを壊されてしまうじゃあないかね」

「なぜ! なぜ地球を、人類を滅ぼそうとするのよ!? あなたは人間……」

人間でしょう、と問う言葉が、口の中に消える。だって、こいつは……こいつは、違う!

「くつくつく。わかるか。君には。一緒にするな! 貴様らのような奇形人類と! 異常なのだよ! 危険なのだよ、狂った進化時計の上を歩き続けるお前達は! 私達が数億年も掛かった進化を多く見積もっても700万年でやってのける! 猿人! 原人!

新人! 君らは進化の袋小路に辿り付くと、どうすればいいかわかっているかのように、その種として最高度に進化した、新たな環境に過剰適応した人類が突然現れる! 私達はそれをジャンプ進化と名づけた。このままでは次のジャンプ進化で宇宙に過剰適応した人類が現れるのは確実だ! 私はそれを数世紀後と結論した。だが戦争で滅ぼそうとしても君達はその活力を活性化させるだけだった。だから私は直接君ら人類を滅ぼす事にした。コーディネイターを生み出しナチュラルと争わせたのはそのためさ。おかげで無事にジェネシスを作る事が出来た。さあ、かわいい野蠻人種よ、君達奇形人類が宇宙に……太陽系外に進出する前に、私が自ら滅ぼしてやる!」

「……馬鹿ね……」

半壊したドレッドノートの中で私はつぶやいた。

プレア、フラガさん、シユバリ工大尉、また、ラウ・ル・クルーゼ……そして私が持っている他者への過剰な共感。それこそが、人類

が宇宙に適応していく形なのではないだろうか？

「あなたは……人類を滅ぼそうとして、その進化を早めてしまったのよ！」

「なにいい！」

フリーダムがビーム砲を、レールガンを一斉にこちらに向け攻撃モーションに入る。

これで……終わりかな……いやだな。

私が最後を覚悟した時だった。

「な！？ 邪魔を、するな！」

……フリーダムが、突然現れた赤いモビルスーツ　ジャスティスに組み付かれていた。

「一体誰だ！ ジャスティス2号機を……！」

「おわかりになりませんか？ お父様？」

この声は！？

「貴様、ラクス！ ……いや！ ラクスではない！ 一体何者だ！」

「ふふふ。私の本当の名前はあなたには発音できませんわ。呼びたければミス・クトウルーとも呼んでくださいな、魂を持たぬ者よ。魂を持たないあなたには、地球人類の進化のパターンなど理解できはしないでしょう。魂の力と言う物を　」

……ラクスじゃ、ないの！？

「ルナマリアさん」

ラクスの声をした何者かは、私に話しかけた。

「私達は、地球の深海の奥底から、はるか昔からあなた達人類を見守ってきました。このシーゲル・クラインの姿を盗み取り、彼に入れ替わった者は、遠い宇宙からやって来た、この星の人類を滅ぼそうとする悪しき物。私が押さえている間に滅しなさい」

「……でも、そうしたらラクス？ はどうなるの……？」

「大丈夫。この体は仮の体です。私の本体は、あなた達の認識では鯨のような姿をして深海に住んでいます。心配はいりませんよ」

「鯨？ まさか、あなたが……羽クジラ！？」

『ふふふ。宇宙に旅立った仲間達もおりますわ。さあ！ 私ごと撃ちなさい！』

『くおのおおおおれえええ！』

『さあ、早く！』

私は覚悟を決めて、ビームリーマーでジャスティスの核エンジンを貫いた。そして、爆発

！

「消えて、ない！」

傷ついているものの、フリーダムだけが、そこにいた。

『WRRRRYYYYY！！』

私はあああ！ 絶対に諦めない！

私は何度も不可能を可能にしてきた！ 真の正義は砕けない！

なぜなら！ 私は！ 聖なるアヌナキ地球総司令官エンリルだからだ！』

フリーダムはジャスティスに組み付かれていたため、咄嗟にレールガンを三つ折りにし、その状態から無理やりレールガンを撃ち反動でジャスティスから離れたのだ。

『Yeahhhhh！！ hahaha！ 私の勝ちだ！ とどめ

だ……宇宙の平和のために、滅びる地球人類！ パワー！！！！！

無限のパワーを、食らえええー！！！！

エウイルナイト・ビッグバートン
闇魔超大爆撃！！！！

！』

やられる！

その時、何かがフリーダムに組み付いた。

「姉ちゃん！」

「クロト！？」

「早く！ 俺達が組み付いてる間に！」

「オルガ！」

「へへへ、三方から組み付かれちゃ、さっきの様に逃げられないだろっ？」

「シャニ！」

「早く！ 姉ちゃん！」

「……だめよ、だめ！」

「いいから早く！ 俺達知ってるんだ！ もう俺達には精神崩壊して死んじまうしかないんだよ！」

「そうだ！ 今更治療されたって多少それが遅れるだけだ！」

「早く俺達が抑えているうちに！」

「今までありがとよ！ 姉ちゃんのおかげで嬉しかった！ 楽しかったぜ！」

「……さあ、僕達が抑えていますから早く！ ……」

ブレア！？

「！」

私は覚悟を決めた。

「あなた達の事、絶対忘れない ……」
たった一つ残ったビームリーマーをフリーダムに突き立てる！

フリーダムはその中にシーゲル・クラインの姿をした者を宿したまま、宇宙に四散した。クロト達と共に……

「無事に……勝ったようね、ルナマリアさんは」

「ああ、遠くから見てても、すごい戦いだっただぜ！ しかし、ドレツドノートも壊されちゃった……死んだ奴らも……いっばいだ……」

ロウ達は必死に流れ弾の飛び交う中をルナマリアに付いて来ていた。
「……しようがないわよ。戦争だもの」

突き放したようにプロフェッサーがつぶやく。

「……しかし、シーゲル・クラインが異星人だったっての、ありや本当か？」

「さあ？ どうなんでしょ？ 赤いモビルスーツで組み付いたの、ラクスとかラクスじゃないとか言ってたわね。ラクス・クラインが、この後、戦後、この事を何も知らずに現れたら、それがひとつの答えになるかもね」

『……………』

8（ハチ）のモニターに、ただ、「……」が並ぶ。

「ん？ どうしたんだ？ 8（ハチ）？」

『おかしいんだ……まるで古くから、ずうっと遙か昔の古くから知っていた人が、亡くなってしまったような、そんな気分なんだ……』

「……おい！ まさか、お前、シーゲル・クラインの！？」

『思い出せないんだ……思い出せない事が悲しい……』

「8（ハチ）……」

『……。 嗚呼！ 思い出した！ 遙かなる母星ニビル！

偉大なるアヌナキ評議会！ エンリル博士……私はあなたと、この星の人類を滅ぼしに長い、長い旅を……長い時間を……二人で一緒に……。こうなったら……残された全てのエネルギーを使い、ドヴァ帝国の作り出した史上最悪の兵器 絶氷のリングイオ ガッツ トウーゾを起動させれば……』

8（ハチ）のモニターが赤く不気味に光り出す！

『……だめだ、私は地球人類と親しくなり過ぎてしまった……。私には、出来ない……消去を』

8（ハチ）からビーっと言う音がしばらく続き、そして止む。

「8（ハチ）？ おい、8（ハチ）！？」

返事が無い。ただの箱のようだ。

その後8（ハチ）と呼ばれた物が目覚める事は、二度と無かった。

『こちら本部、邪魔者を片付ける。敵部隊を全て殲滅せよ！』

ドミニオンのローエングラムが放たれる。

開いた間隙にモビルスーツが突入していく。

地球軍の士気は、異常なまでに高まっていた。

「O・M・N・I・Enforcer！ O・M・N・I・Enf

order!」

「自分は絶対に……敵を許しません!」

「周囲を警戒しろお!」

「びびるなよおー!」

「来たぞ! 敵に教えてやれ! 楽に勝てはしないとなああ!」

「隊長! 俺達は……勝つんです!」

「そつだな! 勝つぞ!」

地球軍とザフトの部隊が接敵し、乱戦が始まる。

ドミニオンは最前線に立つて突進を続ける。

ジェネシスの前面にはザフトが分厚く陣を敷いている。

『こちら本部。指示に変わりは無い。敵を殲滅しろ』

再び、ドミニオンから、そしてアーケエンジェル、イズモからも口
ーエングリンが放たれる。

「ひゃっほう! 敵を丸裸にしてやれ!」

「この! この! このつつつ!」

「お前らのせいでみんな死んだんだ!」

「どうせ帰る場所なんてないんだ! この命、くれてやる!」

「人類が生き残るには、倒すしかない!」

「後ろにも注意しろ! わかったかあ!」

「イエツサー!!!」

「人類に降伏は無い!」

「最後まで戦えええええ!!!」

「イエツサー!」

「イヤッホー! 敵戦艦をやったぜ!」

「弾切れだ! 援護し……ぐあああつ!」

「隊長!」

「なんてこつた!」

「地球を……頼むぞ……」

「これより我ら、ストーム2の指揮下に入ります！」
「ついてこい！」
「イエッサー！」
「後ろに注意しろ！」
「敵を撃破！」
「うまいぞー！」
「こつちも負けられねえぜ！ やった！」
「いいぞー！」

全体として地球軍が押ししている。しかし、一部ではザフトの果敢な反撃により押し戻されてもいた。

ドミニオンを中心とする先端部はザフトの多大なる反撃を受け止めつつ、なおも進軍する。

「本部、応答願います！」
「みんな敵にやられた………」
「動けるのは自分だけです」
「敵の攻撃で、チームの大半がやられ………」
「レンジャー5、レンジャー6は全滅！」
「やった！ 見たか！ やったぞ！ ざまあ………」
「本部！ 本部！」
「もう、駄目だあ！」
「うあああああああ！」
「本部！ 応答願います！」
「敵の攻撃は苛烈、死傷者多数！」
「本部！ 本部！ このままでは全滅を待つだけです！」
『こちら本部。撤退は許可できない』
「ちくしょう！ 報酬は上乘せだ！」
「くそつ、総員！ 敵戦艦を破壊せよ！」
「最後まで諦めるな！」

あちこちから悲鳴のように伝えられてくる救援要請。

ハルバートンは冷静さを保つよう心がけ、手持ちに持つ予備兵力を慎重に小分けにしながら増援を送り込む。

「もうすぐザフトの陣を突破できるぞ！ みんな！ 気張れ！」

「増援に来たぜ！ 感謝しろよ！」

「後ろの敵はまかせろ！」

「今助けるぞ！ 最後まであきらめるな！！！」

「隊長……もう駄目です……」

「弾が無い……弾をくれえ！」

「隊長……どうか、御武運を……」

「お前ら！」

「なんとか目の前の敵艦を破壊するんだ！」

強固な反撃を続けるザフト。その中に一回り大きな変わったモビルスーツがあった。

リジエネレイトである。

リジエネレイトはその大推力による一撃離脱戦法で次々と地球軍のモビルスーツを片付けていく。

「くっそおおお！」

一機の爆発寸前のストライクダガーが道連れ、とばかりにリジエネレイトにしがみつく。

アッシュ・グレイは鼻で笑った。

すばやくコア・ブロックを切り離して後ろに退避し、近くのコンテナから人型パーツを呼び出し、合体する。

爆発。

『……トウモロートウモロー アイラブヤアトウモロー 明日
はしあ〜わ〜せ〜』

戦場に似つかわしくない、子供向けミュージカルの明るい調子の歌を口ずさむ声が聞こえて来る。

爆炎が晴れた時、地球軍のパイロット達が見た者は、まったく変わらない姿のリジエネレイトであった。

第四十七話

「落ちろ！ 落ちろ！ 落ちろおおおおお！」

「隊長……俺……あなたについていけて……」

「まだ戦えるじゃないか！ ぐわあああ！」

「棺桶がまた一つ増えたか……俺ももうすぐそっちに……」

「本部！ こちらスカウト4……もう駄目だ。支えきれん！ 御武運を！」

「うあああああああつ！」

「ぐわああああ……！」

「レンジャー9！ 応答せよ！ レンジャー9！」

「……応答途絶しました」

「レンジャー10！ 応答せよ！ どうした！？ レンジャー10！」

周囲を固めるモビルスーツの数が薄くなる。

前面に立つ続けて砲撃を続けていたドミニオンはついに、装甲に深刻な損害を受ける。

アズラエルはちつと舌打ちをして、アークエンジェルに先頭を譲った。

地球軍の砲撃が弱まるあぶない瞬間。その時、敵の攻撃が微妙に弱まる。

「増援だ！ 増援が来たぞ！」

ザフトの反撃の矛先が新たに現れた艦隊へ向けられたのだ。

「アズラエル理事」

「なんです？」

「第七艦隊のサザランド大佐が戦場に到着しました」

「そうですか」

ん？

アズラエルは怪訝そうな顔をした。ナタルがまだ何か言いたそうな顔をしている。

「どうしました？」

「それが……撤退しているべき損傷を負った艦も連れてきたみたいで」

「なんですって？」

「第七艦隊残存艦隊から通信！ 全ての艦が、同じ言葉を……『幸運を祈る』全ての艦が、そう通信を送って来ています！」

「……おい、あの艦全然攻撃しとらんじゃないか」

「ん、どれ……当たり前だ。艦砲を全てやられとるぞ！ とつとと

撤退させる！ 馬鹿な！ そのまま体当たりしやがった！」

「ちきしょう、ちきしょう、やつら！」

「ああ……また一隻！」

「直ちにサザーランド大佐に撤退命令を送れ！ 支援砲火を！」

「はっ。……返信来ました。撤退する、との事です」

「そうか……」

ナタルは溜息をついた。アズラエルも浮いた腰を椅子に下ろす。

「……おい、どこへ向かって撤退しとるんだ？」

アズラエルとナタルは、その声にぎよつとしてモニターを凝視した。

ドミニオンのブリッジからも見える。第七艦隊残存艦全ての艦が、

一隻残らずジエネシスへ前進を継続していた。

「通信を送れ！ おい！ 早く！」

副官が叫ぶ。

「サザーランド大佐から通信です！ 『我れ、無事ヴァルハラに

向けて避退しつつあり。支援に感謝す。幸運を祈る』以上です！」

次の瞬間、満身創痍の姿のアガムノン級宇宙母艦「ドゥーリット

ル」がジエネシスの前面を守るローラシア級にぶつかり、散華した。

ドミニオンのブリッジは沈黙に満ちる。

「……前進、再開です」

アズラエルは感情を抑えた、だがわずかに震えた声で言った。

「敵を殲滅せよ。命令に変更は、ありません！」

「奴ら……やる！」

「負けるな！」

「第七艦隊を見習え！」

「地球軍の方が数は多いんだ！ 一人一機やれば勝てる！」

「「イエツサー！」」

「O・M・N・I・Enforcer！ O・M・N・I・Enf
Orcer！」

「地球のために！」

「人類の未来のために！」

「一人一殺！」

「一人一殺！」

「なんだよ！ なんで地球軍のやつら！ 死ぬのをなんとも思っ
ないのか！？」

「母艦が……やられ……！」

「離れる！ 巻き込まれるぞ！」

「やったぞ！ ……！？ 来るな！ 来るな！ 来るな！ ……ぐ
わあああああ！」

「……馬鹿な！ 体当たりして自爆なんて、そんなの聞いてないよ
！」

「母さん！ 母さんー！ うえっ……！」

地球軍のパイロットは損傷を受けてもモビルスーツが動く限り脱出
しようともせず、ザフトのモビルスーツに突撃し、死出の道連れに
と図る。

すでにザフトも軍人の消耗が激しく。新兵が少なからずジェネシス防衛線に動員されている。

彼らは地球軍の死に物狂いの攻撃に恐慌を引き起こしつつあった。

「はっはっは！ どっちを向いても敵ばかりだ！ こいつはいい！
そんな中、相変わらず地球軍を殺し続けているザフトのモビルス
ツがいた。

リジエネレイトだ。

だが……

「……ちっ、これで予備パーツは終わりかよ。ほんとにこいつら
恐れを知らん！」

絶え間ない地球軍の攻撃により、さしものリジエネレイトも破損が
続き、とうとう、予備パーツが尽きた。

「一人一殺！」

地球軍のモビルスーツが、何機もビームサーベルを構えながら突っ
込んでくる。

アッシュ・グレイは、こんな経験は最近すっかりなかった。すつか
り、リジエネレイトの機能に頼ってしまっていた。いざとなったら
パーツを変えればいいだけと思っていた。回避の腕が鈍っていた。
もう、予備パーツは無いのだと言う焦りがアッシュ・グレイを襲う。
リジエネレイトの人型パーツにビームサーベルが突き立つ。

「一人一殺！」

リジエネレイトの動きが止まった時、後ろからも地球軍のモビルス
ーツが切り込んで来、ついにコア・ブロックを切り裂かれる

「……へへ……何笑ってた……もう……いいんだ……て？

……一緒……ああ……行こ……」

死の間際に何を見たのか　アッシュ・グレイの死に顔は微笑んで
いた。

次の瞬間、リジエネレイトは核エンジンの暴走により他のモビルス

「ツより一際大きな爆発を起こして

宇宙に散った

文字通り、地球軍の自らを磨り潰すかのような攻撃は続く。

「正面から来るぞ！」

「引き付けて一斉に撃て！」

「了解！」

「任せとけ！」

「地獄へ行けえ！」

「恐れるな！」

「喰らえ！　喰らえええええ！！！」

「誰だ？　たつた一人でジェネシス前面の敵艦と戦っています！」

「ストーム1だ！　まだ生き残っていたか！」

「ストーム1は、たつた一人で敵戦艦と交戦中です！」

「スカウト5、ストーム1を支援する」

「この古い耄れの命などくれてやる！　しかし、未来の芽を摘む事だけは絶対に許さん！」

「死なせるな！」

「うっ……あああああああ！」

「やったか！」

「　　やった！　やったぞ！　ストーム1がジェネシス前面のナス力級を倒した！」

「見たか！　本部！　やったぞ！」

「爆発に巻き込まれるぞ！　逃げろ！」

「馬鹿野郎！　続け！　付け入り時だ！　勝利の女神はお前達に下着をちらつかせているぞ！」

「「イエツサー！」」

「戦闘可能な味方は何隻残っておるか」

「まともなのは本艦を入れて25隻です。ハルバートン提督。アーケエンジェル、ドミニオン、イズモ共に健在！」

「それだけあれば……十分だ。なんとしてもローエン格林をぶち込んでもらおうぞ！」

「イエッサー！」

この段階で地球軍の被害

大破・轟沈19隻。中破32隻。モビルスーツ、モビルアーマーの未帰還機は328機を数えた。

だが、とうとう……ジエネシスへの道は開けた。

ジエネシス目指して突出して突進を続けるアーケエンジェルは、残存するザフト軍の周囲からの砲撃に曝され続ける。ついに、右足部のゴットフリートがぐずり、と船体内部に向かって崩れ落ちる。

だが、とうとう彼らはジエネシスを指呼の間に捕らえたのだ。

ジエネシスに作業用らしき穴が確認された時、マリユーは叫んだ。

「総員退艦用意！ アーガイル少尉、ケーニヒ少尉は救命艇の護衛を！ カル・バヤン少尉、ホルククロフト少尉、コーザ少尉！ アークエンジェルはジエネシス開口部に左足を突っ込ませ、ローエン格林を撃ちます！ その後は令無くして開いた破孔からジエネシス内部に入り、内部から制圧しなさい！」

衝撃

ブリッジが大きく揺れる！

マリユーは脇腹と左足に衝撃を感じた。

……気がつく、ブリッジが……あちこち崩壊している。

「無事な……者は……いないか！」

「……ラミアス艦長、貴女の左足は役立たずになっていきますぞ」
近くで倒れこんでいるリーが答える。マリユールの左足の膝から下は
つぶれていた。どうやら肋骨も折れたようだ。折れた所が突き出て
しまったのか、血がじくじく滲んでくる。

「……そう、ありがとう。あなたの助言はいつも適切だったわね」
寒い……身体が冷たい。大分血を失ってしまったようね。

マリユールは感覚の無くなった左足を他人事のように見つめる。

「大丈夫ですか!？」

「艦長さん……大丈夫ですか!？」

ノイマンとミリイが駆け寄ってくる。

「あなた達も無事だったのね。総員退艦を！　リー大尉、指揮を執
つて！」

返事はなかった。

「……リー大尉は、もう……」

ノイマンが言いにくそうに告げる。リーはすでに口から血を吐いて
事切れていた。

「そう、じゃあ、あなたが指揮を執りなさい。ノイマン中尉」

「艦長、貴女はどくなさるのですか？」

マリユールに応急手当をしながらノイマンが聞く。

「座席に座らせて頂戴。ジエネシスにローエングリンをぶちかまし
てやらなければ気がすまないのよ」

「脱出を……」

「アークエンジェルはまだ戦えるわ。生きられる者は、行きなさい
！」

「艦長、一緒に！」

「だめよ。それでも軍人よ？　もう自分が長く持たないことはわか
るわ」

マリユールは笑って頭を振った。

「艦長！　だめです！　そんな！　一緒に！　私もここに残……」

「ハウ一等兵！ 命令を下す！」

マリューがいきなり顔から笑みを消し、覇気のある声を上げる。

「は、はい！」

「しっかり生きて、それから死になさい。いいわね？」

再び、マリューはミリアリアに微笑みかける。

「ミリイ、艦長の意思を無駄にするな。脱出しよう」

カズイが額から血を流しながら、言う。

「あなたにも、世話になったわね。さあ、行きなさい」

マリューはにっこり笑う。

その顔に、翻意出来ない事を悟り、ノイマンは敬礼すると生き残った皆を促しブリッジを出て行った。

「総員退艦！？ どうしたんだ？」

「……お前ら、さっさと行け！」

「え、機関長？ だって！」

『何をしているの？ 機関室、全員退艦しなさい』

艦内通話機からマリューの声が響くと同時に、モニターにマリューの姿が映る。

「か、艦長！」

「ラミアス艦長、今若いのをおん出す所だ。あんたは？」

『私は、もうだめです。コントロールはブリッジからやります。あなた達は早く脱出を』

「僕は残るわ。いざって時は『ドキ！ 年寄りだらけの戦場パーチー』をやるうと話し合っておったんでなあ。艦長のあんたであっても、途中からの飛び入り参加者の言う事は聞けんよ？」

『……わかりました。では、よろしく願います、機関長』
マリュー・ラミアスは、にっこり笑った。

そして頭をぺこりと下げると、マリューからの通信は切れた。

「さあ、わかつたろう？ これから年寄りだけのパーティーが始まる

んでな。とつとと出てけ」

「で、でも……アークエンジェルはまだ戦うんでしょう？ だったらー！」

「ああ、まだ戦えるさ。それは年寄りに任せてほしいのさ。行け！」

「なんですって!?!」

アークエンジェルから通信が来た時、アズラエルは啞然とした。

「ええ。零距离からのローエングリンの発射、それしか手はありません。既に行動に移っております。ご了承を」

血が抜けて青ざめた頬に妙に晴れやかな笑みを浮かべたマリューに、アズラエルは既視感を覚えた。

アルベール S2インフルエンザで死んだ、皮肉屋だったアズラエルの友人。

最後にビニールの薄い膜を隔てて会った時、『さつさと帰りなよ、休養の邪魔だ。治ったらまた遊ぼうぜ』と言って彼を病室から追い出した。あの時の笑顔に似ている。ああ、アルベール、ラミアス艦長、君はもう自分が死ぬ事を……

「……わかりました。全軍でアークエンジェルの突入を支援します」
「ありがとうございます！」

マリューは見事な敬礼でそれに答えると、通信は、切れた。

アークエンジェルが速度を上げたと言う報告が入る。

アズラエルはマイクをつかんで叫んだ。

「アークエンジェルがジエネシスに突入する！ 残存全艦支援砲火を絶やすな！」

第四十七話

「ミリイ、何だつて!? まだ艦長達が残ってる?」

「ええ、そうよ。艦長は……艦長達は……」

ミリアリアの声が泣き声に変わる。

「ブリッジ! 総員退艦じゃないんですか!？」

『ええ、そうよ。これからアークエンジェルはジェネシスに突撃を
かけます! アーガイル少尉、ケーニヒ少尉は予定通り、救命艇の
護衛をお願いね。』

そう言つてマリユーはウインクした。その笑顔は、トールの脳裏に
焼きついて終生離れなかった。

「……了……解!」

「まだアークエンジェルは戦えます!」

「ああ、ああ。戦えるともさ。ひよつこどもはさつさと退艦しろ!」

老人が、若者の尻を脱出艇の方に蹴り飛ばす。

「……なんだ? お前さんもまだ退艦しとらんかったのか。さつさ
と行け! マードック!」

「おい、でも、爺さん達は?」

「なあに、モビルスーツの予備機が転がつとるだろう。あいつらは
残してつてもらうぞ。対空砲火の真似事くらいは出来る」

「おいおい、でも、まだアークエンジェルは戦うんだろう? だつ
たら人手が……」

「そうとも、まだこの艦には働いてもらう。それは老人に任せて!
さあ、行った行った!」

「……駄々っ子の連中は全て追い出しました。そろそろ行きましょ

うか、艦長殿！」

「ええ、行きましょう」

座席からずり落ちそうになるマリユートの身体を、ブリッジに上がってきた老軍曹が支える。

「機関長、いいぞ！ やってくれ！」

『あいよ！』

救命艇がアークエンジェルから離れる。マリユートはアークエンジェルを加速させた。

「突っ込んで来るつもりだぞ！ なんとしても止める！」

「モビルスーツ隊はどうした！ 予備部隊全て出撃させる！ 防ぐんだ！」

ジエネシス管制室を怒号が飛び交う。

ザフト軍のモビルスーツが慌ててアークエンジェルの方へ向かって来る。

だが……多少の被弾はあるものの、アークエンジェルは、マリユートは止まらない。

アークエンジェル不屈の魂を象徴するように、損傷を受けた右足部ブリッジで二機のストライクダガーがビームライフルを放っている。「くそう、年寄りに寄ってたかって！」

「昔取った杵柄を見せてやる！ これでもミストラルの技能オリンピック選手だったんじゃ！」

「この年になってこんな真似をするとは思わなかったわい！ 長生きした罰かのう」

「はっはっは！ 俺の腕もなかなかのもんじやろうが！ ほい！」

「機撃墜したぞ！」

「ふん、余所見してると」

衝撃が走る。

爆炎が晴れた時、アークエンジェルの右足部が消滅していた。二機のストライクダガーと共に

アークエンジェルのブリッジにも衝撃が伝わる。構造物が、ぼろぼろと落ちる。

「……つつう！ 大丈夫！？ 軍曹！？」

「……ちくしょう、艦長……あと……少し……」

マリューを支えてくれていた老軍曹は鉄塊に胸部を押しつぶされ、死んだ。

彼女はキツ、とスクリーンを睨み付ける。

「ザフトのくそつたれども！ 私の後ろに地球百億の人々の姿が見えるか！」

支援砲火がアークエンジェルの周囲を包み込む。

「なぜだ！？ なぜ沈まん！ なぜ落とせん！？」

「だめです！ もうだめです！」

「間に合わん！ 総員衝撃に備えろ！」

ジエネシスの管制室に居る者は、ザフト決死の攻撃にも関わらずまるで不死のアキレスの様に、こちらへ突撃してくるアークエンジェルに恐れを抱いて、衝突の時を覚悟する。

ついに、ズズ……と言う重い衝撃と共に、アークエンジェルの左足がジエネシスの開口部へ突き立つ！

ザフトにも骨のある奴がいるのだらう。支援砲火による被害に構わ

ず一隻のナスカ級が全速でアークエンジェルに向かって来る。

マリューはちらつとそちらを見たが、すぐにジエネシスに視線を戻す。

「遅かったわねええええ！ ローエン格林、発射ああ！！！」
マリューの手が発射ボタンを押す。

伝わってくる衝撃が、ローエン格林がジエネシス内部を喰い破つてくれている事を伝えてくれる。

次の瞬間、ナスカ級が爆発しながらもアークエンジェルの艦橋にぶち当たった！

（マリュー！ 会いたかった！）

「ああ！ あなた！」

マリューの最期の言葉は、マリュー本人以外は、誰も聞き取ることではできなかつた。しかし、マリューは死の瞬間、確かに感じていた。眼前で微笑んでいる、亡き恋人の姿を

「ジエネシスが！」

「ああ！？ 崩れる！」

一般のザフト兵に取っては、ジエネシスが地球を狙っていたなど知らず。ただ、ザフトの最終兵器が破られた事だけは誰の目にも明らかだつた。

そして 地球軍の攻勢はヤキン・ドゥー工要塞本体に向かう。

「おい、今出て行つたの、シホ・ハーネンフースの隊じゃないか？」
「そうです。もう少し、休憩すればいいのに。あんなんじゃない、潰れてしまいます」

ニコルが心配そうに答える。

「なんせジュール隊は隊長が逃げちまったからなあ。その分突っ張ってるんだろっ」

「……このままじゃあ、負けてしまいますね」

パック飲料を取りながら、ニコルは言った。自分達も、もう、何回目の出撃だろう。覚えていない。

「今だって負けてるけどな」

皮肉っぽくディアツカが答える。

「でも……このままじゃあ、プラント本国まで滅ぼされてしまいます！」

「じゃあ、何かいい案でもあるってのか？」

「賭けですけどね。ジェネシス付近に、地球軍のドミニオンの存在が確認されています。国防産業連合のムルタ・アズラエル理事が陣頭指揮を取っているという情報です」

「それで？」

「この艦に試験的に搭載されている機能を使います。ブリッツに搭載されていたミラー・ジュコロイドを。今まで使う機会もなかったですけどね。艦長も呼んでください。ひょっとしたら負けずに済むかもしれません」

「……マリユール・ラミアスカ。いい女だったのにな」

アズラエルはぼんやりマリユールの事を思い出していた。

「アーケンジェルからの脱出艇は、無事収容されたのですよね？」

「ええ。イシダミツナリに収容されたのを確認しております」

地球軍の攻撃はジェネシス破壊の成功に伴ってヤキン・ドゥー工要塞本体に矛先を向けている。

ジェネシスを巡る攻防戦で主力を失ったザフトの反撃は弱い物となりつつあった。

ハルバートンに任せておけば、大丈夫だろう
アズラエルはドミニオンの損傷の激しさを鑑み、他の損傷艦と共に
後方に撤退していた。

！
突然ずつつ　と艦に衝撃が走る。

「何事だ！」

「わかりませ　なにい！　突然本艦の下方に敵艦が現れました！
ナスカ級です！　接触されましたあ！」

「なんだとお！？　なぜ今までわからなかった！」

「第14ブロック外壁、破壊されました！」

「第14ブロック、監視カメラ！　ザフトが！　ザフト兵が乗り込
んできます！　武装しています！」

「当たり前だ！　戦争中だぞ！」

「銃器は持っていない模様！　おそらく炭素クリスタルのトマホー
クを持っております！」

「さすがに宇宙船内で銃撃戦をやるほど馬鹿ではないか。　こちら
も白兵戦用意！」

「じゃあ、お互い頑張ろうぜ。　絶対にブルーコスモス盟主の首を取
つてやる！」

「ディアツカ、僕はそんな事のために行くんじゃないやありません！　交
渉しに行くんです！」

「ははは。それは早い者勝ちって事で。　行くぜ！」

ディアツカは工作部隊が繋いだ穴からドミニオン艦内へ入って行く。
ニコルも続く。

ドミニオン艦内へ入ってしばらくすると、地球軍兵が見えた。

「ははは！　コーディネイターの恐ろしさを見せてやるぜえ！」

ディアツカは、天井にジャンプして、そこを踏み台にジャンプ、敵
兵を襲うといったトリッキーな動きで敵兵を打ち倒した。

コーディネーターがナチュラルに恐れられる理由、その第一は平均的にナチュラルより肉体的に優れている事が上げられる。
ディアツカ達は、その能力を縦横に発揮してドミニオン内部へと侵攻して行った。

「……やっと突破できた。くそ、さすがにここまで来るとナチュラルどもの壁が厚いぜ、まったく」

「おい！ 通路の反対側から敵が！」

「ここは俺達に任せろ！ ニコルは先に行け！」

「で、でも！」

「いいから先に行け！ お前はブルーコスモスの盟主に会って、交渉でも何でも、好きにしろ！」

「……わかりました！ 無事で！ ディアツカ！」

ニコルは駆け出した。

ディアツカは向かって来る地球軍兵に向き直る。

「さあ、ここから先は通さないぜえ！ ナチュラル共！」

……ニコルは重い体に鞭打ちながら歩いていた。

ブルーコスモス盟主はどこにいるのだろうか？ 地球軍の艦艇がザフトの艦艇と同じような配置なら、高級士官はブリッジに近い部屋を与えられているはずだった。それともやはりブリッジにいるのだろうか？

ニコルは個室 高級士官の部屋らしき部屋の開閉ボタンを片っ端から押して歩いた。だが、空室ばかりが続く。

このままじゃあ、ブリッジまで行かなくちゃならないかもしれないな。自分はそこまで辿り着けるだろうか？

不安と共にまたある部屋の開閉ボタンを押した。

！ 扉が、開いた。

「こんな所にまでようこそ」

部屋に入って来たザフト兵を見て前に出ようとする次郎と三朗を押しとめて、アズラエルが言う。

「ご用向きは何ですか？」

この人がブルーコスモス盟主……メディアの報道などで見知った顔。ニコルは目的が達せられたのを知った。

「わかっていると思いますが、あなたの行動は監視カメラで見えました。どうも艦の上層部に御用のようですね、指揮の邪魔をしないために暇になった私がわざわざ出向いて来てあげたと言うわけです。お礼に気の利いた台詞でも聞かせてくれるんでしょうね？」ニコルは必死に力を振り絞って答える

「……和平を…… そうでない時は……」

苦い物が混じる声でニコルは続ける。

「そうでない時は、そうでない物を。少なくとも、一方的に膝を屈するためにここへ来たではありません。ナチュラルとコーディネイター、共に手を取り合っただけ、人類は先へ行けると信じます……」

限界だった。ニコルの膝が崩れ落ちる。意識が……くそ！

「……この状態で、言うじゃないか。救護室へ。この者に免じて、戦闘を止めさせましょう」

『戦闘を止めよ！ 戦闘を止めよ！ アズラエル様の命令である！』

その声を聞きながら、ニコルは意識を失った。

もし、その艦内放送が一分遅れていれば、この世からニコルの知り合いがまた一人減っていた事だろう。

ディアツカは血だらけのまま立つ事もできずに壁に寄りかかって座り、死神が己の足首から手を離れたのを感じながら、周りを取り囲んだ地球軍兵が近寄って来るのを見つめていた。

C・E・0072、最も激しかったこの戦いの場所を取ってヤキン・ドゥーエ戦役と呼ばれるこの戦争は、終結に向かった。ヤキン・ドゥーエ要塞が地球軍に占領された後、地球軍はそれ以上の進軍を止め、同日、地球連合とプラントとの間に終戦協定が結ばれた。

第四十九話

終戦協定が結ばれた後、ヤキン・ドゥー工 nearby は地球軍、ザフト共同で戦傷者の救助、捜索でこつた返した。

それが一段落ち着いたのは、モビルスーツ内の酸素が切れると考えられた10日後である。

少数の捜索部隊を残し、双方撤退を始めた。

地球軍は、主力基地だったプロレマイオス基地がジエネシスの攻撃により壊滅していたため、ダイダロス基地へと損害を負った艦から撤収を始めた。

「よく……席が取れたな」

「アズラエル理事が、口を利いたと言う事です」

基地施設がプロレマイオス基地に比べ小さいダイダロス基地。そこのあるレストランでアークエンジェル、ドミニオンの生き残った乗員による宴会が始まっていた。

「恨まれやしないかな？ よその奴らに」

「大丈夫でしょう。アズラエル理事は、この基地の、停戦から2ヶ月の間の酒保の払いは全て自分に回せと言っておられますから。

ヤキン・ドゥー工攻略戦に参加した者でそれにありつけない者は、まずいないでしょう」

「そいつは……なんとも豪気だな」

フラガはぐいっとグラスをあおった。

ナタルも自分のグラスをくいっと傾ける。

「まあ、こつして集まるのも最後だろうからな」

「……そうでしょうね」

「殊にアークエンジェルは沈められちゃったからなあ。みんな、ばらばらになるな」

ナタルはちらつと手の付けられていないグラスを見る。……マリユ
ーの分だ。レストランの席の方々にそんなグラスが置いてある。

「暗くなんなよ。今日は飲んで騒いでつてのが一番の供養だぜ」

「……はい」

ナタルは、ごくつと喉を鳴らす。

「そう言えば、ヘリオポリス組は全員無事だったようですね。よか
った……」

「ああ。奴らは俺達が戦争に巻き込んだようなものだったからなあ。
本当に、無事に戦争切り抜けてほっとした」

「ホーク中尉は？ 来ていないようですが」

「ああ、彼女はなあ……ドミニオンの不良連中とも親しかったよう
だし、その死を目の前で見ちまつてる。気力が出ない状態らしい。
おそらく、軍を辞めるだろうな」

「他のヘリオポリス組は、退役は？」

「ああ、するそうだ。だが、世の中がもう少し落ち着くまで軍に残
ると言ってくれているよ」

「こちらのパイロット達は、元から正規軍人ですし、残るそうです。

…… ああ、一人だけ、辞めたいとぼやいているのがおりますが」
ふふつと笑うと、ナタルはグラスをお代わりする。

「そうか。こっちの残りは……」

フラガはスウエン達を指し示す。

「わからんそうだ。どうもブルーコスモスの養護施設で育てられた
らしくてね。しがらみがあるらしい」

「好きな道を選べると良いですね、彼らも」

「ああ。ひとまず戦争も終わって、世の中もちったあ落ち着く。軍
も縮小するだろう。やりたい事がある奴は、これを機会に辞めちま
えばいい」

「中佐は……どうされますか？」

ナタルはごくごくつと新しく出されたグラスの中身を飲む。

「俺か？ 俺は、やりたい事もないし、軍に残るわ」

「そうですか……」

ナタルはほっとしたようにため息をつく、グラスを飲み干す。

「おい、ペースが早いなあ。酒、苦手なんじゃなかったか？」

「私は……小さい頃から、軍人になる事しか考えて来ませんでした」

「ん？ やりたい事でも見つかったか？」

「……いいえ。戦争が終わっても、軍人で無い自分が想像できないのです」

「なら、続けりゃいいじゃないか」

「性格も……固いし。酒の力を借りないと言いたい事も言えない……」

……

「なんだ？ 言えよ。吐き出したい事があれば、ぱーっとさあ」

フラガはナタルに新しいグラスを渡してやった。

そのグラスを両手で抱え込み、目をぎゅっとつぶり、声を搾り出すようにしてナタルは言った。

「……あなたが好きです。あなたが好きです。あなたが好きです……」

「え！？」

「あなたが、好きです……ずっと前から……」

「バジール少佐……」

正直言えば、フラガはナタルの好意の籠った視線に気づいていた。

だが、戦争中でいつ死ぬかわからないと言う事が、恋人を作る事にブレーキをかけていた。しかし、もういいのだとフラガは自覚した。

「私を……嫌いですか？」

震える声。

嫌いなんて、言えるわけ無いじゃないか。

「じゃあ、付き合ってみるか？ 俺の方が愛想付かされるかもしれないけど」

「……そんな事……ありま……せん……」

「ん？ おい？」

いつの間にか、ナタルはフラガの肩に頭をもたれかけ、幸せそうに

寝息を立てていた。

フラガは微笑むと、ナタルの身体に上着をかけた。

「そう!? 無事なのね? お姉様も、サイモ」

「ああ、無事だとも」

父ジョージの返事に、フレイは、ほうつと安堵の溜め息をついた。

「……結局、プラントは理事国の手に戻るのよね?」

「ああ、そうなるだろうな」

「たったそれだけなのね。考えてみると」

フレイは微かに笑った。

たったそれだけ。その結果に辿り着くのに人類は2年の歳月と10億を超える人命が必要だったのだ。

もし。

もし、コーディネイターが生まれなければ。もし、ジョージ・グレンの告白が無ければ。もし、S2インフルエンザが流行しなければ。もし、理事国がプラントに違う対応をしていたら。もし交渉団がテロに遭わなければ。

いくつもの、『もし』が胸を過ぎる。

もし、そのいくつかが実現していれば、人類は躓かずに歩いていたのだろうか。

そうかも知れない。しかし。

フレイはその想念に浸るのを止めた。それらは忘れてはならない。考え続けられなくてはならない。だが、そう。浸り続けてはいけない。歩き出さなくてはならない。

何かのせいにして思考停止してしまえば、人生はそれをした者に対して必ず復讐するのだ。

フレイは、もう、自分が居心地の良かった生暖かい幼い日々には佇

んでいられない事を自覚していた。

一ヶ月後 極東・日本地区。

「頼みますよ、ミスター・アスハ」

「しかしなあ、そうは言っても、アズラエル殿、我が国は独立志向です。大洋州連合に加わると言うのは、どうも……」

ここは戦前よりユーラシア連邦・東アジア共和国からの独立を望む声が大きく。無視できない動きになっていた。

一旦はその動きを抑えようとした両国であったが、日系人の多く居住するオーブ、そして極東への勢力拡大を図る大西洋連邦は独立勢力を支持。ついに、暮里宮家の悠仁様を天皇として元首に推戴、北方領土を含む旧日本領に台湾を加えた日本皇国が成立したのである。

その日本皇国の首都と定められた京都の、とある邸宅で、日本皇国成立の祝賀に訪れたウズミとアズラエルの二人が会談を行っていた。どうやらアズラエルが何か頼み込んでいるようで、ウズミは気が進まない様子で受け流している。

「オーブの権利は現在と変わりませんよ！むしろ権限が拡大されるんですよ？ オセアニア全域に！」

「そして、負担も増えると……」

ウズミから色よい返事がもらえないのでアズラエルは攻める方向を変えた。

「……オーブは戦勝国です。戦勝国には、それなりの責任、と言う物があるでしょう？」

「そんなに大洋州が信用できませんか？ 一応地球連合の肝煎りでしょうが。新政権は？」

「その閣僚が、さっそく暴力的環境保護団体に我が国の捕鯨船の情報を流してたんですよ？ 信用できますか！？」

北アメリカではエイプリルフル・クライシス後のエネルギー・食糧不足により、トウモロコシ等の穀物の食料・バイオ燃料への需要が増大。それに伴い畜産が縮小。大西洋連邦は食料・エネルギー獲得を目的として正式に捕鯨を再開していた。

対して大洋州　主としてオーストラリア・ニュージーランドでは、北アメリカに比べ飼料の多くを牧草に頼っている比率が高い事もあり畜産がさほどダメージも受けず、さらにエイプリルフル・クライシス後の早期のプラントからの援助によってエネルギー面でも余裕があった。故に相変わらず、もはや宗教と化した観もある反捕鯨団体が活発に活動していた。それはヤキン・ドゥー工戦役により反地球連合運動と合流・一体化し。

そしてついに……大西洋連邦の捕鯨船が暴力的反捕鯨団体の船に撃沈されると言う事件が起こってしまったのだ。

まあ、そろそろごねるのもおしまいにするか……あまり困らせて大西洋連邦との仲が拗れるのも困る。

ウズミはアズラエルに頷いた。

「いいでしょう。しかし、閣僚の少なくとも過半数はオーブの望む人物を指名させていたきたい。それからカーペンタリアには地球軍の駐留を……」

「もちろんです。そのぐらいしなきゃ大洋州の手綱は握れないでしょうからね。パラオ等協力的な国もありますし、どうかよろしくお願ひしますよ！」

アズラエルが喜色満面で手を握ってくる。

「ははは……」

ウズミはこれからの苦勞を思っつて苦笑いをした。

戦争が終わり、軍縮が始まる

それは彼等にとっても無関係ではなかった。と言うより、彼らの場合はアズラエルが、自由にさせてやるうと思つた事の方が大きいだろう。

「いまさら軍追い出されてもねえ、どうしろっていうのよ。まあお金はそれなりに貯まつてるけどさ」

「ああ、ミューディーの言う通りだ。好きとは言えハスラーやるほどの腕はないしなあ。傭兵にでもなるかなあ。東アジアやユーラシアは独立運動とか、色々ごたごたしてるみたいだし。実は、ブルコスモス関連の民間軍事会社からスカウトが来てるんだ」

「あ、あたしのところにも来てるよー！」

「スウエンはどうするんだ？」

「俺か？ 俺の所にもスカウトは来てるが……」
スウエンはちよつと照れくさそうに微笑んだ。

「航空宇宙大学に行って、宇宙を勉強しようと思つてる」

「そっかー。スウエンって前から宇宙好きだものねえ。……決めた！ あたしも大学行く！」

「そんなに簡単に決めちゃうのかよ」

「小人閑居して不善を為すって先生が言つてた。あたしみたいな小人は暇つぶしに大学行きまーす」

「そっか。俺も行くかな」

「シヤムスこそ簡単に決めちゃつて」

「まあ、学を身に着けておいて損はないからな。宇宙、面白かつたしな。……俺達、今までずっと軍事の事しか習つて来なかつたろ。

他の景色も見てみたい」

「やったー！ これからもみんな一緒ね！ 嬉しー！」

「本当に辞めるのかね？」

「ええ」

さばさばした声でエドモンド・デュクロは答えた。

「翻意は出来ないかね？ 上層部も君を高く買っている。この軍縮の折だからこそ、君のような人材は貴重だ。寝ていても少将にはなれるぞ？ 起きていれば大将だ」

デュクロは上を指差した。無論、この部屋の天井を意味した物ではない。

「宇宙への希求 昔からの夢でしてね」

「なんとも『ライトスタッフ』的だな」

デュクロの前に座っている男が笑う。

「DSSDだったな、新たな勤め先は」

「はい」

「非常に残念だが、無理に引き止めるのも、あれだ。では、貴官の未来に神の御加護があらん事を」

退役の手続きを終え、建物を出ると甥のソルが待っていた。

「おう、無事にお勤め終了だ」

「おじさん、今までご苦労様でした！」

「ああ」

デュクロは青空を振り仰ぐ。

もうすぐだ。もうすぐそこに行つてやる……

モーガン・シュバリエは戦後、大西洋連邦に訓練交換士官と言うあやふやな身分から、正式にユーラシア軍に戻った。

モーガンの祖国フランスは戦争中の厄介者扱いを一変させた。モーガンを中佐に二階級特進させ、さらにレジオン・ドゥール勲章『シュヴァリエ』を授けた。

フランス上層部は軍縮に伴う士気低下と言う、どうしようもない現象に侵されつつある軍の士気高揚を期待したのだ。

モーガンはその期待に見事に答えた。

その後起こった、ユーラシア連邦からの欧州連合独立戦役においてフランス共和国軍モビルスーツ部隊が示し続けた高い士気は、彼が苦心して維持した物であると評価されている。

「ああ、もうっ！ 次は!? 5千人? はいはいっ」

マティスが「イレギュラー」と名づけた、『一族』に不利益をもたらすと判断された者達のリストは、すでに六桁をゆうに突破していた。各地の『一族』から報告されてくる「イレギュラー」の数はなおも加速度的に増加しつつある。

もうこうなつては、ほとんど意味も無いような代物と化していたが、マティスは意地になってリスト作成を続けてきた。

だが、もうその気力も途切れようとしている。

「……なんで、私の代になってからこんな問題が起こるのよ! こんなの絶対おかしいわよ!」

自分の代から始めた「イレギュラー」のリストアップ。連合とプラントとの戦乱がひとまず終結し、世情が治まるにつれ報告の数は増して来た。

それは当然だろうが、その数。明らかに、おかしかった。歴代の党首がまともに対応していたならばもっと少なくていいのではないのか? 少なくとも前党首の時代になんとかかされていなければならぬ年齢の者達は……

もつとも人類を『一族』が導いてきた、と言う話が真実と言う前提に立てば、の話だが。

最近マティスは幼い頃から教えられて来たその事実を疑い始めてい

た。

ふと、マティスは姉を……マティルダを思い出した。

ふと、姉と語り合いたくなかった。

姉なんて呼ぶと怒るかな？ ……姉なら……うまくやれたのだろうか？

今のマティスにはそうは思えなかった。人類を、一部の者達が管理運営するなど、幻想ではないのか？ 人類は『一族』が管理してきたと自分が教えられてきた事は、『一族』の夢想……妄想だったのでは？

そう思うと全てが虚しくなる。

今まで覚えた全部データラメだったら面白い？ そんな気持ちわかりたくも無いわよ！

頭に浮かんできた何かの歌の歌詞に文句をつける。

「……結婚したい」

最近の口癖がつい口を付いて出た。

「普通の女性の幸せが欲しい！ どこかに私を受け止めてくれる人がいないもんかしら!？」

ストレスが閾値に達したのか、とうとう、マティスは「イレギュラー」リストをデリートしてしまった。

そのままモニターを睨み続ける……と、意を決したように、評判のいい結婚紹介所の検索を始めた。

第五十話

カラン、と酒場のドアが開くと、左右に突き出た特徴的な髪型をした男が不機嫌そうに入ってくる。

「やあ、ルキーニ。遅かったじゃないか」

涼しげな顔をした男性が声をかけた。

「くそ、何でこんな所で待ち合わせなきゃいけないんだ。俺は人ごみが嫌いなんだよ」

「部屋に引きこもってハッキングばかりやっていると現実の情報を見失うよ？ たまにはいいだろ。酒場で聞き耳を立てるのは情報収集の基本さ。ポツキーでいいかい？」

「ちつ。ジエネシスの情報では、見事に遅れを取ったぜ。約束どおり一杯おごつてやらあ。つたく、お前のようなオナベにやられるとはな」

「君の口の悪さにも、もう慣れたがね。せめて男装の麗人とも呼んでくれないか？」

「化粧までしやがって、まったく」

「おや？ 女が化粧で化けるのは当たり前だと思っよ？」

マティアス　マティルダは含み笑いをする。

「方向性がまったく違うだろうが！ ひかえめなおしゃれこそ女性の身だしなみの基本だ！」

「別に身だしなみでやつてる訳じゃない。僕が男装をするのは、ま、癖の一種、趣味だからね。君のハッキングと同じさ」

「クセ〜？」

「そうさ。世間にはもっと悪い癖もある。万引きとか火付けとか。それに比べりゃ可愛い物さ」

くすくす笑うマティルダに見つめられ、ルキーニは微かに頬を赤らめると横を向く。

「さあて、追撃しちやおうかなあ。知りたがっていたらう？ シー

ゲル・クラインの正体！」

「……ああ。今となつちゃ意味ないかも知れんがな。わかつたのか？」

「地球軍……と言うよりアズラエルが抹消した、ルナマリア・ホークとシーゲル・クラインの戦闘記録だ。ここで聞くといい」

マティルダはルキーニにデジタルオーディオプレイヤーのイヤホンを渡す。

「……」

ルキーニはしばらく聞く事に集中する。

「……終わった。マジか、これ？」

「大マジさ」

ふう、とルキーニはため息をつく。

「まさか、第二、第三の、なんていないよなあ」

「わからないよ。それにしても僕ら地球人類は意外に一人ぼつちじやなかったみたいだね」

「俺は……降りる。これ以上付き合ってられるか。宇宙人なんて」

「おや、情報屋とも思えない言葉だね」

「なんとでも言ってくれ。今は現実逃避したい気分なんだ。マスタ
ー！」

ルキーニは立て続けにスクリーンドライバーを3杯あおった。

「ずいぶん飲むねえ」

「……俺は出来る限り世界を把握してないと安心できないんだ。無限に広がる大宇宙なんて大嫌いだ。つかみ所がなくて不安になる。

地球人を狭つちい地球周辺でこそこそ探るのが俺には合ってるのさ。宇宙人の事は目の前にハローって現れてから考える」

「引き籠もり」

「ふん。お前さんはどうするんだ？」

「僕かい？ 僕にとって情報は仕事だからね。興味はあるが……まあ、科学者連中には聞き耳を立てておくよ。アズラエルから仕事も

頼まれたし。そっちからも情報は入る」

「そうか……。まったくお前は度胸はある、背が高い。おまけに声は低いし胸はないし女装は似合わないし……」

「よくそこまで人の欠点を並べられるものだ」
呆れた声でマティルダが答える。

「……でも俺はお前の騎士になりたい。笑うか？」

突然の台詞にマティルダは絶句した。

「……………いや……………おい？」

ルキーニはテーブルに突っ伏して潰れていた。

「マスター。この種の感動はわが人生にそうたびたびあるものではないと思う」

楊枝を啜えて、マティルダはマスターに話しかけた。

「……………これを機に、正常化を図るべきかな？」

ちらつと自分の短髪の端をつまんでみながらマティルダは尋ねた。

「どうぞご随意に」

マスターはにっこり笑った。

……………

「……………はっ。俺は……………？」

「強い酒立て続けにあおつたからね。潰れちゃったんだよ」
マティルダがくすくす笑う。

「そうか。失敗しちまったな。記憶がまるで無くなってやがる。じやあ、俺はそろそろおさらばするよ」

そう言つとルキーニは伝票を手を取った。その顔はほんのりと赤らんでいた。

「じゃあ、僕もそろそろお暇だ」

マティルダも席を立つ。

「また、今度会った時にはおごつてやるよ。情報の礼だ」

「ふふ。ありがとう」

「……………行ってらっしゃいませ」

バーテンダーの声に送られて二人の情報屋は街に消えていった。

ダナは軍を抜けた。軍はあっさりと彼の退役を認めてくれた。

「さあて、金はあるし、自由って奴を満喫するか！ ジョンやエイブズみたいに好んで軍に縛られる奴の気がしれないぜ、まったく」
ダナはまずバイクを買った。いつもカタログで見て、気に入っていた奴だ。

「まずは暖かい所に行きよーな。カリフォルニアでも目指すか」
バイクに跨りエンジンをかける。ハーレーの大排気量空冷OHV、V型ツインエンジンがもたらす独特の鼓動感にダナは酔う。

この石油資源が枯渇しつつある地球でガソリンエンジン車と言うのは高かったが、それだけの事はある。

「へへっ、いい調子じゃねえか。……暖かい所でのんびりするのに飽きたら、アメリカ大陸縦断してペンギンでも見に行くかな」と
ダナは南に向かって走り出した。焦がれていた自由を満喫しながら。

ダナが走り出した方向のずっと先には南アメリカがある。

南アメリカ合衆国はなんと露骨な事に、戦後、大西洋連邦の大統領選前に独立が認められていた。

もつとも、マストライバーのある中米は除かれていた。パナマを中心とした中米自治領では日系女性のNORIEが將軍として統治する事になる。

独立のきっかけは、地球連合がヤキン・ドゥー工戦役で勝利した事で権威が強まった事にある。

南アメリカ内で大西洋連邦との合併を好意的に受け止め、むしろこれを機に北アメリカの人々と同様の権利・生活を要求する団体の勢力が強まったのだ。

それが、北アメリカおよびブリテンの人々に、南アメリカを手放す

事を決意させた。

なんとも皮肉な事である。

大西洋連邦の豊かな人々にとっては南アメリカの貧しい人々を抱え込み面倒をみ、平等の権利を渡すなどなど到底我慢できなかったのだ。

人口と人種を考えれば、まかり間違えば南アメリカ出身の大統領が誕生してしまうではないか！ そんなのとてもない！ と言
うのが大西洋連邦の人々の正直な思いだったろう。

その南アメリカ とある教会で一組の結婚式が行われていた。

「新郎エドワード・ハレルソン、あなたは新婦ジェーンが病めるときも、健やかなるときも愛を持って、生涯支えあう事を誓いますか？」

「はい」

しつかりとした声が答えた。

「新婦ジェーン・ヒューストン、あなたは新郎エドワードが病めるときも、健やかなるときも愛を持って、生涯支えあう事を誓いますか？」

「はい」

凜とした声が答えた。

それにしても……最初の予定とはずいぶん違っちゃったなあ。

エドワードは思った。

最初は、南アメリカの独立のために地球軍から脱走し、戦う予定だった。

それが、故郷へ帰ってみたら、周囲の人々はむしろ大西洋連邦への併合を喜んでいるようだった。

それならそれもいいかと、併合を受け入れる気になったら、独立だ。何か運命の神様にでも遊ばれてる気がする。

まあ、いいか。おかげでジェーンとも一緒になれる……

二人は続いて結婚指輪を交換した。

そして、新郎は新婦のベールをかきあげキスをする。

式が終わり、二人は教会の入り口に立つ。
「そおれ！」

ジェーンが後ろ向きにブーケを放り投げる。

「きゃー！ 私が取ったわ！」

ブーケを取った女性がはしゃいでいる。

エドワードとジェーンは顔を見合わせて微笑んだ。

彼らは幸せだった。

動乱の続く東アジア

揚子江河口の小さな海洋研究所で写真を撮りまくっている男がいる。

「うん！ いいねえ！ もうちょっと撮らしてくれよ！」

「まあ、いいけどさあ。いくらでも撮ってくれていいよ。こっちも、少しでも話題になってくれれば嬉しいからねえ」

このブルーコスモスが設立した研究所の職員は言った。

「でも、お仲間は上海市議の汚職事件の取材に行っちゃってるんだろ？ あんたはいいのかい？ ヨウスコウカワイルカの保護なんて、今のご時世、そんなに人の興味を引きもしない事を……」

「いいんだって！ こっちの方が俺にとってはよっぽど重要さ！」
明るい声でジェス・リブルは断言した。

「俺はこの取材に誇りを持ってるんだ！」

「まったく空気が薄いぜ」

「ああ、ほんとだ。与圧室が恋しい。早くコクピットに入りたいよ」

「そう言うな。モビルスーツは目立ちすぎる」

ジョンがぼやくとエイブズがたしなめる。

ここはチベットのとある峠。

ユーラシア東部と大陸中国ではエイプリルフル・クライシス以後の対応がうまくできず、共産主義政権が復活していた。

その混乱に乗じて、ヤキン・ドゥー工戦役終結後、これで最後の機会とチベットは独立を宣言した。そして、その豊富な地下資源を切り売りし、大西洋連邦、ユーラシア西部を始めとする民主主義国家に支援を求めた。

同じく独立を宣言した……そしてモンゴルの支援があるとは言え、中共と、中共と友邦のユーラシア東部に挟まれ息も絶え絶えの内モンゴルとは違い、チベットは曲がりなりにも歴史的に反中のインドを始めとする各国と繋がっている。

その結果が……チベットの地下資源に魅せられた民主主義国家からの大規模な航空支援とモビルスーツを始めとする地上部隊の派遣だった。

面白い事に、反共と言う事でインドとパキスタンが共同で戦っていたりする。

もはや量子通信技術によりモビルスーツの有利性も薄れて来てはいしたが、ここでは違う。インドからはその急斜面でとても戦車は送り込めない。しかし。例え空から送り込まれるジェットストライカーを装備したモビルスーツが火力で力不足であったとしても。戦車で登る事の出来ない斜面を、ランチャーを背負った重モビルスーツはその四肢を使って登ることが出来るのだ。

「来たぞ、合図を送る」

二人が望遠鏡で見下ろすその斜面には、続々と中共の軍隊 歩兵が姿を現し始めていた。

まあ、中共には人海戦術が合っているとと言う事かな。さすがに似合っていると言うべきか。しかし、しかし。歩兵でモビルスーツに突撃する事の無意味さぐらい教えておいてもかまわんだろうに。

中共の軍隊に哀れさを覚えつつ、ジョンは自分のモビルスーツ

105スローターダガーに乗り込んだ。

もつとも、先ごろ東トルキスタン及び、中南部東沿岸部が独立を宣言して混乱の極みにある中華人民共和国政府としては、これが精一杯だったのかも知れない。

噴煙と砲火が、105スローターダガーに乗り込んだジョンとエイブズの後方から上がった。気化爆弾も混じっていたのだろう。中共の軍勢を一瞬、火炎が包み込み、そして消えた。

「ようし、行くぞ！」

「おうさ！」

ジョンとエイブズはそれぞれのモバイルスーツで、動きを止めた中共の軍勢に突入して行った。

プラント

プラントはヤキン・ドゥーエ戦後の終戦協定で、アイリーン・カナバを臨時代表としてその独立宣言を撤回、再び理事国の支配下に入る事となる。

その後、アズラエルの後押しでパトリック・ザラがプラント評議会議長に再任された。

時に、元々のプラントの人々から「裏切り者」と罵られながらも、彼はプラントのために人生を捧げた。

後世の歴史家は彼を「プラントの父」と呼ぶ。

「アスランったら」

「んー？」

ラクスが話しかけるが、アスランは生返事を返した。

父、シーゲル・クラインを無くし身寄りを失ったラクス・クライン

はザラ家に引き取られていた。

ラクスは戦後、芸能界を引退した。

シーゲル・クラインは、プラントの人々から戦争指導を誤ったと評価されていた。当然、娘のラクスを見る目も戦争前とは違った。芸能界にラクスの居る場所は無かった。

だが……それに傷ついたのも確かだが、ラクスにはある欲求が芽生えていた。芸能界と言う虚飾の世界ではなく、実学の世界に入りたいと言う。

もうすぐ、ラクスは地球の大学に入学するためにプラントを出る。

それなのに……あと少ししか一緒にいられないのに、アスランはさつきから上の空だ。

ラクスは頬を膨らませた。

アスランは思いに耽っていた。

なぜ、シーゲル・クラインは……父を追い落とした時点で講和を望まなかったのだろうか？ それを抜きにしても、第二次ヤキン・ドゥー工戦で、ジエネシスで地球を狙えと命令したと言う。

アスランには信じられなかった。しかし、事実だ。ある人は、戦争指導中の評議会議長という重圧に耐え切れなかったヒステリーだと言う。で、あるならば。父はどんなにか……理事国支配下のプラント評議会議長と言うのはそれに劣らず重圧が掛かっているはずだ。

ディアツカ、ニコル、そしてイザークと自分　終戦後、旧クルーゼ隊の皆は退役、あるいは軍に復帰しないまま、評議会に勤める事になり働いている。

いずれは俺達も……自分も父達のような重責を担わねばならないだろう……一日も早く父の重荷を軽くしてやらねば。

「もう！ アスランったら聞いてますの！？ 私達の正式な婚約パーティーの話ですわよ？ あと少ししか一緒にいられないのに……」

「え？ いや、それはもちろん！ はは……えーと、どこまで話し

たっけ？」

まるつきり聞いていなかった。

「私の事、本当に好きですか？」

「もちろんだよ！」

アスランは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「……………ね、この写真……………」

「え？ ああ、テニスの大会で二位だった時だよ」

ラクスが見ていたアルバム。開かれたページには、指差されたその写真には小さな頃の自分が作り笑いを浮かべて写っていた。

「二位も立派な成績で嬉しかったでしょうけど、悔しかったでしょう？」

「そりゃ、まあ」

悔しかったさ。夜中ベッドで泣いたほど悔しかった。

「今のアスランがね、ちょうど、こんなような顔をしていますの！」

「ラクス……………」

急に、ラクスが愛おしく思えてきた。ラクスがいれば、背負う重荷も軽くなる気がする。

「ラクス……………」

「あつ……………む……………ん……………」

アスランはラクスに口づけた。

そうだ。俺にはいつぱい時間がある。ラクスを好きになる時間が……………アスランはラクスの背中に手を回し、力を込めた。

さよなら……………ルナ……………

「結局、2年間戦って、すべて元通りか」

公園の噴水のふちに座って、ダイエットが昼食のパンの入っていた袋を膨らませてポンっとはじかせた。

評議会の建物内で食事と言うのも味気ないので、わざわざここまで

足を伸ばしたのだ。

ヤキン・ドゥー工戦役が終結して半年になる。終戦協定が結ばれたものの、講和条約の細かい条件では紛糾していた。まあ、それも二年間の双方が交わした激しい戦火に比べればささやかと言って良いものだろう。

が、それもようやくまとまってきた。条約が本決まりになるのももうすぐだろう。

ディアツカ達も、終戦当初の戦場のような事務量も減り、食事時には多少遠出も出来るようになった。

「そうでもないだろう。少しは、ましになったはずだ。でなければ……」

俺達の苦労はなんだったんだ

イザークは、残っていたパンの欠片と共にその言葉を飲み込む。

「なんででしょうね」

「ん？ なにがだ、ニコル」

「なんと言うか、負けたのにむしろ爽快な気分さえするのは。不思議な気分です」

「そりゃあ……無理もないさ。出せる物をすべて出し尽くして戦い抜いた結果だからな」

ディアツカが笑う。

「それはそうと、午後の仕事だが……」

「待った！ 職場に戻ってからにしてくれ。ここは憩いの場としておきたいんでな」

「ん。わかった、イザーク。……憩いって言えば、お前の弟はどうした、弟は？ あいつ有休だろう？ 今日？」

戦後、パトリック・ザラはエザリア・ジュールと再婚した。そう、イザークはアスランと義兄弟になったのだ。

「ああ。どうせラクスといちゃついているんだろう。くそつ。俺達誰も恋人なんかいないってのに！」

「……お前にはシホちゃんがいるじゃないか」

ディアツカはじとーっと恨めしい物が籠った目でイザークを睨む。
「　！　シ、シ、　関係無い！　ここ一ヶ月まったく会ってないぞ！　そもそも会った瞬間に殴られて……」

元部下の名前を出されて、面白いようにイザークは動揺した様子を見せた。

「ふーん。一ヶ月前には会ったんだな？　確かわざわざ会う約束してたんだったよなあ？」

ディアツカは容赦なく追撃する。

「今度、イザークとアスランにおごらせましょうか？」

「そりゃ、お前……いい考えだな！」

「ぶ！」

「ははは！」

「……多くの命が失われましたな」

「ええ、とても多くの……」

先日、ようやくと、正式に地球連合とプラントの終戦条約が発効した。

大西洋連邦アーリントン国立墓地では、この度の戦役の慰霊祭が厳粛に行われた。

慰霊祭の後、アズラエルとハルバートンは誘い合わせたように、ある一つの真新しい墓へと足を向けた。

墓に刻まれた名前は、マリユー・ラミアス

「彼女は、新任の時にちょうど私の部下でしてね……。若い者に先に死なれるほど、やりきれない事はありませんな」

ハルバートンの声は少し震えていた。

「ええ……それでも我々生き残った者は　」

あえて吐き出されなかった言葉　それがハルバートンに伝わる。

ハルバートンはわずかに顎を動かし同意を示す。

そう、生き残った者は、悲しみに耐え、前へ進みださなければ
ならない。いずれ彼ら自身が死者の列に加わるまで

二人は、マリユールの墓にそつと花束を置き、後ろを向いて歩き出した。

最終話

戦争が終わって、私は臍抜けたようになってしまった。

オルガ、シャニ、クロト、マリユーさん、そしてプレア……。

プレアは終戦を待たずに……再び私に会う事無しに亡くなってしまっていた。ちょうどヤキン・ドゥーエ攻略戦の頃だと言う。私が救えなかった人々を思うと気持ちが沈みこむというか気力が出不ない。そんな私を気遣って、アズラエルさんは彼の所有するオーブの小島を提供してくれた。

そこで私は日がな一日、海を眺め、波の音を聴いて過ごした。

その日もいつもと同じくチェアに座ってぼーっと海を見ていた。

……子供の声？ 身を起こして振り向くと、アズラエルさんが男の子二人、女の子一人を連れてこちらへ向かってきた。

「やあ、ルナマリアさん。調子はいかがですか？」

「……こんにちは。まあ、変わりなくって感じで……ごめんなさい」「いいんですよ。謝らなくっても。でも、あなたを見てる人はちゃんと居るんだって、わかっててくださいいね」

「はい……」

「そう言えば、フラガ中佐とナタル中佐、ご結婚するそうですね。」

「招待状を預かってきました」

「そうなんだ……二人ならお似合いね。よかった」

「ステイング。例の物を組み立ててください」

「わかったよ」

「なんだろう？ ステイングと呼ばれた少年は、箱から何かを出すと組み立て始めた。」

「あれは……望遠鏡？」

「この子達……ステイング、アウル、ステラと言います。オルガ達

と同じ施設で育ったんですよ」

「……え!？」

「オルガ達には間に合いませんでしたが、この子達はまだ投薬もさほど受けていなかったなので、回復は順調です。……いいですか？」

彼らの未来は、ルナマリアさん、あなたが与えたんです」

「私……が？」

「できたぜ、おっさん」

ステイングと呼ばれた少年がアズラエルさんに言う。

彼が組み立てた物は、スウエンが持っていた物よりも一回り大きな天体望遠鏡だった。

「うん、この時刻なら、この辺ですね。見てください、ルナマリアさん」

言われるままに、覗き込む。

「……これは、宇宙ステーション？」

レンズの中では、薄っすらと宇宙ステーションらしき物の周りにモビルスーツが群がって、作業しているのが見える。

「DSSDの技術開発センターですよ。遅いじゃありませんか、人間って奴は。まだまだ地球周辺には問題が山積みだって言うのに、先へ先へと進んで行こうとしている……」

私は望遠鏡の接眼レンズから目を離れた。

あの辺だろうか？

透けるような青空を振り仰ぐ。

最近、下向いて海しか見てなかったからなあ。青空が、目に染みる。

……上を向いていたい、か。そう言えばデュクロさんは、もうDSSDに入ったんだろうか。

「私、あそこに行くの」

振り返ると、女の子が望遠鏡を覗き込んで笑っている。

「きつと行けますとも。夢をあきらめなければ」

アズラエルさんが答える。

オーブのマストライバーから発射されたいらしいシャトルが飛行機雲

を後ろに作りながら、上へと向かって行く。高く高く、どこまでも

……

宇宙軌道

「そう。まあまあの報酬ね。受けましょう、マーク！」

「じゃあ、アメノミハシラまでと言う事だから、気を抜くなよ」

「楽勝よ！ それにしても、プラントが負けたおかげで新型ゲイツが安く手に入ってよかったわ」

「護衛の仕事は戦争が終わってもなくなるもんじゃないしな」

結局、メイリンは戦後、ジャンク屋と傭兵を兼業している。

ふと思う。自分を姉妹だと言ってくれた人の事を……

あの人は、もう軍を辞めたのだろうか？

今の私を見てなんと言うかな？ 結局今も戦いの場に身を置いている私を。

人は自分の人生しか歩けない、か……

メイリンはぶるんと頭を振った。そうだ。これが私の人生。余計な事を考える暇なんてない。

なにしろオルテュギアの皆を……彼女の大切な仲間達を食わせていかなければならないのだから。

アメノミハシラ

「ロウ！ 荷物は予定通り届きそうよ！ 最近売り出し中の傭兵を安く雇えたの！」

「安くー？ 樹里、大丈夫なんだろうな？ なんならサーペントテ

イルにでも頼むか？」

「心配しなさんなつて！ 当のサーペントテイルといい勝負したつて言う傭兵なんだから！ 昨日、効さんから確認取つてあるわ！」

「そうですね！ 強かつたそうですね！」

風花が答える。

「そうか、なら安心だな！ これで作業がやりやすくなる。ジエネシスにユニウス7の解体、ふふふ、稼ぎ時だぜ！」

「もう！」

樹里が頬を膨らます。

「サーペントテイルはいつまでいるんだ？」

「さあ？ 自分、オーブの新型機開発のアドバイザーの予定ですけど。今も効はギナ様と話していると思います」

「そうか！ じゃあ風花、自分一緒にいられるな！」

「はい！」

こんな小さな子にジエラシーだなんて……でも……。 あんたの

鈍さのせいなんだからね！

樹里はちよつと恨めしそうに口ウを見る。

「ああ、樹里。今度のシャトルであるの三人娘もアメノミハシラに上がってくるそうだから」

プロフェッサーが樹里に話しかける。

「え！？ ジュリ達ですか！？」

「そうよ。まあ、負いなさんな」

ぽん、つとプロフェッサーは樹里の背中を叩く。

「はあ………」

樹里の気苦労は絶えそうになかった。

「そうかあ、ルナは地球軍辞めるか」
久しぶりに軍務に復帰した私は、休暇を合わせてヘリオポリスのみ
んなと会った。

「うん、私、いつまでもモビルスーツが動かせるだけの女の子でい
たくない。モビルスーツを動かせる自分に甘えていたくないの」

「俺も、ミリイも、もうすぐ辞めようと思ってる。世の中も大分落
ち着いたしな。本土の技術大学へ編入するんだ。まだ学びたい事い
っぱいあるからな」

「俺も、退役だ。家継がなきゃならんからなあ。いつまでも軍人や
ってるなつて親が。……フレイモな」

「ご馳走様！」

「結局俺だけか？ 軍に残るの？」

「以外よねえ、カズイが軍に残るなんて」

「まあ、主に座ってるだけだしね」

「はっはっはあ。知ってるぞ！ 救難任務でいい思いしたからじゃ
ないのか？」

「な、なんだよ」

「えー、なに？」

「こいつ、中東に行った時の救難任務で女の子に懐かれちゃってさ。
この間も手紙来てたよなあ？」

「うっせえよ」

「へーそうなんだー」

「ルナは、辞めた後どうすんだ？」

「ん。DSSDに行っって見ようかなと」

「そうか、宇宙か」

「お前達――！」

聞き覚えのある声にトール、サイ、ミリアリアは振り向く。

「え？」

「あ、カガリ様！？ どうしたんです？」

「んー？ 私も、この大学に入学したんだ！ ピカピカの新入生だぞ！ ふふん」

「え？ カガリ様のご身分は、家庭教師で済ませるんじゃないんですか？」

「世の中の事を色々知らなきゃいけないからな！」

「でも、カガリ様の年齢なら編入でもいいんじゃない？……？」

「ま、そこはどうせなら新入生から目一杯学生生活を満喫したい私のわがままだ」

胸を張ってカガリは宣言する。

「そうですか。ところで、後ろの方はどなた？」

「ユウナだ。ユウナ・ロマ・セイラン。許婚だ」

「やあ、よろしく、君達」

カガリの後ろからひよっこり顔を出してユウナは手を振る。

「……もしかして、ユウナさんも大学生！？」

「まつさか！ 講師だよ、講師！ 実を言えばカガリのお目付けが主な役目だけだね」

「不定期だけだな。こいつ、行政府の仕事も有るから」

「まあ、人を教える立場になると、意外と自分の勉強にもなるもんだよ、うん」

ユウナは腕を組むと目を閉じ、一人納得したようにうなづいた。

「そうか。よろしくお願ひしますね！」

「そう言えば！ お前達編入なんだよな？ よろしくな！ 先輩！」

「よろしく、カガリ様」

「様はいらないって！」

「じゃ、よろしくね！ カガリ！」

ミリアリアは手を差し出した。

「ああ！」

カガリはその手を取り、固い握手を交わした。

「カガリー！ もうすぐ授業始まるよー！」

向こうで、栗色の長い髪をした女の子が手を振っている。

「ああ、マユ！ 一緒に行くからちよつと待て！ ……じゃあ、またな！」

カガリは走り去って、その女の子と一緒に腕を組んで建物の方へ歩いて行く。

「じゃ、君達、またね」

ユウナも別の建物の方へ歩み去って行く。

「へえ、カガリ、もう友達出来たんだ？」

「うまくやってんじゃん」

そこに、通りがかった白衣を着た男性が声をかける。

「おい。もうすぐ授業だぞ。今日は遅れんようにな」

「えへ。はい、キャリー教授！」

彼らの上に、オーブの日差しが眩しく輝いていた。

2年後

船の上で二人の男が話している。

ここはニュージーランドと南米大陸と南極大陸の中間付近、南緯47度9分、西経126度43分。到達不能極にほど近い周囲に島の全く無い海域である。

最近、この海域で大規模な地殻変動が観測された。どうやら海底が海の上に隆起したらしい。都市遺跡らしき物も発見された。

しかし、今は再び海の中に没し、海面は平穏を取り戻している。

その後この一帯の海域は地球連合によりきびしく立ち入りが禁止されている。

「世界平和連合会議か……上手くいくといいですね」

「同じ人類とは言え人種も違えば考え方も違う、結局調整に2年かかったよ」

「異星人が地球を狙っていると分かった今、人類はまとまらないとならないですからね。人類同士で争っている場合ではない。あなたでなければ出来ない仕事でしたよ、ジヨゼフ・コープランド大統領」

「何、アズラエル、君の働きがなければ、とうてい漕ぎ着けなかったろう。クトウルー、か。彼女？ は……どうしてるかな」

「大丈夫……深海で我らを見守っているでしょう。そういう種族でしょう、彼らは」

「灯台下暗し、と言う奴だな。人間以上の知的生物が地球に居るとは。彼らへのメッセージは？」

「これから半年間に渡る作業で、大西洋連邦のアルビン号、ユーラシアのミール号、日本のしんかい6500号、かいこう11000号がそれぞれ深海の方々に投下する予定です。装置は約2年に渡ってメッセージを発信し続けます」

「答えてくれるかな？ 彼らは？」

「……まあ、今までの歴史を見ると、期待しない方がいいかと。今回の事は、彼らにとって緊急避難でしょう」

「古代には、海から上がってきた者に文明を授けられたと言う神話もあるのだがな。『いあ いあ ふんぐるい むぐるうなふくとるう るるいえ うがふなぐる ふたぐん……』か。古文書に出てきた呪文を唱えても何も起きなかったよ。はは……。鯨と間違えて攻撃せんようにしないとな」

「メッセージにも入れておきましたから大丈夫でしょう。鯨と間違えられるな、とね。ははは」

「一世紀は明かせんな。地球連合の首脳らが同時に同じ夢を見て、メッセージを受けたなどと。しかも、それを本気にして我々は行動している」

「ヤキン・ドゥーエの事もありましたからね。彼らの介入は」

「しかし、夢で見た彼らは鯨と言つより蛸や烏賊に似ていたな」
「し！ 禁句かもしれませんよ？ 彼らにとつては？」
「はははー！」

「まあ、お茶でも一杯どうぞ。疲れたでしょう、公式の会談は」
アズラエルは地球を一年ぶりに訪れたマーシヤン（火星入植者）達をねぎらった。

「この後、歓迎会も設けられていますので。その前に気楽に一服を」
「では……頂戴します。ふむ……これは……」

使節団のリーダー、アグニス・ブラーエが軽く驚きの声を上げる。

「わかりますか」

アズラエルは嬉しそうに言った。

「甘茶ですよ。砂糖の甘さではない本当のアマチャです。口の中が爽やかになるでしょう？」

「これもぜひ、火星に持って帰りたい物です」

使節団の副官ナーエ・ハーシエルも甘茶が気に入ったようだ。

「なんなら生きた株も持って行かれますか？ 山野に自生する物ですから、強健です。ぜひ火星に根づかせてください」

「はい。それにしても……驚きました」

「なにがでしょう？」

「地球平和連合会議ですか？ 地球圏が、一つにまとまっているとは。私達が出発する時の情報では、なんと言うか、ごたごたしていたと？」

「ははは。お恥ずかしい。この前使節団が帰られたのはヤキン・ドゥー工戦役が終わって、独立運動やらでごたごたしていた頃でしたか。同じ人類とは言え人種も違えば考え方も違う、結局調整に2年もかかりました。小さなごたごたも、未だ収まらず、と言う所です。

できれば……マーズコロニー群にも参加して欲しいですね」

「それは、あなた個人の考えではなく？」

「ええ。明日の会談の席上でも、ジョゼフ・コーブランド議長から話があるかと。そうなれば、汎太陽系連合とでも名前が変わるでしょう」

「ふと、思ったのですが、なにやら、人類をまとめるのを急いでおられるような……？」

「……理由があるのですよ。いずれ、話せる時が来るかと」

「そうですね。ところで気になるのですが、地球連合はコーディネイター技術を禁止されたとか？ ご存知でしょうか、我々オーストレル・コロニーは生まれる前より職能を割り振り、それに合わせたコーディネイトを行っております。これは、地球ではどのように捉えられるでしょうか？」

「黙認せざるを得ないでしょう。ですが、地球では、コーディネイターはナチュラルの海の中へ自然と溶け込み、消滅すべし、と言う方針です。ああ、ナチュラルとの婚姻強制など強引な手段は取りませんが。我々の認識では、少なくとも今の技術のコーディネイトで能力を底上げしてもそれは短期的な物であり一時凌ぎにしかありませんよ？ 生物学的には後の代になる程生殖能力が衰え、行く先は自滅……これは地球のプラントで経験済みな現象でしてね。結局、自然の気まぐれが与える多様性と活力こそが人類の生存の道、と言う訳です。生命工学に関してはL4のメンデル・コロニーのラクスクライン・ザラ博士が詳しいのでその内訪問されると良いでしょう。第一、遺伝子の通りに、生まれながらにして人生が決められているなんてつまらんじゃないですか？ コーディネイターばかりが集まっていたプラントも、ヤキンドゥー工戦役当時の政治体制はコンピュータ頼りの、むしろディストピアと言うべきでしたし。今は新たなコロニーも建設され、新規移住者もだいぶ増えてましになっていますが」

「ありがとうございます。しかし、わかっていたかったです。それで

もしなければならぬ程に、我々の環境は厳しいのです。初の火星地表都市、東キャナル市の建設も始まりましたし、人材を最大限に活用しなければ……余裕が無いのですよ。我々は」

「わかつております。新たな移民、物資の火星への供給が計画されています。我々もベースマテリアルを始め希少鉱物を必要としています。火星にも発展してもらわないとなりません。火星との行き来も便利にしないとね。プラズマビームを放射する基地を、惑星間飛行経路の各拠点に設置し、それにより宇宙船を加速・減速する計画も推進中です。これが完成すれば、地球・火星間が3ヶ月で往復できますよ！」

「それは……DSSDが計画していると言うヴォワチュール・リュミエールで太陽風を受けて進むシステムですか？」

「いえ、それですと太陽風に従わなくてはならないと言う問題点があります。実際に火星までの到達時間を短縮できるかもしれません。が、いくつかの軌道を考えたところ、おそらく1・6年かかると言う事です。ビームのシステムを使えば、太陽風に従う必要はなく、比較的まっすぐ目的地に向かえる。太陽系のいたるところに基地を建設するためには、初期投資額が莫大な金額になるであろうことは確かですが、宇宙に人間が進出するためには必要不可欠な投資でしょう」

「すばらしい！」

「それはありがたい！」

マーシャン達はがっしりとアズラエルと手を握り合った。

会食が終わり与えられた部屋に戻ってくると、アグニスはふうつと溜息をついた。

「どうしました、アグニス？」

ナーエが尋ねる。

「いや、会談がうまく言つて良かった。会談する前はブルーコスモスの反コーディネイター政策とか、色々悪い噂を聞いていたが、やはり『まず相手を信じる事が、敵を作らず相手の敵とならない為の最善の方法』だな」

「そうですね」

ナーエも溜息をもらす。防衛用に積んで来たモビルスーツ……もしそれが破壊されるなどしたら……使節団と地球側でトラブルが起きたとして火星に伝わるようになっていた。そうならば火星は地球と断交する

それを使節団でたった一人知らされていたナーエは心底安堵していた。

地球平和連合会議からの護衛もしっかり付けられている。この様子ならそのモビルスーツに乗る事にすらなるまい。

その時、ドアがノックされた。

「すみません。火星の方々、お休みのところを。ジャーナリストの方が、取材したいと。それから、個人的に会いたいと言う方も居られます」

「どうします？ アグニス？」

「会ってみよう。今までは接したのが政府の人間ばかりだ。一般人とも会ってみたい」

「では……通してください。取材を受けましょう！」

迎賓館の居室の、客間に客が通される。

「きゃー！ アグニス！ほんとにアグニスだわ！ 大きくなって！」

「こ、これは、姉さん！？ どうして！」

アグニスが驚きの声を上げる。

アグニスに飛びついてきた少女　アグニスよりも若く見えた。

「セトナ様？　これは一体……？　あなたはオーストレルのシンボルとなるべく生み出されたお方。それが何故地球に？」

その少女はセトナ・ウィンタース。アグニスの姉として生まれ、オーストレルの象徴となるために生まれて来たのだが、数年前に行方不明になっていた。

「ふふふ。ごめんなさいね。オーストレルから逃げ出してしまっ
て。ですが私は……私は、皆のシンボルとしてお世話されて生きる
より、人々に尽くして歩んでいきたい……そう思ったのです。でも、
それは火星では許されないから……」

「姉さん……」

「でも、ここでは。地球では、人はどのように生きるか　それを
自分で決める事が出来るのです」

「それで地球に……」

「ええ。でも地球行きの船に忍び込んだら、その船が事故に遭って
しまつて。5年も救命ポッドで眠ってしまいましたわ」

セトナは苦笑した。

「それでお姿が子供の頃のままなのです。一つ、いいでしょうか
？」

ナーエが訊ねた。

「セトナ様は何故、責任を放棄して地球に来たのですか？　あなた
はアグニスの姉です。人一倍の責任感をお持ちでは？」

「簡単な事です。私と言う存在がいなくても火星はやっていける
それだけの事です。私達は、火星の過酷な環境に対応するためと
して、予め職業により遺伝子を決めて人を生み出しました。ですが、
それは同時にマーシヤンの未来を狭めてしまった事にも思えるので
す。まるで遺伝子と言う枠に縛り付けられたかのように……」

「姉さん……。ナーエ、地球に来て薄々感じていた事だが、俺は確
信したぞ。やはり、オーストレル・コロニーのように生まれなが
らに遺伝子で人生を決めてしまうのは間違っている」と

「そうですね。人が、好きな様生きられればどんなにいい事でしょ
う？」

「何を言う、ナーエ、お前がオーストレル・コロニーで遺伝子の

枷を破った第一号だぞ?」

「そういえば、そうでしたね」

「わかつてくれたようですね。そう。人は遺伝子の定めを超えて先へ進めるのです!」

「……おい」

居心地の悪そうな顔でジェス・リブルが顔を出した。

「取材、していいか?」

「あらら、ジェスの事すっかり忘れてしまっていましたわ!」

「そんな?」

「はははは!」

数年後

アズラエルは軍用機からオノゴロ島の軍用空港に降り立った。堂々たる公私混合である。

なにしろ民間空路を使うよりずっと早く着けるのであるからして、アズラエルはなんの良心の呵責も感じなかった。

しかし、ああ、もうちょっとクツシヨンの効いた物を持ち込んだ方がよかったかも知れない。

尻をさすりながらアズラエルは思った。

まだ小さいとは言え子供をずっと膝の上に乗せているのはちょっとした苦行だった。

「パパのおふね」

「ん?」

娘のマーヤが指差す方向を見ると、向ここの海岸に黒の船体のドミニオンが浮かんでいた。

「そうだねえ」

あの艦を見るのも久しぶりだ。しかし一体誰が教えたのだろう。ア

ズラエルは不思議に思った。別に娘に話した事などなかったのに。こつこつという事は、自然と覚えてしまう物なのだろうか。

「さあ、宙港へ行こうか」

「うん！」

マールは元気に飛び跳ねた。

アカツキ島の宙港へ着くと、アズラエル達は出口に陣取った。

「ばーばー！」

振り向くと、マールが入り口の方へ駆けていく。

向こうから、二人の夫婦らしい男女が歩いて来る。マールの祖父母だ。

「まあまあ、マールちゃんもおおきくなったこと！」

二人は目を細める。

「ご無沙汰しております」

アズラエルが義父母に挨拶をする。

「いやいや。なにしろアメリカは遠いですからなあ。……そろそろ時間ですな」

「ええ！」

ちょうど、ガラス越しに、シャトルが降りて来るのが見える。

オーブの交通機関の運行は日本ゆずりらしく正確さで知られている。もうすぐだ、もうすぐ。君と会えるのは何ヶ月ぶりだろう。

ああ、もうここで何時間も待っている気がする。

アズラエルの胸は高鳴った。

「はは。ドキドキしていらっしやる」

「さすがに今日は、な？」

護衛のソキウス達は顔を見合わせると含み笑いをする。

「お、噂をすれば。来たぞ」

出口に赤毛の女性の姿が目に入る。

「ママー！」

マーヤは、ぱつと顔を輝かせてその女性に駆け寄って行く。
その女性は飛びついたマーヤを優しく抱き上げるとこちらへ歩いて
来た。

「ただいま！」

とびきりの笑顔でルナマリアは笑った

<FIN>

あとがき

あとがきであります。

やつと、＜FIN＞の文字を入れる事が出来ました。

これは、私の四作目の作品にあたりまして2007年の夏から書いたお話です。

一年近くも書いていたんだなあと、今更ながら感慨深いものがあります。

この話は構成とかアイデアとか元となった話がありまして、それが実は私の処女作と三作目なのです。

処女作に手を付けたのは2007年の初春でした。ぱーっと思いつくまま書いてしまって、まるであらずじみたいと言われた処女作。二作目も今確かめてみると処女作と同じくらいの分量で。

そして構想がぱったりと先に進まなくなって未完に終わった不幸な三作目。

この作品は言わばリベンジなのです。

処女作を今読み直すと、あまりの未熟さにうぎゃー！ と叫びたくなります（笑）

構想も書いている内に変わりました。

最初から決まっていたのは、ルマナリアとアズラエルをくつつけてラストシーンを描こうと言う事。

それ以外は書いている内にどんどん変わりました。

ボスキャラを8（ハチ）と絡めて異星人にしようと言うのは考えていたのですが、ギガフロートあたりではマルキオを想定してまして、それが変わったのはXアストレイキャラを出そうと決めてからでした。

シーゲル（偽）も。モビルスーツも操縦するスーパーキャラになったのはエターナルフォースブリザードからディアボリック・デスバーストを知ってからでした（笑）

モビルスーツ……最初はストライクルージュで最後まで行こうと思っていたのですが、プレアが関わってきたのでせっかくなのでドレツドノートを使わせてもらいました。おかげでストライクルージュにはぼろぼろになってもらう事に……ぼろぼろと言えばドレッドノートもそうですね（苦笑）

『一族』も途中から出す事になったのですが、マテイス、そして男装の麗人マティアスが気に入ってしまい、ついつい描写が長くなっ
てしまいました。

あと、ご覧の通り地球連合寄りですが、心掛けたのは、アニメ本編の補正を外すくらいにしてヘイトにならない事。

どんな陣営にもそれぞれに、たとえボスキャラのシーゲル（偽）であつても唱えるべき正義が有るんだと言う事。

それがきちんと描写できていればよいのですが……。

逆に鼻屑をしたな、と自覚しているのは、ギナ様とダナ。本編では悲惨な最期だっただけに、救済してみました。

ダナは、優先順位が自由と言う感じで人種差別感情は薄い感じだったのに、本編では仲間に戻らなかつた。かわいそすぎました。

あと救済したと言えばナタルも、かな。

アズラエルは、鼻屑を超えて、主人公の片割れとして思い入れを込めて書いていました。登場するのが遅かつたので無事登場した時にはほっとしました。

あえて救済しなかつたキャラもいます。アッシュとか。クルーゼとか。それでも。納得のいくような死、あるいは死が救済であるような、そんな思いを込めてキャラの最後を書きました。

最初は死ぬ予定では無かつたキャラもいます。マリユー、オルガ、シャニ、クロトです。ですが、話の展開が、構想が、どんどん彼らを追い込んで行きました。悩みました。が、話が生温くなるよりはと思つて涙を吞んで死んでもらいました。

逆に死ぬ予定が、しぶとく生き残つたキャラもいます。ラクスです。当初は最後に体に乗っ取られてラスボスとしてルナマリアの前に立

ちふさがる予定だったのですが……それなりに幸せな戦後となりました。

描写が薄くなってしまったな、と思っっているのはヘリオポリス組。新キャラがどんどん出て来るので、割りを食ってしまいました。

小さな事で、えらく苦労した事。ピステイスの名前。メリオルの男性形を一生懸命調べたのですがなかなか見つからず、何回もwikiを書き直し、結局マークと言う簡単な名前にした事。

そう言えばお気づきの方もいるかと思いますが。作品の題名も何回か変えています。これも、ああでもない、こうでもないとあれこれ考えて。ガンダムに関係のある、そしてこの作品のラストシーンを象徴するような題名を思いつきました。

wikiと言えばこんなにお世話になった時期と言うのもない気がします。

ラクランジュポイントの把握から、ソロモン諸島の位置から、モニターとにらめっこしてストーリーを考えるのは楽しかった。もちろんガンダムseed関連の項目にもお世話になりました。

それだけじゃ足りなくて。DVDBOXから、公式ガイドブック、アストレイのコミックまで買う事になりました。

影響されまいと、あえて買わなかった小説も、一冊だけ。地球周辺の図を参考にするためだけに買いました。

自分で言うのもなんですが、物を書くパワーってのはすごいです(笑)

そう言えば、執筆は自分のパソコンで書いてましたが、前のパソコンが壊れてデータ吹っ飛んでから、いまいちパソコンを信用しきれないのでですね。そんな訳で、インターネットディスクと言う物を契約して、こまめに保存したり……

ああ、どんどん書きたい事が出てきてしましますが、いい加減にして終わらないといけませんね。

出来得れば、いつか。この話を読み返した時にうぎゃー！ と叫びたくなるような成長をする事を願いましてひとまず筆を置きたいと

思います。

応援ありがとうございました。

そして最後に。

もし、もしもこの作品が気に入っていただけたとして。

もしもまた次の作品が書けましたら、いつの日か、また、お目にかかりましょう……。

再掲版あとがき

えっと、あとがきです。

改めて読み返して、うーん、2007年なんですね、この話を書いたの。

とっても昔に思えます。

実はこの作が、一応満足、と思えた作品なのです。

初作と二作目はもう再掲しましたが、感想でも言われてますがまるでプロットそのまま。

自分でも読み返すと枕に顔をうずめてじたばたしたくなります。

でも、それも歴史ですからね、ためになる感想ももらえるかもしれないし、あえて再掲しました。

あれから色々ありました。忙しくて書く余裕がなくなったり、書く気力がなくなったり。

でも、少しずつでもまた書こうかと言う気になってきました。

よろしければ感想のほうよろしく願います。

では最後に。

もし、もしもこの作品が気に入っていただけたとして。

もしもまた次の作品が書けましたら、いつの日か、また、お目にかかりましょう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8834o/>

そして、星を継ぐもの（ガンダムSEED

2011年4月11日00時52分発行